能美丘陵東遺跡群　II

いしかわサイエンスパーク整備事業に係る

埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は、石川県能美郡辰口町宮竹・大口・灯台笹・長滝地内に所在する遺跡群の発掘調査報告書である。本書名は広範囲に点在する各遺跡を便宜的に群として包括したもので、「能美丘陵東遺跡群」と呼称している。また、調査年が長期に渡り、報告遺跡も多数に上ることから、調査年度の新旧にかかわらず、遺物・遺構整理が終了した遺跡を順次報告していくもので、1993年刊行の「Ⅰ」に続いて、本報告書には「Ⅱ」を付した。

2．本書で報告する遺跡は、平成５・６年度に発掘調査を実施した下記の各遺跡で、調査担当者は亀田文哉と西野秀和である。

1　庄が屋敷Ａ遺跡　　（約6,800㎡、平成５年度）
2　大口小松原遺跡　　（約3,800㎡、平成５年度）
3　長滝長尾遺跡　　（約1,700㎡、平成５年度）
4　長滝長尾遺跡（Ｄ地区）（約1,500㎡、平成６年度）
5　長滝宮谷遺跡　　（約410㎡、平成５年度）

3．能美丘陵東遺跡群の発掘調査は、石川県土地開発公社が実施している「いしかわサイエンスパーク」整備事業に係るもので、石川県立埋蔵文化財センターが調査委託を受けて実施した事業である。

4．調査事業の実施にあたっては、石川県企画開発部北陸先端科学技術大学院大学立地対策室、石川県土地開発公社、石川県教育委員会文化課、辰口町、辰口町教育委員会、辰口町町内会の助言、協力を受けた。

5．各遺跡の遺物整理作業、報告書作成は、平成５～８年度にかけて石川県立埋蔵文化財センターにおいて西野が当たり、小村佑子、戌亥久美子、林　茂久、中村方宣（調査補助員）の協力を受けて実施し、Ⅰ「位置と環境」を三谷正輝が、他は西野が執筆した。

6．石質鑑定には、藤　則雄氏（金沢大学名誉教授）の指導を受けた。

7．遺構測量は、国際興業㈱に庄が屋敷Ａ遺跡、㈱太陽測地社に大口小松原遺跡、長滝長尾遺跡、長滝宮谷遺跡を委託して実施した。

8．報告した各遺跡の遺構・遺物実測図、航空写真、現地写真、出土遺物などの全ての資料は、本センターにて一括して保存管理にあたっている。

凡例

1．遺構挿図の縮尺は次のとおりで、挿図内にスケールを、表題に縮尺を明示した。
住居址1/60、土坑1/30

2．遺物挿図の縮尺は次のとおりで、挿図内にスケールを、表題に縮尺を明示した。
縄文土器1/3、石鏃1/2、打製石斧、磨製石斧、磨石類1/3、石皿1/6

3．遺構挿図の水平基準は、海抜高で示している。（単位　m）

4．遺構挿図の方位は、真北、磁北があるが、真北の場合は挿図内方位に●を付した。

5．竪穴式住居址、土坑の遺構番号は、検出順・発掘順に使用し、地点ごとや時期別での再振り込みは行っていないが、土坑が後に住居址と考えた場合には住居址番号と土坑番号の二つを持つものがあり、表題には二つを明示した。

6．写真図版の遺物縮尺は任意であるが、遺物番号は挿図内番号と統一している。

能美丘陵東遺跡群　Ⅱ

目　次

Ⅰ　位置と環境 …… 1

1　地理的環境　2　辰口町の遺跡の概要

Ⅱ　調査の経過 …… 17

Ⅲ　庄が屋敷Ａ遺跡 …… 19

1　地形　2　調査の経過　3　層序と遺構の配置

4　検出した遺構と遺物

(1) 竪穴式住居址　(2) 土坑　(3) 遺構外出土の遺物

5　まとめ

(1) 出土土器の編年的位置　(2) 石器　(3) 住居址の構造　(4) 集落の変遷

Ⅳ　大口小松原遺跡 …… 78

1　地形　2　調査の経過　3　層序と遺構の配置

4　検出した遺構と遺物

(1) 竪穴式住居址　(2) 落とし穴　(3) 土坑　(4) 焼土坑　(5) 窯状焼土坑

(6) 平坦面　(7) 遺構外出土遺物

5　まとめ

(1) 縄文時代　(2) 古代

Ⅴ　長滝長尾遺跡 ……102

1　地形　2　調査の経過　3　層序と遺構の配置

4　検出した遺構と遺物

(1) 竪穴式住居址　(2) 土坑　(3) 出土遺物

5　まとめ

Ⅵ　長滝長尾遺跡（Ｄ調査区）……122

1　地形と層序　2　遺構　3　出土遺物　4　まとめ

Ⅶ　長滝宮谷遺跡 ……130

1　地形　2　炭窯跡　3　横穴

Ⅷ　炭窯跡 ……134

1　長滝宮谷第１～３号炭窯跡　2　長滝宮谷第４号炭窯跡　3　長滝宮谷第５号炭窯跡

Ⅸ　滝谷寺跡 ……140

1　地形　2　遺構の配置　3　まとめ

挿 図 目 次

第１図　石川県辰口町の位置図 …… 1
第２図　周辺の遺跡（1/25,000） ……4～5
第３図　旧石器・縄文時代の遺物（旧石器1/3、縄文1/4・1/6・1/8） …… 9
第４図　弥生・古墳時代の遺物（1/3・1/4） …… 10
第５図　古代の遺物（1/4） …… 12
第６図　中世の遺物（1/2・1/4・1/6） …… 14
第７図　「いしかわサイエンスパーク」整備事業関連遺跡分布図（1/10,000） …… 16
第８図　庄が屋敷Ａ遺跡地形図（1/2,000） …… 20
第９図　庄が屋敷Ａ遺跡全体図（1/800） …… 23
第10図　区画配置図（1/800） …… 24
第11図　遺構配置図（1/800） …… 25
第12図　第２・４・11号住居址配置図（1/100） …… 26
第13図　第２号住居址実測図（1/60） …… 27
第14図　第２号住居址出土遺物拓影・実測図（1/3、1/6） …… 27
第15図　第３・７号住居址配置図（1/100） …… 29
第16図　第３号住居址実測図（1/60） …… 29
第17図　第３号住居址内土坑実測図（1/30） …… 30
第18図　第３号住居址出土遺物拓影・実測図（1/3） …… 30
第19図　第４号住居址実測図（1/60） …… 32
第20図　第４号住居址出土遺物拓影・実測図（1/3） …… 32
第21図　第４号住居址出土石器実測図（1/2、1/3、1/6） …… 33
第22図　第５・６号住居址配置図（1/100） …… 34
第23図　第５号住居址実測図（1/60） …… 35
第24図　第５号住居址出土遺物拓影・実測図（1/3、1/2） …… 36
第25図　第６号住居址実測図（1/60） …… 38
第26図　第７号住居址実測図（1/60） …… 39
第27図　第７号住居址出土遺物実測図（1/3） …… 39
第28図　第８号住居址配置図（1/100） …… 40
第29図　第８号住居址実測図（1/60） …… 41
第30図　第８号住居址内土坑実測図（1/30） …… 41
第31図　第８号住居址出土遺物拓影・実測図（1/3、1/6） …… 42
第32図　第８号住居址出土石鏃実測図（1/2） …… 43
第33図　第９号住居址配置図（1/100） …… 44
第34図　第９号住居址実測図（1/60） …… 44
第35図　第９号住居址出土土器実測図（1/3） …… 44
第36図　第10号住居址配置図（1/100） …… 45
第37図　第10号住居址遺物出土状況実測図（1/60） …… 47
第38図　第10号住居址実測図（1/60） …… 47

第39図　第10号住居址出土土器拓影・実測図（1/3）…… 47
第40図　第10号住居址出土遺物実測図（1/2、1/3、1/6）…… 48
第41図　第11号住居址実測図（1/60）…… 50
第42図　第11号住居址内土坑実測図（1/30）…… 50
第43図　第11号住居址出土土器拓影・実測図（1/3）…… 50
第44図　第11号住居址出土土器拓影・実測図（1/3）…… 51
第45図　第11号住居址出土石器実測図（1/3）…… 52
第46図　第12号住居址配置図（1/100）…… 53
第47図　第12号住居址実測図（1/60）…… 54
第48図　第12号住居址内土坑遺物出土状況実測図（1/30）…… 54
第49図　第12号住居址内土坑実測図（1/30）…… 54
第50図　第12号住居址出土遺物拓影・実測図（1/2、1/3）…… 55
第51図　第13号住居址配置図（1/100）…… 56
第52図　第13号住居址実測図（1/60）…… 57
第53図　第13号住居址出土遺物拓影・実測図（1/3、1/6）…… 57
第54図　第13号住居址出土石器実測図（1/2）…… 57
第55図　第14号住居址配置図（1/100）…… 59
第56図　第14号住居址実測図（1/60）…… 59
第57図　第14号住居址出土土器拓影図（1/3）…… 59
第58図　土坑実測図（1）（1/30）…… 60
第59図　土坑実測図（2）（1/30）…… 62
第60図　土坑実測図（3）（1/30、1/60）…… 64
第61図　遺構外出土遺物実測図（1）（1/3）…… 65
第62図　遺構外出土遺物実測図（2）（1/3、1/6）…… 67
第63図　土器編年図（1/6）…… 74
第64図　集落編遷図 …… 74
第65図　大口小松原・長滝長尾遺跡地形図（1/2000）…… 79
第66図　大口小松原遺跡区画配置図（1/800）…… 80
第67図　遺構配置図（1/600）…… 81
第68図　第1号住居址実測図（1/60）…… 83
第69図　第1号住居址出土土器実測図（1/3）…… 83
第70図　ピット群平面図（1/100）…… 84
第71図　ピット内出土土器拓影・実測図（1/3）…… 84
第72図　土坑実測図（1）（1/30）…… 85
第73図　土坑実測図（2）（1/30）…… 87
第74図　土坑実測図（3）（1/30）…… 90
第75図　土坑実測図（4）（1/30）…… 91
第76図　土坑実測図（5）（1/60）…… 92
第77図　平坦面実測図（1/120）…… 93
第78図　平坦面、周辺出土土師器実測図（1/3）…… 93
第79図　出土土器拓影・実測図（1/3）…… 97
第80図　グリッド別土器出土片数 …… 97

第81図　出土石器実測図（1/3）…… 98
第82図　グリッド別出土石器点数 …… 98
第83図　長滝長尾遺跡・長滝宮谷遺跡区画配置図（1/800）……103
第84図　長滝長尾遺跡（A地区）遺構配置図（1/300）……104
第85図　長滝長尾遺跡（B地区）遺構配置図（1/300）……104
第86図　長滝長尾遺跡（C地区）遺構配置図（1/300）……104
第87図　第1号住居址実測図（1/60）……106
第88図　住居址内土坑実測図（1/30）……106
第89図　第1号住居址出土土器拓影・実測図（1/3）……106
第90図　第1号住居址出土土器・石器実測図（1/3）……107
第91図　第2号住居址実測図（1/60）……108
第92図　第2号住居址出土土器・石器実測図（1/3・1/6）……108
第93図　第3号住居址実測図（1/60）……110
第94図　第3号住居址出土土器・石器実測図（1/3）……110
第95図　第4号住居址実測図（1/60）……111
第96図　第4号住居址出土土器拓影実測図（1/3）……111
第97図　第5号住居址実測図（1/60）……112
第98図　住居址内土坑実測図（1/30）……112
第99図　第5号住居址内出土土器・石器実測図（1/3・1/2）……114
第100図　第5号住居址出土石器実測図（1/6）……115
第101図　土坑実測図（1/30）……117
第102図　出土土器・石器実測図（1/3、1/6）……119
第103図　長滝長尾遺跡（D地区、1994年）遺構配置図（1/300）……123
第104図　長滝長尾遺跡D地区区画図……124
第105図　土坑実測図（1）（1/30）……126
第106図　土坑実測図（2）（1/30）……127
第107図　土坑実測図（3）（1/30）……128
第108図　出土土器拓影・実測図（1/3）……128
第109図　長滝宮谷遺跡実測図（1/200）……131
第110図　炭窯跡立面・断面図（1/60）……132
第111図　横穴実測図（1/60）……132
第112図　第1～3号炭窯跡実測図（1/100）……135
第113図　第2号炭窯跡実測図（1/60）……136
第114図　第3号炭窯跡実測図（1/60）……137
第115図　第1号炭窯跡実測図（1/60）……137
第116図　第4・5号炭窯跡実測図（1/80）……138

表　目　次

第１表　周辺の遺跡地名表 …… 6
第２表　遺跡地名表（第７図）…… 17
第３表　庄が屋敷Ａ遺跡出土石器一覧表 …… 68
第４表　庄が屋敷Ａ遺跡住居址一覧表 …… 72
第５表　大口小松原遺跡出土石器一覧表 …… 99
第６表　長滝長尾遺跡出土石器一覧表 ……121

図　版　目　次

図版１　庄が屋敷Ａ遺跡　調査前の状況（北東から）、表土除去作業（北から）、同上（南から）
図版２　庄が屋敷Ａ遺跡　住居址群近景（北西から）、第２号住居址全景（西から）、同上（東から）
図版３　庄が屋敷Ａ遺跡　第３号住居址土層断面、同上発掘状況、同上全景（南から）
図版４　庄が屋敷Ａ遺跡　第４号住居址土層断面、同上全景、右・ピット内の炭化物、左・遺物出土状況
図版５　庄が屋敷Ａ遺跡　右・土坑全景、左・土坑の土層断面、第４号住居址全景（北から）、同上全景（東から）
図版６　庄が屋敷Ａ遺跡　第５号住居址発掘状況、同上全景（北から）、同上全景（南から）
図版７　庄が屋敷Ａ遺跡　右・土坑内部、左・土坑の土層断面、第５号住居址遺物出土状況、同上
図版８　庄が屋敷Ａ遺跡　第７号住居址土層断面、同上全景、同上土坑全景
図版９　庄が屋敷Ａ遺跡　第８号住居址全景、同上土坑断面、右・土坑全景、左・遺物出土状況
図版10　庄が屋敷Ａ遺跡　第６号住居址全景、第９号住居址全景、第14号住居址全景
図版11　庄が屋敷Ａ遺跡　第10号住居址発掘状況、同上全景、同上遺物出土状況
図版12　庄が屋敷Ａ遺跡　第10号住居址遺物出土状況、同上、同上
図版13　庄が屋敷Ａ遺跡　第11号住居址土層断面、同上全景、右・土器出土状況、左・土坑の土層断面
図版14　庄が屋敷Ａ遺跡　第12号住居址全景、同上土坑断面、同上遺物出土状況
図版15　庄が屋敷Ａ遺跡　第13号住居址土層断面、同上遺物出土状況、同上全景
図版16　庄が屋敷Ａ遺跡　SK112土層断面、SK113土層断面、SK113、SK114土層断面、SK108
図版17　庄が屋敷Ａ遺跡　SK110土層断面、SK110、SK111土層断面、SK111、SK103土層断面
図版18　庄が屋敷Ａ遺跡　SK102、SK105、SK107土層断面、SK107、庄が屋敷Ｃ遺跡を望む
図版19　庄が屋敷Ａ遺跡　SK115、116検出状況、同上完掘状況、SK115
図版20　庄が屋敷Ａ遺跡　路跡検出状況、一括土器出土状況、北東部確認調査
図版21　庄が屋敷Ａ遺跡　出土土器
図版22　庄が屋敷Ａ遺跡　出土土器
図版23　大口小松原遺跡　調査前遠景（北から）、同上近景（北西から）、調査状況（北から）
図版24　大口小松原遺跡　調査区全景（北から）、同上（南から）、同上（北西から）
図版25　大口小松原遺跡　第１号住居址土層断面、同上完掘状況、SK17

図版26　大口小松原遺跡　SK10、ピット内遺物出土状況、同上
図版27　大口小松原遺跡　SK１、SK２、SK５
図版28　大口小松原遺跡　SK３、SK４、SK16
図版29　大口小松原遺跡　SK８土層断面、SK８、SK12
図版30　大口小松原遺跡　SK11完掘状況、同上土層断面、同上
図版31　大口小松原遺跡　造成平坦地全景（東から）、同上（北から）同上礎石と排水溝
図版32　大口小松原遺跡　右・土師器の出土状況、左・溝の検出状況、礎石、同上
図版33　大口小松原遺跡　出土土器
図版34　長滝長尾遺跡　調査前遠景（北から）、同上（東から）、同上（北から）
図版35　長滝長尾遺跡　第１号住居址全景（南から）、同上遺物出土状況、同上完掘状況
図版36　長滝長尾遺跡　第１号住居址内土坑断面、床面遺物出土状況、同上
図版37　長滝長尾遺跡　調査区全景（西から）、同上（南から）、同上（北から）
図版38　長滝長尾遺跡　第２号住居址土層断面、同上完掘状況（東から）、同上（南から）
図版39　長滝長尾遺跡　第３号住居址遺物出土状況、同上完掘状況（北から）、同上（南から）
図版40　長滝長尾遺跡　第３・４号住居址、第４号住居址遺物出土状況、同上完掘状況
図版41　長滝長尾遺跡　第５号住居址土層断面、同上完掘状況（北から）、住居址群近景
図版42　長滝長尾遺跡　SK１、SK２、SK３
図版43　長滝長尾遺跡　SK４、SK５、SK６
図版44　長滝長尾遺跡　Ｃ地区の全景（北から）、同上（南から）、Ｃ調査区からＢ調査区を望む
図版45　長滝長尾遺跡　Ｄ地区全景（西から）、同上（東から）、同上（北から）
図版46　長滝長尾遺跡　SK１土層断面、SK１、SK２土層断面、SK２、SK３土層断面、SK３
図版47　長滝長尾遺跡　SK４土層断面、SK４、SK５土層断面、SK５、SK６土層断面、SK６
図版48　長滝長尾遺跡　SK７土層断面、SK７、SK８土層断面、SK８、SK９土層断面、SK９
図版49　長滝長尾遺跡　SK10土層断面、SK10、SK11土層断面、SK11、SK12土層断面、SK12
図版50　長滝長尾遺跡　SK13土層断面、SK13、SK14土層断面、SK14、SK15土層断面、SK15
図版51　長滝長尾遺跡　SK16土層断面、SK16、SK17土層断面、SK17、SK18土層断面、SK18
図版52　長滝長尾遺跡　SK19土層断面、SK19、SK20土層断面、SK20、SK21土層断面、SK21
図版53　長滝長尾遺跡　出土土器
図版54　長滝宮谷遺跡　調査区全景（南西から）、炭窯全景、同上
図版55　長滝宮谷遺跡　炭窯内部、同上、煙道部
図版56　長滝宮谷遺跡　煙道部上部、入口部分、石積み（南側）
図版57　長滝宮谷遺跡　石積み（北側）、土坑、土坑入口部
図版58　炭窯　炭窯跡全景、同上（北東から）、第2号炭窯閉塞状況
図版59　炭窯　前庭部全景（東から）、第3号炭窯奥壁、第2号炭窯奥壁
図版60　炭窯　第4号炭窯跡全景、同上煙道部、同上奥壁部
図版61　炭窯　第5号炭窯跡遠景、同上全景、同上近景
図版62　滝谷寺跡　堂跡（北から）、同上（西から）、七ツ滝（二の滝）

Ⅰ　位置と環境

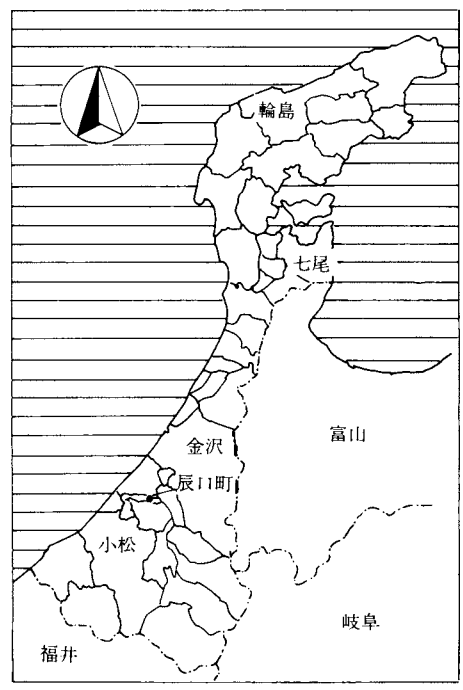
1　地理的環境

庄が屋敷Ａ遺跡は、石川県能美郡辰口町に所在する。本遺跡は平野部に面した丘陵尾根上に位置し、標高は105～112mで平野部との比高差は約50mである。調査範囲は南北約150m、東西は最大で50mを測る。本遺跡に隣接する尾根上には、庄が屋敷Ｂ・Ｃ・Ｄ遺跡が所在し、庄が屋敷遺跡群を形成している。

辰口町は、加賀地域のほぼ中央、金沢市の南西約15kmに位置し、約57.13km^{2}の面積を占める。町の北部は手取川を挟んで川北町、北東部は鶴来町、南東部は鳥越村、南西部は小松市、西部は寺井町とそれぞれ隣接している。町の地形は、手取川に接する北部には東西方向に細長い平野部（手取川扇状地）が広がるが、大部分は標高50～200mを測る比較的緩やかな丘陵地（能美丘陵）でその南東部には標高約510mを最高所とする山地（能美山地）が所在する。平野部の西側から寺井町にかけては、標高20～40mの独立丘陵が点在し、古墳群が築造されている。丘陵地内には能美山地を源とする長滝川－鍋谷川－舘谷川－仏大寺川などの小河川が流れており、その川沿いに集落が点在している。町内の原植生は、町域の大部分は、常緑広葉樹林域に属し、標高350mを越える一部が落葉広葉樹林域であったとされ、平野部ではタブやヤナギなど、丘陵地ではスダジイやウラジロガシなど、山地ではブナなどがそれぞれ林を形成していたとされる。現在では、平野部の多くは水田となっており、丘陵地は竹や杉の植林の他、アカマツやコナラなどの雑木林、山地ではブナやコナラ林がみられる。

当地の気候は、平成４年のデータによると、年平均気温は14.7℃、最暖月は８月で26.3℃、最寒月は２月の4.7℃である。年間降雨量は約1864.5㎜で、降水量の多い月は12月で約257㎜、少ない月は９月の約59㎜であった。降水日は年間で181日におよび、降水日の多い月は12月で24日で少ない月は７月の８日間である。

近年の辰口町は、金沢市と小松市を直結する加賀産業開発道路沿いの丘陵地を開発の対象としており、住宅団地・丘陵公園・ゴルフ場・放牧場などに利用されている。また、丘陵北東部では本遺跡の発掘調査の原因となった北陸先端科学技術大学院大学を核とする「いしかわサイエンスパーク」の整備が進められている他にいしかわ動物園の移転、こども科学館などの建設も予定されているが、この様に一定の地域に開発行為が集中することは、埋蔵文化財や自然環境の破壊を招く危険性がある。しかし、これらの開発は地域の振興策として期待されているだけに、開発と環境保護の両立を目指していかなければならない状況にあると言える。



第１図　石川県辰口町の位置図

2　辰口町の遺跡の概要

辰口町の歴史は灯台笹遺跡の発掘調査によって、旧石器時代から続く事が確認された。本節では辰口町で発掘調査が実施された遺跡を旧石器時代から中世まで時代別に概観していきたい。尚、遺跡名に続く番号は第２図と第１表に対応する。

旧石器時代

灯台笹遺跡（No.115）

本遺跡は、灯台笹集落南方の丘陵上に位置する。縄文時代の遺跡と複合し、旧石器時代の遺跡としては、県下初の調査例として知られている。発掘調査は昭和45年に丘陵鞍部を中心に実施され、東山型ナイフ形石器、掻器、石核、剥片などが出土している。

庄が屋敷Ｄ遺跡（No.107）

宮竹集落南東の丘陵尾根上に位置し、西方の尾根上には庄が屋敷Ｃ遺跡が隣接している。本遺跡は、旧石器・縄文・古代の複合遺跡である。平成４年の発掘調査では、立野ケ原型ナイフ形石器・剥片・石核などが出土している。

他には、湯屋窯跡からは尖頭器状石器など２点が出土している。

縄文時代

旭台Ａ遺跡（No.66）

能美丘陵中央の旭台地内の丘陵鞍部に位置する縄文時代の遺跡である。昭和47年に、金沢大学考古学研究会によって発見され、遺物が採集されている。本遺跡は、採集遺物から前期前葉に所属すると見られる。

莇生遺跡（No.82）

莇生集落東の舌状丘陵上に位置する縄文・中世の複合遺跡である。昭和50年から52年に発掘調査が実施され、中期中葉の環状集落が確認された。遺構は、竪穴住居跡・炉跡・土坑・配石跡などが検出されている。遺物は、中期中葉の古府式期を中心とする土器が出土している。また、石器では磨石類と石錘が多量に出土している。

庄が屋敷Ａ・Ｂ・Ｄ遺跡（No.104・105・107）

宮竹集落南東の丘陵尾根上に位置し、庄が屋敷Ｃ遺跡の南方から樹枝状に延びる尾根上に所在する集落遺跡である。遺構は竪穴住居跡・集石炉・土坑等が検出され、遺物は前期から後期の土器・石器等が出土している。

長滝遺跡（No.85）

長滝集落北西の水田地帯に位置する縄文・中世の複合遺跡である、昭和49年に金沢大学考古学研究会によって発見され、翌年の現地踏査によって、中期から後期の遺物が採集されている。平成２年には、石川県立埋蔵文化財センターによって、遺跡の北縁部が発掘調査されている。

灯台笹遺跡（No.115）

旧石器時代の遺跡と複合しているが、発掘調査は旧石器の出土地点の丘陵鞍部を中心に実施されたために、縄文時代の遺跡の範囲は、充分につかめていない。遺構は殆ど検出されておらず、遺物も中期や後期と推定される土器や石器が少量出上している。

下開発茶臼山遺跡（No.７）

下開発集落南方の丘陵上に位置し、下開発茶臼山古墳群と複合している。縄文時代の遺構は、土坑・石囲炉・集石遺構などが少数検出されているだけである、遺物は、後期初頭の土器や石器が少量出土している。遺構・遺物ともに数が少ないことから、１～２棟程度の住居があったと見られている。

岩内遺跡（No.70）

岩内集落南方の水田地帯に位置する縄文・古代・中世の複合遺跡である。縄文時代の遺構は、遺跡の南西部に多く見られ、土坑・ピット・集石遺構・埋設土器などが検出されている。遺物は、中期と晩期の土器や石器、ニホンザル・ホンシュウジカの骨片などが出土している。他に徳久・荒屋遺跡、下開発遺跡で縄文時代の土器や石器が少量出土している。

弥生時代

高座遺跡（No.２）

高座集落南方の水田地帯に広がる弥生・古墳時代の複合遺跡である。昭和52年の発掘調査は、遺跡の縁辺部を中心に実施されたために、遺構は殆ど検出されていない。遺物は、後期月影式土器が出土している、本遺跡の北

方には、弥生後期の円形周溝墓を検出した西山古墳群が所在する事から、本遺跡には弥生時代の集落が存在した可能性が考えられる。

西山古墳群（No.1）

高座集落北方の独立丘陵上に位置する弥生・古墳時代の複合遺跡である。弥生時代の遺構は、2基の円形周溝墓（6・12号墓）が検出されている。両周溝墓内には、複数の土坑墓が検出されている。また、12号墓では、土坑墓の他に溝・柱穴などが検出されている。遺物は、土坑墓や周溝から月影式土器・板状鉄器・線刻礫・礫などが出土している。

古墳時代

高座遺跡（No.2）

弥生時代の遺跡と複合する。弥生時代と同様に遺構・遺物は少ないが、遺構は方形周溝遺構・ピット・溝が検出されている、方形周溝遺構は、柱穴・炉跡などは検出されず、人為的な埋め戻しや土器の据え置きなどが見られることから、祭祀儀礼に関する遺構と見られている。遺構内からは、宮地式土器が多数出土している。

西山古墳群（No.1）

弥生時代の遺跡と複合し、破壊・消滅したものを含めて、14基の古墳が発見されている。このうち、発掘調査が実施されたのは4基（1・3・8・9号墳）で、3号墳は中期、1・8・9号墳は後期の古墳である。3号墳は墳丘・周溝は認められず、埋葬施設は木棺直葬と見られ、甲冑・刀剣・鉄鏃・銅鏡・櫛などが副葬されていた。1－8号墳は調査時には墳丘が認められたが、9号墳は墳丘などは認められず、調査終了後の土採集工事の際に発見された。埋葬施設は、3基とも切石積横穴石室で刀・鉄鏃・馬具・装身具・須恵器などが副葬されていた。

下開発茶臼山古墳群（No.7）

縄文時代の下開発茶臼山遺跡と複合する。28基の円墳が確認されており、昭和49・50年に14基の発掘調査が実施された。築造時期は5世紀後半から6世紀前半で、埋葬施設は木棺直葬が主流であるが、1号墳は粘土床が検出されている。副葬品は刀剣類・鉄鏃・管玉・ガラス小玉・須恵器・土師器などが出土している。また、7号墳には環頭太刀・直刀・鉄鏃が副葬されていた。他の遺跡としては、荒屋古墳群・来丸古寺古墳群・来丸物見山古墳群・来丸古墳群などの古墳群が存在するが、発掘調査は実施されておらず、築造時期などは不明である。

古代

下開発遺跡（No.5）

下開発集落南方の水田地帯に広がる、縄文～中世の複合遺跡である。古代の遺構は、掘立柱建物群・土坑・畝状遺構などが検出されており、古代の集落遺跡であることが知られている。遺物は、8世紀後半～9世紀前半を盛期とする土器が多数出土している。その中には「荘」「庄」と記された墨書土器が見られ、本遺跡が天平勝宝七年（755年）に立庄した「東大寺領幡生庄」の比定地であると推定されている。

徳久・荒屋遺跡（No.4）

徳久・荒屋・北市・下開発の各地区に広がる縄文・弥生・古代・中世の複合遺跡である。遺構は、掘立柱建物群・土坑・畝状遺構・大溝（旧河道）などが検出されている。遺物は、8世紀後半～10世紀代の土器・墨書土器・木器・石帯などが出土している。

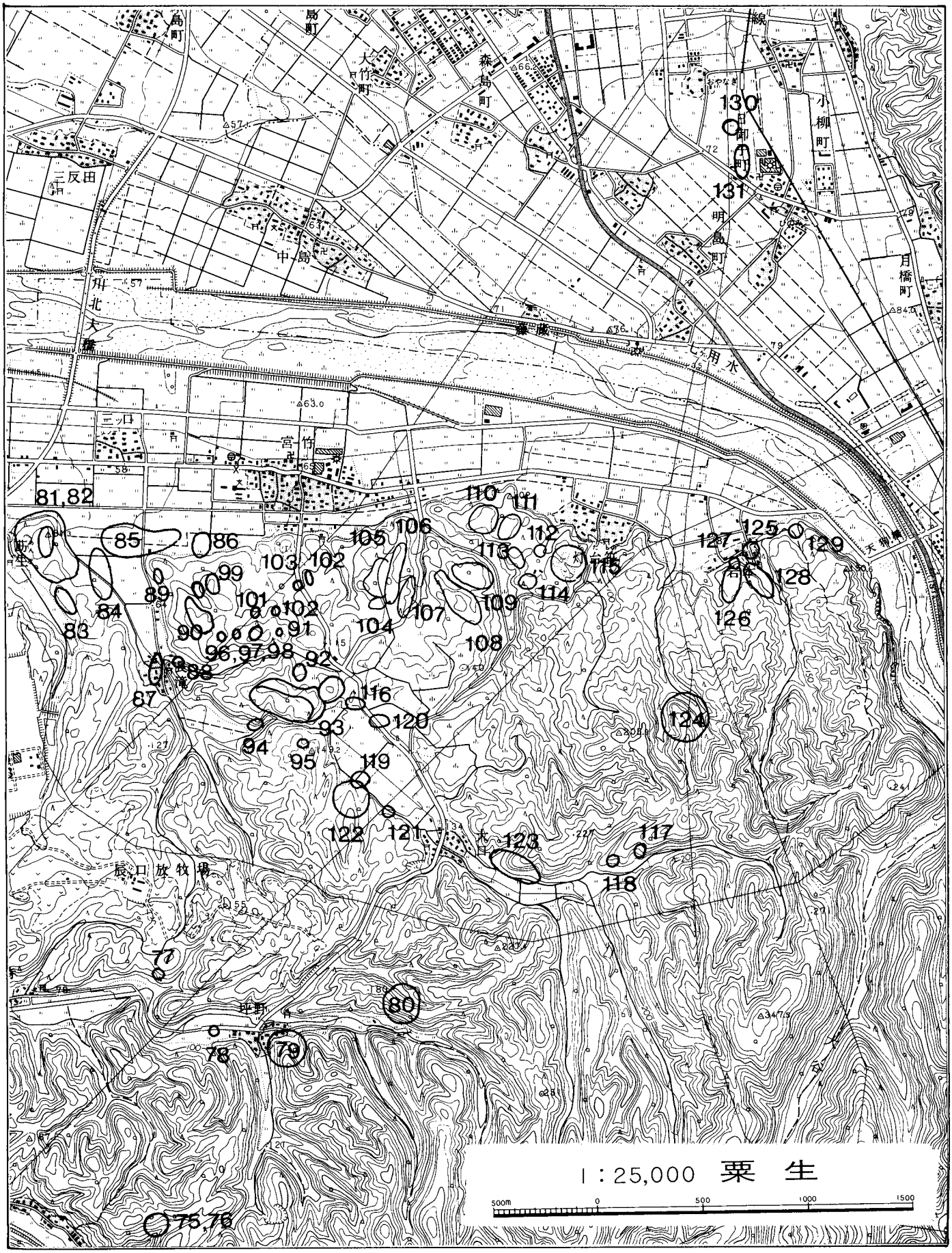
庄が屋敷B遺跡（No.104）

縄文時代の遺跡と複合する。古代の遺構は、掘立柱建物跡・土坑・焼土面などが検出されている。遺物は須恵器・土師器・鉱滓・フイゴの羽口・鉄斧などが出土している。焼土面が顕著なこと、鉱滓が多量に出土していることから、鉄製品の小鍛冶跡とみられるが、出土遺物から南西地区は8世紀後葉、東地区は10世紀前半代と時期差が認められる。

岩内遺跡（No.70）

縄文時代の遺跡と複合する。古代の遺構は、掘立柱建物・土坑・ピット・溝状遺構などが検出されている。調

与九郎島
川　北　町
舟場島
新　砂　川　用　水
山田先出
手　取　川
辰口橋
出口
清水
上清水
東レ工場
北市
三ッ屋
山　田　宮　竹　用　水
岩内
大釜
倉重
徳久
上開発
下開発
高座
荒屋
来丸
辰口運動公園
辰口丘陵公園
緑が丘一丁目
緑が丘五丁目
緑が丘四丁目
緑が丘七丁目
松が丘三丁目
得　橋　用　水
徳山
岩本
和気
鍋谷川
上八里町
館
金剛寺
口町
山口倶楽部ゴルフ場



第２図　周辺の遺跡（1/25,000）

第1表　周辺の遺跡地名表

No.	名　　称	所　　在	種　別	時　　代
1	西山古墳群	辰口町徳久	古墳	古墳
1	西山横穴群	辰口町高座	横穴墓	古墳後期
2	高座遺跡	辰口町高座	集落跡	縄文・古墳・中世
3	徳久山上郷館跡	辰口町徳久	館跡	不詳
4	徳久・荒屋遺跡	辰口町徳久・荒屋・上開発・下開発	集落跡	縄文～中世
5	下開発遺跡	辰口町下開発	集落跡	古墳後期～平安
6	下開発クモンミヤ遺跡	辰口町下開発	集落跡	平安～中世
7	下開発茶臼山古墳群	辰口町下開発	古墳	古墳中・後期
7	下開発茶臼山遺跡	辰口町下開発	集落跡	縄文・中世
8	茶臼山製鉄跡群	辰口町徳久	製鉄跡	不詳
9	荒屋古墳群（A支群）	辰口町荒屋	古墳	古墳
10	荒屋古墳群（B支群）	辰口町荒屋	古墳	古墳
11	下徳山A遺跡	辰口町下徳山	散布地	奈良末～平安
12	下徳山B遺跡	辰口町下徳山	散布地	平安
13	下徳山C遺跡	辰口町下徳山	散布地	不詳
14	下徳山金谷地遺跡	辰口町下徳山	窯跡	奈良
15	下徳山D遺跡	辰口町下徳山	窯跡	奈良末
16	下徳山御陵山遺跡	辰口町下徳山	窯跡	平安
17	下徳山杉谷窯跡	辰口町下徳山	窯跡	奈良
18	下徳山トモサダ遺跡	辰口町下徳山	散布地	不詳
19	和気窯跡	辰口町和気	窯跡	平安
20	和気和田見遺跡	辰口町和気	散布地	不詳
21	和気和田見窯跡	辰口町和気	窯跡	平安
22	和気下和田窯跡	辰口町和気下和気	窯跡	平安
23	和気近世窯跡	辰口町和気	窯跡	近世
24	和気矢口A遺跡	辰口町和気	散布地	縄文中期
25	和気公文屋敷跡	辰口町和気	館跡	不詳
26	和気中和気窯跡	辰口町和気	窯跡	平安
27	後山谷2号窯跡	辰口町和気	窯跡	平安
28	後山谷1号窯跡	辰口町和気	窯跡	平安
29	虚空蔵城跡	辰口町下館・寺畠	城跡	中世
30	虚空蔵山横穴群	辰口町下館	横穴墓	古墳後期
31	寺畠窯跡	辰口町寺畠	窯跡	不詳
32	寺畠薬師坂古墳	辰口町寺畠	古墳	古墳
33	向山遺跡	小松市上八里町	散布地	不詳
34	上八里中世墓	小松市上八里町	墳墓	室町
35	上八里A遺跡	小松市上八里町	散布地	縄文・平安
36	上八里2号窯跡	小松市上八里町	窯跡	不詳
37	上八里B遺跡	小松市上八里町	散布地	奈良
38	金剛寺坂中世墓遺跡	辰口町上徳山	墳墓群	中世
39	徳山寺跡	辰口町徳山	寺院跡	中世
40	上徳山A遺跡	辰口町上徳山	散布地	奈良・平安
41	上徳山近世窯跡	辰口町上徳山	窯跡	近世
42	湯屋チョウヅカ遺跡	辰口町湯屋	墳墓	中世
43	上開発カワリダ遺跡	辰口町上開発	散布地	中世
44	上開発古墳	辰口町上開発	古墳	古墳
45	辰口ましじやま古墳	辰口町辰口	古墳	古墳後期
46	辰口町本村遺跡	辰口町辰口	散布地	不詳
46	辰口八幡神社1号墳	辰口町辰口	古墳	古墳
47	辰口廃寺跡	辰口町辰口	寺院跡	不詳
48	辰口縄文遺跡	辰口町辰口	散布地	縄文
49	来丸古寺古墳群	辰口町来丸	古墳	古墳
50	来丸物見山古墳群	辰口町来丸	古墳	古墳

No.	名　　称	所　　在	種　別	時　　代
51	来丸古墳群	辰口町来丸	古墳	古墳
52	来丸遺跡	辰口町来丸	散布地	縄文中期・平安
53	来丸天明寺跡	辰口町来丸	寺院跡	不詳
54	来丸気多神社1号墳	辰口町来丸	古墳	古墳
55	来丸丸山遺跡	辰口町来丸	散布地	不詳
56	来丸さくらまち窯跡	辰口町来丸	窯跡	奈良
57	湯屋窯跡	辰口町湯屋	窯跡	古墳
58	湯屋遺跡	辰口町湯屋	散布地	古墳～平安
59	来丸五升谷窯跡	辰口町来丸	窯跡	不詳
60	火釜A遺跡	辰口町火釜	散布地	縄文前期
61	火釜B遺跡	辰口町火釜	散布地	平安
62	火釜C遺跡	辰口町火釜	散布地	平安
63	来丸旭台遺跡	辰口町来丸	散布地	縄文
64	旭台北砦跡	辰口町旭台	砦跡	中世
65	旭台南砦跡	辰口町旭台	砦跡	中世
66	旭台A遺跡	辰口町旭台	散布地	縄文前期・後期
67	旭台B遺跡	辰口町旭台	散布地	平安
68	岩内茶仙堂遺跡	辰口町岩内	散布地	中世
69	岩内経塚遺跡	辰口町岩内	経塚	中世
70	岩内遺跡	辰口町岩内	集落跡	縄文・平安・中世
71	金剛寺跡	辰口町金剛寺	寺院跡	不詳
72	鍋谷中世墓群	辰口町中央鍋谷	墳墓	中世
73	鍋谷横穴	辰口町中央鍋谷	横穴墓	古墳後期
74	鍋谷堡跡	辰口町鍋谷	城跡	不詳
75	鍋谷延願寺跡	辰口町鍋谷	寺院跡	中世
76	鍋谷延願寺遺跡	辰口町鍋谷	散布地	不詳
77	金剛寺乱の穴横穴	辰口町金剛寺	横穴墓	古墳後期
78	坪野遺跡	辰口町坪野	散布地	縄文
79	坪野妙観寺跡	辰口町坪野	寺院跡	不詳
80	坪野智永寺跡	辰口町坪野	寺院跡	不詳
81	茆生城跡	辰口町茆生	城跡	中世
82	茆生遺跡	辰口町茆生	集落跡	縄文～平安
83	茆生城山奥窯跡	辰口町茆生	窯跡	奈良
84	茆生B遺跡	辰口町長滝・茆生	散布地	古墳～平安
85	長滝遺跡	辰口町長滝	散布地	縄文・平安
86	宮竹遺跡	辰口町宮竹	散布地	縄文･古墳･平安～中世
87	長滝宋誓寺跡	辰口町長滝	寺院跡	不詳
88	長滝経塚	辰口町長滝	経塚	中世
89	長滝八幡遺跡	辰口町長滝	散布地	平安
90	長滝墓山A遺跡	辰口町長滝	散布地	縄文・平安
91	長滝墓山B遺跡	辰口町長滝	散布地	平安
92	長滝宮谷遺跡	辰口町長滝	窯跡	不詳
93	長滝長尾遺跡	辰口町長滝	散布地	縄文
94	長滝A遺跡	辰口町長滝	散布地	不詳
95	大口経塚	辰口町長滝	経塚	中世
96	宮竹観音開きA遺跡	辰口町宮竹	散布地	旧石器・平安
97	宮竹観音開きB遺跡	辰口町宮竹	散布地	平安
98	宮竹観音開きC遺跡	辰口町宮竹	窯跡	不詳
99	宮竹沙弥城山遺跡	辰口町宮竹	散布地	縄文
100	宮竹中山A遺跡	辰口町宮竹	窯跡	不詳
101	宮竹中山B遺跡	辰口町宮竹	窯跡	不詳
102	宮竹オオハゲA遺跡	辰口町宮竹	散布地	不詳
103	宮竹オオハゲB遺跡	辰口町宮竹	散布地	縄文

No.	名　　称	所　　在	種　別	時　　代
104	庄が屋敷B遺跡	辰口町宮竹	散布地	縄文・平安
105	庄が屋敷A遺跡	辰口町宮竹	集落跡散布地	縄文
106	庄が屋敷C遺跡	辰口町宮竹	集落跡	縄文
107	庄が屋敷D遺跡	辰口町宮竹	集落跡散布地	縄文・平安
108	宮竹うっしょやまA遺跡	辰口町宮竹	集落跡散布地	旧石器・縄文・平安
109	宮竹うっしょやまB遺跡	辰口町宮竹	集落跡散布地	縄文・平安
110	宮竹あつ坂遺跡	辰口町宮竹	集落跡散布地	縄文・平安
111	灯台笹裏野A遺跡	辰口町灯台笹	集落跡散布地	縄文・平安
112	灯台笹裏野B遺跡	辰口町灯台笹	散布地	縄文・平安
113	灯台笹下遺跡	辰口町灯台笹	集落跡	旧石器・縄文
114	灯台笹ながげ遺跡	辰口町灯台笹	集落跡	縄文・平安
115	灯台笹遺跡	辰口町灯台笹	散布地	旧石器・縄文
116	大口窯跡群	辰口町大口	窯跡	平安
117	大口A遺跡	辰口町大口	散布地	奈良～平安
118	大口B遺跡	辰口町大口	散布地	平安後期
119	大口C遺跡	辰口町大口	散布地	縄文
120	大口D遺跡	辰口町大口	散布地	平安
121	大口E遺跡	辰口町大口	散布地	縄文中期
122	大口長生寺跡	辰口町大口	寺院跡	不詳
123	大口中世墓	辰口町大口	墓地	中世
124	岩本白鳥尼神社跡	辰口町岩本	社跡	不詳
125	岩本岩根宮遺跡	辰口町岩本	散布地	縄文中期
126	岩本中世墓遺跡	辰口町岩本	墳墓	中世
127	岩本家清館跡	辰口町岩本	館跡	不詳
128	岩本経塚	辰口町岩本	経塚	中世
129	岩本B遺跡	辰口町岩本	散布地	平安
130	日御子A遺跡	鶴来町日御子	散布地	平安
131	日御子B遺跡	鶴来町日御子	散布地	平安

査区が狭いために、掘立柱建物の規模は不明であるが、数棟分が検出されている。遺物は、9世紀代の須恵器・土師器が出土している。

辰口マルヤマ窯跡

辰口集落東方の丘陵斜面に位置する。2基の窯跡が発見されている。未発掘であるが、遺物は7世紀前半代の須恵器が採集されている。本窯跡は、辰口町最古の須恵器生産窯である。

湯屋窯跡群（No.57）

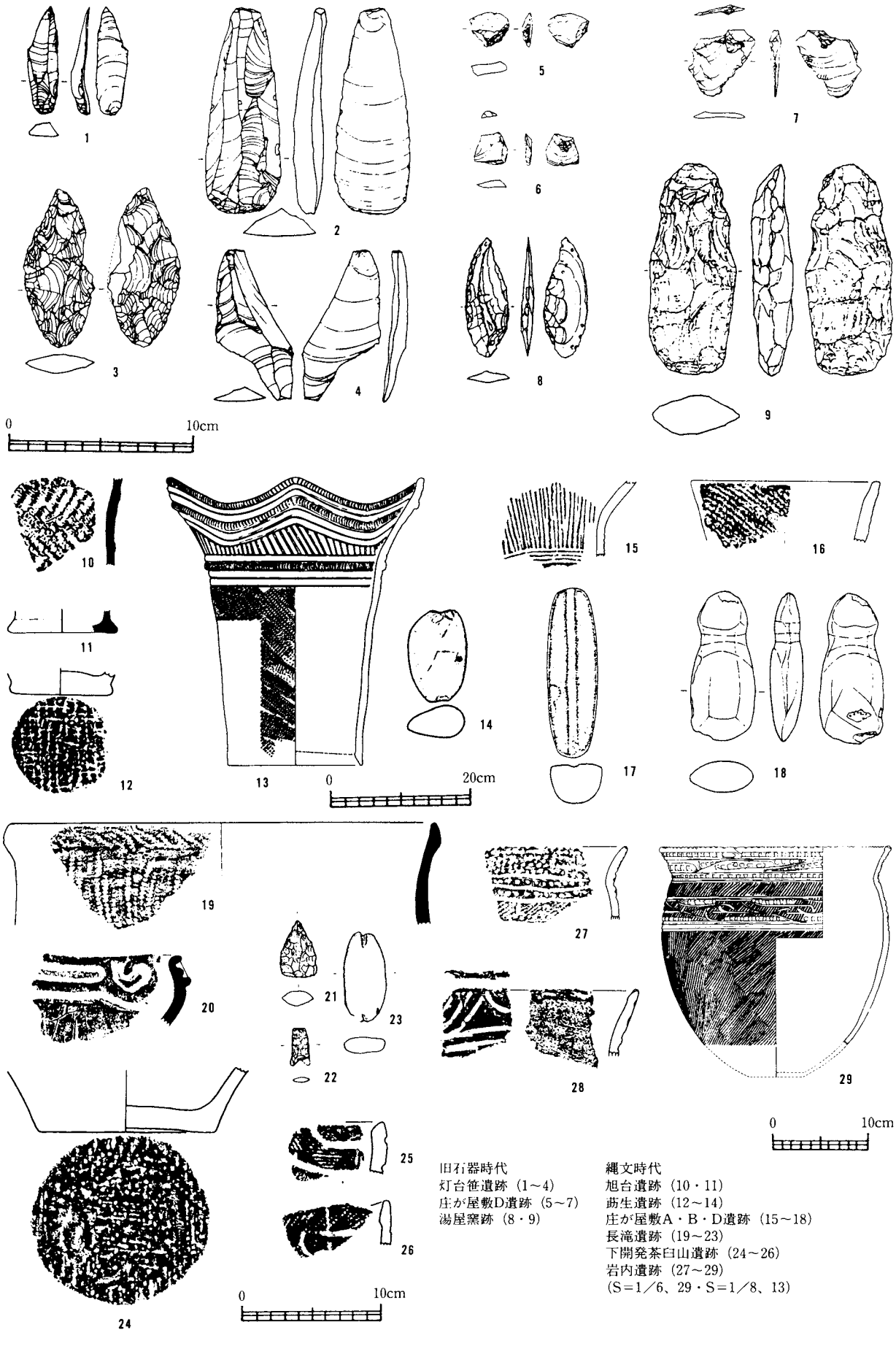
湯屋集落北西の加賀産業道路沿いの丘陵谷部斜面に位置するA支群とA支群の西側尾根の湯屋集落側に位置するB支群に分けられる。A支群は4基の穴窯と3基の平窯が、B支群では1基の穴窯が調査されている。遺物は、7世紀後半代の須恵器・土師器・瓦が出土している。本窯跡産の瓦が石川郡の末松廃寺（現野々市町）に供給されている。

莇生城山奥窯跡（No.83）

莇生集落南東の舌状丘陵西側斜面に位置する。昭和50年に、金沢大学考古学研究会によって灰原が発見され、7世紀末から8世紀初頭の須恵器が採集されている。

来丸サクラマチ窯跡（No.56）

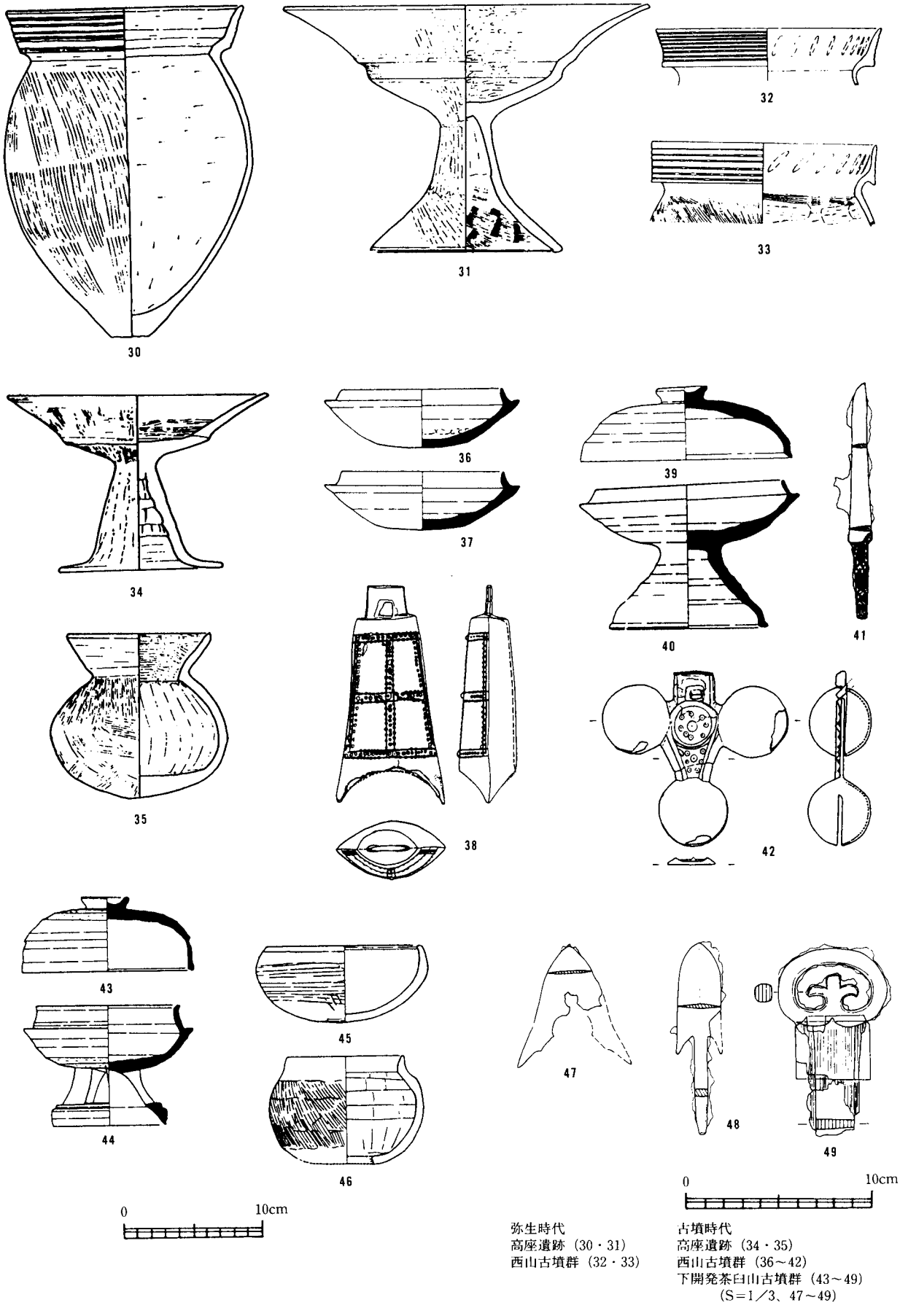
来丸集落南方の丘陵北斜面に位置する。昭和49年に、加賀産業道路建設に係る発掘調査が、石川県教育委員会によって実施されている。遺構は、2基の窖窯（1・3号窯）と1基の平窯（2号窯）が検出されている。窖窯からは、8世紀初頭から前半の須恵器が出土している。3号窯出土の杯・杯蓋には、「大」「日」などのヘラ書き文字が見られる。



旧石器時代
灯台笹遺跡（1～4）
庄が屋敷D遺跡（5～7）
湯屋窯跡（8・9）

縄文時代
旭台遺跡（10・11）
茅生遺跡（12～14）
庄が屋敷A・B・D遺跡（15～18）
長滝遺跡（19～23）
下開発茶臼山遺跡（24～26）
岩内遺跡（27～29）
（S＝1／6、29・S＝1／8、13）

第３図　旧石器・縄文時代の遺物（旧石器1/3、縄文1/4・1/6・1/8）



弥生時代
高座遺跡（30・31）
西山古墳群（32・33）

古墳時代
高座遺跡（34・35）
西山古墳群（36～42）
下開発茶臼山古墳群（43～49）
（S＝1／3、47～49）

第４図　弥生・古墳時代の遺物（1/3・1/4）

和気金谷地窯跡（No.14）

和気集落北西の丘陵斜面に位置する。昭和45年に金沢大学考古学研究会によって、遺物が採集されていたが、窯体などは未発見であった。しかし、昭和59年に町史編纂の為の現地踏査が実施され、灰原が確認された。遺物は、8世紀後半前葉の須恵器が採集されている。また、杯・杯蓋には、「＝」「＞」などのヘラ記号が付されているものがある。

和気1号窯跡（No.19）

和気集落北西の丘陵斜面に位置する、本窯跡周辺では、昭和30年代から40年代にかけて土砂採取や開墾などによって、多くの窯跡が消滅・破壊されたと見られており、本窯跡も窯体下半が破壊されている。遺物は、8世紀後半後葉の須恵器が採集されている。

和気後山谷窯跡群（No.27・28）

中和気集落北方に位置する。1号窯は、昭和59年の町史編纂の為の分布調査時に灰原が確認され、8世紀末の須恵器が採集されている。2号窯は、分布調査時には窯体は破壊されており、灰原が残るだけであったが、調査終了後には灰原も削平された。2号窯の灰原からは8世紀後期後半の須恵器が採集されている。

和気和田見窯跡（No.21）

和気集落北方の小丘南西斜面に位置する。小丘は階段状に開墾されており、灰原の一部が露呈し遺物が散乱している。採集された遺物は、8世紀後期後半の須恵器である。

和気中和気窯跡（No.26）

中和気集落北方の丘陵斜面に位置する。昭和53年に金沢大学考古学研究会によって発見され、9世紀前半代の須恵器が採集されている。

大口窯跡（No.116）

大口集落北西の丘陵斜面に位置する。昭和53年に、金沢大学考古学研究会によって発見された。発見時は、農道法面に3基の窯体が露呈していたが、1基は崖崩れによって崩壊した。残った2基のうち、東側の1号窯の床面からは、焼き台に使用されたと見られる杯3片と盤1片が出土している。2号窯からは、遺物は出土していない。

中世

下開発遺跡（No.5）

古代の遺跡と複合する、中世の集落遺跡である。遺構は、掘立柱建物群・土坑・溝・畝状遺構・井戸などが検出されている。遺物は、13世紀から14世紀頃の土師質土器・陶磁器・木器などが出土している。

虚空蔵山城跡（No.29）

和気・舘の両地区にまたがる室町期から戦国期の山城跡である。加賀国守護職を兄弟で争った富樫幸千代が城主であったことや、織田信長軍が攻めた一向一揆に関連する城跡などと伝えられている。昭和56牛から58年に実施された発掘調査では、土塁・石垣・空堀・土坑・ピット・井戸が検出された。出土した遺物は、16世紀代の陶磁器や砥石など少量である。

茹生城山跡（No.81）

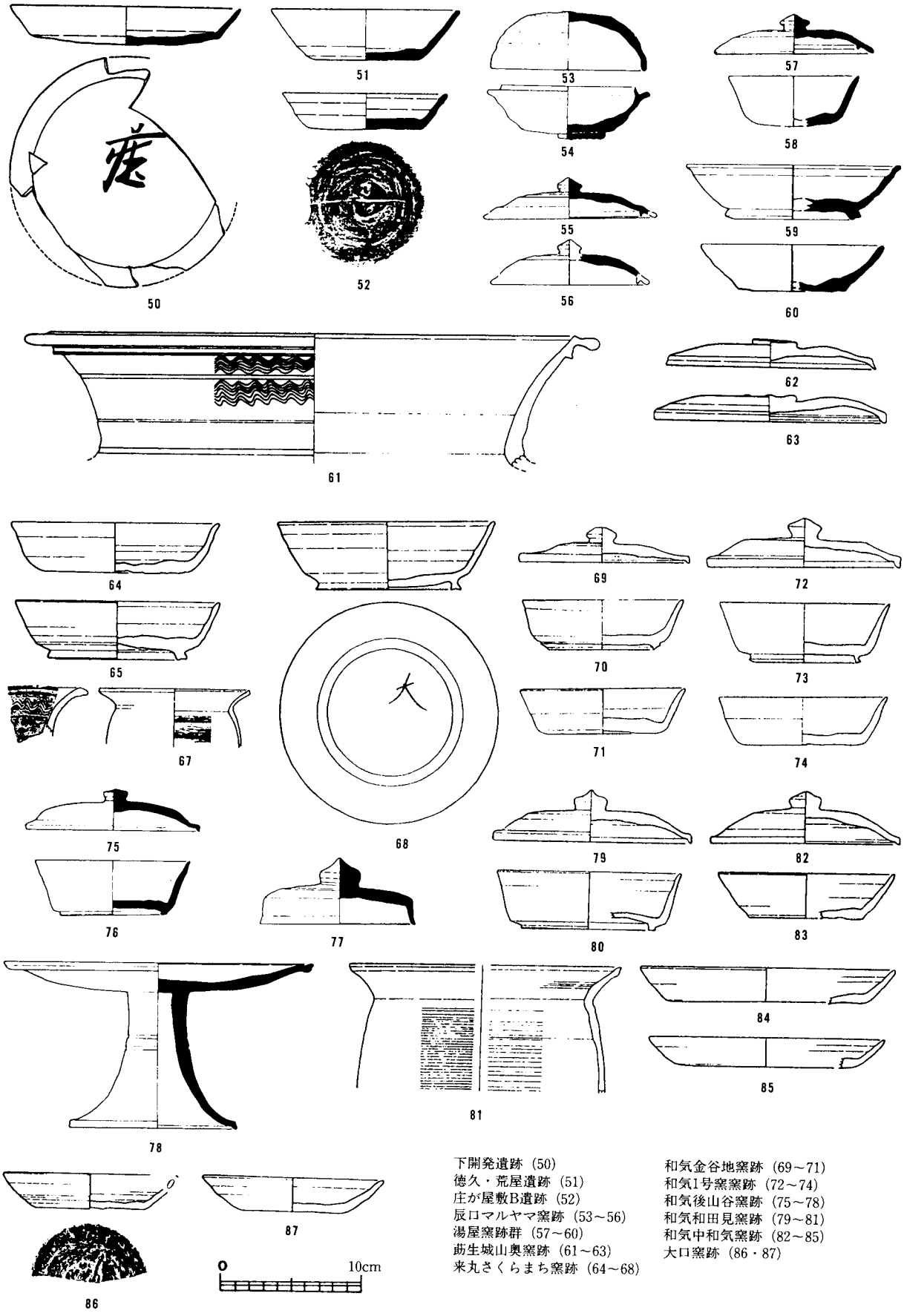
縄文時代の遺跡である茹生遺跡と複合する。城主は、富樫氏と争ったとされる阿曽孫八郎とされるが、詳細は不明である。昭和50年から52年に実施された発掘調査では、城に関連する遺構・遺物は発見されていない。

湯屋チョウヅカ遺跡（No.42）

湯屋集落南西の丘陵斜面に位置する鎌倉時代中期の墳墓群である。14基の墳墓が確認され、10基が発掘調査されている。墳形は円形または楕円形を呈し、土まんじゅう形の盛土が見られる。遺物は、主体部から骨片・加賀古陶・銅銭片・短刀・火打金などが出土し、墳丘周辺からは、五輪塔・土師質土器などが出土している。

金剛寺坂中世墳墓群（No.38）

上徳山集落南東の丘陵斜面に位置する。本墳墓群は、虚空蔵山城が一向一揆によって落城した際に、守備兵を



下開発遺跡（50）
徳久・荒屋遺跡（51）
庄が屋敷B遺跡（52）
辰口マルヤマ窯跡（53～56）
湯屋窯跡群（57～60）
苗生城山奥窯跡（61～63）
来丸さくらまち窯跡（64～68）
和気金谷地窯跡（69～71）
和気1号窯窯跡（72～74）
和気後山谷窯跡（75～78）
和気和田見窯跡（79～81）
和気中和気窯跡（82～85）
大口窯跡（86・87）

第５図　古代の遺物（1/4）

埋葬したと伝えられている。25基が確認されているが、昭和38年に小松市立博物館などによって1基の試掘調査が実施されているのみである。遺物は、古瀬戸の壷・越前焼の片口鉢・火葬骨・五輪塔・宝篋印塔などが出土している。壷・鉢は13世紀代のものと見られるが、五輪塔・宝篋印塔から室町中期から江戸初期の墳墓群と推定されている。

長滝経塚（No.88）

長滝集落東方の丘陵上に位置する。明治末年に滝波神社を現在地に移転した際に遺物が出土している。遺構は検出されておらず、旧社殿築造時には削平されていたものと推定されている。採集された遺物は、13世紀代の珠洲焼の四耳壷・加賀焼の片口鉢・和鏡などである。

仏大寺仏陀寺跡

仏大寺集落東方の仏大寺川沿いに位置する。室町初期に曹洞宗の大源禅師が創建したとされる。土塁・石垣が残存し、天目茶碗・中世陶器などが採集されているが、未調査のため詳細は不明である。

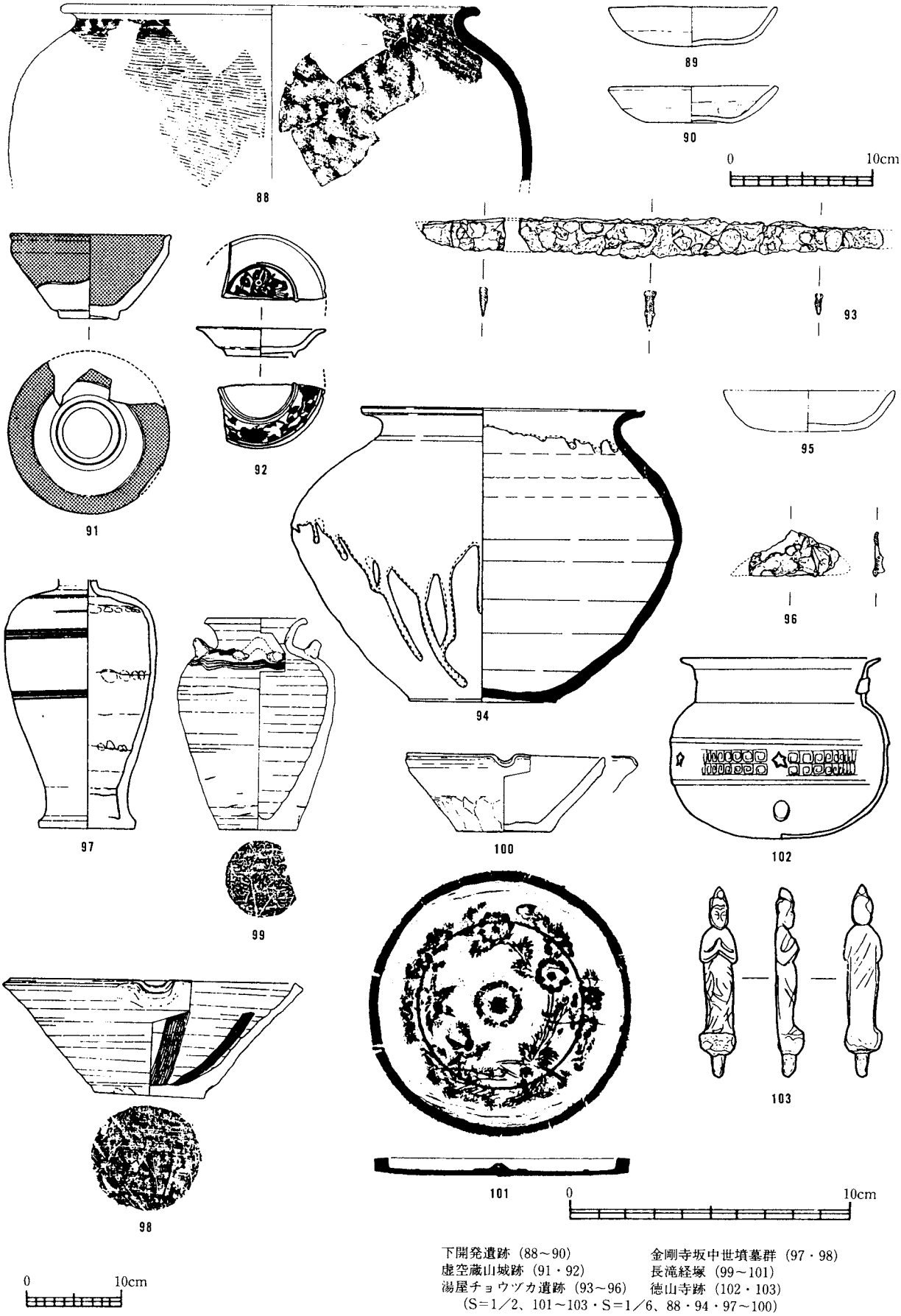
徳山寺跡（No.39）

上徳山集落東方に位置する。虚空蔵山城主の富樫幸千代の菩提寺と伝えられている。昭和28年の耕地整理の際に礎石が確認され、銅製小型仏像・鋳銅製香炉・煙管・中世陶器などが採集されている。

来丸天明寺跡（No.53）

来丸集落南東の丘陵麓に位置するとされるが、昭和55年に圃場整備事業に係る発掘調査では、寺跡と確認される遺構・遺物は発見されていない。他に中世の遺構・遺物が検出されている遺跡は、長滝遺跡・岩内遺跡・下開発茶臼山古墳群・高座遺跡などがある。また、未調査の遺跡では大口経塚・岩本経塚・岩内経塚・大口長生寺・坪野智永寺・坪野妙観寺・金剛寺などがある。

以上のように、辰口町の遺跡の概要を見てきたが、当町では旧石器時代以降、丘陵地とその周辺が主として人間の活動の場となっている。旧石器時代では、丘陵北部でなどの調査例があるが、今後の調査の進展によってはさらに遺跡数は増加するものと予想される。続く縄文時代においては、丘陵北部で中期の集落遺跡が多く調査されており、庄が屋敷C遺跡などが代表的な遺跡である。しかし、中期後葉頃から気候の寒冷化が始まり、前期から中期中葉までの温和な気候が失われていく。寒冷化の影響は縄文人の食糧源となる動植物にも大きかったものと思われ、より低地への進出がこの時期から弥生時代前・中期にかけて始まるものと一般に理解されている。弥生・古墳時代の遺跡は高座遺跡、西山古墳群、下開発茶臼山古墳群で確認されている程度であるが、当町の西側に接する寺井町・小松市では和田山下遺跡、高堂遺跡、千代遺跡、漆町遺跡など当期の集落遺跡が調査されていることから活動の主体が平野部へ移行したためと考えられる。古代は、丘陵北西部で主に須恵器の生産が開始される。また、平野部では下開発遺跡、徳久・荒屋遺跡などの集落遺跡が確認される。その背景としては、天平勝宝七年（755年）の墾田永年私財法の施行などにより土地の私有化が公認されるとともに、私有や寺有の庄園が形成されたことが考えられ、当地が「東大寺領幡生庄」として開発が活発化したと推定される。中世の遺跡は、経塚や墳墓を除いては数少ないが、当時すでに耕地化はかなり進んでいたと予想され、石内遺跡では遺物の広汎な散布が認められる。付近に中世集落が存在した可能性もあるが、近・現代のほ場整備などで削平された可能性もある。当町における人的活動の盛期は縄文時代と古代であったと考えられる。また、それぞれの盛期のうちでも縄文時代は中期の前葉から中葉の集落遺跡、古代では8世紀前半までの窯跡群、8世紀後半からの集落遺跡と性格を異にする遺跡が主体となっているようである。これらの遺跡がどのように成立し、盛期を形成して、また終息していくのかは不明確な点ではあるが、数々の調査で得られた多くの考古資料が文献史や自然史などとともに、本書が地域史を考察するうえでの一助となれば幸いである。　（三谷正輝）

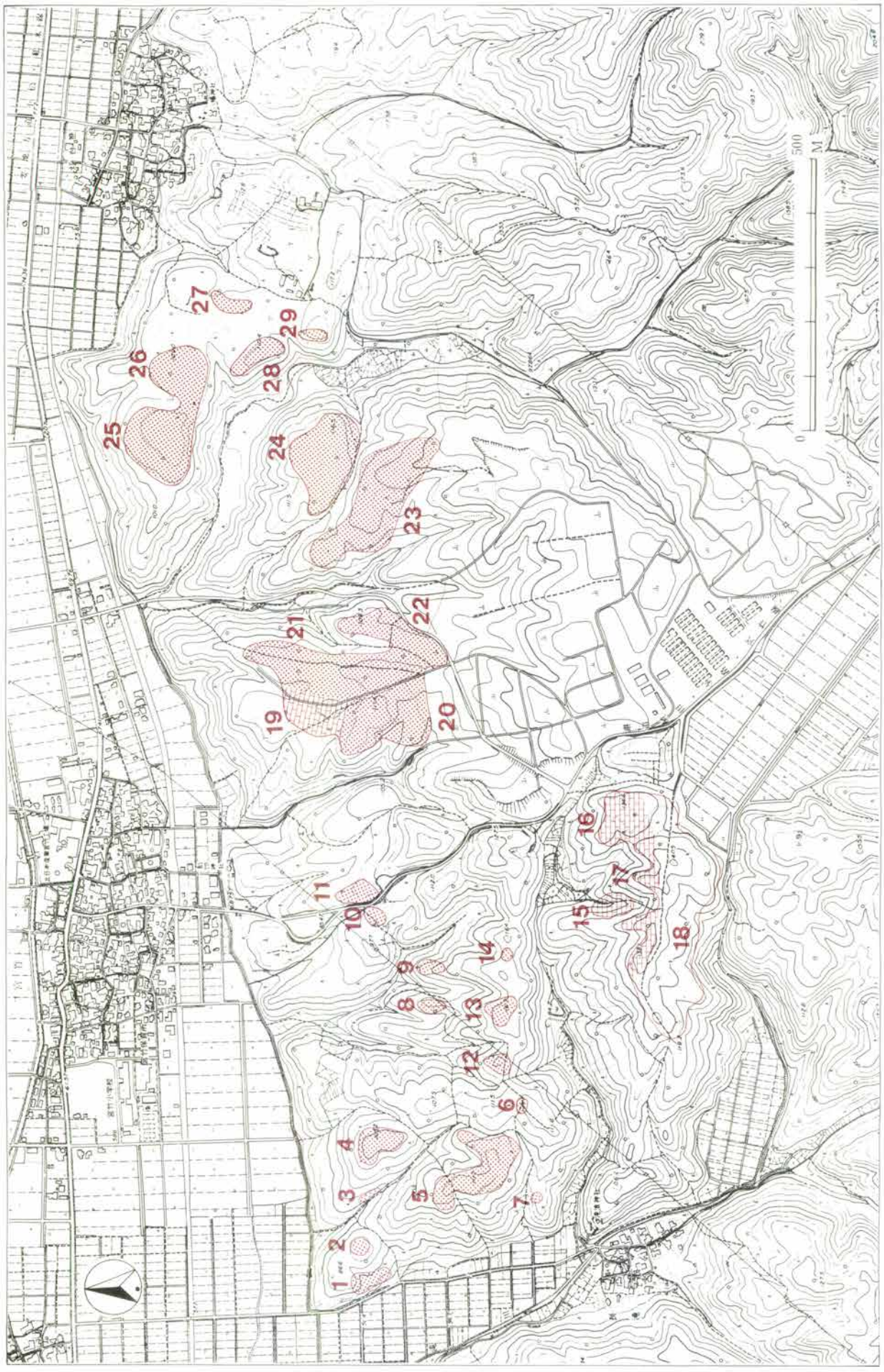


下開発遺跡（88～90）　　金剛寺坂中世墳墓群（97・98）
虚空蔵山城跡（91・92）　　長滝経塚（99～101）
湯屋チョウヅカ遺跡（93～96）　　徳山寺跡（102・103）
（S＝1／2、101～103・S＝1／6、88・94・97～100）

第6図　中世の遺物（1/2・1/4・1/6）

（参考文献）

北野博司　1988『辰口西部遺跡群Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
小嶋芳孝・藤田邦夫他　1993『岩内遺跡・長滝遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
滝上秀明　1985『辰口町湯屋チョウヅカ遺跡』辰口町教育委員会
滝上秀明　1988『辰口町虚空蔵山城跡』辰口町教育委員会
滝上秀明　1988『辰口町湯屋古窯跡群Ⅱ』辰口町教育委員会
辰口町史編纂委員会　1983『辰口町史第一巻自然民俗言語編』辰口町
辰口町史編纂委員会　1987『辰口町史第二巻前近代編』辰口町
寺井町史編纂委員会　1994『寺井町史第三巻自然民俗集落編』寺井町
中島俊一　1978『辰口町・高座遺跡発掘調査報告』石川県教育委員会
西野秀和　1978『筋生遺跡』辰口町教育委員会
西野秀和　1982『辰口町下開発茶臼山古墳群』辰口町教育委員会
西野秀和他　1993『能美丘陵東遺跡群Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
橋本澄夫　1990『日本の古代遺跡　43　石川県』保育社
安　英樹　1993『県土幹線軸道路整備事業（加賀産業開発道路）関係埋蔵文化財発掘調査報告害』石川県立埋蔵文化財センター
山本直人　1986『岩内遺跡発掘調査報告書』石ノⅠⅠ県立埋蔵文化財センター
山本直人　1988『岩内遺跡』石川県立埋蔵文化財センター



第7図　「いしかわサイエンスパーク」整備事業関連遺跡分布図（1/10,000）

II　調査の経過

石川県能美郡辰口町宮竹、大口、灯台笹、長滝、旭台地内で実施されている「いしかわサイエンスパーク」整備事業は、昭和63年度（1988）に設置された「先端科学技術大学院準備調査室」から広範囲な事業計画が始まり、平成２年（1990）に創設された「北陸先端科学技術大学院大学」へと具体化していく中で、大学を核とした周辺地域約175ヘクタールを、民間研究所・住宅・公園等用地として総合的に整備していく地域総合開発事業である。

開発地域内は各集落の裏山という立地状況ではあるものの、雑木林、山林地域であった事から、埋蔵文化財の分布状況の把握は空白に近く、石川県教育委員会発行の遺跡地図において周辺地域に周知の埋蔵文化財数カ所を数えるに過ぎない状況であった。

昭和63年度の１月に事業予定地の現地踏査が、辰口町教育委員会を主体とし、石川県立埋蔵文化財センターが協力するという形で実施されたのが現地での調査の始まりである。同年度に関係機関の協議が持たれ、大学本体に関係する地域の埋蔵文化財は町教育委員会が対応し、石川県土地開発公社が事業主体となる「いしかわサイエンスパーク」整備事業に係わる地域においては、石川県立埋蔵文化財センターが調査主体として作業を行う事とした。開発区域においては旧石器時代の灯台笹遺跡を初めとする周知の遺跡に影響は及ばないと判断できるものの、多くの地点が平野部に近い丘陵地であり、広い平坦地が丘陵尾根上に広がる事から未発見の遺跡が所在している可能性が高いと判断され、工事中での不時発見を避けるという観点から事前の埋蔵文化財の有無を確認する為の試掘調査等を実施する事とした。試掘調査等の結果に基づき、以後の取り扱いについては関係機関で協議を行う事が了解された。

平成元年度には町教育委員会による大口地内の試掘調査や町教育委員会と本センター合同の開発区域全域の再踏査が実施された。翌年の平成２年度には、町教育委員会による大口Ｄ遺跡（約2.500㎡）、大口窯跡（約1.300㎡）の発掘調査が、県道改良・住宅整備用地に係る形で行われ、周辺整備用地内での分布調査は期間的な制約があった事から長滝地内の約90.000㎡を対象として10月下旬から11月下旬までの約２カ月間実施した。立木の伐採がなされていない中での作業は多くの困難が伴った。確認できた遺跡は、大口小松原遺跡、長滝宮谷遺跡、長滝長尾遺跡、滝谷寺跡の４遺跡であった。

平成３年度には残余部分約605.000㎡を対象とした分布調査が４月初めから９月半ばまでの長期にわたって実施され、縄文時代の大集落跡が推定された宮竹地内の庄が屋敷遺跡群や旧石器時代の灯台笹下遺跡をはじめとして21遺跡の所在が明らかとなった。また、新設の県道用地内に含まれた宮竹うっしょやまＡ遺跡の南端地区（約1.300㎡）の発掘調査が、町教育委員会によって実施された。

第２表　遺跡地名表（第７図）

1　長滝八萬Ａ遺跡　2　長滝八萬Ｂ遺跡　3　宮竹墓谷中世墓群　4　宮竹沙弥城山遺跡　5　長滝墓山Ａ遺跡　6　長滝墓山Ｂ遺跡　7　長滝墓山Ｃ遺跡　8　宮竹中山Ａ遺跡　9　宮竹中山Ｂ遺跡　10　宮竹大破毛Ｂ遺跡　11　宮竹オオハゲＡ遺跡　12　宮竹観音開きＡ遺跡　13　宮竹観音開きＢ遺跡　14　宮竹観音開きＣ遺跡　15　長滝宮谷遺跡　16　大口小松原遺跡　17　長滝長尾遺跡　18　滝谷寺跡　19　庄が屋敷Ａ遺跡　20　庄が屋敷Ｂ遺跡　21　庄が屋敷Ｃ遺跡　22　庄が屋敷Ｄ遺跡　23　宮竹うっしょやまＡ遺跡　24　宮竹うっしょやまＢ遺跡　25　宮竹あつ坂遺跡　26　灯台笹裏野Ａ遺跡　27　灯台笹裏野Ｂ遺跡　28　灯台笹下遺跡　29　灯台笹ながげ遺跡

全域の分布調査が終了した10月下旬には、事業地域内の広い範囲に渡って展開している25遺跡（滝谷寺跡を除く、対象面積約170.000㎡）の所在が確定し、以後の埋蔵文化財の取り扱いについての協議が、企画開発部、土地開発公社、県教育委員会文化課、埋蔵文化財センターとの間で持たれた。広大な面積での開発事業である事から全体事業終了年度は平成12年度までの長期間に渡る計画であるが、発掘調査は７年程度での計画で対応して頂きたいとの協議が企画開発部側から提起され、開発事業工程の見直しが図られた。センターでは恒常的に膨大な調査量を抱えている事から現状での調査体制では対応しきれないと判断され、大幅な人員増と専従の調査体制の確立が必要と認められた。

平成４年度にはサイエンスパーク関連の対応を専従とした調査第３課が当センター内に設置され、辰口町教育委員会職員２名の併任を含めて職員６名、嘱託１名、調査補助員７名で現地調査に取り組む体制が整えられた。調査体制は調査員２名･補助員２～３名、作業員約30名で班を編成し、３班３現場が並行する形で作業を進める事とした。

平成４年度は宮竹オオハゲＡ遺跡（約3.000㎡）、庄が屋敷Ａ遺跡（約5.000㎡）、庄が屋敷Ｂ遺跡（約4.100㎡）、庄が屋敷Ｃ遺跡（約5.000㎡）、庄が屋敷Ｄ遺跡（約5.400㎡）と炭窯跡６箇所の調査を実施し、同年度に「能美丘陵東遺跡群」として報告書を発刊した。

平成５年度(1993)には調査箇所がまとまっていたことから２班体制として現地作業を行い、庄が屋敷Ａ遺跡(約6.800㎡)、庄が屋敷Ｃ遺跡（約12.700㎡）、大口小松原遺跡（約3.800㎡）、長滝長尾遺跡（約1.700㎡）、長滝宮谷遺跡（約400㎡）、宮竹観音開きＡ遺跡（約500㎡）、宮竹観音開きＢ遺跡（1.500㎡）、宮竹観音開きＣ遺跡（約500㎡）と炭窯跡４箇所の調査を実施した。

本報告書は、平成５年度に調査を行った庄が屋敷Ａ遺跡他の整理が終了した遺跡の報告書である。なお、遺構・遺物ともに豊富に検出された庄が屋敷Ｃ遺跡については後日刊行を予定している。

Ⅲ　庄が屋敷Ａ遺跡

1　地形

標高約100～500ｍのなだらかな丘陵が重なるように連なる能美丘陵は、東西方向約10㎞、南北方向約４㎞の広がりをもって、西側の日本海側に高度を下げ南加賀の平野部に限られるが、平野部にも独立丘陵を点在させる。丘陵の北縁を限るのは県下最大の河川、手取川で、南側の縁を小河川の鍋谷川が蛇行しながら西に流れる。能美丘陵は、ほぼ辰口町の町域に重なる形と言える。

庄が屋敷遺跡群は、能美丘陵内の東部に立地する遺跡群で、能美郡辰口町宮竹地内に所在する。立地している丘陵は標高約100ｍから112ｍのなだらかで幅のある尾根を形成して北側の手取川に向かって高度を下げていく。Ａ遺跡を含めた庄が屋敷遺跡群は幅のある尾根上に展開する４遺跡で構成され、樹枝状に分かれた尾根筋ごとのまとまりとして分離したものである。庄が屋敷遺跡群全体では、南北方向約300ｍ、東西方向約270ｍの広大な面積を占めている。平野部に最も近接している庄が屋Ａ敷遺跡では、南方向に直線距離にして約200ｍ、比高差約40ｍ程度で平地に至る。平野部を直接的に望む前山の丘陵上での試掘調査は開発区域外となる事から実施していないが、遺跡が所在する可能性は極めて高いと判断される。庄が屋敷遺跡群の前山の背後の尾根上を占地するという在り方は、今後縄文集落を見ていく上での重要な視点を提供したものと思われる。

庄が屋敷Ａ遺跡は遺跡群の北西に位置し、東側は幅の狭い緩やかな谷を介在させて南北方向に伸びるＣ遺跡と並列し、南側は比高差約10～20ｍを持ったＢ遺跡へと傾斜している。西側は約50ｍの落差がある急峻な深い谷に画され、北の平野部側へは狭い鞍部をおいて尾根筋が連なり、やはり、急傾斜面を形成して平野部に落ちる。

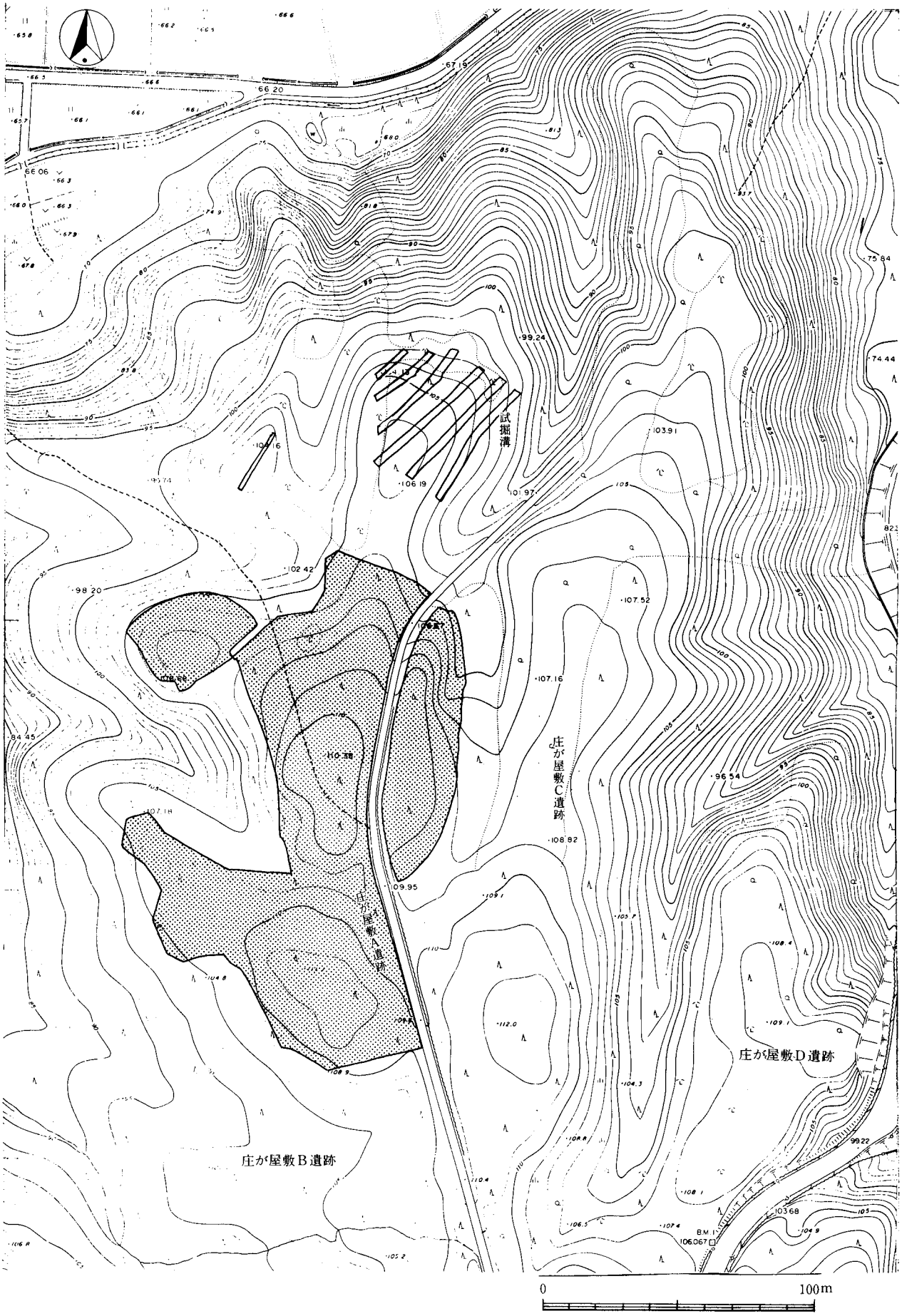
南北方向に伸びる林道は集落にまではとどかず、Ｃ遺跡の北端東部で止められている。Ａ遺跡では頂上部分から僅かに東に寄った位置で尾根筋に並行して走り、傾斜変換点から東に向きを変えて谷筋に入る。

尾根筋を微地形的に見れば、長楕円形の緩傾斜の丘陵が鞍部を置いてつながる形であり、南地区は標高111ｍを越える最高所から北西方向に伸び、北地区は南北方向に長い丘陵尾根となり八方に緩い斜面を形成する。北地区に隣接した北西部は、鞍部を置いて小丘陵が派生した形となる。南地区の最も高い位置には縄文時代の竪穴式住居址１棟が、西側端には古代の竪穴式住居址及び焼土坑群が検出された。北地区では丘陵頂上部が空白地となり、周辺部に中期の竪穴式住居址が適度な距離を置いて10棟以上で環状形態で配置されているのが検出された。北西部の派生した尾根上には、結果としての環状集落に付随する位置で１棟の住居址が確認された。古代の焼土坑群は、西側斜面に沿う形での検出である。

2　調査の経過

林道に隣接している為に、南西地区を除いて丘陵全域に杉の植林が為されている状態で、鞍部や谷筋にあたる地区では樹齢が50年を越える大木に成長していたが、緩傾斜が広がる丘陵尾根筋では比較的若い杉の木が目立った。

発掘調査は調査班ごとに担当地区を定めて進める事とし、Ａ遺跡調査班は、東に隣接するＣ遺跡北端地区をも併せて受け持った。Ｃ遺跡北端部は、前年の平成３年度に重機による表土除去が平坦部分で実施されていたが、平成５年４月７日から範囲確定に併せて周辺地区への再度の重機による表土除去作業を行った。作業員の参加を得てからは、Ｃ遺跡北端部での遺構検出作業に並行して、４月下旬からＡ遺跡での重機による表土除去作業を実施した。試掘調査の結果によれば、遺物の小片と黒褐色土層が認められてはいたものの、遺構の密度は希薄と推定されていた。表土除去作業はＣ遺跡に隣接する谷と林道に挟まれた地区から始めたが、地山層上面での遺物の出



第８図　庄が屋敷Ａ遺跡地形図（1/2,000）

土は全く認められず、傾斜変換線上に１点の一括土器を認めただけであった。表土除去は引き続いて林道を越えた西側地区の平坦部分から緩傾斜が伸びていく北側地区へと進めた。北側の緩斜面でも遺物の出土は単独出土に近い石器や小片の土器が見られる希薄な状態が続いたが、調査区中央部の林道に隣接して焼土面が見られる１箇所が注意された。Ａ遺跡の南端地区約5000㎡は、平成４年度に発掘調査が実施されていて、その排土が調査区内に積み上げられている事から、その排土を調査区から南約400ｍの造成工事箇所へ搬出する事とした。表土除去作業は５月６日に終了したのであるが、遺構検出・精査はＣ遺跡北端部での作業を優先して実施し、Ａ遺跡での遺構検出作業を開始したのは６月に入ってからである。

調査区は国土基本図に乗せた10ｍ間隔の杭を打ち、前年に行われた南端地区での５ｍグリッドに準じた区画を設定した。東西方向にはアルファベッド、南北方向はアラビア数字で表示し、北西隅の杭でグリッド表示名とした。

６月前半の遺構検出作業は、重機によっては排除しきれなかった杉の木の根株の処理作業から始めた。南地区の根株周りの土からは、縄文土器の出土が見られ、何らかの遺構が残されている可能性が高いと判断できた。さらに調査が進み地山面が確定されると、掘り込みの一部だけが残る住居址や掘り込み部分が全く失われて貯蔵穴跡だけとなった住居址などが現れてきた。

６月下旬には平面楕円形状の丘陵の傾斜変換線上に、縄文時代中期前半の10棟を越える竪穴式住居址が環状に配置されているのが把握された。広い平坦面を持つ尾根上に住居址が密集して展開するＣ遺跡での在り方とは異なり、限定された時期での環状集落址の在り方としての位置付けが可能視され、また、遺物包含層が顕著に把握できない地点においても住居址が配置されている可能性が考えられた事から、周辺地域での確認調査を実施する事とした。調査区北端の西側に緩傾斜面を形成する小丘陵では、全域の表土を除去して１棟の住居址を検出する成果が上げられた。また、調査区の北端から平野部に寄った南北に細長い丘陵部で、幅約２ｍの試掘トレンチを６本設定し確認調査を実施した。各トレンチとも、明瞭な包含層や遺物は確認できず、また、遺構の検出も認められない事から遺構の形成されない丘陵地区と判断した。

７月上旬から８月の旧盆までの期間で13棟の住居址、12基の土坑の精査、実測、遺物取り上げ、写真撮影を順次進めた。旧盆開けの18日から、大口小松原・長滝長尾遺跡への発掘調査を開始した。

調査日誌（抄録）

４月７日～５月６日　庄が屋敷Ｃ遺跡北端部での重機による表土除去作業と併せて、Ａ遺跡での表土除去及び残土搬出を行う。

５月24日～６月11日　Ｃ遺跡での遺構掘り下げが終了したので、Ａ遺跡での作業を開始する。根株周りの残土の排除と根株の処理作業。グリッド杭の設定。

６月16日　切り株処理が終了したので、南東隅から地山面を検出して遺構確認を始める。

６月17日　南地区での遺構検出で住居址状の落ち込みを検出する。昨年度の１棟の住居址に順じて、２、３号住居址とする。住居址番号は検出順として振り込んだ。

６月18日～24日　林道から東側の調査区での遺構検出。５号住居址の検出。

６月25日～28日　北側地区での遺構検出。３、５号住居址の掘り下げを始める。

７月１日　調査区全体で13号住居址までの把握ができた。３～５号住居址の掘り下げ。

７月２日～６日　２、３、５、11号住居址の掘り下げ。北端部の西側丘陵部の表土除去。

７月７日　２、３、６、７号住居址の掘り下げ。11号住居址の土層断面図作成。

７月８日　２、５号住居址貯蔵穴の掘り下げ。４号住居址の床面精査。７号住居址の掘り下げ。丘陵の南北を走る山路と推定される部分の掘り下げ。

７月９日　土坑、住居址の実測図の作成。

７月16日　２、３、５、７号住居址の床面精査。10号住居址の掘り下げ。４号住居址、SK101の遺物取り上げ。SK107、

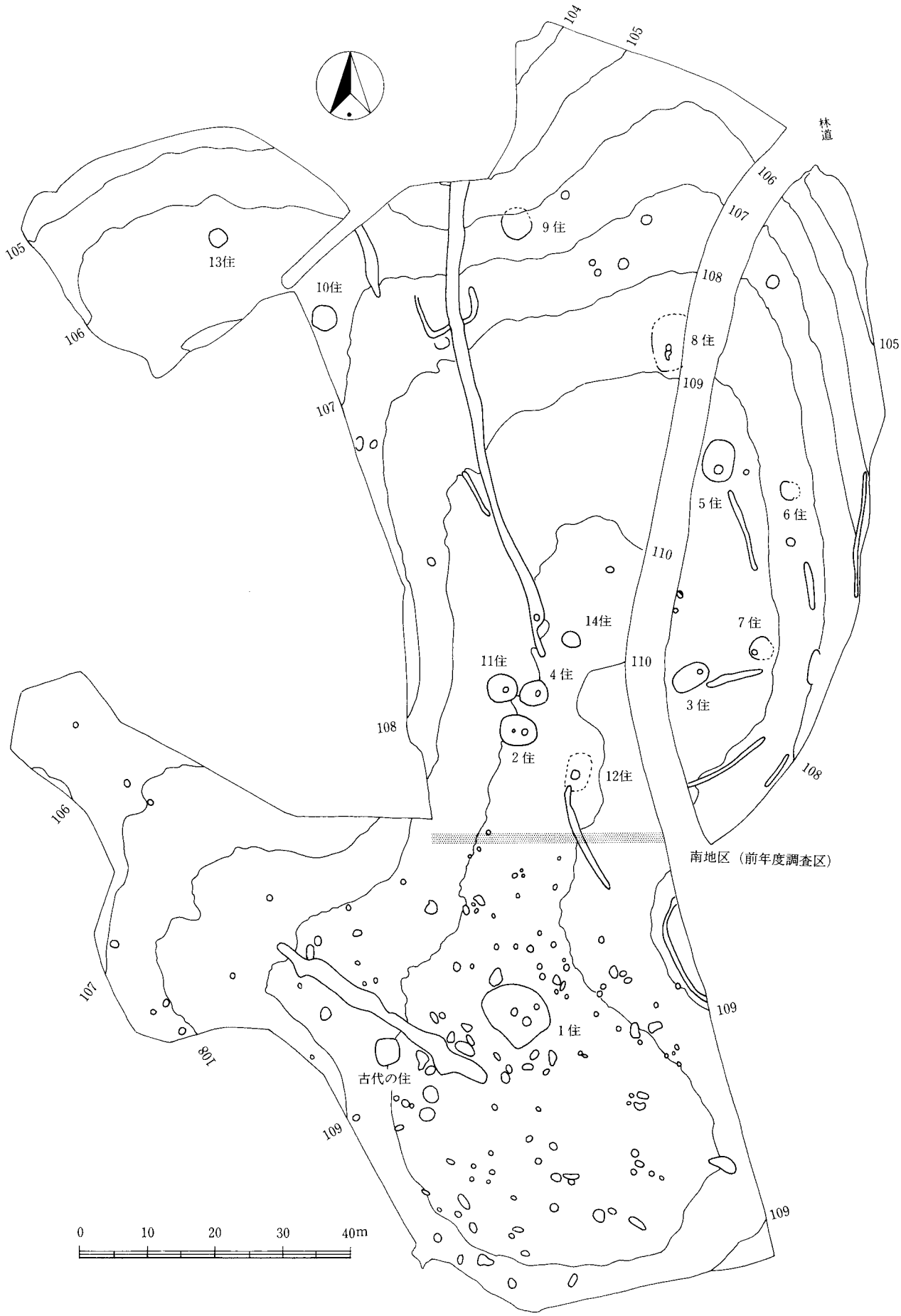
114の掘り下げ、実測。
7月19日　北端丘陵の確認トレンチの精査。
7月20日　林道から東地区の精査。2、3、5、11号住居址の床面精査。5号住居址は6本主柱である。8号住居址、SK112の掘り下げ、
7月21日　2、4、11号住居址の床面精査。林道から東北、西南地区の精査。
7月22日　6、8～10号住居址の床面精査。SK102、103、105、107、113の写真撮影。12号住居址の貯蔵穴の掘り下げ。
7月23日　12号住居址の貯蔵穴内の遺物出土状況の実測。遺物取り上げ。8、10号住居址の床面精査。6、8～10号住居址、SK110の写真撮影。
7月26日　北西拡張区の切り株処理。
7月27日　8号住居址貯蔵穴の掘り下げと実測。2、11号住居址、SK101の実測。北西拡張区の切り株処理。
7月28日　3、5、7号住居址の実測。北西拡張区の切り株処理。
7月29日　5、8号住居址の実測。北西拡張区の切り株処理。北方トレンチの精査。東端のトレンチから打製石斧が単独出土。
7月30日　北方トレンチの精査。5、8、10号住居址の実測。
8月2日　北方トレンチの精査、平板測量。北西拡張区の精査。
8月4日　北方トレンチの平板測量。北西拡張区の平板測量。9号住居址の実測。
8月5日　北西拡張区の遺構検出。中央部に土坑状落ち込みが1基だけ見られる。
8月9日　庄が屋敷Ｃ遺跡北端部の精査と写真撮影。大口小松原遺跡での重機による表土除去を開始する。
8月23日　補足実測と写真撮影。
9月7日　航測に向けての清掃作業。
9月16日　航測に向けての清掃作業。
9月17日　Ｃ遺跡と併せて航測を実施。

3　層序と遺構の配置

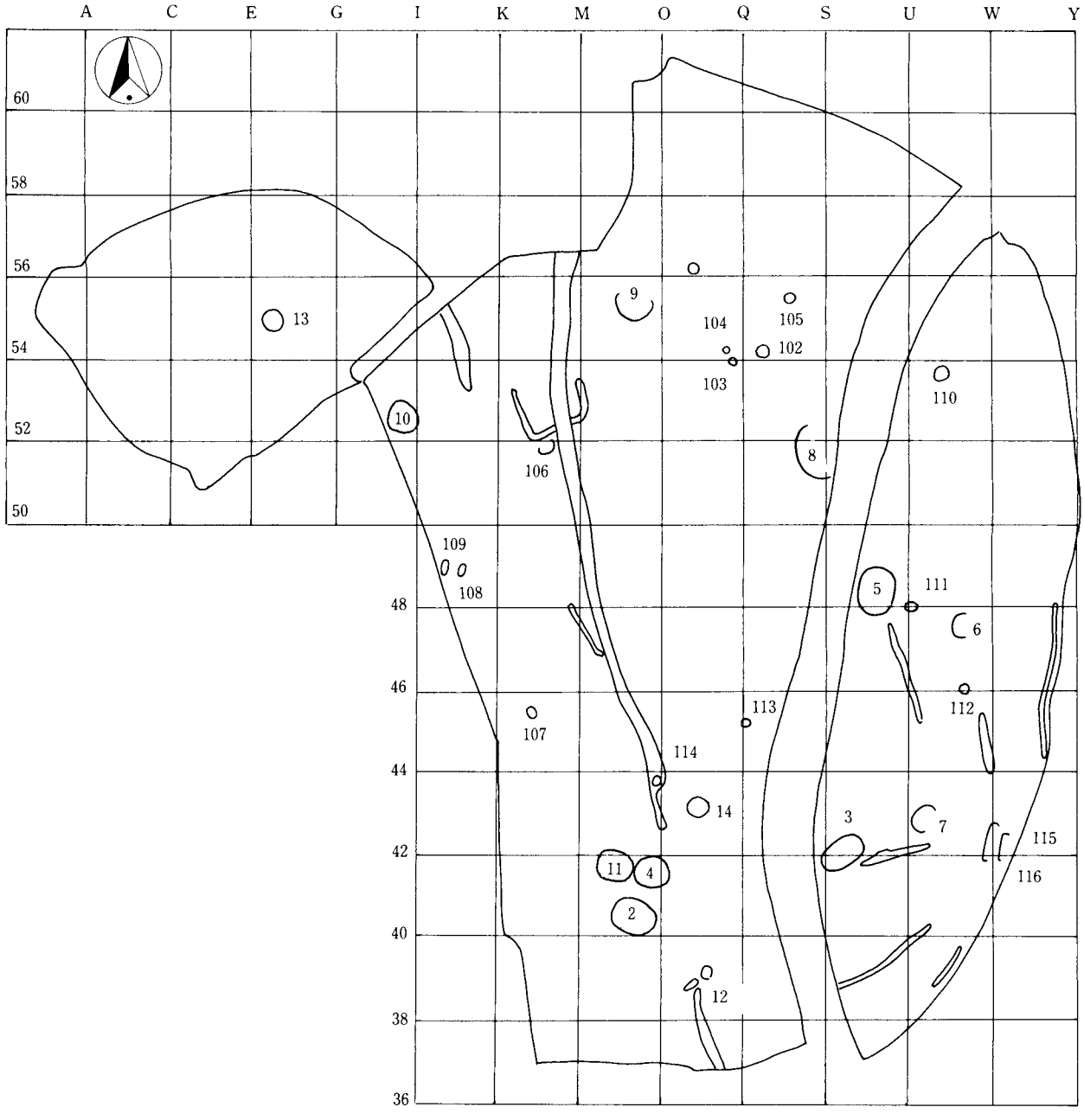
本遺跡は南北方向に伸びる細長い丘陵に立地しているが、微地形的に丘陵を見るならば、南地区は派生する尾根筋が北西方向に伸びて谷に落ち込み、集落が展開する北地区は、狭い尾根筋から緩傾斜面が北方に幅を広げて伸びていく地形を呈する。西方では丘陵尾根に挟まれた小谷に向けて急激に高度を下げていく。対して、東方は緩やかに傾斜をとり、狭く浅い谷地を挟んでＣ遺跡と向き合う地形をとる。北地区の住居址群は、尾根筋に乗る緩傾斜面から傾斜が強まる変換線上に配置される形態となる。北西端部の拡張地区は、狭い鞍部をおいて瘤状に付属する丘陵で、南側に緩傾斜面を形成し住居址が立地しているが、北及び西側は急激に落ち込み急斜面を形成している。

層序は10棟を越える住居址群が配置されるにも関わらず、明瞭な遺物包含層の形成は認められず、調査区全体は傾斜のある丘陵で通例的に見られる流土及び自然腐植土が谷側に堆積するという状況で、尾根上は表土層直下に地山面が露呈するという在り方であった。調査区北端の鞍部では、黒褐色の自然腐植土が厚く堆積し50cmを越える地点も見られた。

本遺跡の南端地区約5,000㎡は、平成4年の夏から冬にかけて発掘調査を実施し、縄文時代・古代の住居址各1棟と焼土坑16基が検出されている。縄文時代の第1号住居址は、本丘陵の中で最高所を占地し、ほぼ南北方向に長い平面不整楕円形プランを呈し、長軸10.5m、短軸8.9m、深さ30cmの規模を測り、東寄りに貯蔵穴と推定される土坑1基が掘り込まれていた。土坑覆土から横位の羽状縄文が施文される小波状口縁の深鉢片が得られ、前期前葉の佐波式期に並行するものと考えられている。第1号住居址からは、佐波式土器以外に表裏縄文土器や中期



第９図　庄が屋敷Ａ遺跡全体図（1/800）

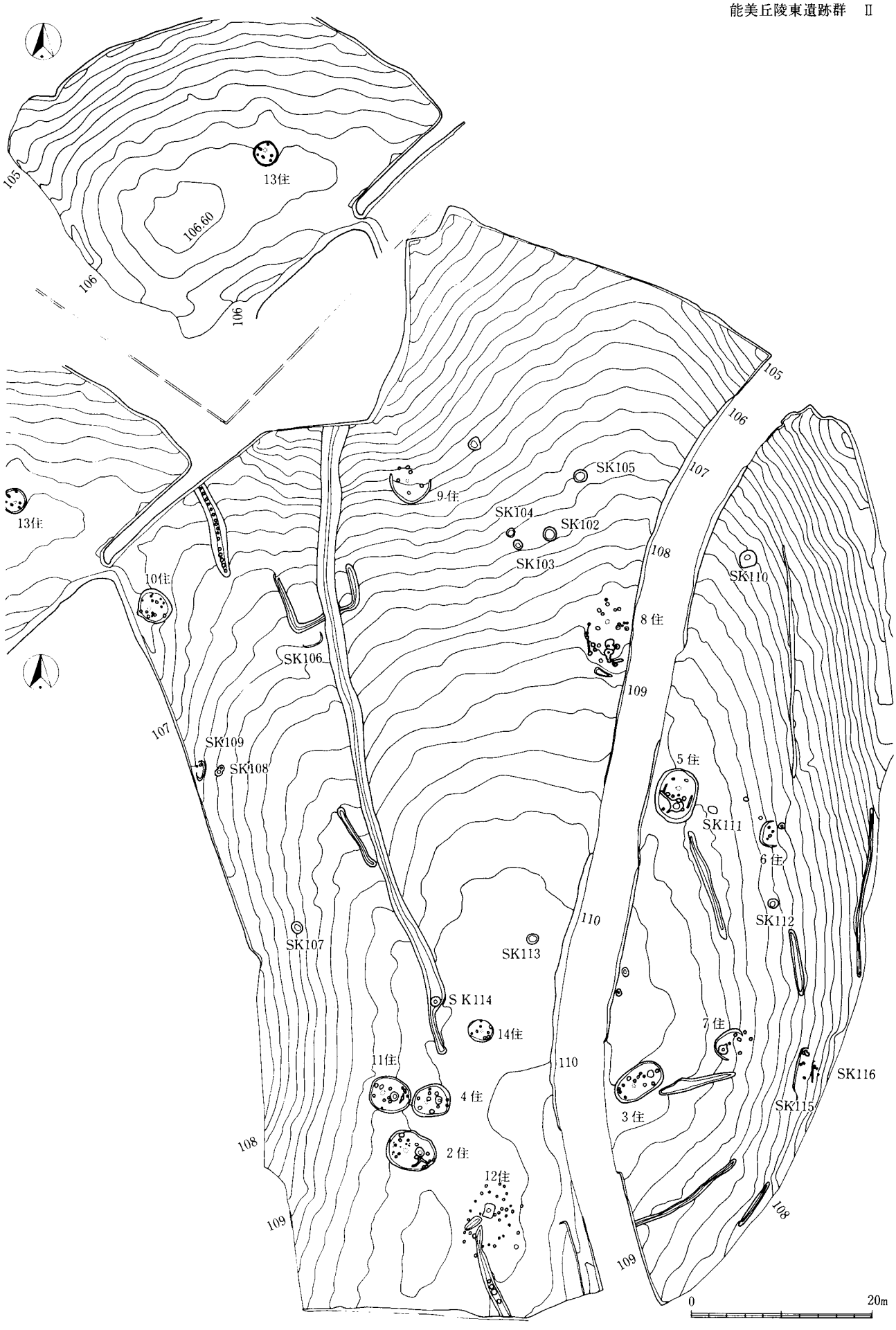


第10図　区画配置図（1/800）

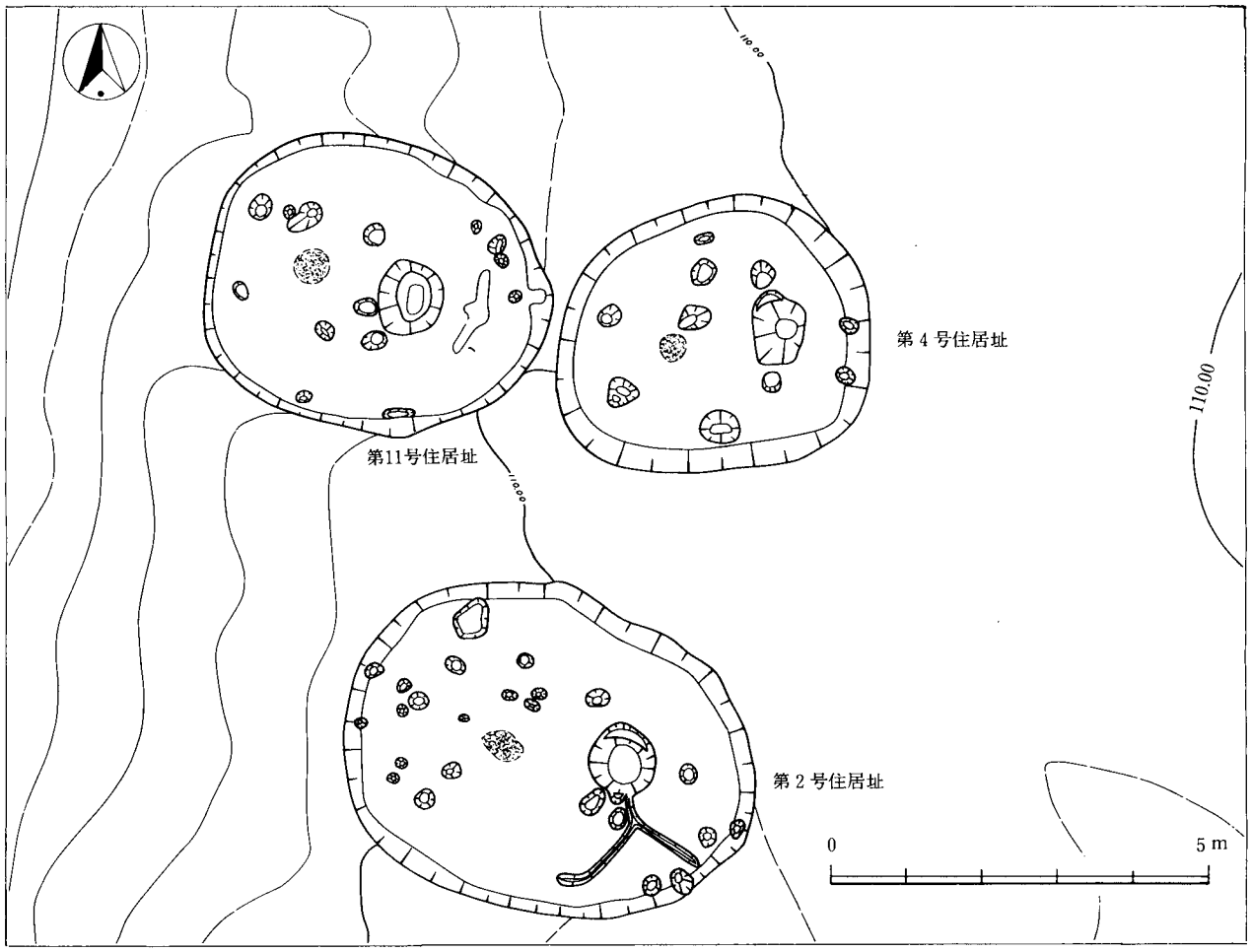
前葉の新保１式土器などが出土している。いずれにしろ、本次調査で検出された住居址群とは30mを越える距離があり、また、時期的な差がある土器の出土から遺物での確定は困難であるが、住居内に貯蔵穴を設ける形態や石皿、磨石類の出土頻度の高さなどに類似性が指摘され、本丘陵に定住的な進出を果たした中期前葉段階を想定していく上で重要な住居址と考えられる。

古代の住居址は、丘陵の尾根筋からやや離れて西側斜面に係る位置の検出であった。平面プランは南北方向にやや長い隅円方形で、南北方向380cm、東西方向350cmの規模を測る。傾斜変換線に沿って構築される事から、尾根筋に向いた東側が30cmと深く、西側は10cmの掘り下げで床面にとどく。竈と想定される焼土の固まりが南東隅に検出され、上面や周辺に土師器長甕片の出土が見られた。住居址の構築は、出土した長甕から９世紀前後の時期に想定され、丘陵内での単独住居の歴史的な意義付けは重要な問題を提起していると思われる。

16基の焼土坑の多くは、丘陵の南斜面から西斜面に構築され、北及び東斜面では見られないという特徴的な分布状況を示す。北側の平野部が見える位置や尾根上を避けた斜面で、南方向を意識した選地と考えられ、出土遺



第11図　遺構配置図（1/800）



第12図　第２・４・11号住居址配置図（1/100）

物が皆無なことから時期不詳とされているが、単独住居址に並行する時期、つまり、古代での埋葬施設の可能性を考えていきたい。

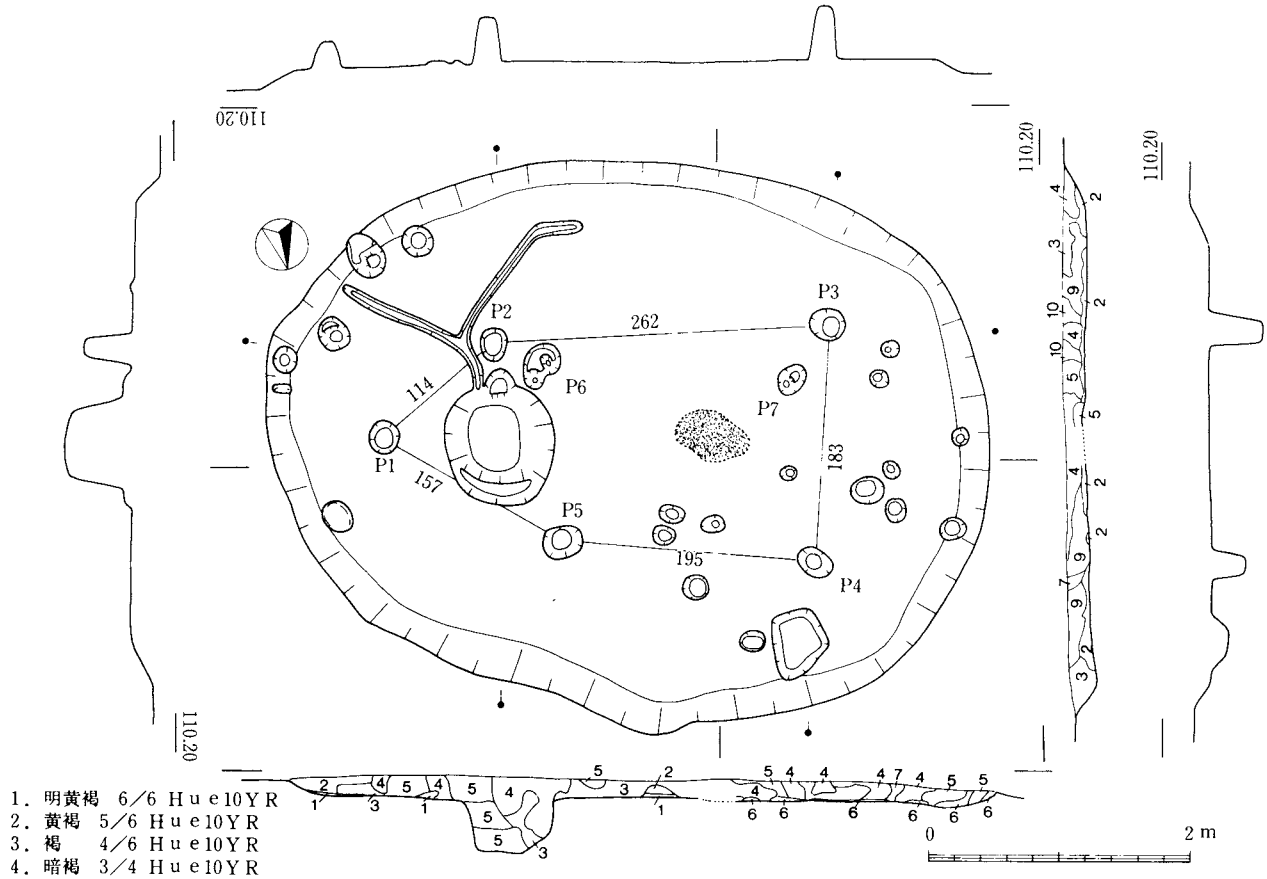
本次調査での主な遺構は、縄文時代中期前半の集落址と斜面に構築された少数の焼土坑群である。南北に伸びる尾根上の緩傾斜面を空地とし、傾斜が強い西側斜面以外の三方の斜面変換線上に、一定の間隔を置いた13棟の住居址が並び、住居址間の空閑地に少数の土坑が配置される。土坑には遺物の伴出は認められず、径30cmを越える平板な円礫が、掘り方に近い位置に置かれるのが２例認められた。縄文時代の遺物の出土は、住居址に隣接する傾斜面を含めて東西、北斜面においても見られず、遺構内の覆土からのものに限定され、量的にも少量であるのが特徴的である。住居址内の遺物においても床面に付随して復元完形となる土器は極めて限定されているのは、10棟を越える住居址とは言え集落形成の性格を表しているものとも考えられる。

焼土坑の分布は傾斜の強い西側斜面に３基、隣接する西側尾根上に１基と、南東斜面裾で検出された２基の並列した長方形プランの土坑がある。後者は床面全体に炭が堆積し、焼土坑とは立地や形態が異なるのであるが、同じ性格を持つものと推測している。焼土坑では伴出遺物は認められず、時期は確定できないのであるが、古代に属するものと考えている。

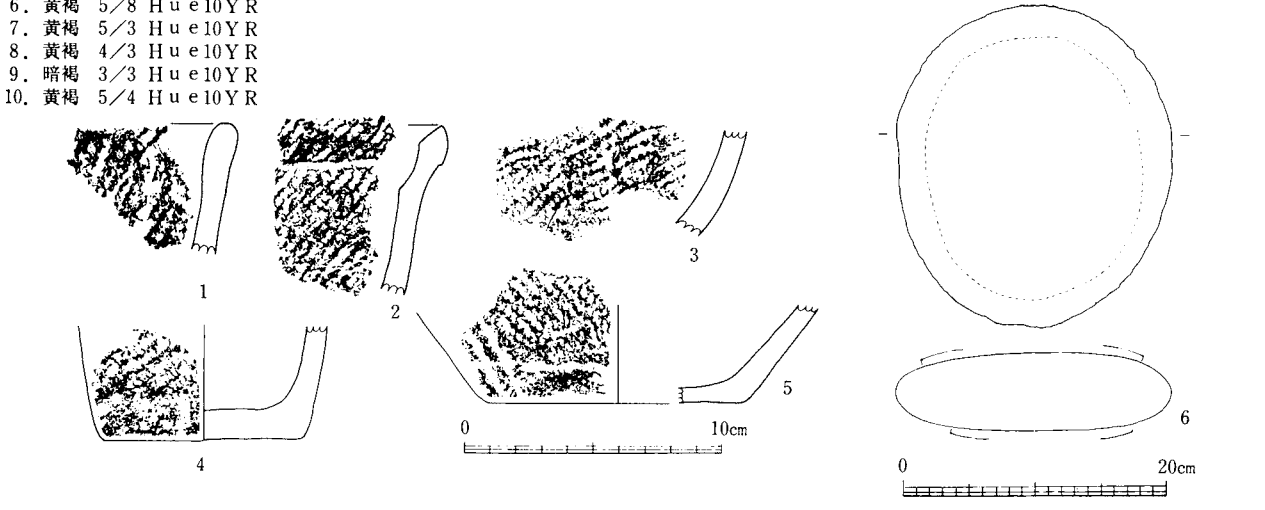
4　検出した遺構と遺物

(1)　竪穴式住居址

検出した住居址は広く調査区に分布し、丘陵頂部を中心として環状に配置されているようにも見られる。住居



第13図　第２号住居址実測図（1/60）



第14図　第２号住居址出土遺物拓影・実測図（1/3、1/6）

址は一定の地区や傾斜面に塊状に群をなし、調査区の最も高所に位置する第２、４、11、12、14号住居址は掘り方が接近した状況にあり、時期的な差を考慮しても群としての把握が出来そうである。この中で、第13号住居址のように狭小な住居址が含まれるという在り方は、東斜面の第３・７号住居址、第５・６・８号住居址の関係にも当てはめて考えられ、それぞれを群として括って考えられる。北端部の第９、10、13号住居址は平面円形プランを呈し距離を置いた配置状況から南地区の群とは異なり、時期的に後出すると判断される。

別の視点では、第２号住居址の群と、第３号住居址の群とで小規模な環状集落と捉えることも不都合ではないように思われるが、廃棄された住居址群の、結果としての環状集落となった可能性が高いと見られる。

住居址の番号は検出順に付けているために、報告においては以上の５つの群を外して番号順に記述していく。また、平成４年度に第１号住居址が発掘・報告されている事から、本報告では第２号住居址から記述していく。

１　第２号住居址（第12～14図、図版２）

遺構　調査区の南方、丘陵尾根上に占地する住居址で、N41グリッドに殆どが含まれる。北西約２ｍに第11号住居址、北東約２ｍに第４号住居址が、南東方向約６ｍほどの間隔を置いて第12号住居址が立地する。住居址の中央と東壁付近には、杉の根株があり、床面と壁に枝根が残る状況での検出であった。

平面プランは長楕円形を呈し、等高線に直行する東西方向に長い掘り方を持ち、東方が高く、西方に向けて緩傾斜となる。尾根上に立地する事から表土層は比較的薄く漸移層が堆積しにくい事から暗褐色の覆土が明確に把握され、住居址との判断は容易であった。長軸方向で557cm、南北方向の短軸は443cmの規模を測り、床面までの平均的な深さは約18cmである。壁の立ち上がりは全体的に緩やかな傾斜面を形成し、丘陵斜面側の西方はさらに緩やかとなる。壁溝が全く掘り込まれないのは、庄が屋敷遺跡群全体を通しての住居址の在り方である。床面は杉の枝根が入り込んでいる為に明確には出来なかったのであるが、おおむね平坦に整えられ、西に寄って配置される地床炉から西側の床面がやや傾斜した状態での検出である。

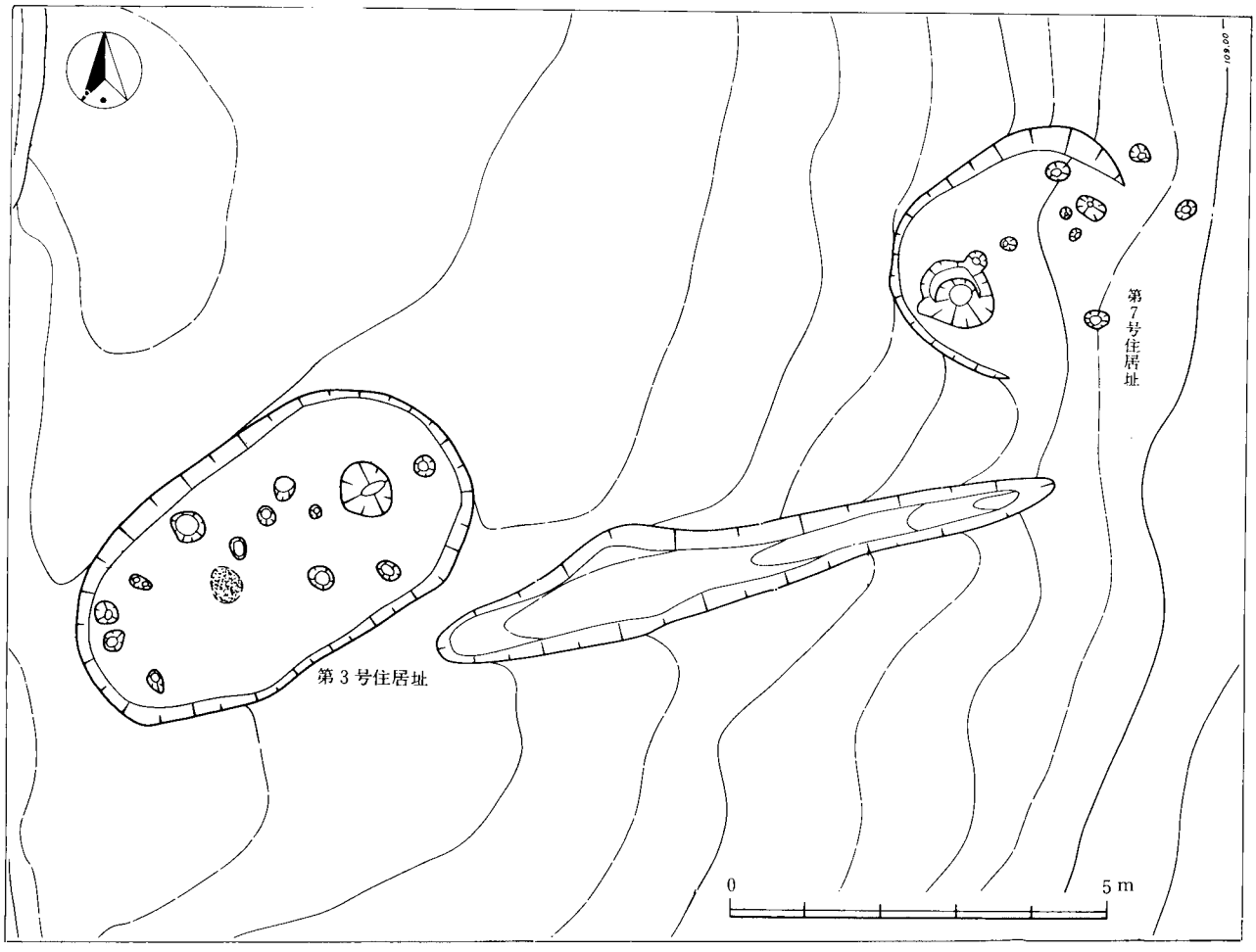
覆土は暗褐色土が上層位に広がり、掘り込み近くでは複雑な形で褐色、暗褐色土が介在しているのは、図を作成した時点で乾燥が進んだ為に判然とは捉えられなかった影響が大きいと思われる。床面に接する部分では黄褐色土が薄い層となるのは、丘陵の斜面側にあたる事から、貼床を行った結果とも推定されるが、確定は出来ない。覆土からの遺物の出土は限られ、縄文施文の深鉢片少量と東壁に接して出土した石皿を認める程度であった。

炉址は地床炉で、住居の中軸線に乗り、中央から西に寄った位置に楕円形プランで検出した。長さ60cm、幅40cmの規模を測る。

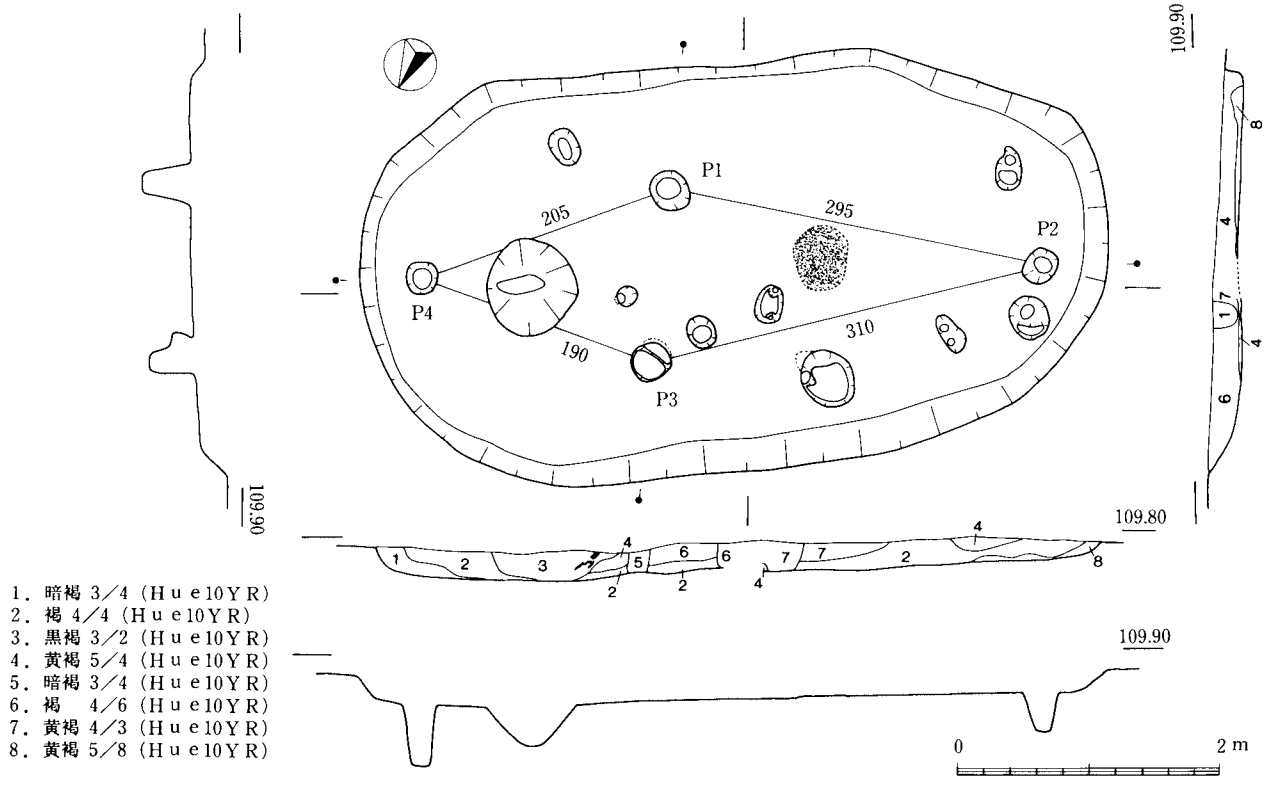
貯蔵穴も中軸線に乗せた形で、東壁に寄る位置で検出した。平面楕円形をなし、北側に段を設けた二段掘りで、長径90cm、短径85cm、深さ38cmを測る。壁の立ち上がりは急角度で、底面は平坦に整えられる。覆土は上層から褐色、暗褐色土が堆積していたが、出土遺物は皆無である。土坑の南側には壁に向かって枝分かれした小溝が掘り込まれている。幅12～20cm、深さ約５cm程度のもので、掘り方の断面は薬研状に近い形である。溝が掘り込まれている方向は、丘陵の尾根に向かうものでありＹ字状に溝を掘って、滲み出してくる水を受けとめ、土坑へ導く為と推定され、貯蔵穴の性格付けにひとつの手がかりを示唆するものと考えられる。また、枝分かれした溝の一方が壁に添うように屈折しているのに対して、東側の溝が壁に向いて直行しているのは、住居の出入口部に当たるのを避ける為ではと想定され、平坦地における竪穴式住居址の入口構造を見ていく上での視点を示すと考えられる。同様の溝は第５号住居址においても観察される。

小穴は西半部で多数を検出できたが、木の根の撹乱と推定されるものが多く、住居址に付く主柱穴は、土坑脇の２個の柱穴を中心として東側に１個、西の壁近くの２個を合わせての、５本主柱（Ｐ１～Ｐ５）と思われる。しかし、内側に寄っているＰ７、Ｐ８での構築が、より方形に近い形となることから、改築を行った結果としてＰ１～Ｐ５となった蓋然性も考慮する必要がある。

土器　出土遺物は少量に止まる。１は口唇に丸味を持たせた深鉢片で、器表が荒れている為に明瞭ではないが、撚りの大きな斜縄文が巡るようだ。内面は撫でによって比較的平滑に整えられる。黄褐色を呈し、胎土には目立つ砂粒は含まれず、焼成は普通である。２は外反して立つ口縁の端部に、粘土紐を貼付して内外面共に段を形成する成形を行う。内面の段の中央部分を指頭で押さえたような微妙な弯曲が付く。肩部の内面には稜線が走るような成形が施される。外周には斜縄文が転がされ、全体に煤が付着している。色調は暗褐色を呈し、胎土には微砂粒の混和が見られる。３は小型深鉢の胴部片で、底部近くかと推定される。淡茶褐色を呈し、胎土に若干の微砂粒が混和される。４は深鉢底部片で、底径約８cmを測る。外底面にかすかに網代痕を認めるが、撫でによって殆どが消されている。立ち上がり部分も撫でが施される。淡茶褐色を呈し、胎土には少量の砂粒の混入が見られる。５は底径約10cmに復元された浅鉢底部である。体部には縦に引かれる半隆起線が見られ、ＲＬの斜縄文が転がされる。器壁は深鉢片と比較して、若干薄手に成形される。茶褐色を呈し、胎土に微砂粒の混和が均一な形で認

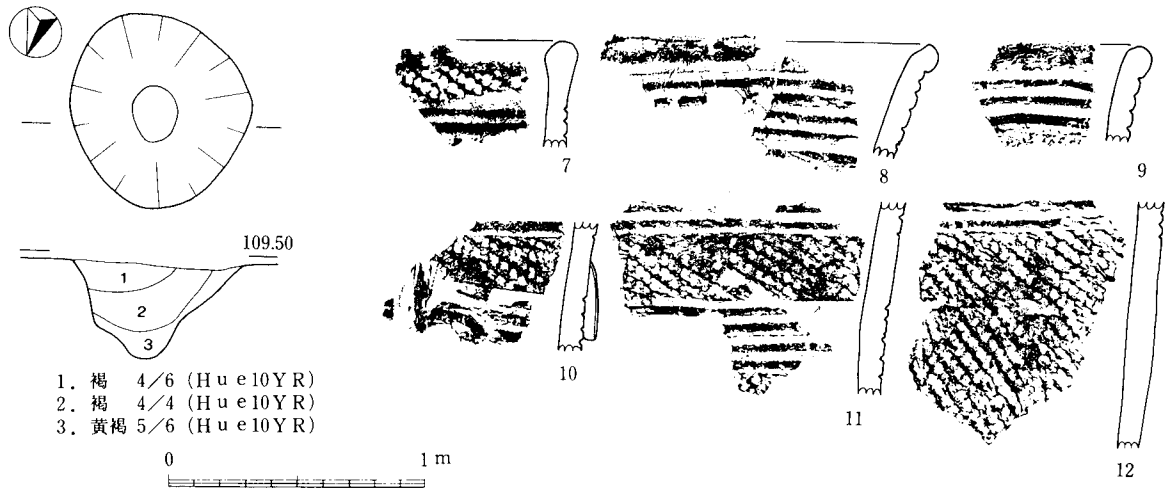


第15図　第3・7号住居址配置図（1/100）

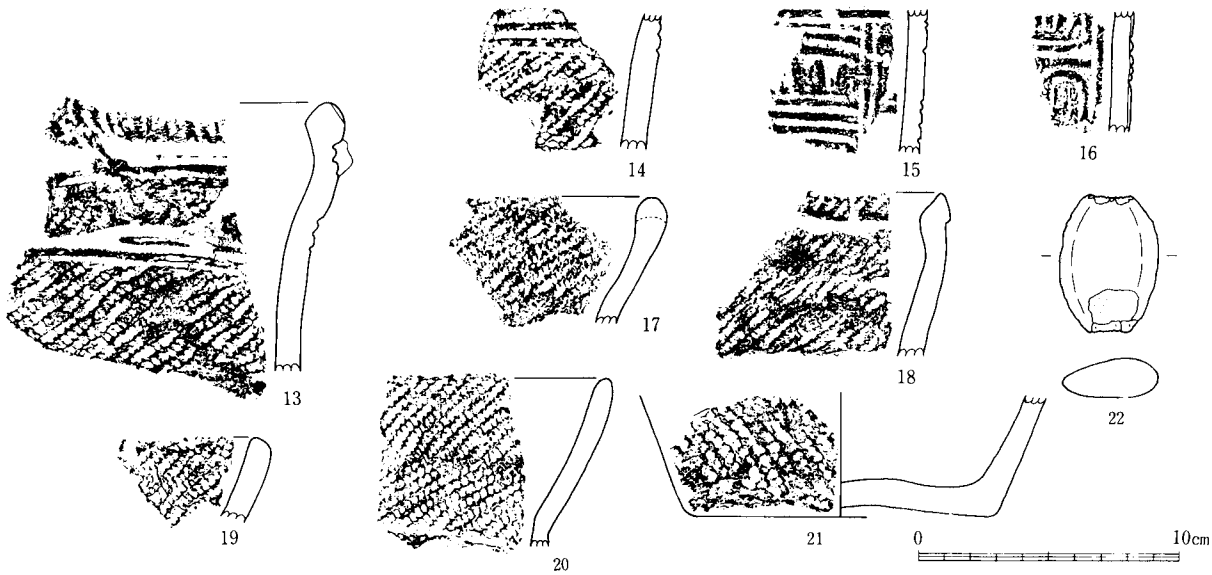


1．暗褐 3／4（Hue10YR）
2．褐 4／4（Hue10YR）
3．黒褐 3／2（Hue10YR）
4．黄褐 5／4（Hue10YR）
5．暗褐 3／4（Hue10YR）
6．褐　4／6（Hue10YR）
7．黄褐 4／3（Hue10YR）
8．黄褐 5／8（Hue10YR）

第16図　第3号住居址実測図（1/60）



第17図　第３号住居址内土坑実測図（1/30）



第18図　第３号住居址出土遺物拓影・実測図（1/3）

められる。焼成は良好である。他の土器片は小片で20片程度の出土である。

石器　６の石皿は、特別の整形を施さない平板な河原石を使用したもので、表裏面共に滑らかになった磨痕が認められる。磨痕が顕著に見られるのは、石皿の中央部ではなく、縁に近い周辺部であるのは、使用状況の一定の形を推定させる。他には、輝石安山岩の剥片２点が出土している。

時期　浅鉢底部片の在り方から、新崎式期での所産と想定される。

２　第３号住居址（第15～18図、図版３）

遺構　調査区の南地点、Ｓ41・42グリッドに位置し、丘陵頂上部から東側を占地して長軸方向を等高線に並行させる形で検出された。東方約６ｍに第７号住居址が、西方約18ｍに第４号住居址、北方約26ｍの距離を置いて第５号住居址が立地する。

林道に隣接した位置にあり、杉及び桧の切り株が３本程度接近して残っていた為に、当初の段階では把握できなかったが、切り株周りの土から土器が検出できた事から、住居址の可能性を考慮しながら作業を進めた。

平面プランは長楕円形で、等高線に並行する北東方向に主軸を置く。傾斜面にある事から、北西半部での壁が

高く、斜面側の南東部での掘り込みは浅い形状となる。長軸方向で575cm、短軸方向で315cmと扁平な楕円形を呈する。床面までの平均的な深さは約20cmほどで、褐色、暗褐色土が堆積するという状態で、東側に位置する土坑上面だけが黒褐色土を呈する状況が見られた。黒褐色土の下層位には黄褐色土があり、自然堆積以外の状況が想定される。黒褐色土には斜め位置になった土器片がまとまって出土するという状況は、住居址が一定程度埋没した段階でも土坑が窪地状となり、捨て場として機能したものとも見られるが、同一地点での再掘り下げが行われた可能性も考えられる。壁溝は見られず、壁の立ち上がりは傾斜して湾曲した形となり、床面への移行は角の立たない成形となる。床面は平坦であるが、南西側では枝根が多数入り込み、充分には押さえきれなかった側面がある。

炉址は地床炉で、主軸に乗り南西側に寄せた位置で検出された。平面楕円形を呈し、長径50cm、短径40cmの範囲で床面の赤変が認められた。

土坑は炉址から170cmの間隔を置き、主軸に乗せ北東側に寄せて設置される。平面楕円形を呈した二段掘りである。長径75cm、短径70cm、深さ39cmの規模を測る。掘り方断面形は円錐形に掘り込まれ、底面が極端に狭くなる形状である。底面での平坦面は限られた状態となり、物を貯蔵する空間を作り出すよりも深さを確保しようとした形態ではと推定される。覆土は3層に分層されるが、第2層の褐色土には焼土粒、炭化物が多く含まれていた。第1層の褐色土は、炭化物を若干量含んだ土層である。土坑からの出土品は、輝石安山岩の剥片であった。

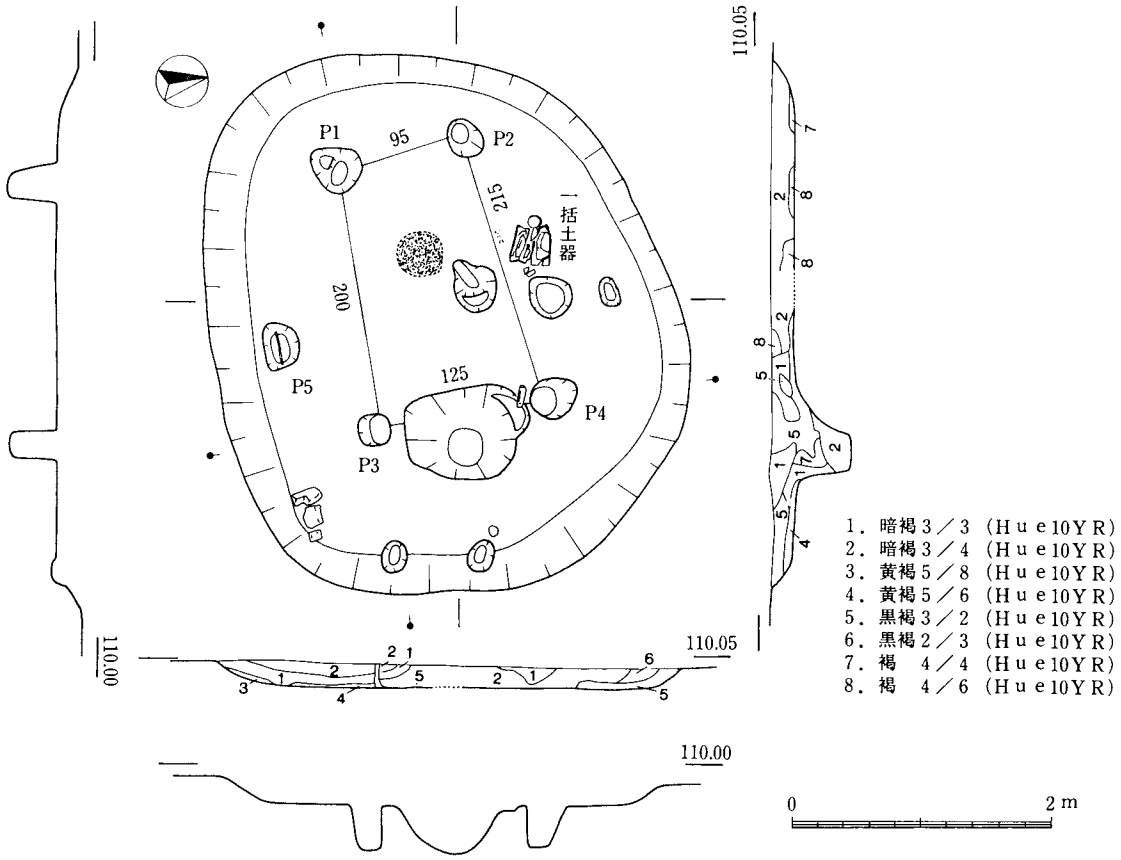
主柱穴は、先の第2号住居址と同様な配置を持つ5本主柱とも考えられるが、検出した穴の形状から、長菱形の4本主柱と判断した。西端のP2に隣接する穴は、木の根痕と判断された。

遺物の出土は南西側と北西側での出土が目立つ。それも上層からの遺物が多く、住居址の床面からの検出は皆無に近い。本住居址の所産時期は、出土土器から直接的には比定しにくいと判断される。

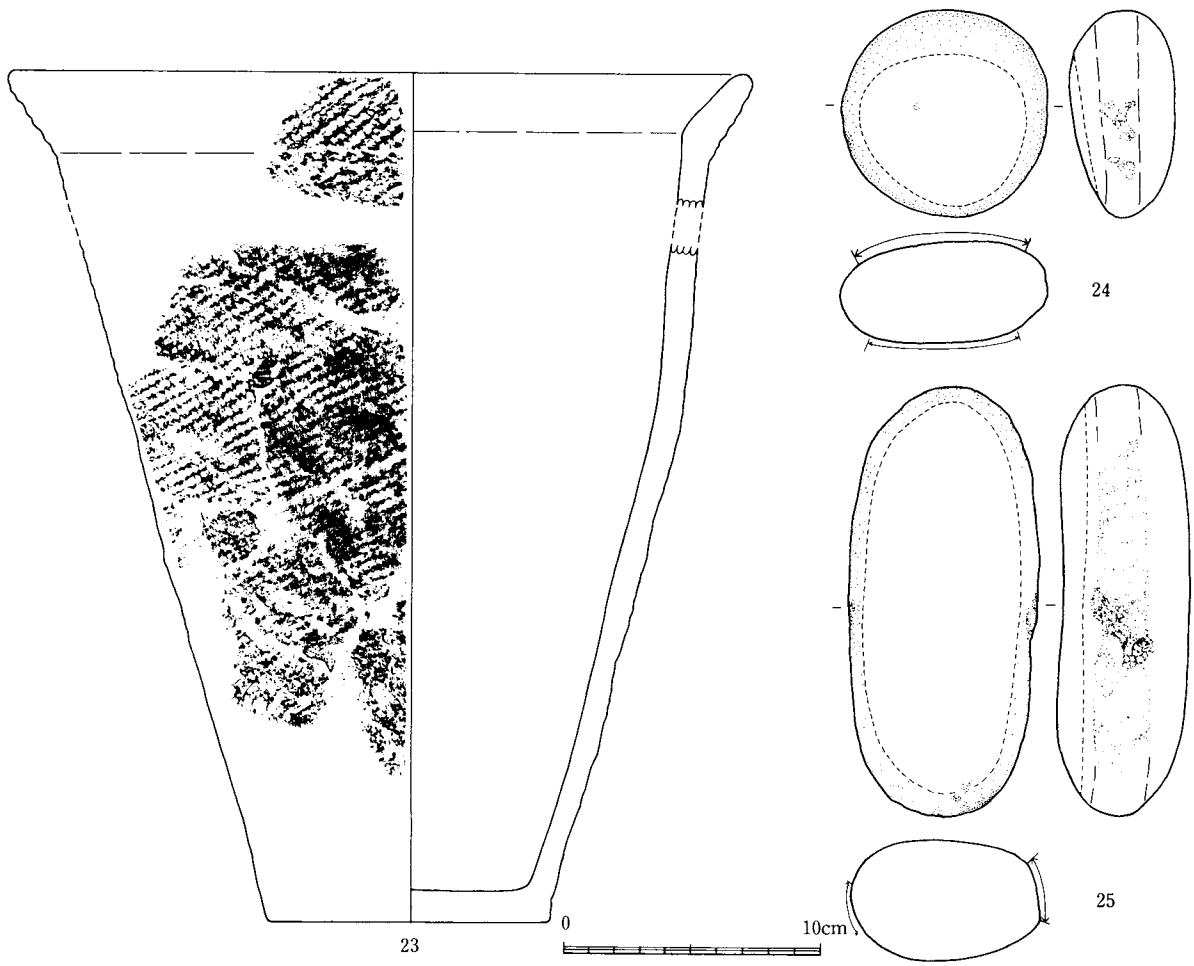
土器　出土土器の量で見れば、本住居址からの遺物量は相対的に多い方に含まれるが、絶対的には少量である。図示したいずれの遺物も覆土上層からの出土品である。7～12の土器は同一個体と判断できる資料で、肩部に括れを持たないバケツ状器形を呈する平口縁深鉢の大型品と推定される。幅広の口縁端部は粘土紐を貼付し突出させたもので、口唇に突起を付けた7は縄文が加飾される。平行半隆起線文が6条巡らされ、間隔を置いて再び平行半隆起線文を巡らす。間の空白部には縄文が施され、縦位置での区画半隆起線文に、10で見られるように口唇の突起と連動する粘土紐の貼付文が加えられる。色調は暗褐色を呈し、胎土には微砂粒が少量混和されるが、焼成と共に良好である。内面は平滑に整えられ、斜め方向での磨き痕が判別できる。口唇の突起が矮小化してはいるものの縦の貼付が明確である事から、新保2式期に位置付けられる。13はようやく判別のつくキャリパー状口縁で、波状口縁深鉢である。口縁が外側に大きく肥厚し、大きな爪形文が加えられる。口縁端部と頸部に平行半隆起線文が巡り、縄文施文のままの口縁帯を区画する。口縁の端部に小振りの粘土紐の貼付が鈎形になされ、垂下貼付文の名残と判断される。外周は全体に煤が薄く掛かる暗茶褐色で、内面は明茶褐色を呈し、胎土に砂粒の混和が多く見られる。新崎2式期であろう。15は狭い区画内に半裁竹管の端部を連続的に押圧した蓮華文が施されるもの、16は半隆起線で蓮弁の縁を区画して内部に縦の沈線が施された蓮華文施文の深鉢胴部片である。15と共に新崎2式土器に比定される。17、19、20は同一個体に考えられる波状口縁深鉢で、口唇端部を肥厚させ入り字状口縁を形成する。口唇は丸味を付け内屈するような成形を施し、20の内面で見られるように頸部に稜線が入るような弱いキャリパー状口縁となる。淡褐色を呈し、胎土に砂粒の混和が見られ、焼成は良好である。18は口縁端部を肥厚させた波状口縁深鉢片である。濁茶褐色を呈し、胎土には微砂粒の混和が多い。21は底径12cmを測るもので、外に開いて立ち上がる胴部の形態は、大型の深鉢か浅鉢かの判別が困難であるが、調整が粗雑で、胎土に砂粒の混和が多いことから前者と推定される。底面外周に若干の網代痕が観察できる。淡褐色を呈し、内面は灰褐色となる。

石器　打欠石錘が1点出土した。他には、輝石安山岩の断片9点と投擲具に想定される河原礫の剥片5点が出土している。

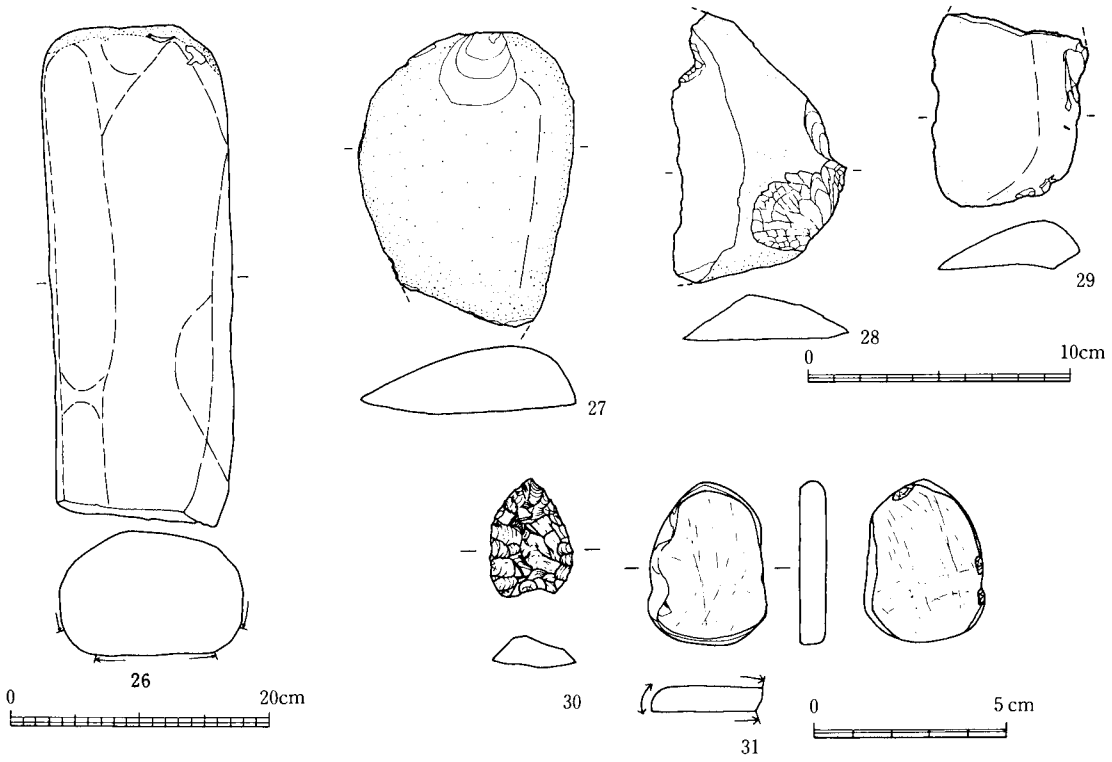
時期　土器には新保2式、新崎2式土器が見られ、土器の出土状態から新保1式期に遡る可能性が考えられる



第19図　第４号住居址実測図（1/60）



第20図　第４号住居址出土遺物拓影・実測図（1/3）



第21図　第４号住居址出土石器実測図（1/2、1/3、1/6）

ものの、遺物で確認できる新保２式期に位置付けておくが再考が必要と思われる。

3　第４号住居址（第19～21図、図版４・５）

遺構　本次調査区の南地区、丘陵尾根上の最高所を占地している住居址で、N42グリッドに大部分が含まれる。西の第11号住居址とは掘り方ラインが接するような形で隣接し、南方約1.7mに第２号住居址が配置される。表土除去を進めている段階で、暗褐色土の平面楕円形プランが確認され、竪穴式住居址と判断できた。

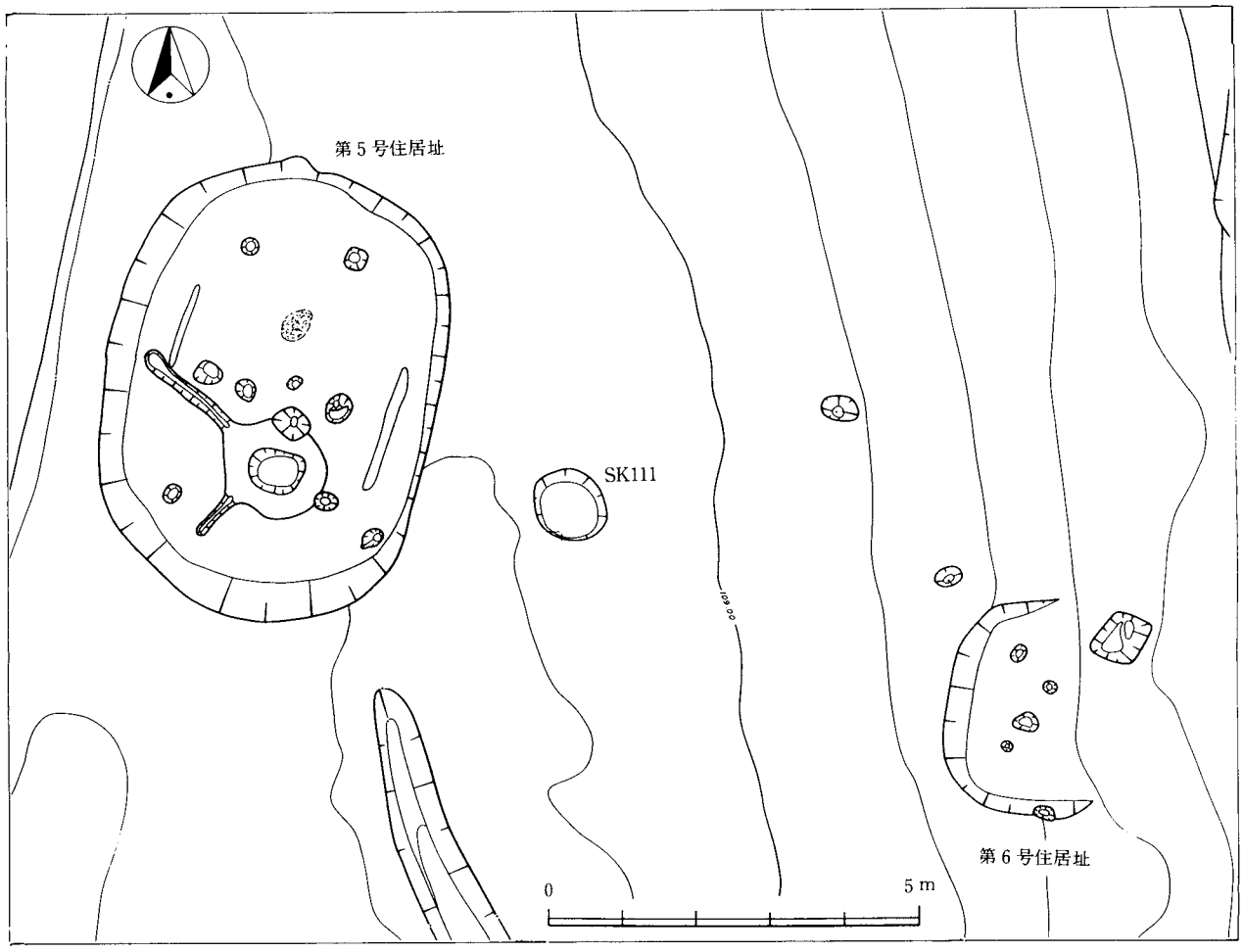
平面プランは南側が直線的となる不整形な楕円形を呈し、ほぼ平坦地ではあるが等高線に直行する東西方向に主軸を置いて掘り込まれる。長軸方向で430cm、短軸方向で365cm、深さは18～20cm程度となる。壁の立ち上がりは比較的急で、張り出している北側部分でやや緩やかである。壁溝は認められず、床面は平坦ではあるが、微妙な状態で凹凸が見られた。

覆土は住居址内土坑周辺を除いては、安定した形での黒褐色土、暗褐色土のレンズ状堆積状態であるが、土坑部分で縦方向での土層堆積が見られる。東側の覆土には、炭化物を多く含んだ黒褐色土が、掘り込みラインに添うような形で入り、南辺にまで廻り込むのが観察され、住居址廃棄後に東南方向からの捨て場となった可能性が高い。覆土からの遺物は少なく、北壁に寄った位置で床面から浮いて横位置になった深鉢一括が出土した。土坑周りからは、磨石類や棒状形の台石が、床面から遊離したレベルで出土した。

炉址は主軸方向に乗せ西に寄せた地床炉で、平面プランは円形をなし、径35cmの範囲で赤変している。地床炉から東へ90cmの位置に、住居址内土坑が掘り込まれる。土坑は住居址の長軸と直行する主軸を取り、平面長方形プランに掘り込まれ、長軸98cm、短軸74cm、深さ38cmの規模を測る。掘り方は炉址側に傾斜をつけ、壁側が直に近い状態である。覆土は暗褐色土と褐色土で、出土品は得られなかった。

主柱穴は４本で、土坑の両脇にあるＰ３、４及び対となる西側のＰ１、２の方形と推定した。土坑の東方で壁に入り込む２個の穴は浅く、不定形であることから除外したが、入口部での柱穴の可能性が考えられる。なお、南壁に近いＰ５には、炭化した板材状のものが立てた状況で遺存していたが、性格は不明である。

土器　23は一括出土した深鉢で、口縁部を図上復元した以外は接合することができた。口径29cm、推定器高33cm、底径11cmを計測するが、体部には歪みが生じややいびつな器形である。口縁部が外反し開く成形で、体部は



第22図　第５・６号住居址配置図（1/100）

直線的に外傾して立ち上がり、体部下半を除いてＬＲの斜縄文が施文される。内面は丁寧に磨かれ平滑に整えられる。底部は撫でが施され、網代痕は認められない。色調は黄褐色と淡黒褐色が斑状に認められ、二次的火熱による変色かと思われる。胎土には微砂粒、焼土粒が混和され、焼成は並である。時期的な判断は困難であるが、中期前葉段階に位置付けたい。

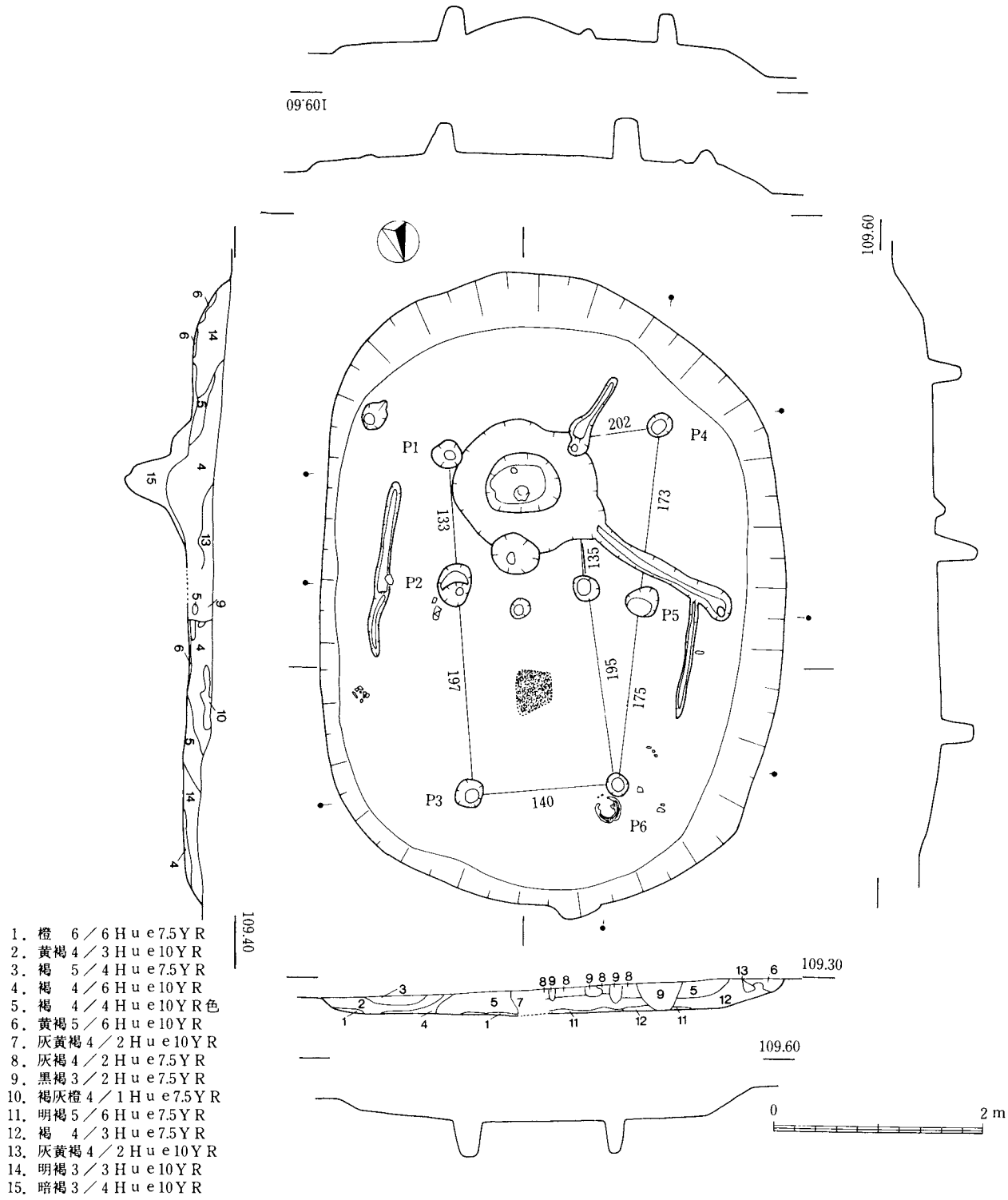
石器　24は表裏面共に磨痕が見られる完形品で、側面の敲打痕は明確ではない。25は長楕円形の完形品で、両側面共に面が形成されている。表裏の磨痕は明瞭ではない。26は住居址の隅で検出した方柱状を呈したもので、表面は気泡が空いたような細かな窪みが付き、明確な面の形成は認められないのであるが全体が滑らかになっている事から台石と判断した。27～29は石材を異にした礫剥片で、芯となる石核は検出されなかった。30は背面が平坦で表面が瘤状に盛り上がる剥片に表裏剥離調整を施した石鏃で、完形品での出土であった。輝石安山岩の剥片は小片となった18点が得られている。31は板状に剥離する石材の表裏及び側面に磨痕が認められるもので、性格は不明である。側縁の相対した部分に欠損が生じているのが注意される。

時期　中期前葉段階に位置付けておく。

4　第５号住居址（第22～24図、図版６・７）

遺構　調査区の中央東側の、丘陵平坦面東端に立地する住居址で、Ｔ49グリッドに大半が含まれる。東方約８ｍに第６号住居址が傾斜面上に立地する。北々西約13ｍの緩斜面上に第８号住居址が、南方約27ｍに第３号住居址が配置される。

住居址の西側に隣接して林道がつけられ、工事による撹乱が掘り方上面に及んでいたものの壁面の立ち上がり

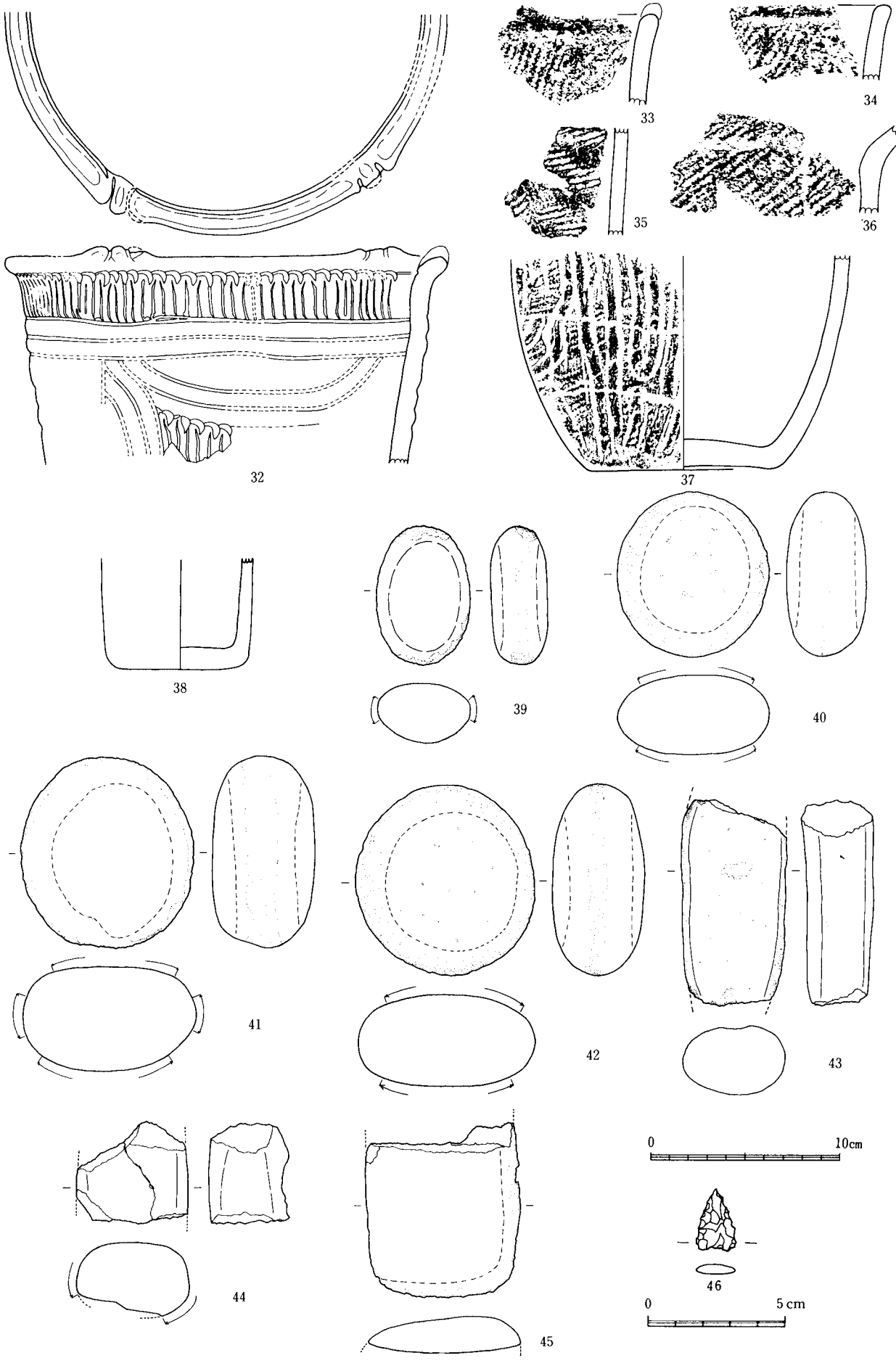


第23図　第5号住居址実測図（1/60）

は遺存していた。また、北西地区には杉や欅の切り株が残り、その周辺から遺物の出土が顕著に見られたが、枝根がはびこり掘り下げには難渋した。

平面プランは南北方向に長軸を置く長楕円形を呈し、等高線に長軸が平行した立地である。長軸方向で610cm、短軸方向で450cm、検出面からの平均的な深さは20cm程であるが、尾根筋に近い西側での深さは30cmに近く深く掘り込まれていると言える。

覆土の上層は褐色土でおおむね覆われるが、掘り込み近くや中央部分では明るい褐色土が入り、所々に黒褐色土が散在している。覆土からの遺物は北端地区に片寄った状況での出土であった。



第24図　第５号住居址出土遺物拓影・実測図（1/3、1/2）

壁面は傾斜を持って作られ、南、西壁は深い掘り込みであるが緩やかな傾斜となり、角を付けないで床面へと移行している。西壁の下場から40cm内側に入って、幅７～９cm、深さ２、３cm、長さ120cmの溝が検出された。溝の覆土は暗褐色土で、比較的硬く締まった土である。この溝と対照的な位置の東壁でも検出された。西の溝へは南の土坑に接続する幅15cm、深さ７cmの溝が切られている。同様の溝が南西方向へも延びる。第２号住居址でも見られたもので、湧出してくる水を受ける為に、尾根側に向いての設置と考えられる。

床面上の遺物は少なく、口縁部を下にした深鉢が北西隅に見られたほか、東壁近くで素文の破片がやや浮いたレベルで認められた程度である。床面は中央部から東側に寄った部分に向いて傾斜しているようだが、踏みしめられたような箇所は確認できなかった。

主軸に乗って地床炉、土坑が配置され、その間隔は110cm程である。炉址は不整形で、長さ40cm、幅35cmの範囲で、地山土の赤変が見られた。土坑は平面プランが長楕円形の二段掘りで、長軸は住居址主軸と直行する形で掘り込まれる。長径135cm、短径120cm、約20～30cmの傾斜の付いた段が周囲を巡り、長径80cm、短径64cm、深さ50cmの土坑が掘り込まれる。覆土は均質で、暗褐色土が堆積していた。床面は角に丸味を持たせて、平坦に整えられ、床面から若干浮いた位置で円礫と深鉢底部片が出土した。

主柱穴は６本柱と想定され、南側の土坑周辺の４本の間隔が狭く、北側柱穴に向けて広く柱間が取られ、北端の柱穴に向けて幅が狭まっていくのが特徴的である。

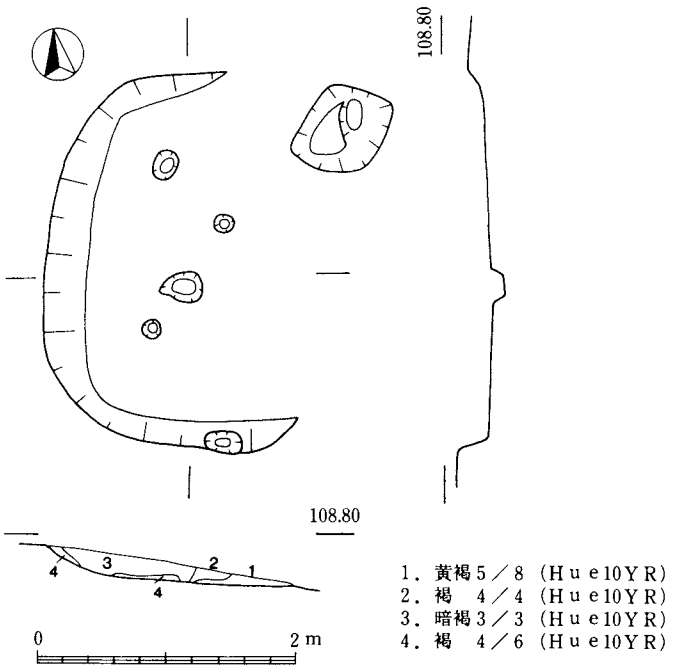
土器　32は床面で倒立していた深鉢で、口径23.6cmに復元できた。粘土紐を継ぎ足して口縁端部を外傾させ、口唇内側に広く面が形成される。口唇には四等分した位置に小突起を貼付する。突起は粘土紐を縦位置に２条配するものと、口唇に対して弧状に貼り付けるものが見られる。口縁帯には半裁竹管で縦の平行沈線を引き、その上端に竹管端を押圧した形で蓮弁端が施文される。幅広の半隆起線文で区画した体部には、口唇突起に連動した位置で縦位置の半隆起線文が配され、体部文様は４区画に分割される。縦位置の区画内には突起を付けて鍵状に垂下する施文が入る。分割した文様帯には弧状の半隆起線文で無文帯が形成され、その下に蓮華文が施文される。新崎式後半の施文構成と考えられる。色調は暗褐色を呈し、胎土に若干の砂粒が混和され、焼成は良好で、全体に煤が薄く付着している。33、34は同一個体と見られる口唇部が肥厚した入り字状口縁の深鉢片である。全体に風化が進み、器表面は荒れている。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が多い。35は比較的薄手の深鉢胴部片で、茶褐色を呈し、焼成堅緻に上がっている。36は口縁部が開く深鉢の頸部片で、内面に稜線が形成される。黄褐色を呈し、胎土への砂粒の混和は極めて少量である。37は底径10cmの深鉢で、体部が広がる器形をなすと想定される。体部全体に薄く縄文が施文され、その上に浅めの半隆起線文が長い縦位置に配され、間に楕円形の区画文が置かれる。内面６cmの高さにまで炭化物が付着している。体部は高さ約４cm、３段になって横方向に破損しているのは、粘土紐の接合部分からの破損と考えられる。器表は二次的火熱により濁赤褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が多い。38は底径6.6cmの小型土器で、全体に風化が進行し、器表の施文は把握できない。内面の底面隅には炭化物の付着が見られる。濁黄褐色を呈し、微砂粒の混和が見られる。所産時期は、32の縦横区画での体部文様帯の在り方や蓮華文が二段構成となることから、新崎２式期での所産に位置付けられる。

石器　39は両端の敲打、側面の面が使われている小型品。40は片面に雨垂れ状の窪みと磨痕が、側面の敲打痕は明瞭ではない。41は両面ともに磨痕が見られ、側縁に敲打痕がある砂岩質の磨石類である。42は両面に面があるようだが、磨痕は不鮮明である。43は長楕円形の石材で、両端は敲打に使われたようで共に欠損している。表面には不整形な窪みがひとつ見られる。44は長楕円形状の断片で、片側面に明瞭な面が、両面には磨痕が残る。45は礫剥片で、他に２点の出土がある。46は輝石安山岩の石鏃で、ほぼ完形を保っている。中央部分が厚く成形され全体に厚ぼったく作られている。同質の剥片は７点が得られ、自然礫の表皮部分を残しているものも見られた。

時期　床面に倒置していた深鉢の在り方から、新崎２式期に位置付けられる。

5　第６号住居址（第25図、図版10）

遺構　調査区の東端、庄が屋敷Ｃ遺跡に向き合う東斜面で検出した住居址で、西側の掘り込みラインを確認し



第25図　第６号住居址実測図（1/60）

て判断した。Ｖ48グリッドに殆どが含まれる。西方7.6ｍの平坦地に第５号住居址が立地する。

平面プランは東壁が流失している為に明確には判断できないが、北端で検出している土坑を中心とするならば、東西に長い楕円形プランと推定される。長軸方向で推定約400cm、短軸方向で297cm、深さ15cmの規模が想定できる。覆土は暗褐色土で、流失している東側では黄褐色土が堆積していた。覆土からの遺物に目立ったものはなく、小片となる土器が若干見られる程度である。西壁の立ち上がりは緩やかで、遺存している床面は平坦に整えられる。北壁に隣接するような位置で、土坑を検出した。平面不整方形を呈し、二段掘りである。長軸70cm、短軸60cmの平面規模を測り、壁面は緩やかな傾斜を付けて落ち込む。土坑内部を含めて、周辺部分には杉の根株が入り込み、充分な状態での検出が困難であった。炉址は検出できず、また、対となる柱穴も確認できなかった。

土器　土器片が４点出土したが、風化が進んだものや無文の体部片で、図示に耐えない事から図化しなかった。

時期　判断は困難であるが、隣接する第５号住居址との関係が深いように思われ、新崎２式期での可能性を考えておきたい。

６　第７号住居址（第26・27図、図版８）

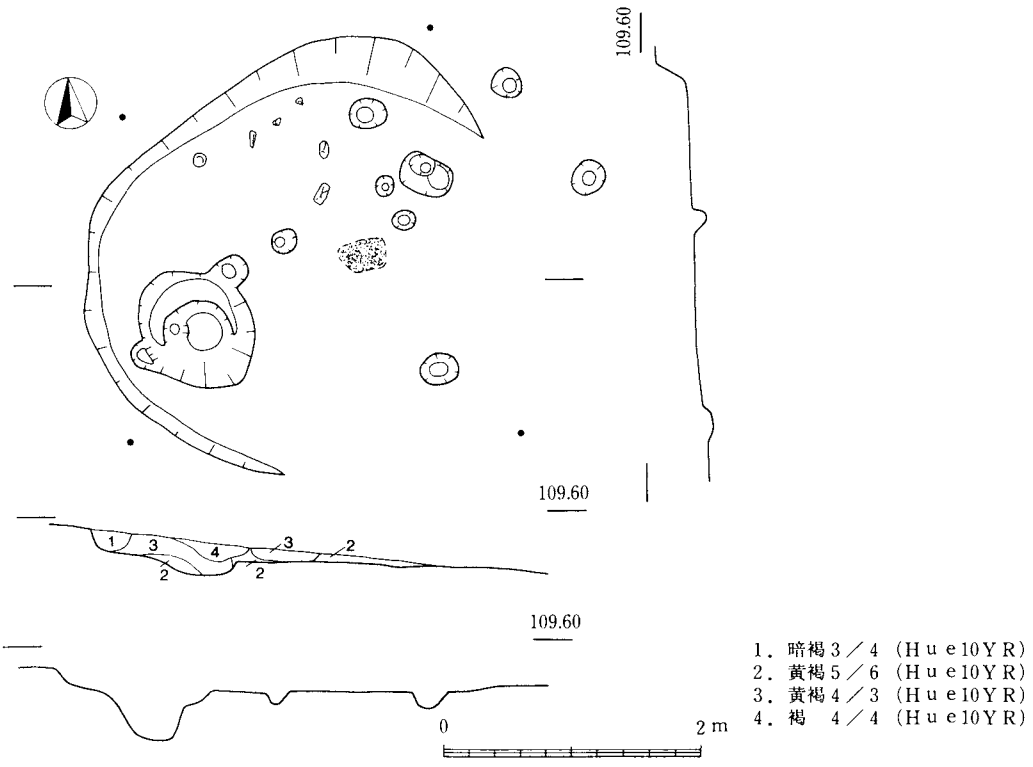
遺構　調査区の南東隅、平坦地である丘陵頂上部から東側の傾斜面上を占地する。Ｕ43グリッドに含まれ、西方約６ｍには第３号住居址が、北方約20ｍには同じく傾斜面に立地する第６号住居址が配置される。丘陵上には充分な空地があるにも拘わらず斜面に立地する第６、７号住居は、隣接する第３、５号住居址にそれぞれが従属する位置付けが可能視される。丘陵平坦面の角に位置する事から、長軸方向は等高線の流れに沿わせた形で、北東方向に置いている。

東壁が流失している為に、平面プランを確定することはできないが、住居内土坑と炉址が主軸上に配置されるこれまでの傾向から、東北方向に主軸を置く、楕円形プランが推定される。長径約350cm、短径300cm、深さは西端で15cmの覆土を認めた。西方の壁は角が立つような比較的急に立ち上がる形態を示すが、東北部分では緩やかな在り方となる。床面は覆土の認められた部分では平坦であるが、地床炉が確認できた部分から北東は地山の傾斜面となり、床面は流失したものと考えられる。

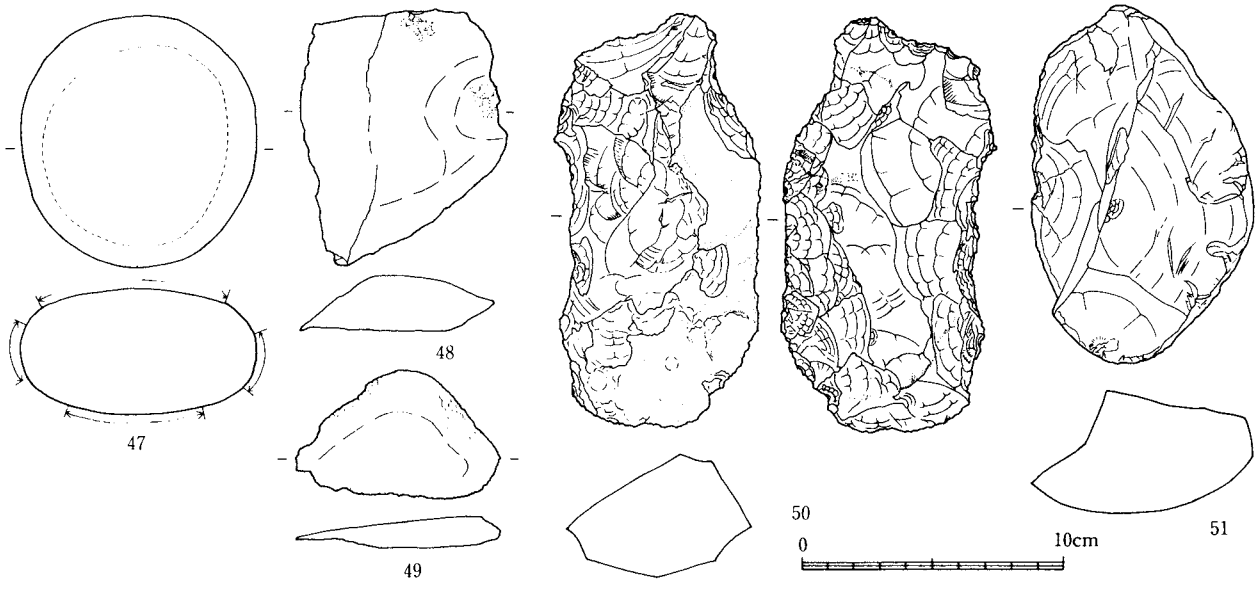
地床炉は不整方形を呈し、長さ35cm、幅25cmの範囲で地山の赤変が確認できた。炉址から80cmの間隔を置いて、住居址内土坑が配置される。南西の壁との約25cmの距離を持つだけで、殆ど接するというような在り方である。第２、３、５号住居址との歴然とした格差を認める。土坑は平面楕円形を呈し、住居址の主軸に直行する北西方向に置き、長径105cm、短径85cmの二段掘りで、二段目は径40cm程度の円筒形をした形態で、西端が更にピット状に落ち込んでいく。覆土から遺物は得られなかった。主柱穴は２本が想定できるだけで、配置状態は不明である。

床面での遺物は、丘陵尾根筋に平行した北西壁に添う地区で、磨石類と円礫の剥片及び輝石安山岩の石核などが出土した。

石器　土器片は得られなかった。石器類も少数である。47は両面に磨痕、側面に潰れがある完形品である。48、



第26図　第7号住居址実測図（1/60）



第27図　第7号住居址出土遺物実測図（1/3）

49は礫の剥片である。50、51は輝石安山岩の石核で、広い範囲に自然面が遺存している。50は円礫を打ち欠いたものの側縁部分に更に細かく敲打を入れて剥片を製作した状況が見られる。敲打は片側縁だけではなく、両側縁から行っている。51は一次的に打ち割られた状態で遺存していたもので、先の例と共に本遺跡では大型の石材である。

時期　資料的に恵まれていないのは先の第6号住居址と同様で、住居址内土坑の設置状況から中期前葉段階が想定されると言える。

第28図　第８号住居址配置図（1/100）

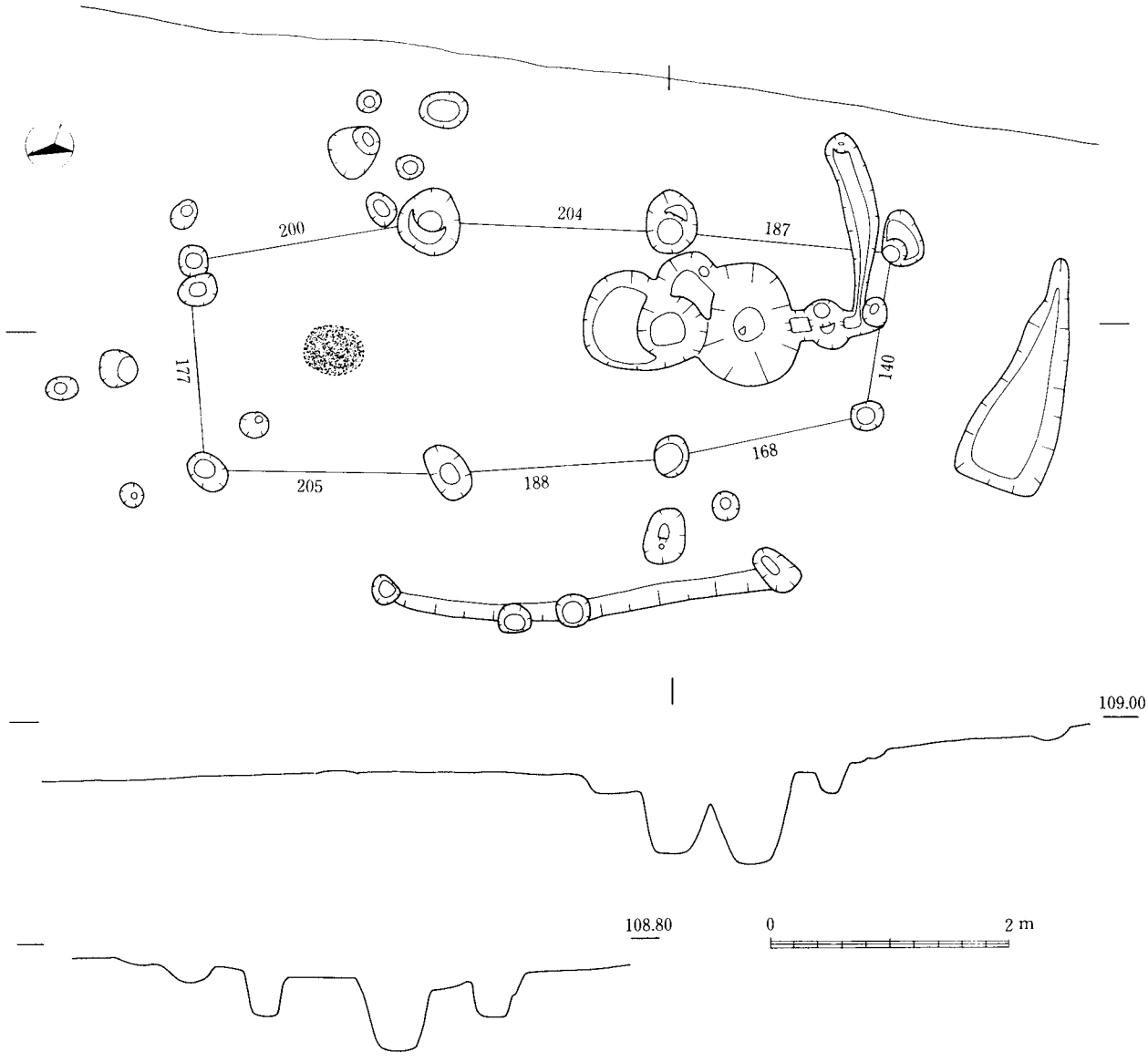
7　第８号住居址（第28～32図、図版９）

遺構　調査区の北西地区、丘陵尾根筋が緩傾斜面となって北側に高度を下げていく変換線上を占地している。東側には林道が走り、東壁部分は既に消滅したものと考えられた。丘陵全体の重機による表土除去の段階で、北側の裾部から南側の頂上部に向けて排土した為に、落ち込みレベルを越えてまで掘りすぎた状況が想定され、地床炉が露呈するまで判別できなかったと言える。住居址はＲ52グリッドに大部分が含まれ、Ｒ53、Ｓ52･53グリッドにまたがる。南々東約13ｍに第５号住居址が、北西方向約23ｍには第９号住居址が、南々西約41ｍには第13号住居址が配置され、第５号住居址との関係が最も密接だと言える。

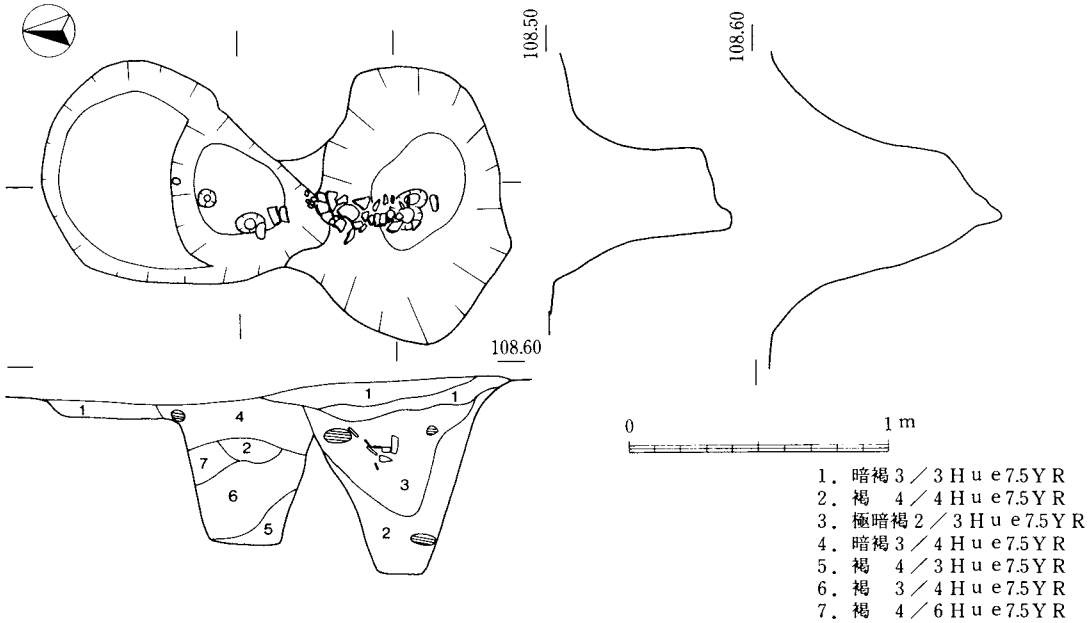
平面形は楕円形プランと想定され、土坑と炉址が主軸上に並ぶ在り方と、僅かに確認できた西壁の検出から、等高線に直行して南北方向に長軸を置く形と言える。遺存していた西壁と炉址などの乗る主軸との距離は約250cmで、折り返すと短軸は500cmの規模が推定できる。長軸方向では南端に位置する二つの不整形な落ち込みを、住居址の掘り込みとは確定できないが、８本柱に推定される主柱穴の在り方から、長径は約８ｍ程度の規模が想定され、本遺跡での最大規模の住居址と判断される。

西壁が確認できた延長は約350cmで、覆土は暗褐色土の５cm程度に止まるが、土器片が若干含まれていた。壁の立ち上がりは緩やかで、主軸付近の床面とは落差を持つのは、掘り過ぎた為と判断できる。

炉址は主軸に乗せた地床炉で、楕円形プランを呈し、長径50cm、短径40cmの範囲で赤変していた。炉址から南方185cmの距離をおいて、住居址内土坑２基が掘り込まれている。２基の土坑は切り合い関係を持つもので、南側に位置するものが新しい段階と判断できた。北土坑は平面卵形を呈した二段掘りで、長さ110cm、幅84cmで、深さ約５cmの広い段を付け、南端に径60cm、深さ55cmの土坑が掘り込まれる。覆土は褐色土で、微妙な色調の違いか

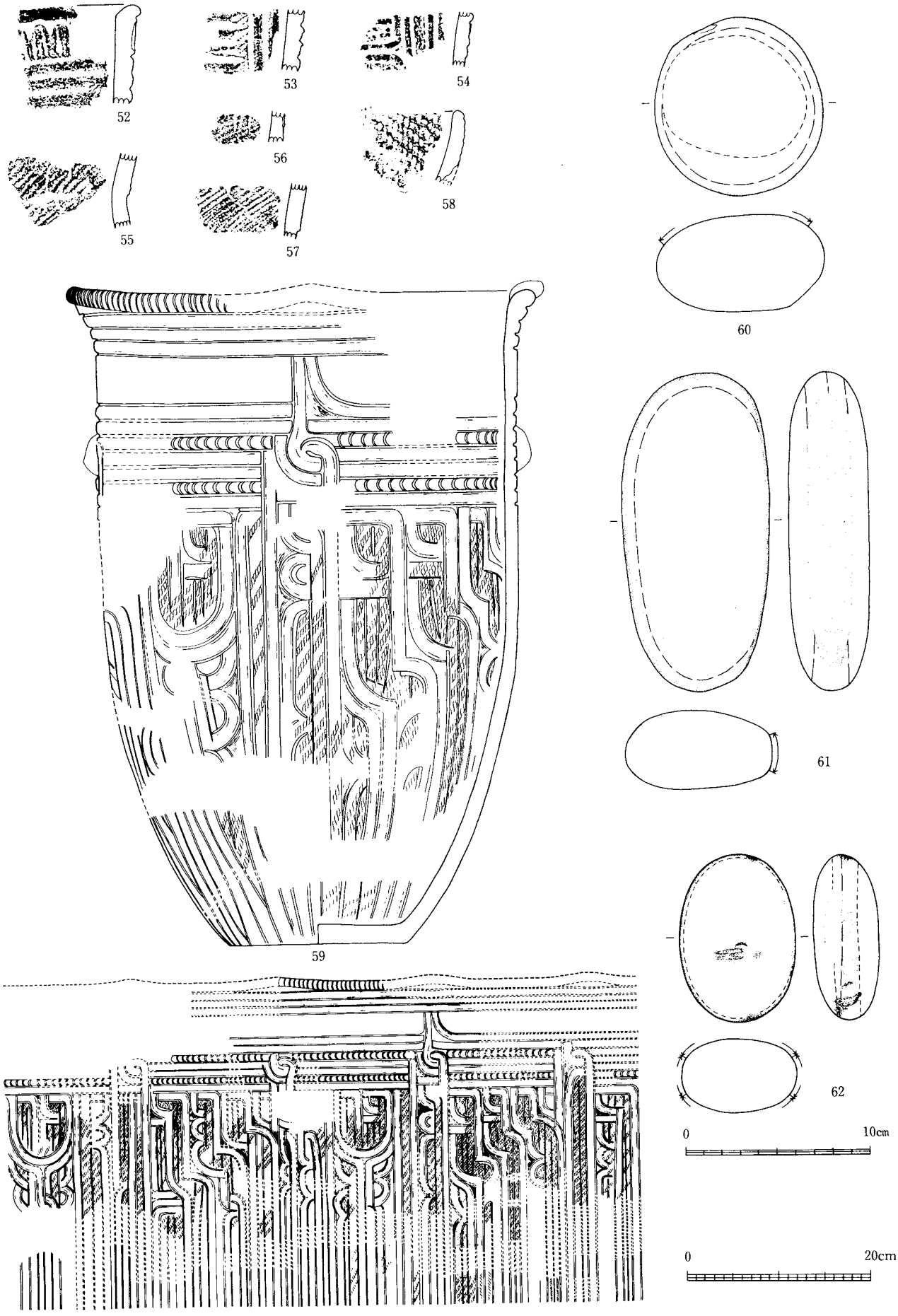


第29図　第８号住居址実測図（1/60）

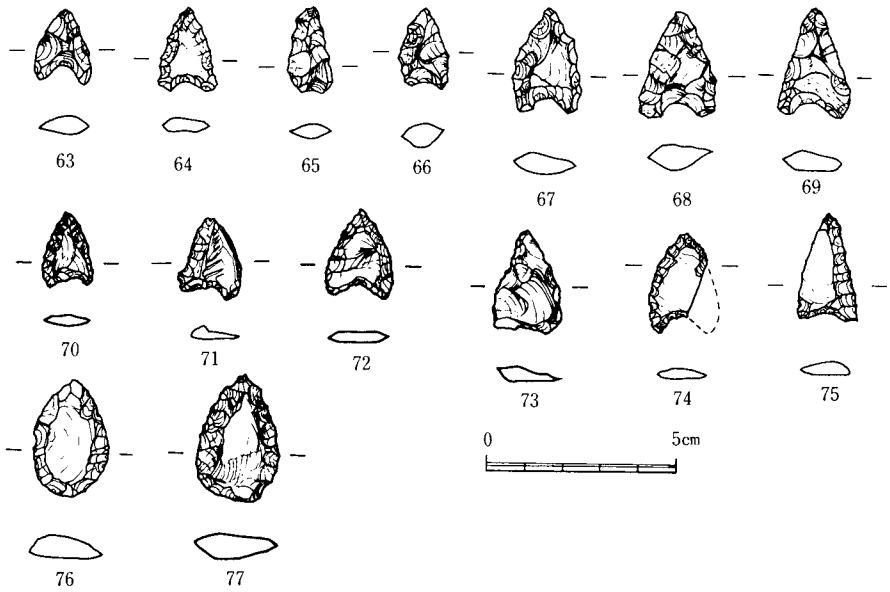


1．暗褐３／３Ｈｕｅ7.5ＹＲ
2．褐　４／４Ｈｕｅ7.5ＹＲ
3．極暗褐２／３Ｈｕｅ7.5ＹＲ
4．暗褐３／４Ｈｕｅ7.5ＹＲ
5．褐　４／３Ｈｕｅ7.5ＹＲ
6．褐　３／４Ｈｕｅ7.5ＹＲ
7．褐　４／６Ｈｕｅ7.5ＹＲ

第30図　第８号住居址内土坑実測図（1/30）



第31図　第８号住居址出土遺物拓影・実測図（1/3、1/6）



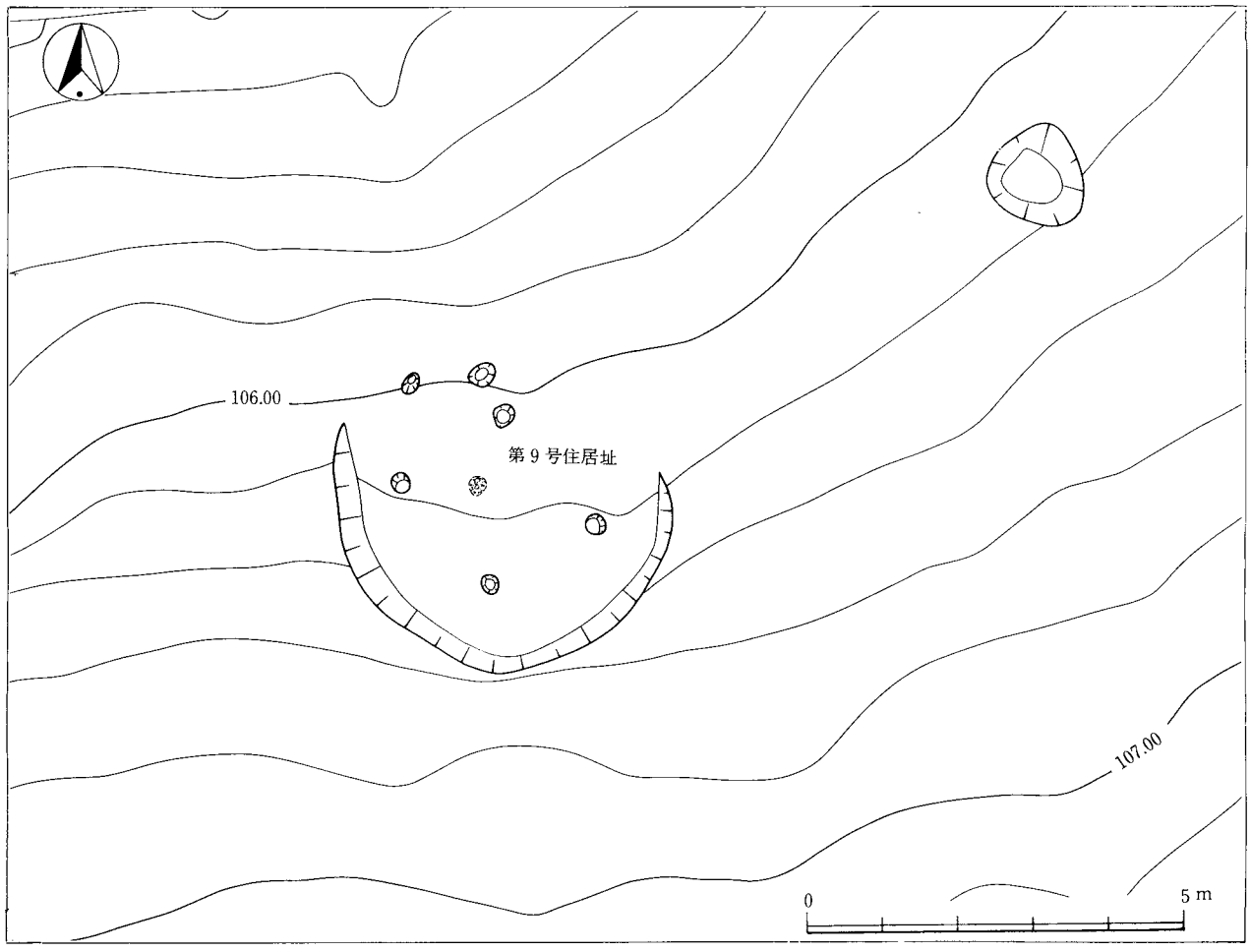
第32図　第８号住居址出土石鏃実測図（1/2）

ら南側からの意図的な埋め戻しが行われたと想定される。南土坑は住居址の主軸と直行する東西方向に長径を置く楕円形プランで、長径108cm、短径85cm、深さ76cmの規模を計測する。掘り方は強い傾斜を付け、平坦な底面へは丸味を持って移行する。覆土の極暗褐色を呈した中層位に、北方向から落ち込んだ形の一括土器が出土した。円礫などの包含が目立つのも、中層位であった。南土坑では土器の他に輝石安山岩の剥片が多量に包含され、北土坑においても同様の出土があったが、土器は検出されなかった。

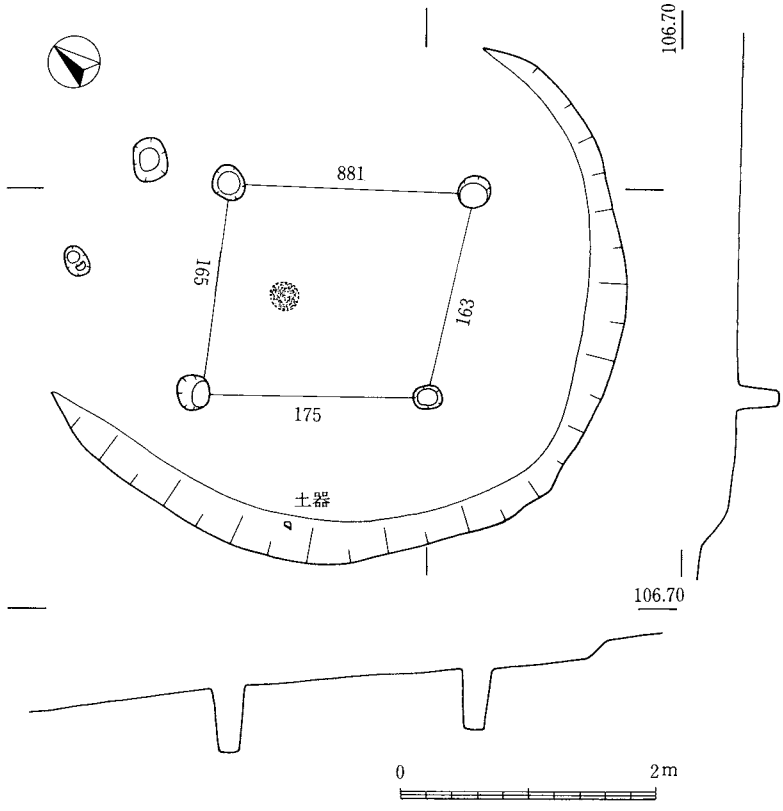
床面は地床炉周辺の北側部分は平坦であるが、南の土坑周辺では傾斜が付いて、判別できなかった。

主柱穴は８本柱に想定できるが、土坑で見られた改築に対応した配置での柱穴の重なりは確認できなかった。地床炉を核とする４本と、土坑を囲む４本の８本主柱で、前者には北方に位置する１本が付け足される可能性も考えられる。

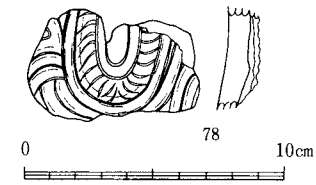
土器　52は口唇が外側に突出する成形で、蓮華文の縦の沈線は先端の鋭い工具で施され、蓮弁端は竹管による押圧文である。半隆起線文は断面が扁平となる浅めの施文である。内面は角の立つ面が形成される丁寧な撫でが施される。器表は荒れて濁褐色を呈し、内面は茶褐色をなしている。胎土には微砂粒の混和が多い。53は体部片で、縄文施文の後に半隆起線文が施されるのが観察できる。暗褐色を呈し、胎土に砂粒の混和が目立つが、焼成は堅緻である。54は区画内に格子目文が施される中型の深鉢体部片で、褐色を呈し、胎土に砂粒の混和が目立つ。焼成良好である。55は茶褐色を呈し、微砂粒を多量に混和させた胎土を持つ深鉢頸部片である。内湾する口縁帯に粘土奨が足されて厚みを増しているのが観察される。56は沈線が引かれた体部片。57は半隆起線文で区画されている縄文帯である。撚りの堅い縄文で、時期的あるいは地域的な差異が考えられる。58は端部が内屈する深鉢で、内面は丁寧に撫で調整がなされ、平滑に整えられる。暗褐色を呈し、胎土に砂粒の混和が目立ち、焼成堅緻である。59は口径26cm、底径10cm、器高推定36cmに復元できた波状口縁深鉢である。底部と体部は直接的には接合できなかったが、推定器高に大きくは影響しないと考えた。大振りの爪形文の付く口縁端は、継ぎ足されて突出し、内面に面が形成される。３条の半隆起線と２条おきに爪形文を配した平行線文に限られた横位無文帯は、撫でによる調整が施された無文帯で、それを縦に区切る半隆起線文が突起を配し、鍵状に垂下していく。無文帯に繋がるものと、入らない突起が見られ、合わせて４単位であるが、無文帯を区切る形で見るならば、欠損してはいるが、２単位と推定することができる。丈の低い波頂部での、施文処理は把握できなかった。体部は縄文が最初に転がされ、突起から伸びる区画線に沿わせてＢ字状文が、間にはＵ字状の区画文が配され、体部下半は縦の半隆起線文で埋め尽くす。全体的には手慣れた施文と見る事ができる。内面は平滑に整えられ、底面から約４cm上がった



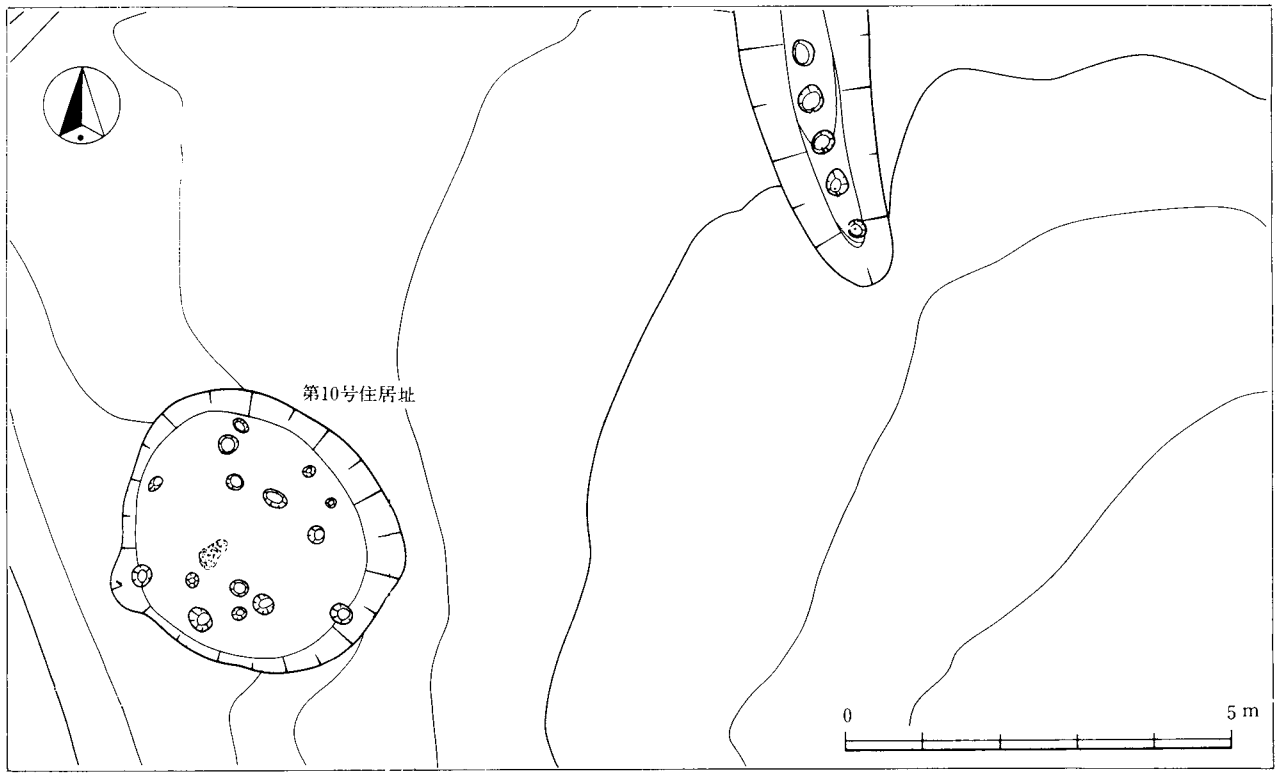
第33図　第９号住居址配置図（1/100）



第34図　第９号住居址実測図（1/60）



第35図　第９号住居址出土土器
実測図（1/3）



第36図　第10号住居址配置図（1/100）

位置から10cmの範囲で、帯状に炭化物が付着している。器表面では底部から約16cmの高さまで二次的火熱で橙色に変色し、その上約８cm程に煤の付着が顕著に認められる。体部突起の下から上には変化は認めがたい。色調は褐色から橙色までの幅があり、胎土での砂粒は体部下半で露出するような状況となるのは、日常的に使用した結果ではと推定される。二次的火熱の影響が弱い上半部では、器表での砂粒の浮き上がりは目立たず、平滑な状態を保っている。多条化した半隆起線文と積極的な無文帯の形成と縦位置での区切り状況から、新崎式期までは下らず新保２式期に位置付けられる。

石器　60は表面に磨き面が見えるもので、側縁での使用痕は不鮮明である。61は長楕円形の石材の片側縁が面取りされたような顕著な使用痕が遺存する完形品である。面は磨き面となるものではなく、堅い面にあたった粒子の粗い面で、石皿の上で物をすり潰すような使い方が想定される。62も完形品で、片面に傷のような窪みがあり、両面ともに滑らかな磨き痕がある。長軸に沿う側縁部は軽い面取りが残るような痕跡である。両端部での使用痕は明確ではない。63～77までは石鏃で、70～77までの８点は南土坑から出土した。63、66～68では体部の中央が膨らむように成形され、全体的に厚ぼったい形態となる。全体では逆刺が寸ずまりの形状で先端部での調整は粗雑である。形態の傾向としては、五角形への指向が感じられる。剥離調整は表裏共に施される。72は整美に成形されて他の石鏃と異なる形状である事から、74などを含めて移入品の可能性が推定される。71、73、75などは平板ではない剥片をそのまま使用している。76、77は基部が丸く納められ、逆刺を必要としない利用状況が推定されるが、判然としない。石鏃に使われている輝石安山岩は土坑内から多量に出土した。石核を含めて、南土坑からは267点、1,150ｇが、北土坑からは132点、1,074ｇの出土量がある。

時期　土坑の切り合い関係から２時期が考えられ、新保２式期と新崎１式期に当てはめられるが、後出する型式内での時期差を考慮しなければならないとも思われる。

8　第９号住居址（第33～35図、図版10）

遺構　調査区の北端部、丘陵尾根筋が緩傾斜していく地点で、N56グリッドに含まれる。本住居址から以北に

住居址はなく、南西約28ｍに第10号住居址が、南東方向約23ｍに第８号住居址が、住居址が集中している南端地区までは約60ｍを越える距離がある。第８号住居址の検出状況と同様に傾斜面裾部からの排土の為に、下半部は確認できなかった。

平面プランは、炉址や柱穴の状況から楕円形と見られ、北西方向に主軸を置き、長径約480cm、短径約400cmの規模が想定できる。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状を呈する。覆土を確認できたのは壁面下場の限られた範囲で、暗褐色土が堆積し、遺物の包含は限定されたものであった。

床面は削平した為に明瞭ではないが、中央部分で径20cmの円形の地床炉を検出した。本住居址の特色として、住居址内土坑が設置されない事で、中期中葉上山田式期での在り方と捉えられる。主柱穴は４本が想定でき、炉址を中心として、ほぼ等距離の対となる柱穴が配置される。

土器　土器が２片出土しているが、１片は小片で、図示したものも遺存状態は良くない。78は弧状となる隆帯に刻み目が入り、周辺に粗い半隆起線文が巡らされる。濁茶褐色を呈し、胎土には微砂粒の混和が多い。渦巻文を構成する隆帯の在り方から、上山田式期での所産が想定される。

時期　上山田式期での所産と見られる。住居址内土坑が設置されない為に、平面プランが長楕円形プランから円形に近い楕円形へと変化しているのが特徴的である。

９　第10号住居址（第36～40図、図版11・12）

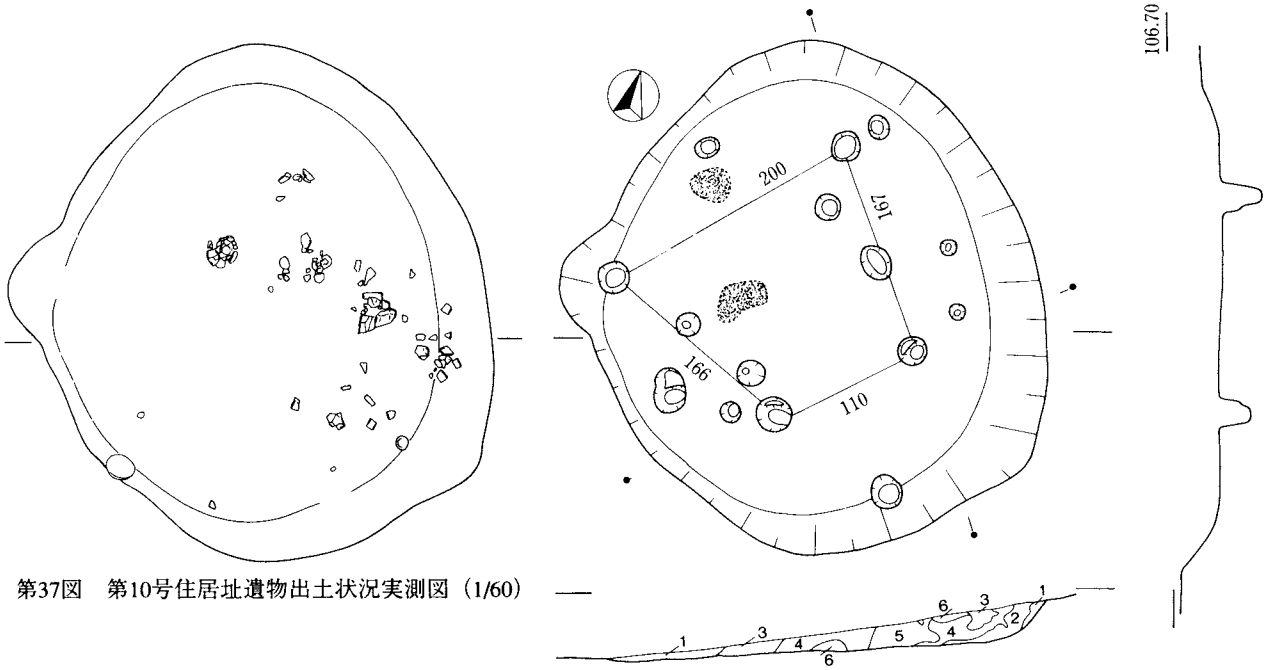
遺構　調査区の北西部、緩傾斜面裾部で、南西方の崖地までわずかという地形の中に立地する。北西約16ｍには鞍部を挟んで第13号住居址が、南南東約56ｍに第11号住居址が、東北東約28ｍに第９号住居址が配置される。丘陵裾部での精査を進めていた段階で、土器が集中的に出土した事から住居址の所在が明らかになったが、崖地に近く、斜面の下位とも言える地点で独立的な性格も感じられ、本丘陵全体の調査範囲の在り方に疑問が持たれる事となった。その為に、西側に隣接する丘陵の確認調査及び本調査区の北東側に伸びている尾根上に試掘溝を設定する調査を追加する事とした。調査の結果、北東側の地区で遺構は確認できなかったが、北西の丘陵斜面から第13号住居址が発見された。

平面プランは南北方向に長軸を持つ楕円形で、長軸400cm、短軸350cm、東壁での深さは24cmの規模を計測する。覆土は暗褐色、褐色土が堆積し、明褐色や黄褐色土が中央部や掘り方面に流入する状況を示し、東側での排土が流入したとも考えられる。遺物の出土状態は、東壁に寄った南地区は床面に近いレベルでの検出で、中央部から北側に寄った遺物はやや上層での出土と判断された。壁の立ち上がりは、傾斜の弱い断面形皿状をなすもので、壁溝などの施設は検出されなかった。

床面は平坦ではなく、傾斜に沿うような状況で東から西方向に向けて10cmを越える差が見られた。が、住居址の廃棄後は低くなる西側地区での風化がより進行した結果として低くなったとも想定できる。焼土面は中央部と北壁に寄った地点の２ヶ所が検出され、後者は検出地山面からかなり浮いた状態となるものの、絶対高では同レベルにあると言える。中央の焼土面は平面不整形をなし、長さ43cm、幅24cm、北側へ60cmの距離を置いたものは卵形で長径30cm、短径25cmの範囲での赤変が確認できた。住居址内土坑は第９号住居址と同様に検出されなかった。

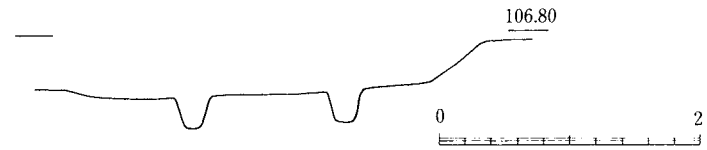
主柱穴は炉址を中心とした４本主柱と推定できるが、やや歪つな方形配置となる。

土器　79は波状口縁の小型深鉢に想定でき、斜め方向に弧状を描く基隆帯に細かな爪形文が施文される。80と同一個体であろう。隆帯は口縁端をも縁取るように配される。波頂部内面にはリング状の貼付文が置かれ、口縁帯内面には段が形成され、全体的に薄手の成形である。色調は暗褐色を呈し、胎土には多くの微砂粒が混和されているが、焼成は堅緻である。80は遺存状態が良くないもので、口縁部隆帯から派生するしの字状隆帯が見られる。81、82、88は同一個体と推定できる。口径は推定で約20cm、底径12cm、推定器高約25cmの筒状体部を付ける波状口縁深鉢である。波頂部分が小片でしか得られなかったので口縁端部が不鮮明であるが、半隆起線を置いて肥厚する端部が想定される。波頂部は渦巻文を核として横方向へと流し、上の空白部を楔形刻み目文で埋める。

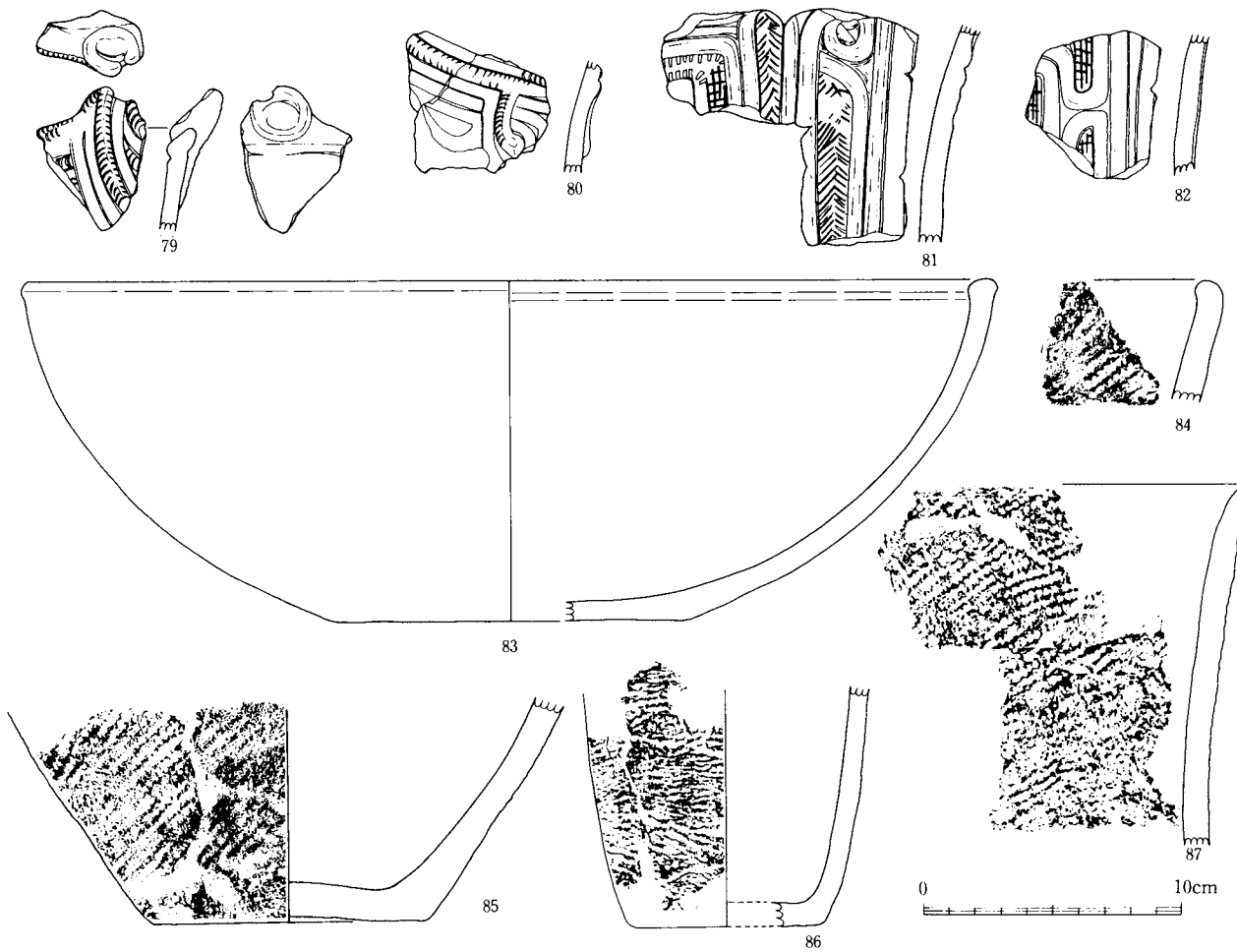


第37図　第10号住居址遺物出土状況実測図（1/60）

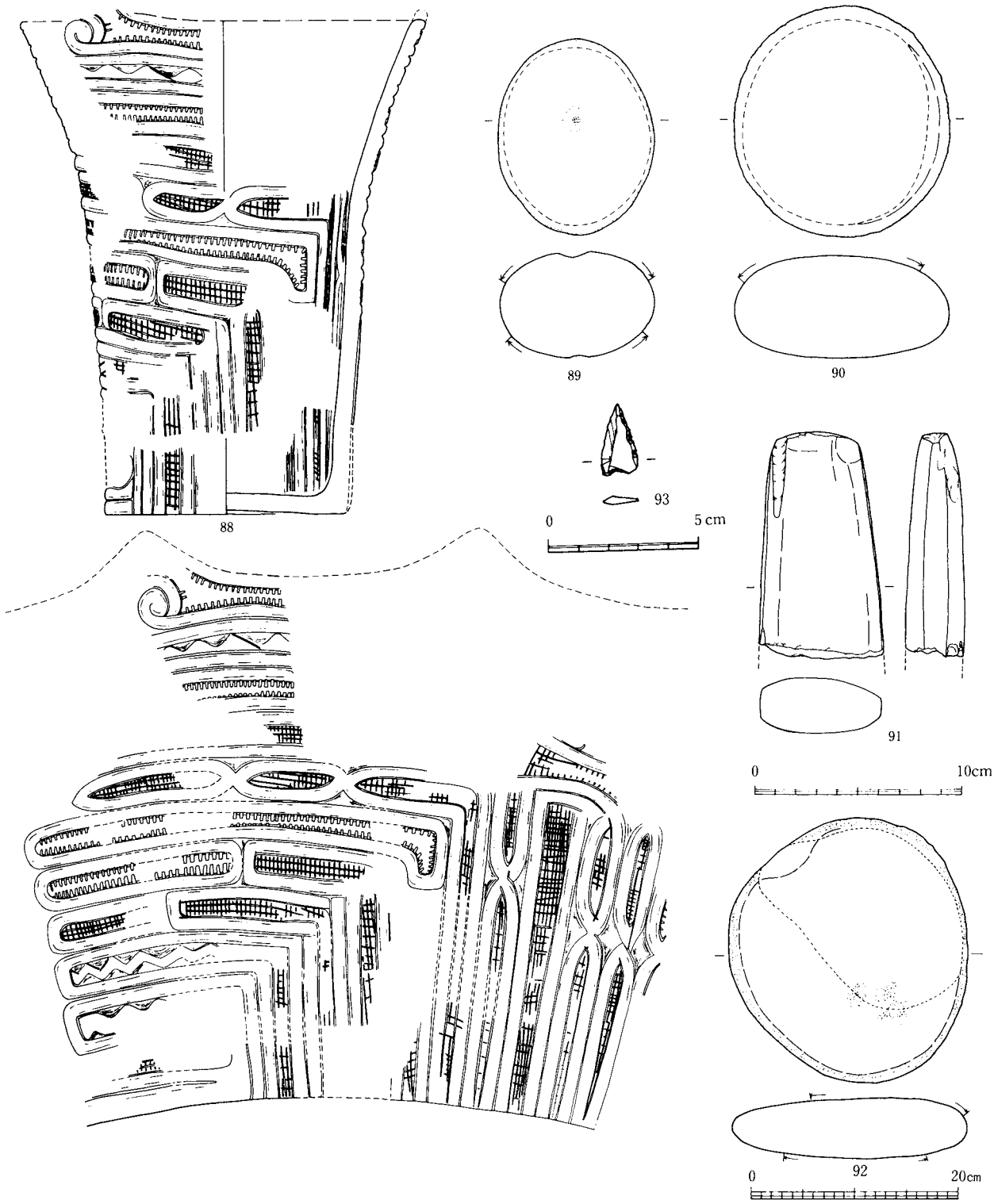
1．明褐５／６（Ｈｕｅ7.5ＹＲ）
2．暗褐３／３（Ｈｕｅ10ＹＲ）
3．褐　４／６（Ｈｕｅ10ＹＲ）
4．黄褐４／３（Ｈｕｅ10ＹＲ）
5．褐　４／４（Ｈｕｅ10ＹＲ）
6．暗褐３／４（Ｈｕｅ10ＹＲ）



第38図　第10号住居址実測図（1/60）



第39図　第10号住居址出土土器拓影・実測図（1/3）



第40図　第10号住居址出土遺物実測図（1/2、1/3、1/6）

下段の狭い区画内には三角形彫去が連続して施される。体部以下は縦方向の半隆起線文で区画した２単位での文様帯が作られる。区画内は横位置の小区画文を積み重ね、内部に充填文様としての格子目文、楔形刻み目文、三角形彫去文が施文される。縦の半隆起線文の間に施文される矢羽状刻み目文が81で見られるのは、標準的な上山田様式の基隆帯上の刻み目文や基隆帯による渦巻文を消化しきれていない地域的な様相を示していると考える。また、体部文様帯の区画の在り方は、前段階の新崎式土器の伝統を色濃く残した状況を示していると見られる。色調は灰褐色から暗褐色を呈し、胎土には多量の微砂粒が混和され、焼成は良好である。上記の２個体は、上山

田式土器に比定される。83は全体の４分の１程度が遺存していた浅鉢で、口径38cm、底径14cm、器高13.4cmに図上復元できた。口唇部が内側に肥厚しているのが見られ、口唇部の施文部分を欠損しているが、玉抱き三叉状文が置かれたと推定される。底部は薄手で中窪み状態に成形され、体部は丸味を持たせた立ち上がりとなる。内外面ともに丁寧に撫でが施されている。色調は明褐色を呈し、胎土は微砂粒が混和された均質なもので、通例的な様相を示し、焼成は良好である。84と85は同一個体で、厚い器壁を持つ大型の深鉢器形に推定できる。底径10.6cmを測り、体部に広がる形で立ち胴部へとつながる。口縁端部で内屈させる成形を取り、小片での資料であるが波状口縁を形成すると推定される。内面の調整は丁寧で、平滑に仕上がっている。色調は淡褐色から黄褐色までの幅があり、胎土には微砂粒の混和の他に焼土粒の混入が認められ、焼成は良好である。86は底径7.6cmを測る筒状の体部を持つ小型深鉢で、高さ３cm強の位置で３段に渡り等間隔で破損している。粘土輪積みの幅が、そのまま反映しているのであろう。また、底部との接合面では炭化物が入り込んでいるのが観察でき、使用中でもヒビ割れが進んでいた事を窺わせる。器表面は凹凸が目立つ成形で、横方向に施された単節の縄文が粗く施されるが、本遺跡では少ない手法と言える。内面は平滑に整えられる。器表の色調は淡黄褐色、内面は暗褐色を呈し、胎土には微砂粒が多量に混和されるが、内面では調整によって目立たない状態である。焼成は並である。87は口縁端部に粘土紐を貼付し、外側に肥厚させて段を形成する波状口縁深鉢と想定される。器表面全体に煤の付着が見られる。色調は褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が多量に見られる。

石器　89は表面に１個の窪みを持つ完形品で、両面共に磨き面がかすかに残るようだ。90は表面が平滑な磨き面を残す完形品である。91は刃部を欠損した磨製石斧で、基部の左側に擦り切りの溝が遺存している。断面形では正確な中膨らみではなく、片側部分の厚みが無く、楔状に厚みを増す成形となる。92は砂岩質の石皿の完形品で、両面共に縁に寄る位置で磨き面が認められる。石鏃は１点の出土である。剥片の縁と基部の括れ部に片面だけの剥離調整が施された簡略な製品である。他には、輝石安山岩の剥片が４片（15.6ｇ）出土した。

時期　中期中葉上山田式期での所産時期が想定され、第９号住居址と並行する時期があてられる。

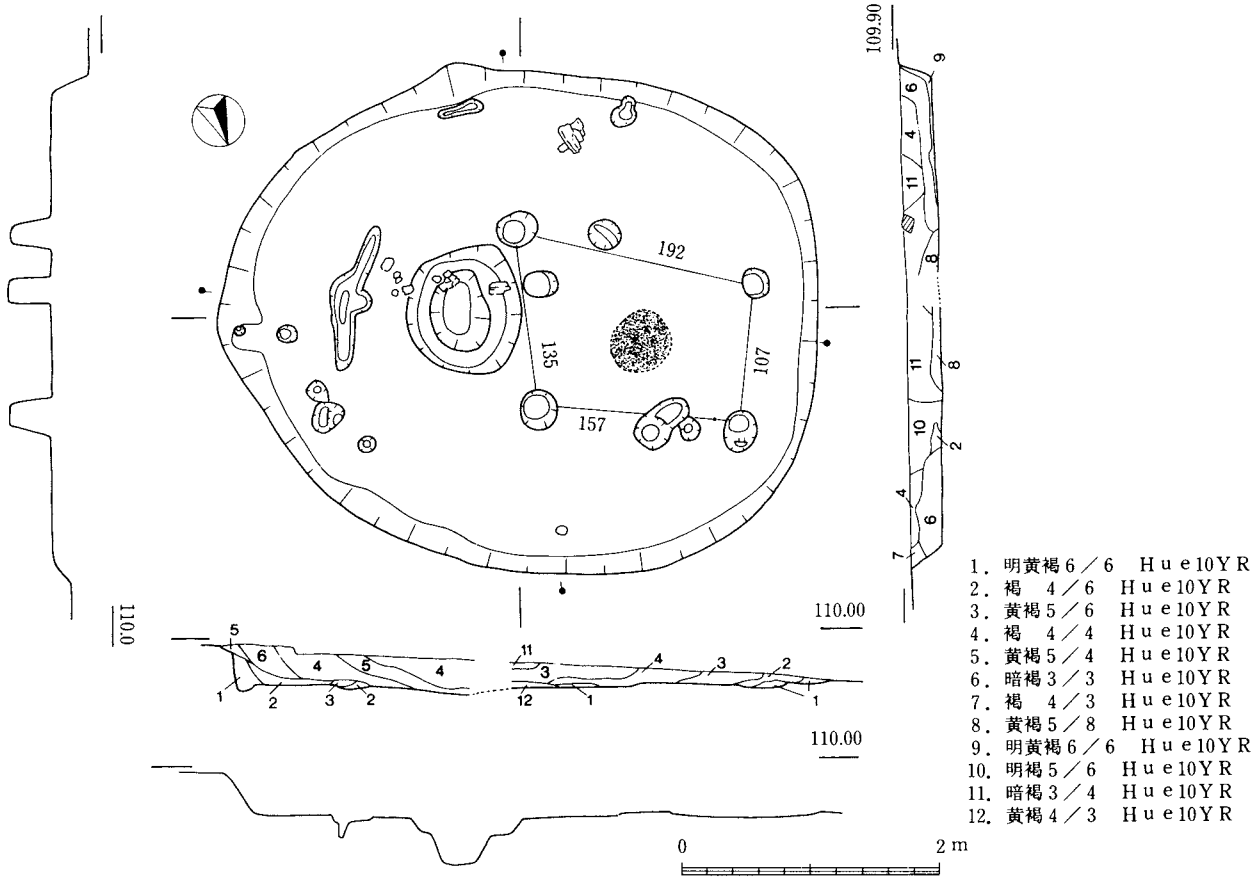
10　第11号住居址（第41～45図、図版13）

遺構　本住居址は調査区の南端、住居址が集中している地区で、丘陵尾根上の西側を占地し、M・N 42グリッドにまたがって検出された。東方向20cmには第４号住居址の掘り込みラインが、南方向約210cmには第２号住居址が配置され、本遺跡での住居址集中箇所での１棟である。住居址の西側部分は丘陵斜面にかかり始めている為に、褐色土の包含層が北西地区を含めて広がり、検出当初は大型住居址あるいは複数の住居址が重なっているとの想定も考えられたが、斜面に堆積した流土であった。

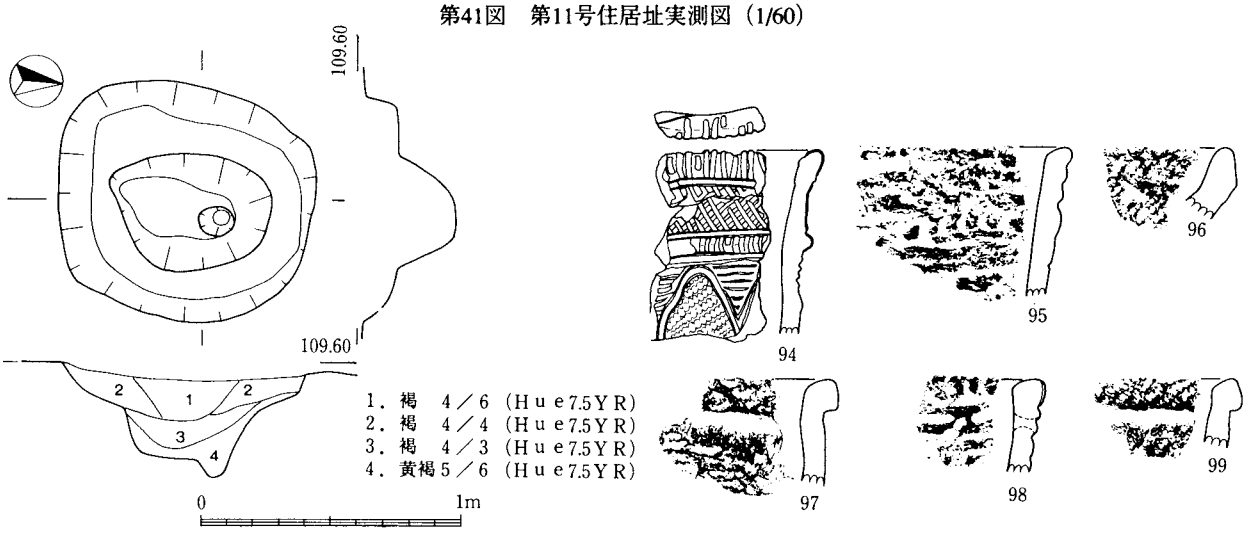
平面プランは長楕円形を呈し、等高線に直行する東西方向に主軸を置く。長軸468cm、短軸390cmの規模を測り、床面までの平均的な深さは25cmであるが、東端部分では30cmを測り、全体的に比較的深く掘り込まれている。壁の立ち上がりは東半部分では直になるが、斜面にかかる西側では緩やかな皿状の形状を示す。

覆土は住居址中央部に向けての、斜め方向の整合したレンズ状堆積を示す。褐色、暗褐色土の層序の中に、黄褐色系の混じりの少ない土層が入り込んでいるのが注意される。覆土からの遺物は比較的多く、住居址内土坑上面や南壁近くで深鉢一括土器が見られた。一括品は検出床面から僅かに浮いたレベルで、横倒しの状態で出土したが、本遺跡での住居址の床面は、全般的に掘り過ぎている傾向にあり、ほぼ床面に付くと判断して大過ないと思われる。

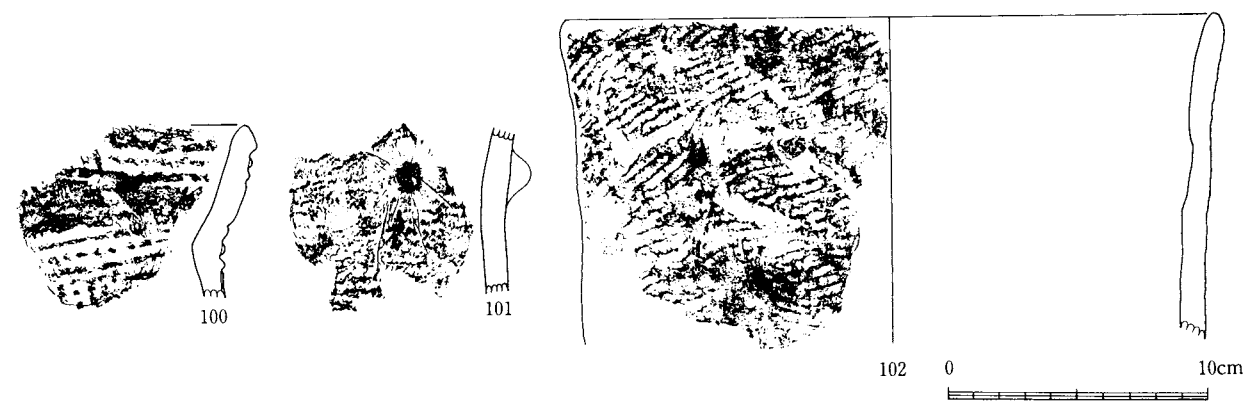
炉址は主軸に乗せた地床炉で、西壁から１ｍ離れ、径47cmのほぼ円形の範囲で地山土が赤変していた。炉址から64cmの距離を置いて、住居址内土坑が掘り込まれる。土坑は平面楕円形をなし、住居址の主軸と直行する方向で長軸が置かれる。長径98cm、短径92cmの規模で、断面皿状をなし15cm落ち込んだ所で、中の土坑へと掘り込まれる。二段掘りの土坑は上の掘り方に沿うような楕円形をなし、長径58cm、短径40cm、深さ22cmの規模となる。土坑上面からの深さは合わせて37cmとなる。土坑底面の北端には、小ピットが入り込んでいる。覆土には、住居址内覆土と同様の褐色、暗褐色土が堆積し、下層位では炭化物の包含が多くなり、床面は明瞭な平坦を形成して



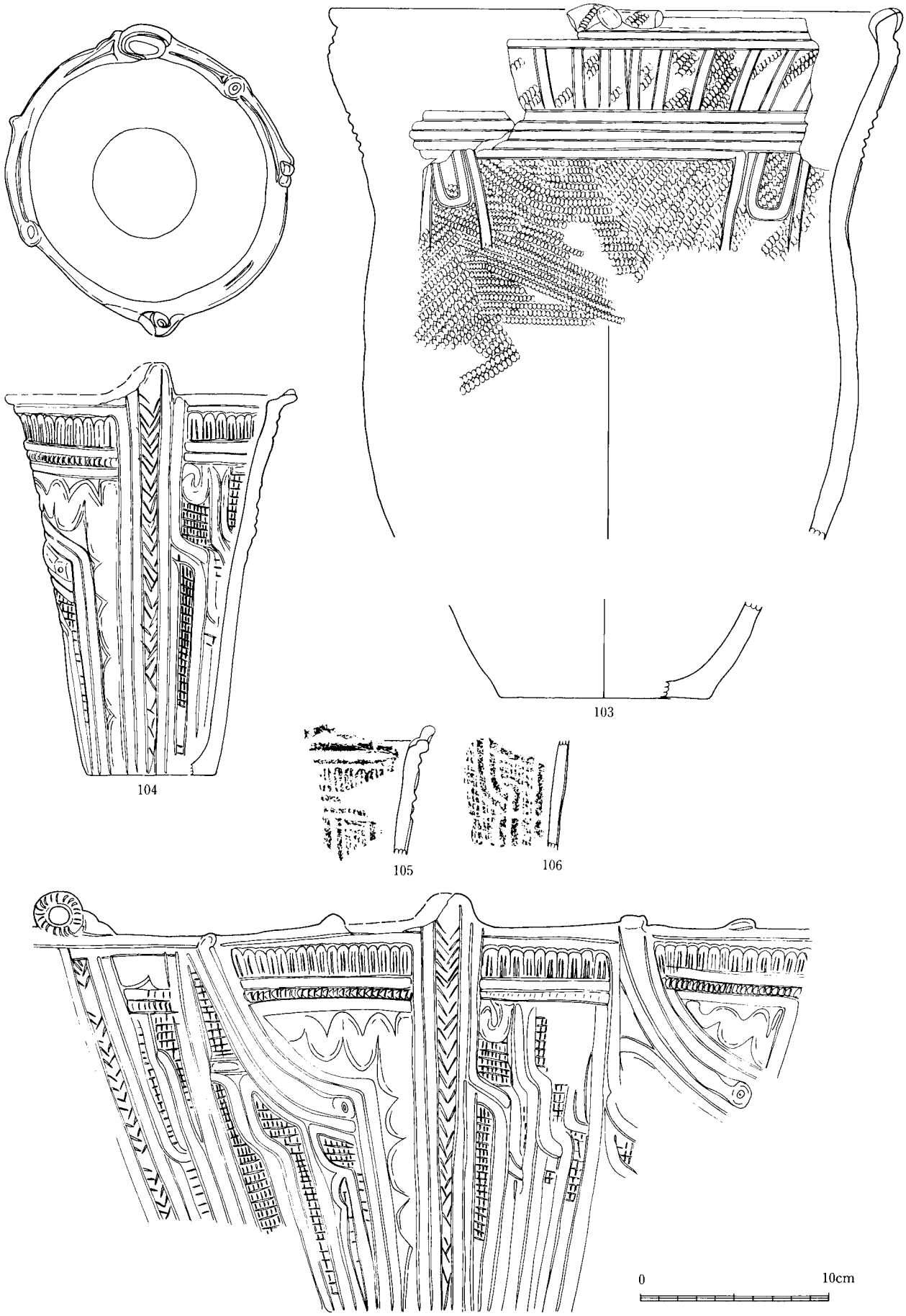
第41図　第11号住居址実測図（1/60）



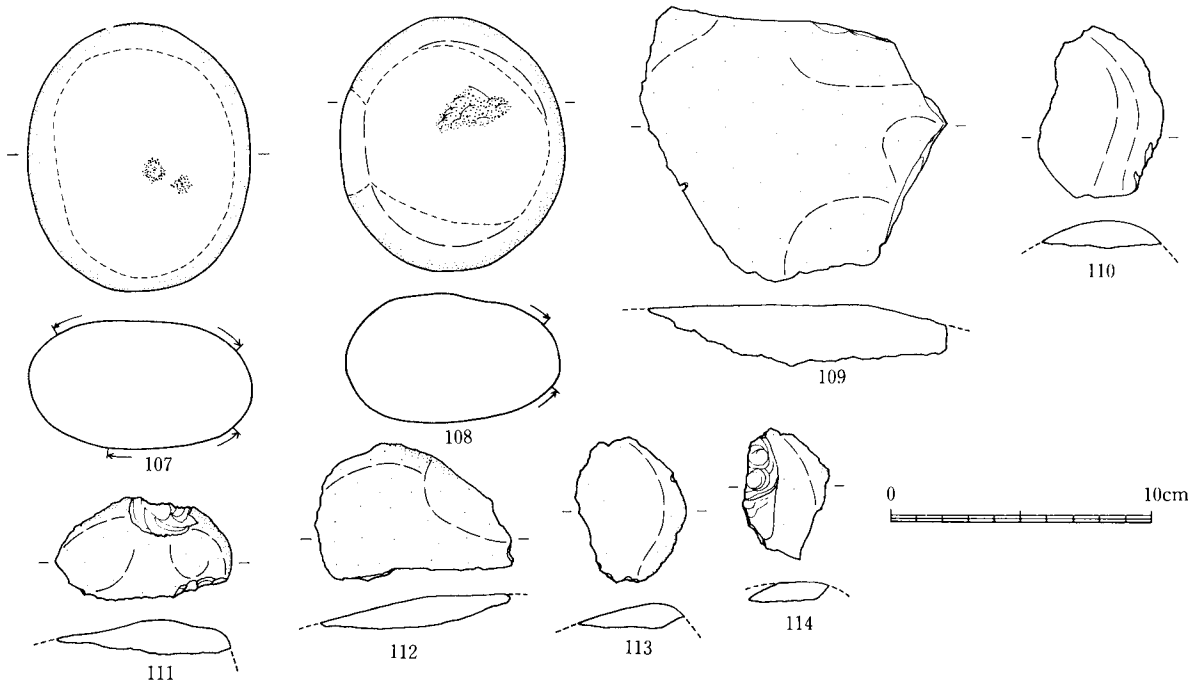
第42図　第11号住居址内土坑実測図（1/30）



第43図　第11号住居址出土土器拓影・実測図（1/3）



第44図　第11号住居址出土土器拓影・実測図（1/3）



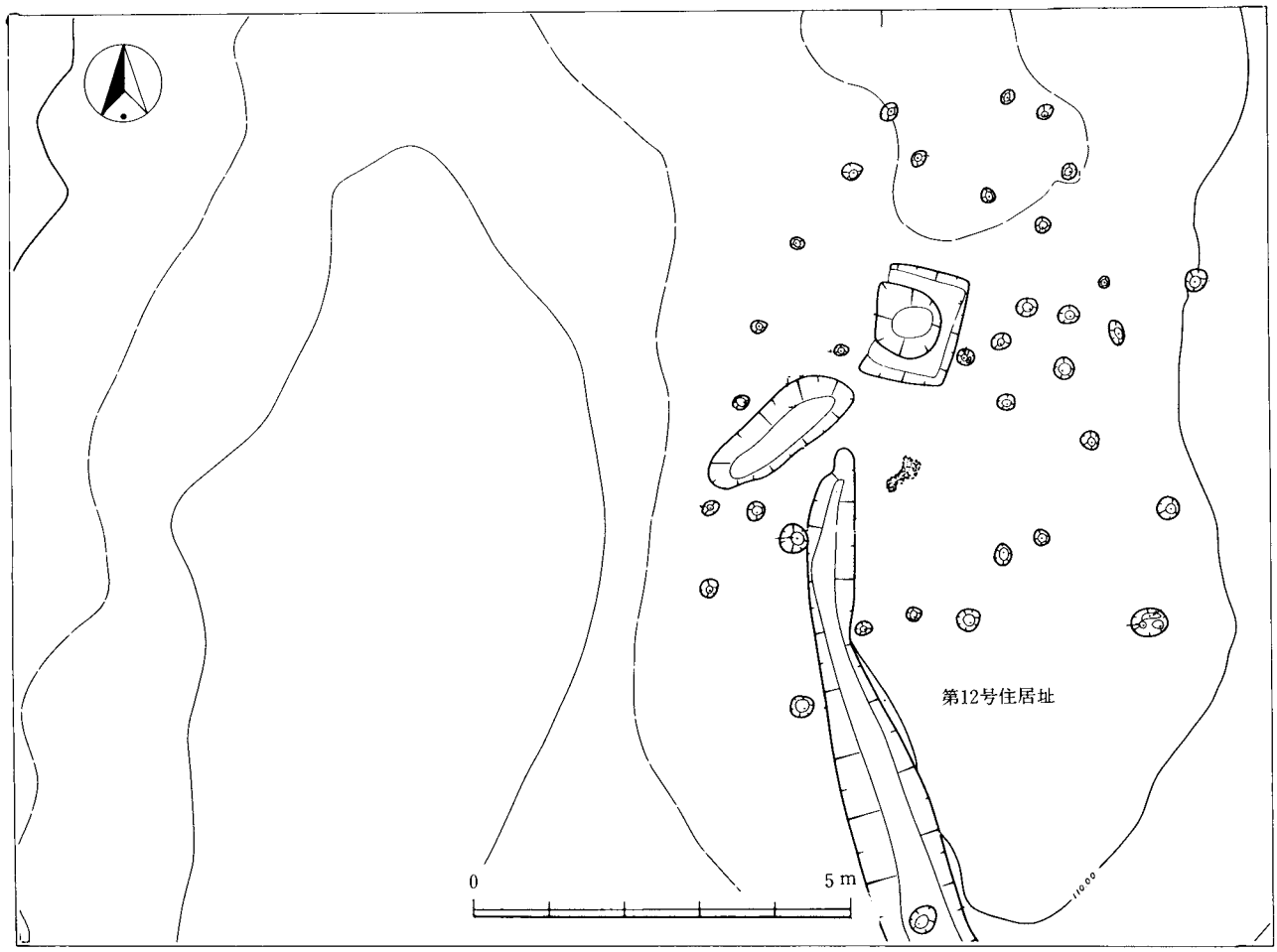
第45図　第11号住居址出土石器実測図（1/3）

はいなかった。覆土での遺物の出土は少なかった。

土坑から35cm、住居址の下場から55cmの距離を置いて、住居址掘り方に平行する形で湾曲する長さ115cm、幅10～15cmの溝が検出された。中央部には更に10cmほど掘り込んだ溝が入る。土坑へと接続する第２・５号住居址例とは性格の異なるものと推定され、入口部分での施設ではと推定している。

主柱穴は炉址から等距離にある４個の柱穴が想定され、土坑の東側にある溝に複合する小ピットは深くはない事から主柱とはしなかったが、脇柱的な形で建てられていたのではと推定される。

土器　94は口縁端部が開く単純な器形で、頸部に隆帯が巡らされる。口唇部分は縦の素麺張りが、口縁文様帯には斜め格子に、隆帯には縦の素麺張りが施される。隆帯から下には、細い半裁竹管で弧線文を連続させるＹ字状文が入る典型的な朝日下層式土器の深鉢である。濁褐色を呈し、胎土は精良で、焼成も良い。95、98は同一個体で、口唇が肥厚して内面に面を形成する平縁の深鉢と推定される。半隆起線文や爪形文の施文は乱雑で、浅い形状で終わっている。淡褐色を呈し、胎土に多くの砂粒が混和される。98では補修の為の穿孔が入れられる。96は口縁端部が内屈する成形をなす深鉢の口縁部片で、暗褐色を呈し、胎土に焼土粒や微砂粒の混和が見られる厚手の成形である。97、99は口縁端部で粘土紐が貼付され段が形成される深鉢口縁部であるが、施文される縄文が異なっていることから別個体と判断される。共に器表には煤の付着が認められる。100は波状口縁深鉢で、口唇部分は粘土紐が足されて幅広で高くなり、口縁帯は無文に止められる。頸部以下には半隆起線文の施文が密に施されるようだ。口縁内面には厚く炭化物が付き、外周の上端に煤の付着が見られるが、内部からの吹きこぼれの可能性も考えられる。明茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含まないようだ。101は径２×1.6cm、高さ0.8cmの突起が付く深鉢体部片である。淡褐色を呈し、胎土には微砂粒、焼土粒の混和が多量に見られる。焼成良好で、堅緻に上がっている。102は口径25.4cm、現器高12cmを測る深鉢である。口唇部分は指で押さえただけの粗い成形で、内外周ともに凹凸の残る器面で、器表には粗い形で単節斜縄文が巡らされる。器表面全体に煤の付着が顕著に残る。濁褐色を呈し、胎土には砂粒の混和は少ない形となる。焼成は並である。103は口径30cm、底径11.2cm、接合した部分での器高は29cmを測るが、推定器高は38cm程度であろう。中膨らみの体部から弱い括れを付けてキャリパー状口縁が立ち上がり、口縁端部で内屈する。口縁端に粘土紐を貼付して肥厚させ、口唇に対して縦位置の貼付が突起として付けられる。口縁帯は平行半隆起線文で区切られ、縄文地文に間隔の空いた縦の半隆起線文が巡る。



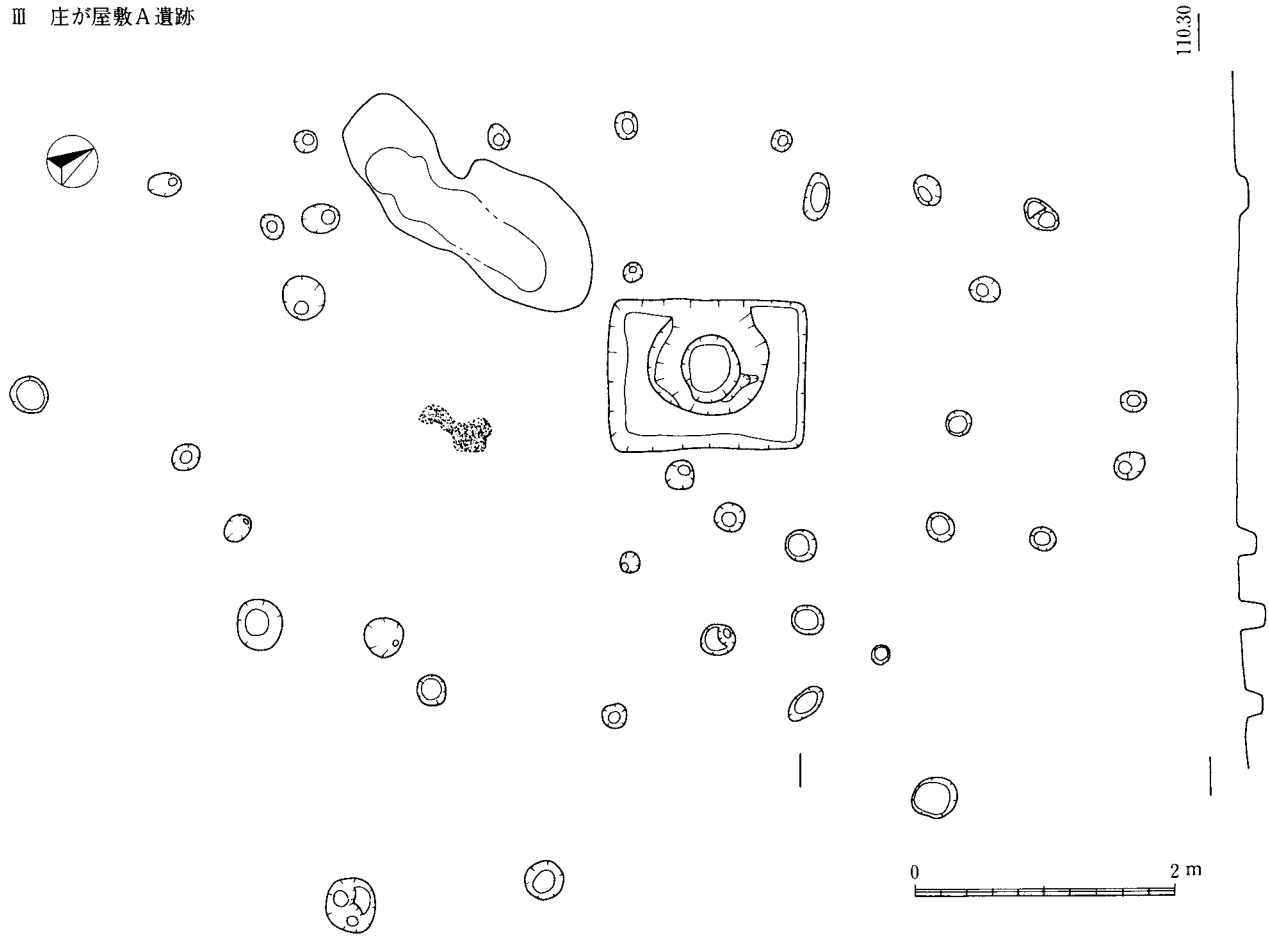
第46図　第12号住居址配置図（1/100）

頸部以下には縦とU字状の半隆起線文が垂下していく。体部には縄文が施文されるが、体部過半では素文のままである。体部の中央付近で幅3㎝程度の煤の付着が、リング状に巡っている。口縁部分は灰黄褐色、体部は暗褐色、底部周辺は灰褐色を呈している。内面での調整は、口縁部分が横方向、体部では縦方向に横が加わるという形で撫でが施されている。胎土は微砂粒が若干見られるものの精良で、焼成も良い。施文の状態から、新保様式第1段階の資料と見なされるが、口縁文様帯と器形が連動していない点や、口縁部地文と体部地文が同じ縄文となる事や、口唇突起と頸部垂下文様が独立している点や、口唇突起が不明確であるなどの点が、能登地域などの新保様式の中核地域出土資料と異にしている点であり、加賀地域での新保様式の受容の在り方を示す好資料と評価できる。

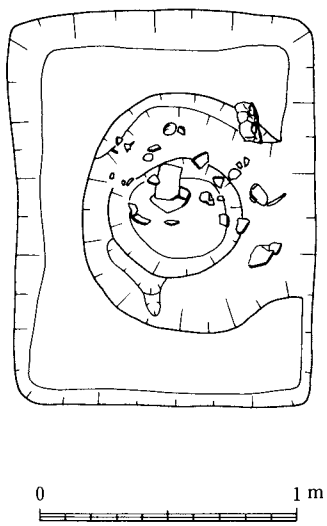
石器　107、108の磨石は、両面に平滑になった面が認められる完形品である。側縁部分には明確ではないが、敲打がなされたような状況が見られる。108の表面に見られる窪みは意図的とは思われず、偶然剥落したものと考えた。109～114は円礫の剥片で、図示した剥片全てが同質の石材であることから同一個体と判断できるが、芯となる部位の検出は認められなかった。いずれの剥片においても縁は鋭角とはなるものの剥離調整を施した状況は認めがたい。図示した以外に、110と同程度の小片の礫剥片が12点（280ｇ）出土していて、いずれも表皮を残す形状を示している。

石鏃などの狩猟用具の出土は見られなかったが、輝石安山岩の剥片は土坑からの2片を含めて30点（394ｇ）の出土があった。

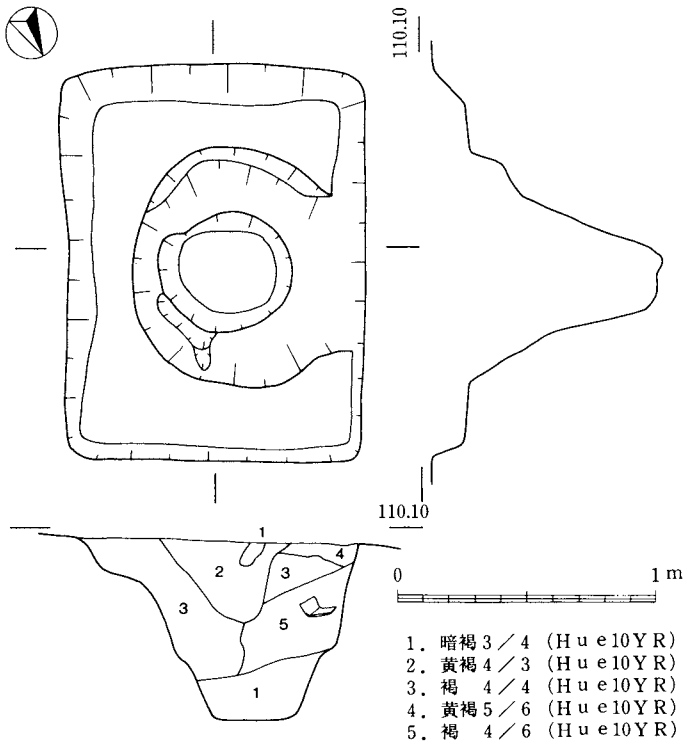
時期　出土した土器には、前期末葉の朝日下層式から中期中葉の上山田式までの幅が見られるが、床面に接して一括出土した上山田1式期での所産と見るのが妥当である。しかし、住居址群の北側に展開している住居址内



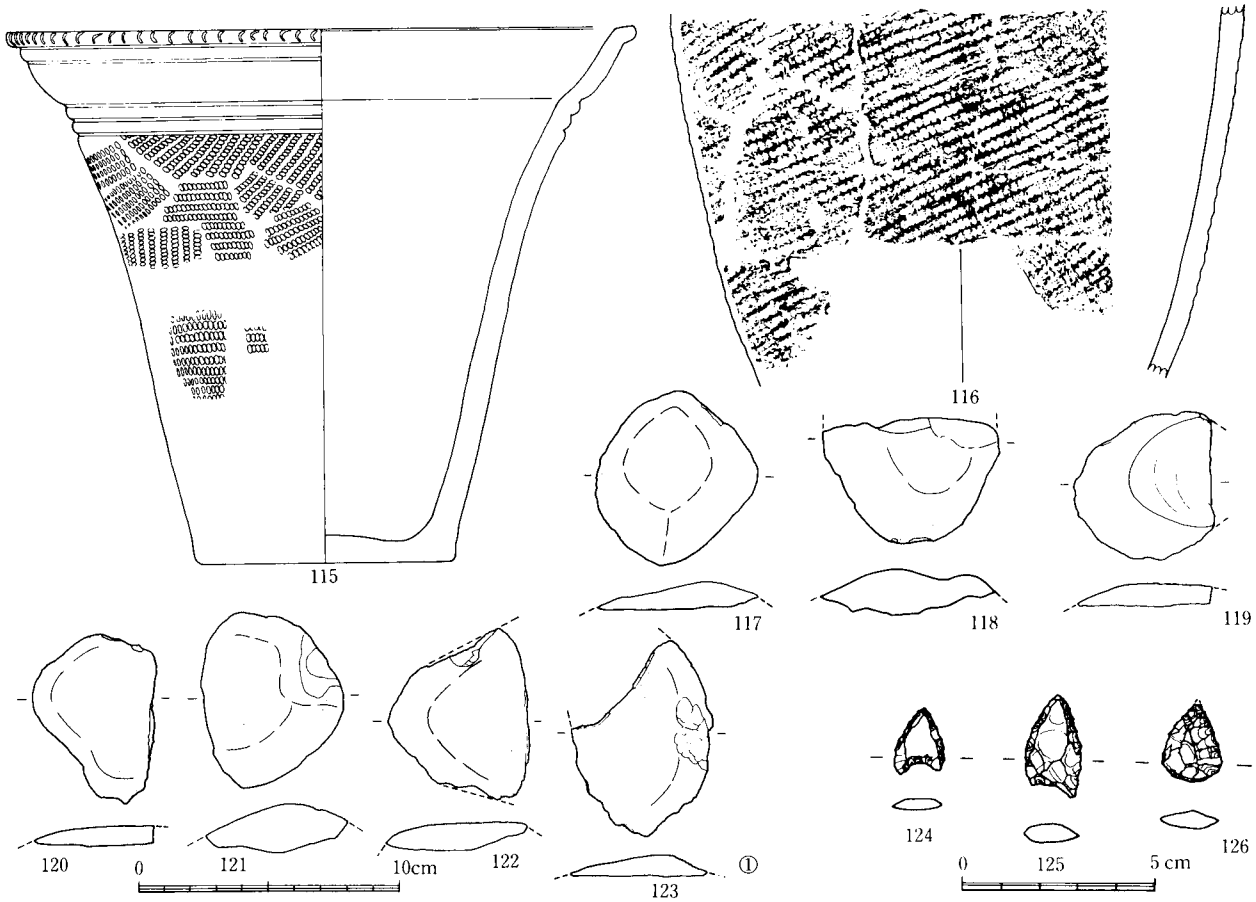
第47図　第12号住居址実測図（1/60）



第48図　第12号住居址内土坑
遺物出土状況実測図
（1/30）



第49図　第12号住居址内土坑実測図（1/30）



第50図　第12号住居址出土遺物拓影・実測図（1/2、1/3）

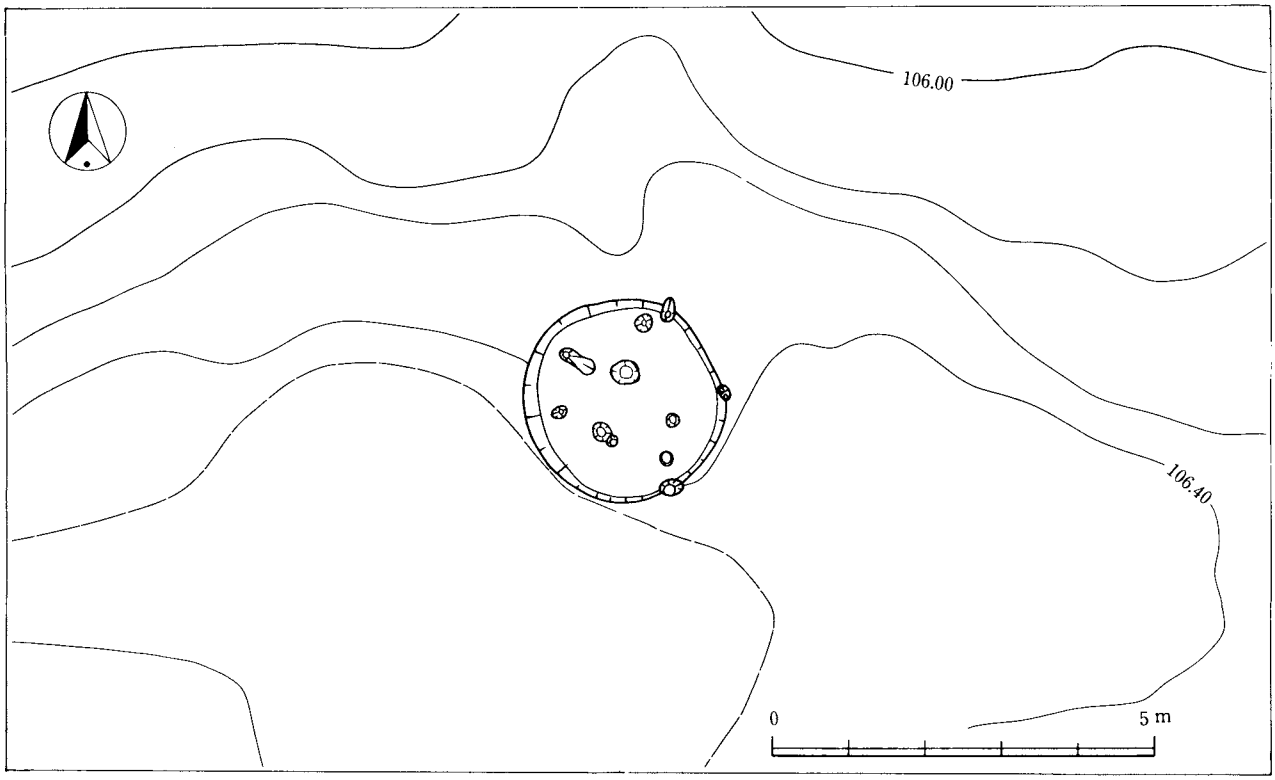
土坑を持たない群との整合性が保てなくなる事が指摘される。上山田式期においても土坑を設定する住居址がある事は明らかであり、集落構造を考える上での手がかりと言える。本住居址は３棟が掘り方を接して構築されている事から、時期ごとに同一家族が継続して占地していた事が可能視される。

11　第12号住居址（第46～50図、図版14）

遺構　本次調査区の南端、丘陵尾根筋に立地する住居址である。微地形的に見れば、丘陵尾根から東側、僅かに緩傾斜面上を占地している。Ｐ39グリッドを中心として、四方に広がる。北西約６ｍに第２号住居址が、北東約15ｍに第３号住居址が、南方約30ｍに第１号住居址が配置される。

丘陵頂上部に立地する事から表土層は比較的薄く、すぐに地山面が露呈するという状況から、竪穴の掘り込みラインは全く不明である。地山面が現れ、風倒木痕や木の根の撹乱穴が散在するという状況や、夏期の乾燥が進んでいた事などから調査の最終段階まで認識できなかった。地山面の精査を行う段階で、焼土面と二段掘りの土坑が検出され、ようやく住居址の所在が確認できたという状況である。

平面プランは不明であるが、土坑と焼土が主軸上に配置されるという本遺跡住居址群の在り方から、等高線に平行する南北方向に長軸を持つ楕円形プランと推定して大過ないであろう。推定として、長径550cm、短径400cm程度であろうか。住居址の中には、風倒木痕や山道跡等が入り込み、床面の状態は不鮮明で、検出した地床炉もいびつな形の検出である。炉址は長軸55cm、短軸35cmの範囲に想定される。炉址から北方へ90cmの距離を置いて大型の二段掘り土坑が設置される。土坑の平面は方形プランを呈し、住居址主軸方向に長軸を置く。長さ155cm、幅115cmの規模で、約15cmまで掘り下げ、平面楕円形の土坑掘り方となる。楕円形土坑は西端を外周の方形掘り方に接し、東方では間隔を持つという形になる。長径92cm、短径約80cm、深さ55cmの規模で、上層で褐色土、下層



第51図　第13号住居址配置図（1/100）

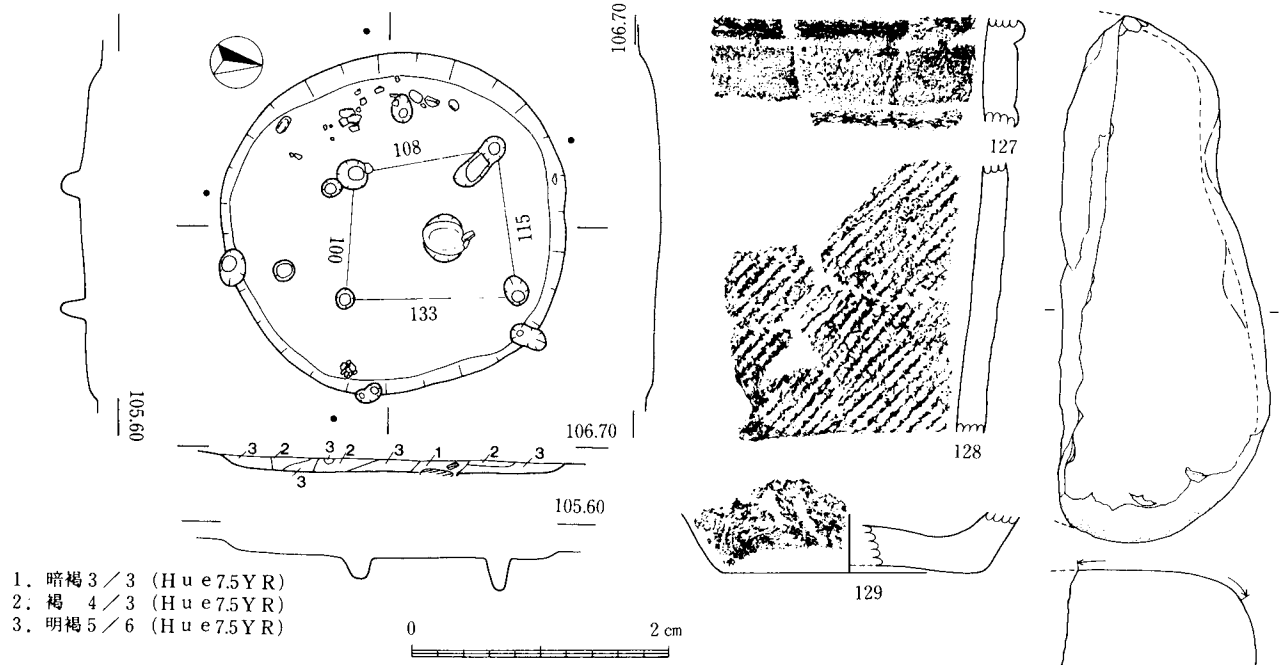
は暗褐色土が堆積し、掘り方に沿う斜め位置となった土器片が見られ、底面近くで大きな破片や礫剥片、輝石安山岩剥片が多量に検出された。

主柱穴は４～６本主柱と推定できるが、精査を繰り返したが柱穴と判断できるものの検出はなく、木の根の撹乱穴が見られただけである。なお、本遺跡では、炭化物を含まない小ピットは掘り下げていないので、本住居址周辺だけが目立つ状態となっている。

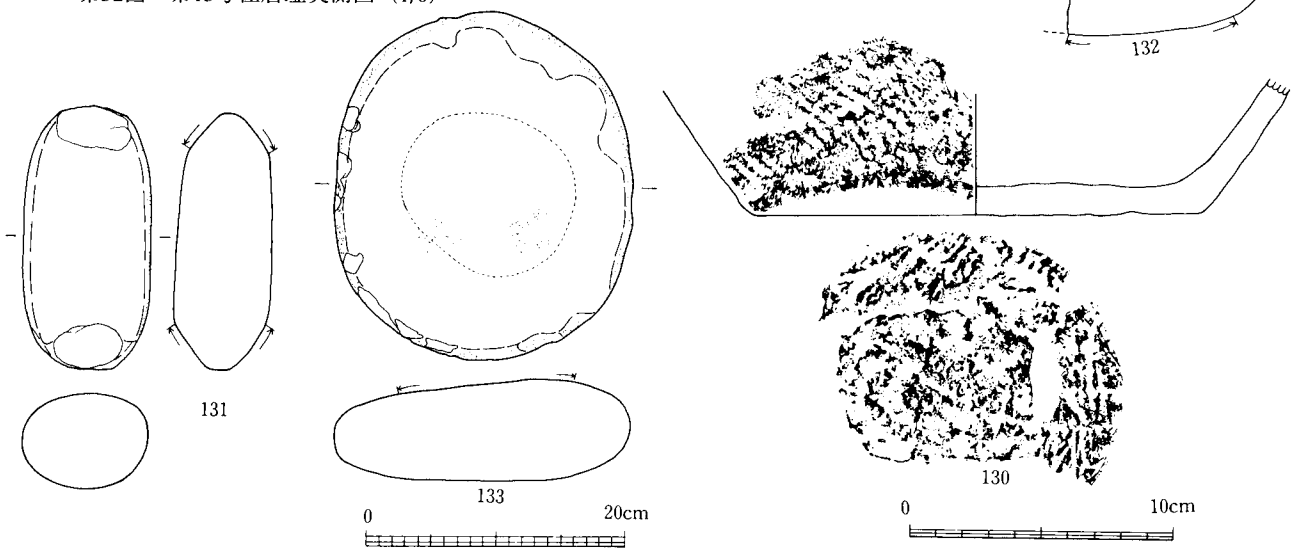
土器　115は３分の１を欠損していたが底部から接合復元ができた深鉢で、口径24.5cm、器高21.3cmを測る。口縁部は単に外傾しているようにも見えるが、内面に弯曲が入る成形からキャリパー状口縁を意図していたと判断できる。突出する口唇には粗い爪形文が巡らされ、頸部の半隆起線文に限られて口縁無文帯を形成する。無文帯が撫でに依る調整が施されているかの判断は困難だ。頸部以下には斜縄文が転がされているが、体部の下半は二次的火熱による剥落が進行している為に明瞭には判別できない。内面は撫でによる調整が施されるが、凹凸のある調整である。色調は淡褐色から橙色を呈し、口縁周辺部には煤の付着が認められる。胎土には焼土粒の混和が目立つものの砂粒の混入は少量に止まる。本資料は器形の在り方や平行半隆起線が多条化していない事から、新保式第２段階の加賀地域での状況を示すものと考えられる。116は縄文施文の体部片で、最大径22cm、現器高13cmに復元できたが、口縁部、底部の破片の出土は見られなかった。縄文は比較的丁寧に施文されている。破損は粘土紐の輪積み部分から進み、外傾接合の状況が観察できる。内面は明茶褐色を呈し、撫でによって平滑に整えられる。色調は暗褐色から橙色までの幅があり、二次的火熱による変色と煤の付着が顕著に見られる。胎土には微砂粒が多量に混和されて、先の115の胎土とは全く異なる形である事が注意される。土器資料の個体数は他に１、２例が想定されるが、図示に耐える資料は得られなかった。

石器　土坑内から得られた石器は、石鏃３点と礫剥片及び輝石安山岩剥片であった124、125の石鏃逆刺は片側が短い形で押さえられ、126では基部が中膨らみになる成形となっているのが注意される。礫剥片は９点の出土があり、内７点を図示した。輝石安山岩の剥片は、141片（878ｇ）が出土した。

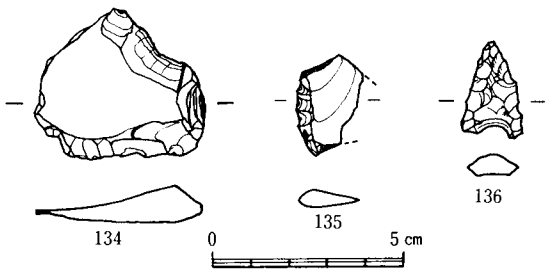
時期　新保２式期の段階が想定される。



第52図　第13号住居址実測図（1/6）



第53図　第13号住居址出土遺物拓影・実測図（1/3、1/6）



第54図　第13号住居址出土石器実測図（1/2）

12　第13号住居址（第51～54図、図版15）

遺構　本次調査区の北西端部、当初計画の調査区を拡張して検出した単独の住居址である。丘陵の南西緩斜面を占地し、鞍部を介して南西約16mに、第10号住居址が立地している。小丘陵は北西方向に高度を上げ、僅かな緩斜面を持って崖状に西及び北方向に落ち込んでいく。

平面プランは南北方向に僅かに長い楕円形で、長径265cm、短径255cmの規模を計測する。緩斜面にある為に、北側部分が高く、南側が低くなる検出面であるが、掘り込まれた床面は、周辺部から中央へと緩傾斜を形成している。掘り込みの壁は、検出した住居址群の中で最も傾斜が緩いもので、断面形は皿状を呈する。覆土は暗褐色土は少なく、褐色土、明褐色土が錯綜するような形で堆積していた。遺物は西壁周辺に集中的に出土し、東壁近くに若干が見られた。

炉址を示す焼土面は確認できなかった。中央部分で、石皿を伏せた小ピットが検出されているが、性格は不明である。また、住居址内土坑も検出されなかった。

主柱穴は４本主柱と想定され、北側に寄せた配置である。

土器　縄文施文の体部片の出土は多いのであるが、文様部や口縁部などの出土は見られなかった。127、128は同一個体と推定できるが接合は出来なかった。幅のある半隆起線文で限られた無文帯が形成され、撫でに依る調整である事や器壁が1.2cmと厚手に整えられる事などから、新保式第２段階での所産が想定される。内面の調整は撫でにより平滑に整えられる。器表には煤の付着を見るが、色調は暗茶褐色を呈し、胎土には均質ではあるが多量な微砂粒が混和されている。129は底径10cmに復元されるもので、強く外傾して体部に立ち上がる。暗褐色から褐色を呈し、胎土には焼土粒の混和が認められる。130は底径17.4cmを測る大型の底部片で外傾して体部に繋がる。内面の図示した上端に輪状の炭化物がめぐる。底部には網代痕がかすかに見られ、簾状を呈するものの２条の結び目が弯曲する形で平行位置にあるのが注意される。扇状の形態を持つのではないかと想定される。器表面は二次的火熱による淡橙色を呈し、胎土に微砂粒、焼土粒の混和が一定量施されるが、目立つものではない。底部の調整や胎土の在り方から、中期中葉以降での所産が想定できる。

石器　131は平面長方形で、断面楕円形を呈する整った形状の敲打石で、本遺跡での唯一の例である。両端が楔状に欠け落ち、打面が突帯状に狭い面を形成している。楔形部分は面を作るものの磨かれたとは見られず、整形が行われた結果かと推定される。132は両面に磨痕が、133では片面の中央部分に磨痕が見られる石皿である。134、135は剥片石器に推定したもので、端部の片面だけに二次的な剥離調整が施される。136は基部近くの片面に瘤状の膨らみが残る石鏃で、両面調整が施される。輝石安山岩の剥片は２点（30ｇ）が出土している。

時期　厚手成形の新保２式土器から焼土粒混和の中期中葉以降の土器が見られが、時期的には上山田式期での所産時期が推定される。

13　第14号住居址（第55～57図、図版10）

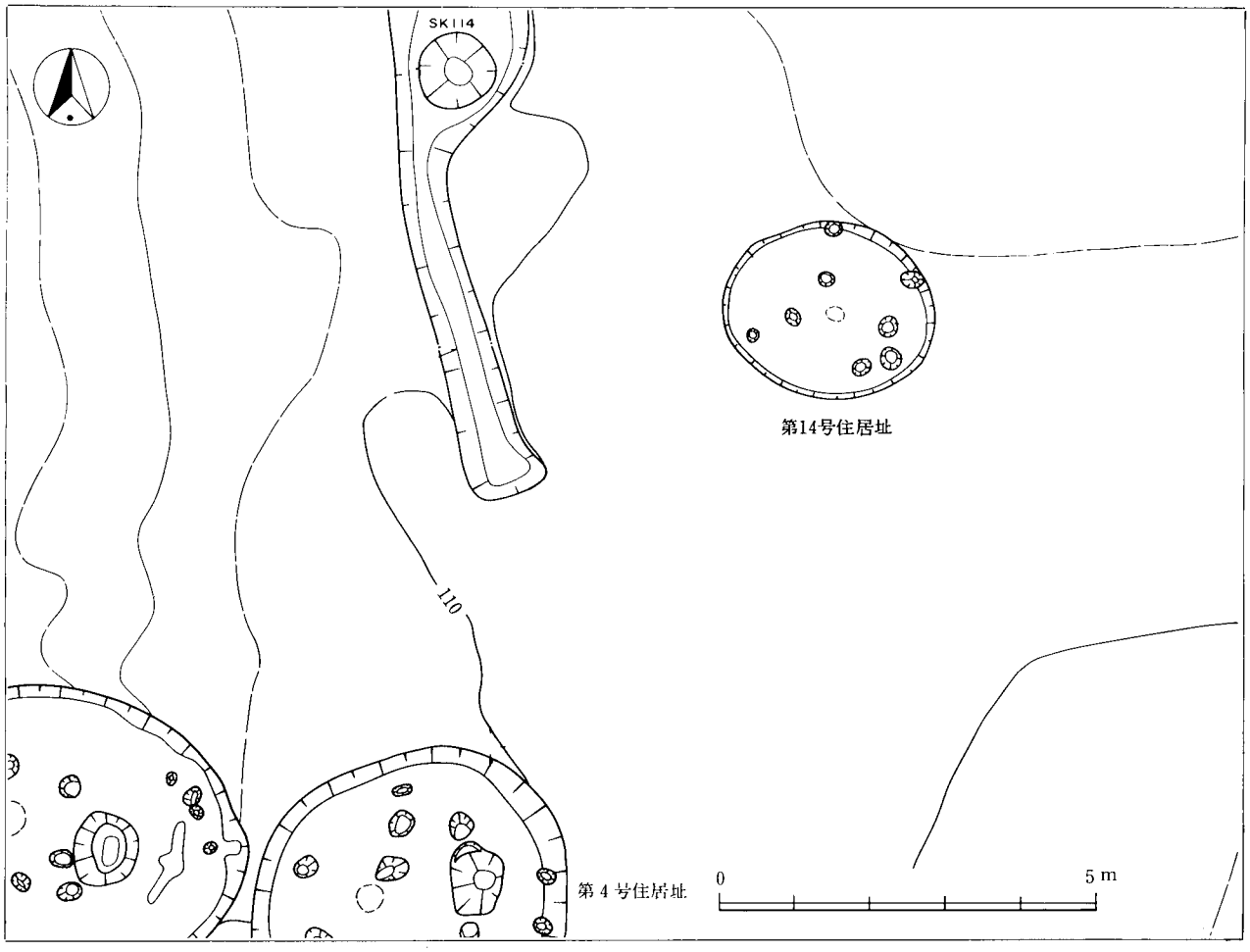
遺構　丘陵頂上部に立地している小型の住居址で、南端住居址群の北端に位置している。南西約６ｍには第４号住居址が、東方約15ｍには第３号住居址が配置される。

頂上部分である事から地山面が早くに現れ、土器の出土が浮き上がったような状態で見られ、円形の範囲で褐色土の落ち込みがかすかに認められた。落ち込みの深さは殆ど遺存しない状態となっていた。

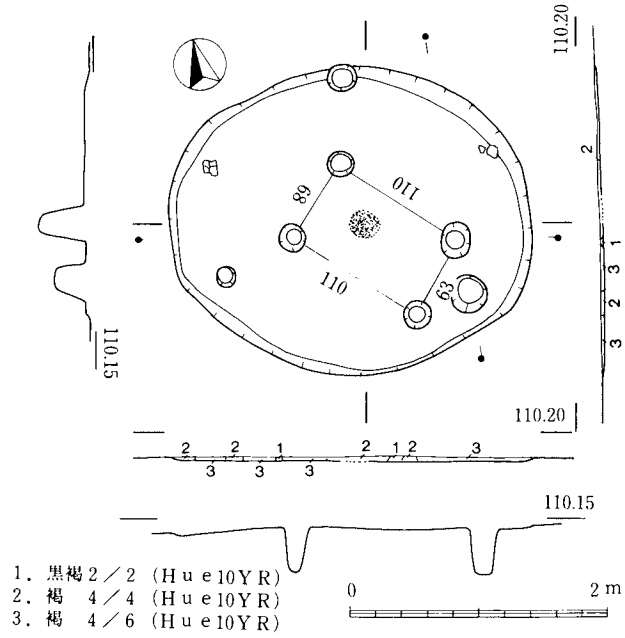
平面形は東西方向に長軸を持つ楕円形プランで、長径280cm、短径238cm、検出した深さは２、３cm程度と僅かなものである。住居址内土坑は設置されていない。中央部に径20cmで円形の焼土面が見られ、炉址と判断した。床面には幾つかの小ピットが見られ、住居址の長軸方向とは角度を持つのであるが、炉址を巡る４本主柱と考えた。

土器　土器片が少数得られた程度で、石器は出土しなかった。137は頸部に括れを持たない器形の深鉢口縁部で、口縁端部に粘土紐を貼付して隆帯とし、口唇にさらに粘土紐を向き合わせて貼り付ける。頸部付近に突起が貼付されて右下に弯曲して貼付文が垂下しているのは、口唇の突起に連動させた偶数単位での区画を示すものである。縄文地文が施文されてから頸部、口縁の貼付が施されている。頸部での突起が口縁まで伸びない状況や、口縁帯を区画する隆帯を持たないことから、新保２式での位置付けが考えられ、加賀での地域性を反映した在り方と推定される。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒、焼土粒が多量に混和され、焼成は並である。

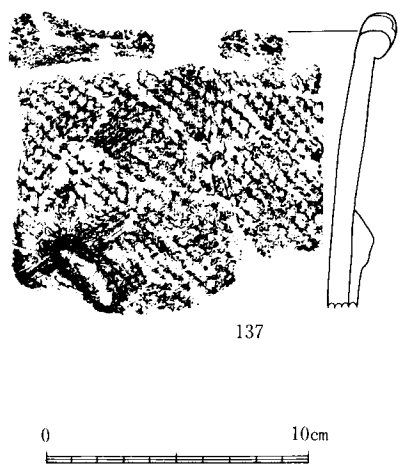
時期　新保２式期における所産と推定される。



第55図　第14号住居址配置図（1/100）



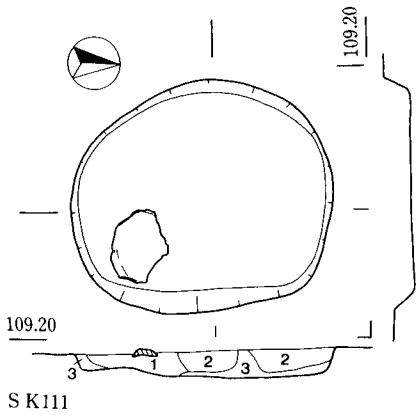
第56図　第14号住居址実測図（1/60）



第57図　第14号住居址出土土器拓影図（1/3）

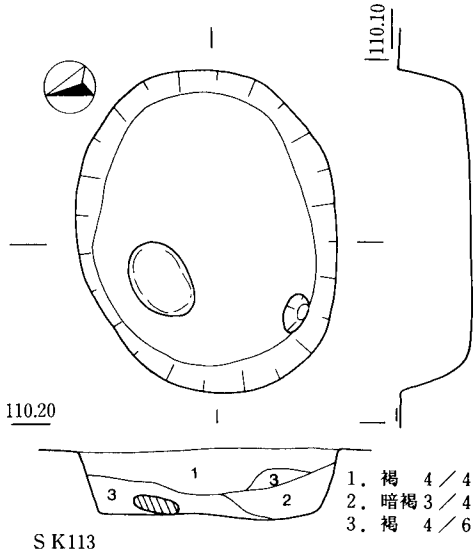
(2)　土坑

土坑は10数基の検出を見ている。各土坑からの出土遺物は皆無に近く、その為に所産時期を確定するのが困難なものが多くを占める。平面形態や覆土の状況から、次ぎのように大まかな類別ができる。1、覆土内に円盤形



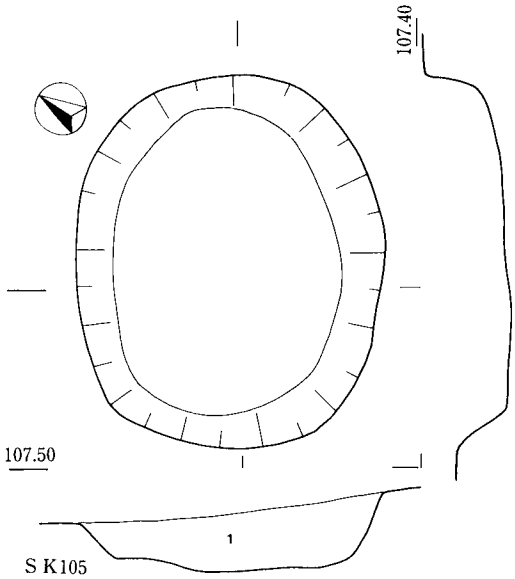
SK111

1．褐　4／4（Hue10YR）
2．暗褐3／3（Hue10YR）
3．黄褐5／4（Hue10YR）



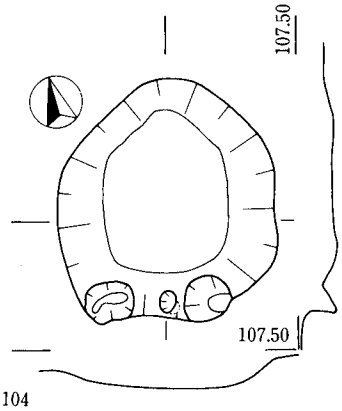
SK113

1．褐　4／4（Hue10YR）
2．暗褐3／4（Hue10YR）
3．褐　4／6（Hue10YR）

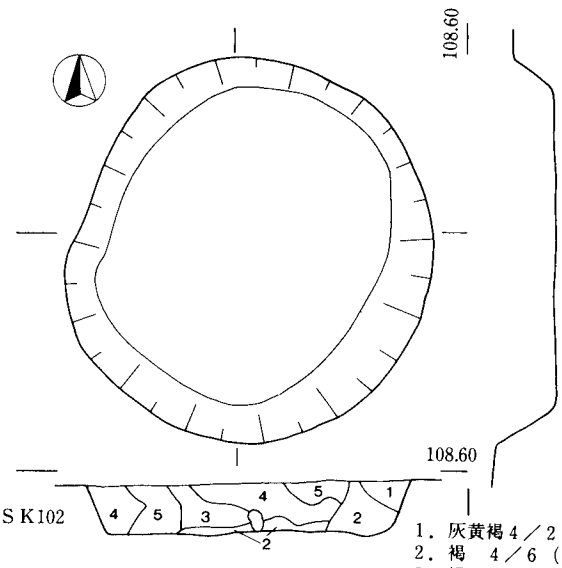


SK105

1．黒褐2／3（Hue10YR）

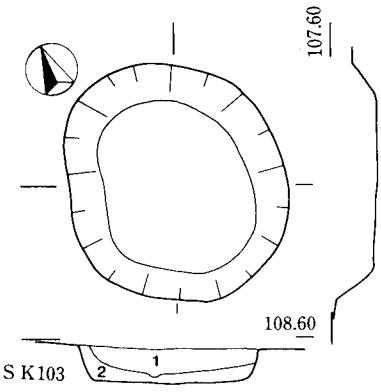


SK104



SK102

1．灰黄褐4／2（Hue10YR）
2．褐　4／6（Hue10YR）
3．褐　4／4（Hue10YR）
4．暗褐3／4（Hue10YR）
5．黒褐3／2（Hue10YR）



SK103

1．黒褐2／2（Hue10YR）
2．黄褐5／6（Hue10YR）

0　1m

第58図　土坑実測図（1）（1/30）

の河原礫が含まれる円形土坑、2、覆土に礫を含まない円形土坑、3、壁面が焼け付き、覆土に細かな炭が多量に包含されている円・楕円形土坑、4、壁面が焼け付き、床面に炭化物が多量に見られる長楕円形プランの土坑、5、その他の形態を持つ土坑の5形態に分類する事が出来る。時期的なまとまりを想定するならば、1、2形態の円形土坑は縄文時代の所産が推定され、立地状況は住居址に隣接する占地で、単独ないしは集中する在り方を示す。3、4形態の土坑は焼土坑と呼称されるもので、丘陵西側斜面に間隔を置いて構築されていた。前年に調査を実施した本遺跡南地区の緩斜面でも16基の検出が認められた土坑と同じ性格を有するもので、遺物の出土を見ない事から時期不詳とされているが、能美丘陵東遺跡群内の発掘状況から古代に所産したものと考えられる。焼けた壁や炭の出土が目立つ在り方から伏せ焼き法と呼ばれる近代での製炭法の痕跡と見るのが北陸での一般的な性格付けであるが、古代における埋葬手法のひとつとしての可能性を視野に入れて考えていきたい。

1　SK111（第58図、図版17）

調査区の中央平坦地の東端に立地する土坑で、第5号住居址から東方約1.5mに位置している。平面プランは楕円形を呈し、長径100cm、短径90cm、深さ11cmの規模を測る。覆土は褐色、暗褐色土が上層に見られ、下層には黄褐色地山漸移層に近い土が不定形に認められた。掘り方に接する南位置には、長さが30cmを越える縁辺部を欠いた河原礫が斜め位置に検出された。床面は比較的平坦に整えられ、南端部分が若干高まる状態であった。覆土からの出土遺物は認められなかった。

2　SK113（第58図、図版16）

調査区の中央部、最も標高の高い平坦面で検出した土坑で、Q45グリッドに大部分が含まれる。周辺には土坑、住居址の構築が見られない地区で、南方向約10mに第14号住居址が配置されるだけであるが、東側の林道部分に住居址が存在した可能性は十分に考えられる。平面形は東西方向に長軸を持つ楕円形で、長径125cm、短径101cm、深さ28cmの規模を測る。壁は角度の強い掘り方で、床面は平坦な状態である。覆土は褐色系の土で充たされ、北西側に寄った位置で、斜め方向になった長さ30cmを越える円盤状の平石が検出された。石端の一部が床面に接するような形となっている。覆土からの出土遺物は認められなかった。平石は石皿としての大きさを持つものであるが、表裏面ともに使用痕は確認できなかった。

3　SK105（第58図、図版18）

調査区中央部分の北側斜面にかかる地区で検出した土坑群のひとつで、R56グリッドに含まれる。等高線に平行させる形で長軸を置く、平面楕円形プランを呈する。長径144cm、短径118cm、深さ23cmを測る。覆土は黒褐色土のみが確認され、遺物の出土は見られなかった。掘り方の角度は強く、丘陵側の深さが斜面側に比較して強い傾向にある。床面は細かな凹凸の入る状態ではあるが、おおむね平坦な形態を保っている。

4　SK104（第58図）

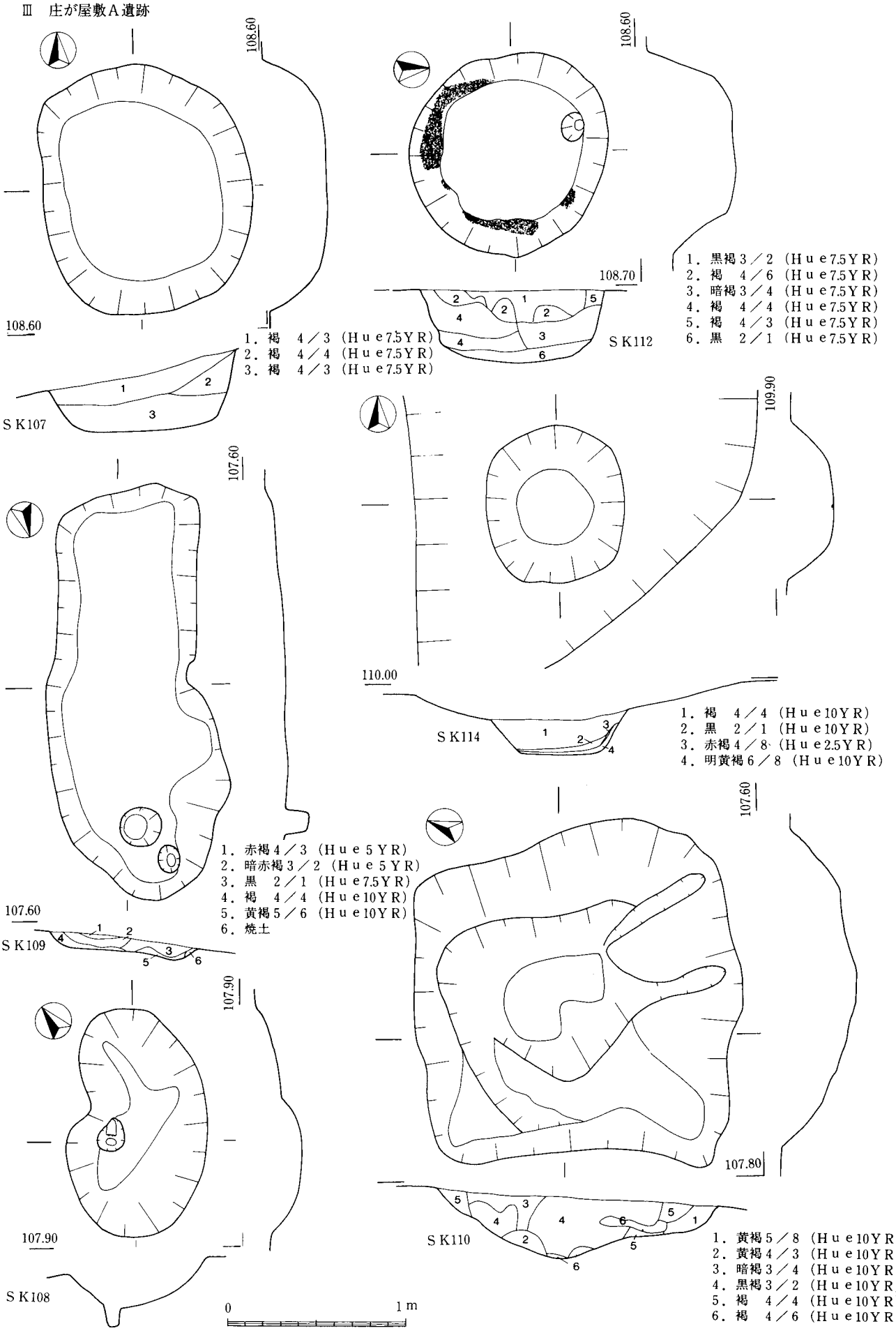
北側傾斜面に立地する土坑群のひとつで、南に隣接してSK102が掘り込まれている。平面不整楕円形を呈し、等高線に対して直行する形で南北方向に長軸を置く。長径94cm、短径84cm、深さ11cmの規模を測る。南辺の掘り方内にはすぼまる形での小ピットが見られる状況で、床面が凹凸のある形態から木の根跡の可能性が高いと判断される。遺物の出土は見られなかった。

5　SK102（第58図、図版18）

北側斜面のQ55グリッドで検出した土坑で、北約6mにSK105が構築されている。平面形は等高線に直行する長軸を置く楕円形プランで、長径150cm、短径135cm、深さ20cmの大型土坑である。壁の立ち上がりは比較的角度があり、床面は凹凸はあるものの平坦に整っている。覆土は黒褐色、暗褐色の土が縦方向に入り込むという特徴的な状態を示している。覆土からの遺物は皆無であった。

6　SK103（第58図、図版17）

北側斜面の土坑群のひとつで、P54グリッドに立地している。北側にはSK104が掘り方を接して立地している。平面形は等高線に対して直行して長軸が置かれる楕円形プランを呈し、長径98cm、短径85cm、深さ14cmを計測する。床面は平坦に整えられ、掘り込みの角度は長径と短径部分では異なる形での検出である。覆土からの遺物は



第59図　土坑実測図（2）（1/30）

見られなかった。

7　SK107（第59図、図版18）

調査区の中央部分、西側斜面上で検出した土坑で、M46グリッドに含まれる。平面楕円形をなし、等高線に対して平行する主軸を取っている。比較的整美な楕円形で、長径140cm、短径116cm、深さは丘陵側で40cmの規模を計測する。壁の立ち上がりは急で、床面とのつながりは整った湾曲を示し、床面は平坦に整えられる。覆土は褐色土が堆積していて、焼土面などは確認できなかった。出土遺物は皆無である。

8　SK112（第59図、図版15）

典型的な焼土坑で、東側斜面へと傾斜が強くなる変換線上のV47グリッドに立地している。平面プランは僅かに楕円形を呈し、長径118cm、短径107cm、深さ40cmの規模を測る。検出の段階で掘り方ラインに沿って焼土粒が巡るのが認められ、覆土には多くの炭化物が認められた。覆土は炭化物を含んだ柔らかな土質で、最下層には厚さ７cmの炭化物層が形成される。覆土には土坑が開口した状態での水性堆積を示すラインは認め難く、軟質な在り方から埋め戻された状況を示すものと推定される。覆土からの遺物は見られなかった。掘り込みは角度がついて深く、床面は中央部分が若干窪むような形で平坦に整えられている。壁面には火熱を受けて赤変した地山土が面を持って巡るのが見られ、上端、床面での赤変は限定されるような状況である。壁面には小ピットが入るのは、木の枝根が入り込んだ結果と想定される。

9　SK109（第59図）

調査区の中央部、西斜面の端で検出した土坑で、I49グリッドに位置している。平面プランは等高線に主軸を平行させた長楕円形を呈し、長さ227cm、幅77～98cm、深さは８cmの規模を測る。覆土は10cmに満たない浅いもので、検出面で焼土粒の塊と炭化物を含んだ土層が認められ、壁面の一部が赤変しているのが確認できた。北端には径22cm、深さ12cmの小ピットが掘り込まれるのが特徴的である。断面形は皿状を呈し、床面は傾斜はしているものの平坦に成形されている。出土遺物は認められなかった。

10　SK114（第59図）

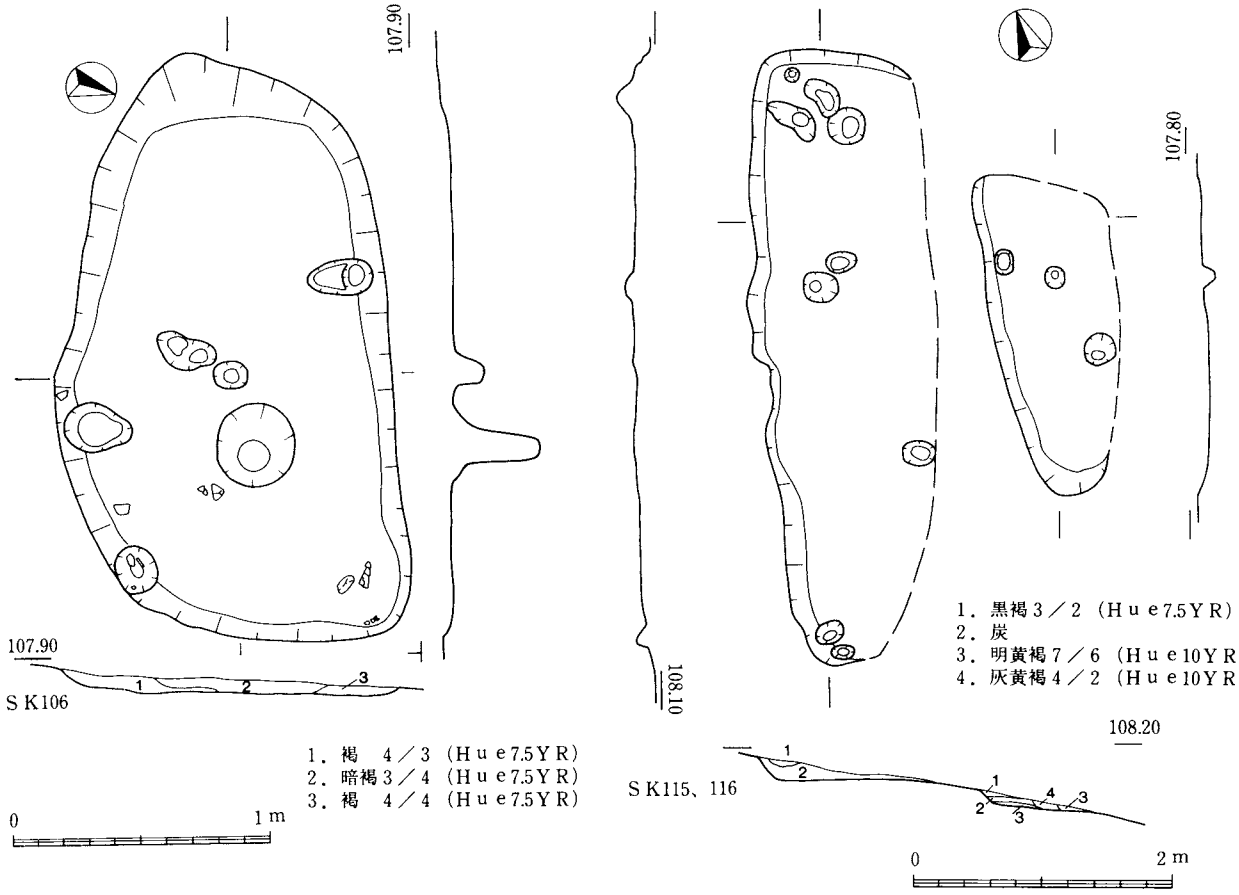
調査区の南部、住居址群が配置されている地点に隣接する丘陵頂上部、N44グリッドで検出した。調査区の中央部を南北方向に伸びる路跡と推定される溝が登り切った位置で、溝覆土を取り除いた段階で検出した。路の構築時期は確定出来ないが、覆土の状況や周辺部での陶磁器の散布状況から近代での所産と想定され、焼土坑の構築時期は近代以前である事は動かないと想定される。土坑は路によって上半が削平されている事から、構築当初の規模は若干拡大して考えねばならないだろう。現況での平面形は尾根筋に平行する長軸を持つ平面楕円形プランで、長径87cm、短径77cm、深さ20cmの規模を測る。断面形は深い鉢状を呈し、床面は平坦に仕上げられ、比較的整った掘り方と言える。覆土の最下層には、厚さ２～３cm程度の炭化物の薄層が堆積し、壁面には僅かに焼土粒が形成され、上層は褐色土が厚く堆積している。覆土からの遺物の出土は見られなかった。本土坑においては大きな火を長時間焚かなかった状況を示すものと考えられる。

11　SK108（第59図、図版16）

調査区の西側斜面裾部、SK109に隣接して構築されていた土坑で、J47グリッドに含まれる。平面プランは不整楕円形を呈し、長軸方向は等高線に平行する形である。長径128cm、短径78cm、深さ23cmの規模を測る。平面形が中途で括れる形を取り、断面皿状をなして床面中央部に小ピットが入り込む状態から、木の根の撹乱による可能性が高いと判断される。

12　SK110（第59図、図版17）

調査区の北側斜面の東端、U54グリッドで検出した。縄文時代の住居址群からは距離を置いた立地である。平面プランは隅円方形を呈し、長さ190cm、幅182cm、深さ35cmの規模を測る。断面形は中央部分が最も深くなる形状をなし、面的に凹凸が入る形をなす。覆土には黒褐色が縦方向にはいり、不定形な形で褐色、暗褐色土が堆積しているのが見られた。覆土からの出土遺物は認められず、形態、覆土の状況から風倒木痕の可能性が高いと判断される。



第60図　土坑実測図（3）（1/30、1/60）

13　SK106（第60図）

調査区の北側、丘陵平坦面が傾斜面に係る変換線上、Ｌ52グリッドに位置している。等高線に平行する形で東西方向に主軸が置かれた平面長方形プランを呈し、長さ226cm、幅130cm、深さ５cmと遺存状態の良くない落ち込みである。覆土には縄文土器が包含され、中央部分に良好な小ピットが見られる事から、住居址の残欠の可能性も考えられたが、柱穴として対応する穴および炉址としての焼土面は検出できなかった。土器の遺存状態は良くなく、図示できなかった。

14　SK115、116（第60図、図版19）

調査区の南側斜面裾部、Ｖ43、Ｗ43グリッドを殆どが含まれる位置で検出された。庄が屋敷Ｃ遺跡との間の谷間は平坦面が形成され、幅約４～６ｍをもって裾部を巡り、斜面端部に幅が40cm程度の溝が掘り込まれている。溝からの出土遺物は認められないが、周辺の状況からの判断では近代での所産が想定される。裾端の溝からは僅かに距離を置いて、等高線に平行する主軸を持つ平面プラン長方形の土坑２基が、併置した状態で検出された。SK115は斜面側の掘り込み部分が流失している為に正確な規模は把握できないが、現況では長さ約250cm、幅約100cm、深さ18cmを測る。東側に遺存していた壁面は火熱を受けて赤変し、覆土には細かく破砕した炭が層となって堆積していた。床面は比較的平坦ではあるが南東方向に傾斜し、炭化物を含んだ小ピット
が認められるが、SK116でも多数が見られるように枝根が入り込んだ結果での落ち込みと判断される。SK116では短辺部分での隅が遺存している事から長さは480cmと確定することができた。幅においては斜面側が流失していることから現況での最大幅で135cmを測るが、同じ幅で構築されていたとは確定できない。深さは丘陵側で20cmを測り、床面を覆うように炭化物層が認められた。炭化物は材の形を残している物は少なく、大部分は細片となった炭であった。壁面は熱による変色が全体に見られるが、床面につながる部分から床面にかけては変色は弱いか

第61図　遺構外出土遺物実測図（1）（1/3）

全く見られない状況であった。人工遺物は双方ともに検出されなかった。2基の土坑は、伏せ焼き法と呼ばれる製炭土坑とも想定できるが、焼土坑と類似する意図のもとに構築された埋葬施設と考えている。

(3)　遺構外出土の遺物（第61・62図）

土器　遺構覆土に含まれていた以外をまとめて記述していく。遺物の出土状況を見ながら表土除去を実施しているものの、見落としている遺物もあるものと考えられる。しかし、明確に遺物包含層が確認できる地区は限定されていた事や、集落そのものの継続期間が限定された状況である事から遺物量は絶対的に少量であったと推定される。

138はM38グリッドから出土した波状口縁深鉢の波頂部片である。口縁全体に細身の半裁竹管で斜め位置の平行線を入れ、交差する形で篦による平行沈線が施され、結果として斜格子目文が形成される。波頂部の中央には素麺貼りによる円形区画が施され、内部には斜格子目文が地文とは別の形で入れられる。口縁端部には素麺貼りに使用する粘土紐2条分を貼付して無文面を形成し、左側に2条の結節浮線文が垂下していく。色調は灰褐色を呈し、胎土には僅かな微砂粒が見られるだけである。所産時期は前期後半の朝日下層式に当てられる。139は調査区中央部、O46グリッドから出土した深鉢口縁部で、口縁端部に貼付文が巡り、縄文施文の口縁帯とは段が形成されるが、縄文も転がされている。淡灰褐色を呈し、胎土には微砂粒の混和が一定量見られる。半裁竹管を使用しない状況や良好な胎土の在り方から中期中葉段階かと推定される。140は調査区南部のN64グリッドの山路覆土から検出した口縁部片である。幅の広い半隆起線文を平行に巡らせ、その上に爪形文が施されている。淡茶褐色を呈し、胎土には多量の微砂粒が混和されているが、焼成は良好である。中期前半段階の所産が想定される。

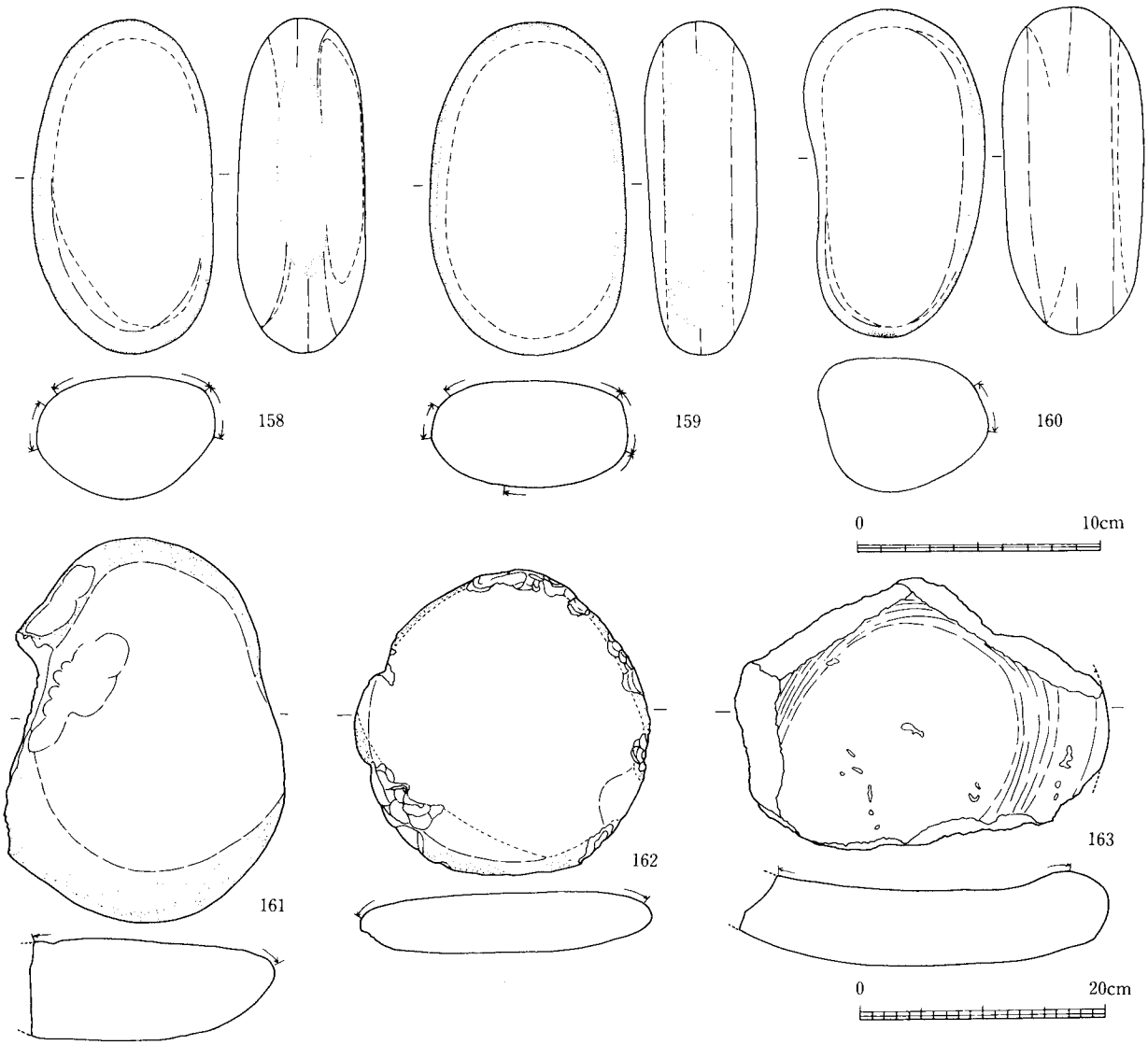
141～144まではH54グリッドの柱穴から出土したもので、141～143は同一個体片と見なされる。口縁部は内屈する形で成形され、内面側は肥厚して段を形成し、143で見れるように口唇部に半円状の突起が付される深鉢型土器で、全面に縄文が施文される。色調は若干の煤が付着する暗茶褐色を呈し、胎土には多量の微砂粒が混和され、焼成は並である。144は縄文施文の体部片で、撚り大きな縄文が施されている。器表面全体に煤の付着が顕著で、胎土、内面の状態などは先の口縁部片に類似していると言える。141は口唇部突起の在り方から、中期中葉の上山田式期の所産に位置付けられる。

145、146は調査区の東側、傾斜変換線上に近い平坦面のT46グリッドで検出した一括土器である（図版）。底部は地山面に接っして立ち、その上に口縁部片が載るという出土状況であったが、掘り込みの状況や体部片の出土は認め難いものの据え置かれたものと考えられる。145は口径43cmに復元される外展して立ち上がる平口縁の深鉢で、平行沈線で区画された口縁文様帯に台形の小区画を縦に配置し、蛇行文が接続した形で施文されている。口縁帯は強い撫でに依って素文に整えられ、口唇は面を付けて角の立つ成形である。底部は底径14cmを測るもので、僅かに窪み底の成形となっている。網代圧痕が認められるが、撫でに依る調整が施され明瞭には把握できない。体部片の一部には縦縄文が微かに見られる箇所がある。色調は灰黄褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が定量的に見られ、焼成は良好である。深鉢は肩の張らない体部をなす器形が推定される。文様や器形の在り方から能登・富山地域での後期前葉の前田式土器に比定できるが、南加賀地域での該期の編年が、遺跡、資料の絶対的不足から明瞭ではなく流動的側面を持つ時期である。

147は調査区の北西端、K55グリッドから出土した須恵器の底部片である。底径9cmに復元できる中型の瓶器種に想定される。淡青灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

148は調査区の北部、N64グリッドの山路覆土から出土した土師質土器で、口径9cmに復元される。口縁端部は微かに外に開き、全体的には厚手の成形をなしていると言える。口縁端部内外面には灯心油痕が厚く付着しているのが見られる。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には濃茶褐色をなす焼土粒が少量混和されていて、焼成は良好である。

石器　磨製石斧　149は基部と刃部の一部が欠損している磨製石斧で、刃部は直刃ではなく中央が突出する形での半円状をなしていたと判断できる両刃成形である。断面形は中膨らみの成形で、側面と体部面との境は丸味を



第62図　遺構外出土遺物実測図（2）（1/3・1/6）

付けた形である。

打製石斧　3点の出土あり、共に完形品での出土である。150は体部の厚みがある成形で、基部では表裏面双方からの調整がなされるものの刃部側での調整は雑であり、刃部としての鋭さに欠ける在り方を示している。刃部での磨耗痕は明瞭には捉えられない。151は基部の一部が欠損したような状態であるものの製作時点での欠損と推定した。刃部が基部に比較して広くなる撥型をなし、側縁および刃部においては表裏からの打撃調整がなされるが、基部については成型時のままとなり二次的調整は行わなかったと思われる。刃部での磨耗痕は判然とは捉えきれない。152は調査区の北方に位置する丘陵上での試掘調査溝の東側で検出した単独遺物である。基部が欠損しているようにも見えるが小型の完形品と見られ、体部の中央部に括れを施した撥型成形である。刃部は湾曲した丸刃で、基部側に厚みのある器形をなし、括れ部の側縁が角の取れた状況を示し、基部近くでもう一段の括れが成形されるのが特徴的である。

打欠石錘　153は河原礫の両端を両面から打ち欠き、紐掛けを作り出した通有の打欠石錘の完形品である。

磨石類　154は表面に複数の浅い窪みが残り、表裏面に平滑な面の見られる完形品である。側面での敲打痕は微かだが認められる。155は片面のみが平滑な面を付け、側縁部に敲打による粗い面が認められる完形品である。156は片面での磨痕が認められるもので、裏面や側面においては使用痕が明確には把握できない。157は表裏面が

第３表　庄が屋敷Ａ遺跡出土石器一覧表

番号	名　称	石　　質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(g)	遺存状態	出土地点	備　考
6	石皿	白色凝灰岩	250	210	60	4740	完形	２号住居址	
22	打欠石錘	安山岩	50	38	15	48	完形	３号住居址	
24	磨石	細粒砂岩	79	79	39	332	完形	〃	
25	磨石	中粒砂岩	167	73	50	960	完形	〃	
26	台石	角閃石安山岩	390	140	96	9810	一部欠	〃	
27	礫剥片	緑色凝灰岩	112	79	25	246		〃	
28	礫剥片	珪化白色凝灰岩	114	70	18	106		〃	
29	礫剥片	同上	72	58	18	76		〃	
30	石鏃	輝石安山岩	30	22	7	5.57	完形	〃	
31	不明石器	凝灰岩	42	32	6	12.4	完形	〃	
39	磨石	細粒砂岩	73	50	31	168	完形	５号住居址	
40	磨石	中粒砂岩	86	79	42	420	完形	〃	
41	磨石	中粒砂岩	101	91	54	760	完形	〃	
42	磨石	粗粒砂岩	100	96	48	680	完形	〃	
43	磨石	細粒砂岩	106	54	41	377	一部欠損	〃	
44	磨石	細粒砂岩	52	59	41	188	残欠	〃	
45	礫剥片	安山岩	92	83	20	222		〃	
46	石鏃	輝石安山岩	23	15	5	1.83	一部欠	〃、No.4	
47	磨石	中粒砂岩	97	91	49	620	完形	７号住居址	
48	礫剥片	珪化白色凝灰石	96	80	21	152		〃	
49	礫剥片	珪化白色凝灰石	43	79	11	40		〃	
50	石核	黒色頁岩	160	77	48	720		〃	
51	石核	黒色頁岩	139	85	47	740		〃	
60	磨石	火山礫凝灰岩	94	91	52	700	完形	８号住居址	
61	磨石	中粒砂岩（手取統）	175	80	44	950	完形	〃	
62	磨石	中粒砂岩	92	63	40	350	完形	〃	
63	石鏃	輝石安山岩	19	14	4	0.94	完形	〃	
64	石鏃	輝石安山岩	21	14	3	1.14	完形	〃	
65	石鏃	緑色凝灰岩	22	11	11	0.86	一部欠	〃	
66	石鏃	輝石安山岩	21	13	6	1.4	完形	〃	
67	石鏃	輝石安山岩	27	18	5	2.55	完形	〃	
68	石鏃	輝石安山岩	28	20	7	2.94	完形	〃	
69	石鏃	輝石安山岩	28	19	5	2.49	完形	〃	
70	石鏃	輝石安山岩	14	13	3	0.76	完形	〃	南土坑
71	石鏃	輝石安山岩	22	16	4	0.96	完形	〃	南土坑
72	石鏃	輝石安山岩	24	18	3	1.24	完形	〃	南土坑
73	石鏃	輝石安山岩	32	18	4	1.08	完形	〃	南土坑
74	石鏃	輝石安山岩	27	15	3	1.31	半欠	〃	南土坑
75	石鏃	輝石安山岩	29	16	4	1.8	完形	〃	南土坑
76	石鏃	輝石安山岩	31	20	6	4.07	完形	〃	南土坑
77	石鏃	輝石安山岩	33	22	7	4.68	完形	〃	南土坑
89	磨石	安山岩（手取統）	96	77	52	432	完形	10号住居址	
90	磨石	安山岩	113	104	50	790	完形	〃	
91	磨製石斧	珪化凝灰岩	111	59	27	330	刃部欠	〃	
92	石皿	細粒砂岩	260	230	58	5160	完形	〃	
93	石鏃	輝石安山岩	24	12	2	0.76	完形	〃	
107	磨石	中粒砂岩	104	86	51	660	完形	11号住居址	
108	磨石	細粒砂岩	98	87	51	598	完形	〃	
109	礫剥片	珪化白色凝灰岩	99	125	23	296		〃	
110	礫剥片	珪化白色凝灰岩	66	47	10	36		〃	
111	礫剥片	珪化白色凝灰岩	68	40	14	40		〃	
112	礫剥片	珪化白色凝灰石	76	52	11	44		〃	
113	礫剥片	珪化白色凝灰石	56	41	9	20		〃	

番号	名　称	石　　質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(g)	遺存状態	出土地点	備　考
114	礫剥片	安山岩	50	34	7	14		11号住居址	
117	礫剥片	安山岩	60	55	11	42		12号住居址	
118	礫剥片	安山岩	47	67	16	60		〃	
119	礫剥片	珪化白色凝灰岩	54	56	9	30		〃	
120	礫剥片	石英安山岩質凝灰岩	65	48	8	26		〃	
121	礫剥片	珪化白色凝灰岩	67	55	18	56		〃	
122	礫剥片	珪化白色凝灰岩	65	53	11	40		〃	
123	礫剥片	珪化白色凝灰岩	72	55	9	30		〃	
124	石鏃	輝石安山岩	16	13	2	0.6	完形	〃	
125	石鏃	輝石安山岩	26	14	5	2.13	完形	〃	
126	石鏃	輝石安山岩	20	16	4	1.49	完形	〃	
131	敲打石	アルコーズ砂岩(手取統)	100	50	38	300	完形	13号住居址	
132	石皿	中粒砂岩	210	80	59	1320	残欠	〃	
133	石皿	輝石角閃石安山岩	270	230	80	7180	完形	〃	
134	剥片石器	泥岩	46	41	10	15.6		〃	
135	剥片石器	泥岩	25	16	5	1.52		〃	
136	石鏃	輝石安山岩	25	16	5	1.81	完形	〃	
149	磨製石斧	緑色凝灰岩	126	68	25	406	基部欠	T49	
150	打製石斧	凝灰岩	125	69	32	304	完形	M49	山路
151	打製石斧	緑色凝灰岩	108	56	17	110	完形	W52	
152	打製石斧	緑色凝灰岩	91	56	14	122	完形	試掘溝東溝	
153	打欠石錘	石英安山岩	73	55	21	126	完形	R35	
154	磨石	中粒砂岩	94	78	45	470	完形	L56	山路
155	磨石	火山礫凝灰岩	91	81	50	558	完形	M50	山路
156	磨石	中粒砂岩	106	83	57	700	一部欠	L56	山路
157	磨石	角閃石安山岩	160	75	56	1010	完形	M50	山路
158	磨石	火山礫凝灰岩	139	74	52	780	完形	M50	山路
159	磨石	粗粒砂岩	137	82	44	780	完形	M50	山路
160	磨石	粗粒砂岩	136	73	55	810	完形	M50	山路
161	石皿	輝石角閃石安山岩（白山系）	317	235	80	9210	一部欠	O46	
162	石皿	輝石角閃石安山岩（白山系）	256	245	43	4200	完形	M52	山路
163	石皿	輝石角閃石安山岩（白山系）	305	225	61	6480	一部欠	SK111	

捻れたような形で面が広がるもので、表裏面ともに平滑な面が遺存し、片側の側縁部は面が形成されるが、他方の側面は敲打痕のはじけとなる完形品である。158は断面形が三角形となる楕円形の石材の側面を主に使用した磨石類で、面の広がる部分での磨痕は弱いものである。両端部での敲打痕は確認できない。159は片側側面に使用が片寄る形での磨耗が進行した状況を示し、当初の楕円形が損なわれる状態となっている。表裏面の磨耗痕は明瞭ではない。160は片側側面に面取りを施したような磨痕が見られる完形品である。全体での断面形は三角形を呈し、狭くなった部分での使用となっている。

石皿　161は平盤な河原礫を使用した石皿で、一部を欠損している。全面を使用するのではなく図示した右側部分での磨痕が顕著に認められる。162は端部での欠損は見られるが、ほぼ全形を保っている平板な石皿である。石材の表面は全体に結晶部分が欠落して細かな抜け穴が広がる状態であるが、片面の全面を使用した磨痕が認められる。163は縁の部分を大きく欠損している石皿で、縁部分を成形して作りだした例は本遺跡群の中では少数例である。皿状になった部分での磨痕の範囲は楕円形をなしており、全体形そのものが楕円形であったものと推定される。

剥片　輝石安山岩の剥片類は、3点の石核を含む13点の出土あり、総重量654gを測るが、住居址内出土量に比較して少ない。

5　まとめ

(1) 出土土器の編年的位置

本遺跡は２ヶ年で約11,800㎡という広範囲の発掘調査を実施しながら、14棟の竪穴式住居址の配置を確認したに止まるのは、本遺跡の集落的性格の一面を映していると判断される。小さな谷地形を挟んで東側に、時期を並行して展開する庄が屋敷Ｃ遺跡の56棟にもなる集落の周辺部での在り方と断定的に規定するには、散在的な配置状況を説明しきれないとの恐れがある。ここでは出土土器の編年的位置付けを見ながら、集落の変化と内容を試行していきたい。

本遺跡から出土した遺物量は、14棟の住居址が検出された集落址としても、時期的に数型式に渡るとは言え、少量であるとの印象は拭いきれない。調査区域外の急斜面に廃棄場所が定められていた可能性は否定しきれないものの、住居址周辺部での遺物の散布が殆ど見あたらない出土状況から、量的な在り方は相対的なものではなく絶対的に遺物量が少なかったと思われる。表土除去は重機械を導入しての作業である事から、包含層の見落とし等の危惧は皆無とは断言できないとも言えるが、調査員が立ち会った上での表土除去作業であり、広範囲に渡っての遺物の出土を見過ごすとは考え難いと思われる。

本遺跡での最も古い時期の資料は、平成４年度に検出した第１号住居址覆土からの表裏縄文施文の土器である（註１）。丘陵を一段下がった庄が屋敷Ｂ遺跡で矢柄研磨器の出土が見られる事から、草創期での所産も視野に置けるものの、現在までの県下での出土遺跡は早期末から前期初頭段階の小松市柴山潟底貝塚（註２）、穴水町甲・小寺遺跡（註３）などからのものが知られている事や、第１号住居址土坑覆土から出土した羽状縄文施文の波状口縁深鉢の在り方から前期初頭、佐波式段階での位置付けが妥当と思われる。住居址の所産時期を示すものであり、庄が屋敷遺跡群の中で単独の形であれ定住化が認められる事は注目できる。表裏条痕調整を施した資料は、庄が屋敷Ｂ遺跡でも確認できる。また、本遺跡の南地区においては前期末葉の朝日下層式期の遺物がまとまった状態で出土している点は、中期前葉に集団的に進出する前段として注意しなければならない。

前期中葉段階の資料は本遺跡では認められないが、東側の谷を越えて平行位置にある宮竹うっしょやまＡ遺跡（平成６年度調査）や灯台笹裏野Ａ遺跡（平成８年度調査）などで散発的な状態での出土が見られるだけとなり、末葉の朝日下層式段階で能美丘陵東遺跡群の各遺跡で散布する状況へと変化していく。本遺跡では、第11号住居址、M38グリッドで１点づつの出土が見られる。

中期初頭の新保式土器は横位無文帯手法の成立で前後に分離されるが、新保１式土器に確定して位置付け出来る資料を上げることはできず、第11号住居址（103）の深鉢が縦位半隆起線文の間隔が開いている事から該期への可能性も残すが、口縁帯の隆帯が見られず、体部との境に並行半隆起線文が多条化している点や胴部の垂下文が口縁帯と連動していないことからの判断であるが、地域的な受容形態であることも充分に可能視出来る余地が認められるが、現在的には先の条件から新保２式土器に止めておきたい。

新保２式土器は第３・８・12・14号住居址からの出土が見られ、本遺跡に群として定住が図られた時期を示していると考えられる。第３号住居址出土の平口縁深鉢（７～13）は、横位無文帯が縄文施文のままとするが縦方向に走る隆帯と並行半隆起線文の施文から判断されたものであるが、無文帯部を縄文施文で埋める形までを新保２式に含めるかは、今後に検討を残す課題でもある。第８号住居址の復元できた深鉢（59）は、僅かに外反する口縁部や底部近くまで胴径が張っている器形、無文帯や体部の施文手法などに能登地域との類似性を認めるのは容易である。違和感が残るのは口縁端部に巡らされた隆帯で、小さな波状口縁となっている事であるが、新崎式土器への移行を示す在り方とも捉えられる。第12号住居址（115）の復元できた深鉢でも、外傾度の強い口縁部と内面でようやく確認できるキャリパー状口縁の成形などに写し取る際での省略を認めることが出来る。第14号住居址の資料は口縁部片だけであるが、口縁帯に残る「の」字状突起の遺存状態から判断したものである。新保２式での特徴的な施文である軌軸文（註４）が全く姿を見せない点は時期的な差異を示すとも考えられるが、金沢市大桑中平遺跡の六角形文の在り方（註５）で見られるような伝播による変異と省略が働いているとも見られ、時

間の流れと受容主体の受けとめ方を分別していくのは微妙な問題を含んでいるものと思われる。

新崎式土器は蓮華文の成立と無文帯への刻み目文の導入を指標として分離されているが、渦巻文の萌芽を捉えて３式までに細分する動きも見られる（註６）。資料的な制約から本遺跡では問題を提起するまでには至らず、従来の１・２式の分離で編年を考えた。新崎１式は、第８号住居址の深鉢口縁（52）の精微な蓮華文の施文で考えられるだけと、極めて限定された状況となっている。第２号住居址での浅鉢器形と推定される底部片（5）は、縄文地文に半隆起線文が垂下している在り方から考えに含めたものである。ともに明確な状態を示すものではなく、住居址の重複状況や配置状態からの前後関係を含み込んだ形で捉えたものである。庄が屋敷Ａ遺跡での特殊な在り方とも思われる。

新崎２式土器と想定したのは、第５号住居址の床面で検出された深鉢で（32）、口唇に小突起を付し幅広になる口縁内面が特徴的で、施文は蓮華文が複数段に施される形となる。同住居址の底部片（37）では粗雑な体部施文と胴下部が膨らむという新崎式土器特有の成形が認められる。第４号住居址の縄文施文の深鉢（23）を新崎式に含めて考えるかは躊躇されるが、外折して短く伸びる縄文深鉢が、入り字状口縁の系譜からのものであるか、別系統の深鉢であるかは今後の課題であり、壁を接して構築されている第２・４・11号住居址群の中での流れとして当てたものであり、土器そのものでの型式変化を後づけるものではない。それは、住居址が併存した可能性を考慮しない前提条件であり、集落構造の把握の視点を規定した形となる。

上山田式期の資料は第11号住居址の小型深鉢（104）を代表例として上げられる。体部文様帯を分割し、斜め方向の隆帯、縦の文様帯を主文様として区画し、処理的な格子目文で埋める構成を取る。矢羽状文、三角形彫去文などが加わる事から、施文的にも新崎式との変化が見て取れる。第10号住居址の深鉢（88）においては横方向に硬直化した施文構成を取り、楔形刻み目文、格子目文が残部処理的に施文されている中で、三角形彫去文が口縁近くに配置されている事から判断される。浅鉢器形では体部が無文化の傾向を強め、口唇部に玉抱き三叉状文等が配される施文となる。また、器形的には底部から直線的に伸びる形から、体部の膨らみが強い丸味を帯びる流れが想定される。上山田式土器は前後に分離され、後継型式の古府式土器も分割されているが、本遺跡においては、資料的制約から分離した形での提示は出来なかった。

本遺跡での資料は第63図で示したような、新保式、新崎式、上山田式土器型式という流れで比定され、さらに、新保２式、新崎２式という細分まで行い得たと言えるが、明確な資料が得られなかった型式間の遺物の少なさが問題として浮上してくるものと考えている。

土器編年と遺物出土状況及び土坑の配置などを考えて、住居址の所産時期を第64図の様に変遷を考えた。遺物の出土が見られなかった第６・７号住居址については図の中からは除外しているが、各時期数棟単位である事から住居址群全体での変化に大きく変更するものではないと判断される。

（2）石器

石器は通例の構成をなすものであるが、石皿や磨石類が量的に卓越する状況が認められ、一定程度集落の経済的基盤を反映している可能性が高いと思われる。装飾品や呪術具などの特異な資料は見られないが、第11号住居址等から出土している河原礫剥片の用途については、これまでの集落遺跡で取り上げられる事もなく、用途を含めた位置付けは不鮮明であったが、庄が屋敷遺跡群での出土状況からひとつの問題提起を行っておきたい。自然面を残す不定楕円形の剥片は出土地点の周辺で母岩となる石核や成形する際に生じたであろう石屑が検出しがたい事から、手取川の河原で打ち欠き作業を行った後に持ち込んだものと想定できる。剥片の縁での特定の形状をなそうとする細部調整や使用痕跡が認めがたいという特徴が上げられ、手に余るほどの大きさをもつものが少なく、円盤状をなすという形態での共通性が指摘でき、剥片石器であるが完形品として把握できる。扁平である事を除いて明快な平面形状が把握しにくい事から、柄を取り付けたり手に持って得物として使用したものではなく、投げ弾のように投擲具としての性格が想定される。扁平である円盤形は球状形態よりも空気抵抗が減少する事から、少ない力でより遠くにまで到達させる事ができると考えられる。そして、庄が屋敷Ｃ遺跡北端部での住居址

から数10点とまとまる形での出土状況は、狩猟に際し量を確保した結果を示すものと考えられ、狩猟を行う季節的な問題が集落の季節的定住を見ていく上でのひとつの手がかりと評価していきたい。狩猟具としては弓や槍等が一般的であるものの、対象とした獲物に対し狩猟法を変えるのは十分に考えねばならない事で、捩り編みの錘具や網漁の錘具に使われたとされる打欠石錘の用途についても、丘陵内で散発的に出土する状況から森林内での網狩猟に使われた可能性も視野に入れるべきではと考えている。

(3) 住居址の構造

本遺跡で検出できた14棟の住居址平面プランは、第１号住居址の不整楕円形プランから円形に近い第13号住居址までの形状が認められるが、全体的には長楕円形が卓越していると見られる。編年的な流れでは新保式期の長楕円形プラン、大型住居址が上山田式期の小型化した円形プランへと変化していると言えるが、上山田式期の第11号住居址のように規模的には前の時期と変化が認めがたい事例があり、傾向としての在り方では小型化していくと考えられるが例外的な住居址も存在すると言え、居住形態に深く関わる問題と言える。

平面規模では新保２式期から新崎２式期までの時期では、第８号住居址が推定で約800cmと例外的な大きさを持ち、第４号住居址が430cmと小型に属するものが見られるが、同時期幅に入る他の住居址では550～610cmまでの長径であり、その差異は比較的小さいと思われる。長径600cm前後での規模の平均値が得られるが、同時期に位置付けられる庄が屋敷Ｄ遺跡（註７）の４棟の住居址の内、新崎１式期の第４号住居址が790cm、新崎２式期の第２号住居址が882cmの規模を有し、本遺跡に比較して大型化していると言える。また、小松市念仏林遺跡（註８）の新崎２式から上山田式期に位置付けられる３棟の住居址の長軸規模は840～1090cmであり、800cmを越えるのが該期の平均値ではないかと思われる。住居の規模は居住人員の多少を直接的に反映しているとは確定こそ出来ないが、極めて蓋然性は高いと思われ、本遺跡で一回り規模が小型化するのは、家族規模の少なさを映している可能性が高いと思われる。上山田式期に含めた第９～11号住居址は、平面プランが円形に近い楕円形で、長軸規模が400～480cmと前段階に比較し、さらに小型化しているのが認められる。平成７・８年度に調査を実施した宮竹うっしょやまＢ遺跡・宮竹あつ坂遺跡で検出した古府式期の集落址でも、長楕円形の大型住居址に混じって円形に近づいた小型住居址の配置が確認され、大小が混在した形で推移していくものと見て取れ、また、長径で800cmを越える大型住居の展開は薄れていくのではと思われる。居住人数の減少を引き起こした要因は、優れて中期文化の変化に対応していると思われる。

住居址の構造では、主軸に載せた配置で地床炉、土坑が配置されるのが通例で、庄が屋敷Ｄ遺跡でも同様の配置形態が取られている。地床炉は住居址の主軸方向に平行し長い楕円形をなすのが一般形であるが、念仏林遺跡

第４表　庄が屋敷Ａ遺跡住居址一覧表

番号	立地形状	平　面　形	長さ	幅	炉	土坑	時　　期
1	頂上部（直行）	不整楕円形	1050	890	無	有り	佐波式期？
2	緩斜面（直行）	長楕円形	557	443	地床炉	有り	新崎１式期
3	緩斜面（平行）	楕円形	575	315	地床炉	有り	新保２式期
4	緩斜面（直行）	不整楕円形	430	365	地床炉	有り	新崎２式期
5	緩斜面（平行）	長楕円形	610	450	地床炉	有り	新崎２式期
6	斜面（直行）	楕円形	400	200	不明	有り	不明
7	斜面（平行）	楕円形	350	300	地床炉	有り	不明
8	緩斜面（直行）	楕円形	800	500	地床炉	有り	新保２式期他
9	斜面（直行）	楕円形	480	400	地床炉	無し	上山田式期
10	斜面（直行）	楕円形	400	350	地床炉	無し	上山田式期
11	緩斜面（直行）	楕円形	468	390	地床炉	有り	上山田式期
12	頂上部（平行）	楕円形	550	400	地床炉	有り	新保２式期
13	斜面（平行）	楕円形	265	255	不明	無し	上山田式期
14	頂上部（直行）	楕円形	280	238	地床炉	無し	新保２式期

では住居址外に焼土面が検出されているのが特徴的である。石囲炉の導入は上山田式段階での導入が推測されているが、能美丘陵地域では古府式期段階まで遅れるのではないかと思われる。ちなみに、56棟が検出された庄が屋敷Ｄ遺跡での石囲炉跡は皆無であった。また、６棟の住居址と２基の炉址が出土している辰口町茣生遺跡では、２基の石囲炉が見られるものの他は地床炉であり、第６号住居址の所産時期を上山田式期としているものの下る可能性が高く、共に古府式段階に位置付けられるようだ（註９）。

主柱穴の配置においても、主軸線を間にして線対象に検出されるのが新保式期から新崎式期まで通例的に見られる形である。しかし、後出する上山田式期からは規模の縮小に連動して線対象の配置が崩れていく傾向が指摘できる。特に円形に近く小型化した住居址に土坑が配置されない事例に目立つと言える。また、壁溝が掘り込まれずに、壁の立ち上がりが緩い曲面を形成するのも各時期を通して通例的に見られ、住居の上部構造に関しての手がかりは得難い形となっている。

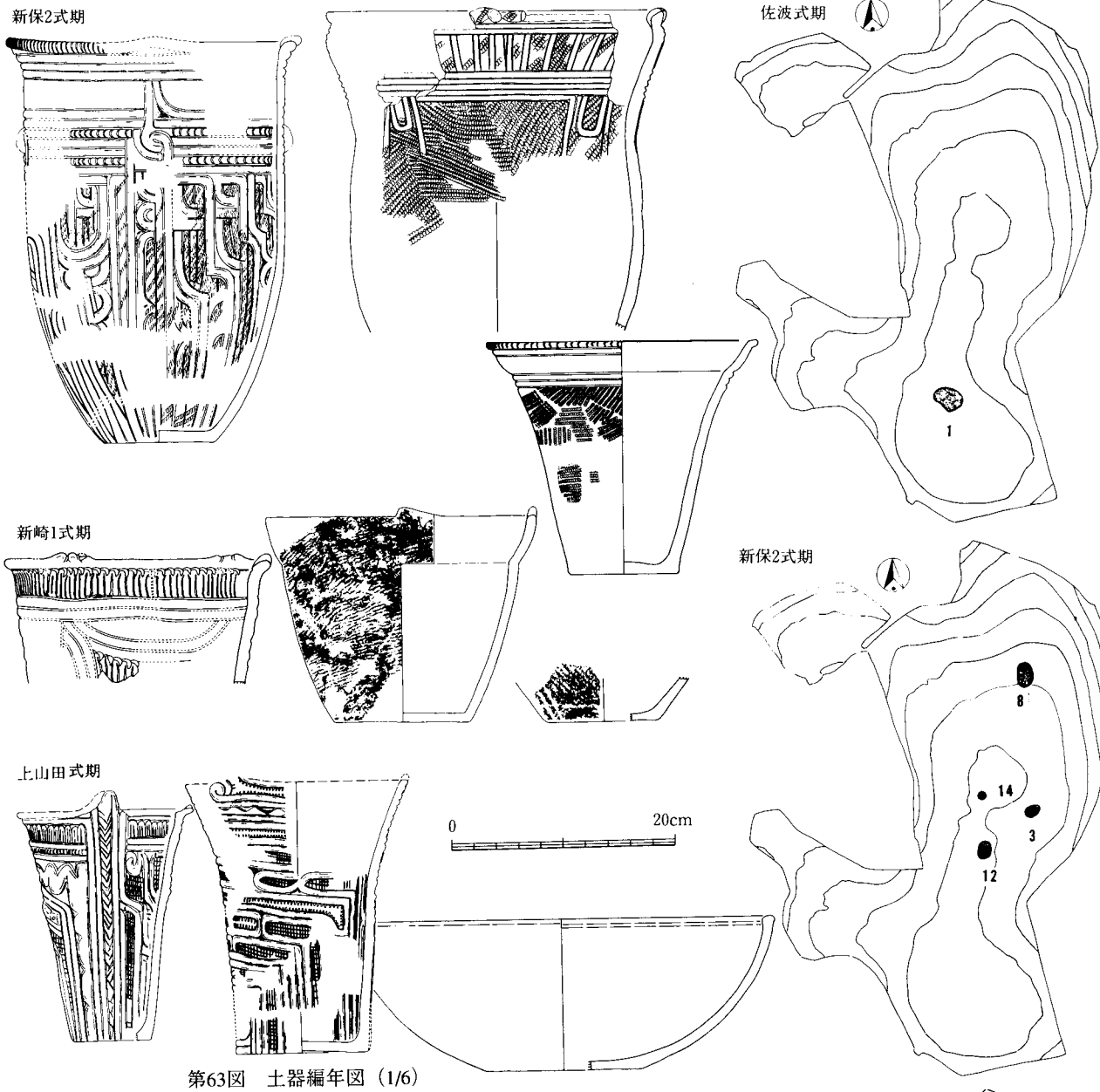
本遺跡の住居址だけでなく、庄が屋敷Ｃ・Ｄ遺跡、念仏林遺跡、茣生遺跡等の住居址でも通例的に検出されるのは、住居址の長軸に載せて構築される土坑である。住居址の中では最も深く掘り込まれる事から土器、石器などの遺物を包含している事例が多くあるものの利用状態を確定するまでの資料は見られず貯蔵穴としての捉え方が一般的である。本遺跡での14棟の住居址の内、設置されているのは10棟に上り、前期初頭の佐波式期から中期の上山田式期までの長い時期幅を通しての定まった位置での在り方は、該期において住居の中で炉の設置とともに必要不可欠な設備である事を示していると考えられる。

土坑の平面プランは楕円ないしは円形を呈し、径100cm、深さ40cm前後になるのが一般的な規模で、住居址床面から二段掘りになる事例が比較的多く見られる。断面形は内底面が平坦に整えられる例は少なく、底部に向けて径を狭めて井の底のような形状をなすものが多いと言える。二段掘りになるのは板材などで蓋を置く為であろうと指摘されている。本遺跡の第２・５号住居址内土坑には、土坑に接続する形で溝が壁側に延ばされているのが検出された。溝の始まる壁は標高の高い側に当たり、降雨の際や地中から滲み出してくる水を受けて土坑へと導いた工夫と考えられ、食物などを一定の温度で保存する為の施設との捉え方に疑問が持たれる。水が入り込んでも支障のないものの貯蔵との見方も取りうるが、関東地域などの中期集落で通例的に見られる貯蔵穴は、入口部分が狭く底面を整え広くするフラスコ状の断面形態を取るのが一般的であり、地表との空気の流れを少なくする効果を意図して温度を一定に保つ工夫と思われ、当地域での住居址内土坑の掘り方を広くする構造とは大きく異なることが指摘される。底面を狭くするのは貯蔵品が多い場合には不都合であると言え、固形物ではなく液体、つまり、水そのものを貯蔵する為の施設と考えたい。壁から滲み出してくる水を受けるに支障はなく、底面を狭くするのは上澄みを汲み出す際に沈殿した不純物が撒き上がり難くする工夫と思われる。二段掘りの構造は、既述したように蓋をする為のものと思われる。同一住居址で土坑が隣接して掘り込まれる例が、第８号住居址、庄が屋敷Ｃ遺跡第１号住居址などで検出されているのは、住居を改築する際に水の為に新鮮な壁面と適度な規模を必要とした結果と考えられ、固形物の貯蔵の為であれば拡張すれば良いのであり、新たに掘り直す必然性は薄いと思われる。県下で検出されている事例を見れば、丘陵上を選地している庄が屋敷遺跡群、茣生遺跡、念仏林遺跡などでの検出例が多い事が指摘できる。

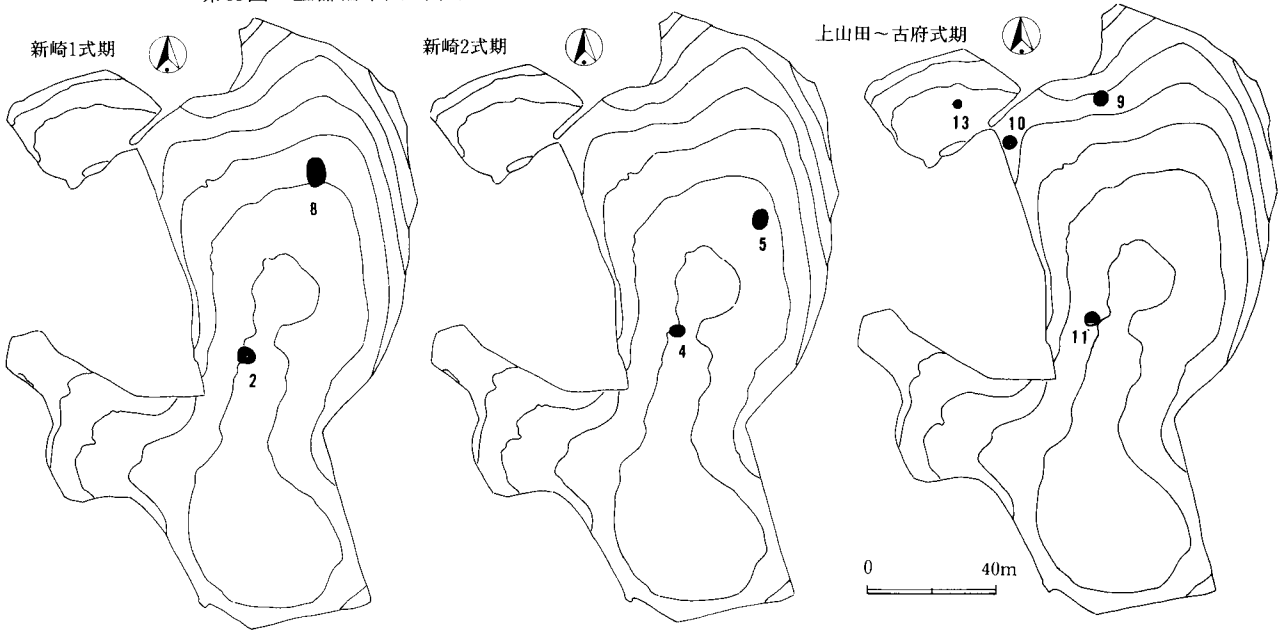
水の貯蔵と性格を規定すれば、住居内での男女の占める空間が自ずと定まるように思われるが、第８・12号住居址での土坑底面、壁面には輝石安山岩の剥片を多量に検出される事例が、別の視点を示唆していると思われる。剥片の出土から母岩を加熱して水に漬ける方法で剥片を製作した状況を示すものと推測しているが、役割分担からは外れた形態とも推測できる。いずれにしろ、住居址内土坑は日常的な水汲みが必要と見られる事から、住居の入口、奥などの位置付けが規制されるのではと想定され、併せて今後の課題として取り上げていきたい。

(4) 集落の変遷

本遺跡での土器編年から第64図集落変遷図で示したような形で、各住居址を型式ごとに当てはめてみた。土器型式が間断なく連続する事はなく、型式ごとに土器出土に濃淡が見られるが、継続的変化を辿ると仮定した。時



第63図　土器編年図（1/6）



第64図　集落編遷図

期的に判断材料が得られなかった第6・7号住居址は割愛したが、時期幅のある集落である事から大勢への影響は少ないと考えている。

最初に丘陵上に住居址を構築したのは前期前葉の佐波式期の段階で、単独での進出であるものの長径10mを越える大型住居を頂上部に構築している。大型住居址に見合う人員が居住していたと考えられるが、それらに沿うにだけの遺物が出土しないと言う事で、果たしてどれだけの期間、居住していたのか疑問が持たれる出土状況と言える。

前期前葉から中葉、後葉にかけては住居址の検出は見られなかったが、平成4年度の南地区での調査で、末葉の朝日下層式土器の出土が比較的まとまった状態で見られる事から、植物採集や短期間での狩猟の為等に季節的に限定が付される形で丘陵内に入り込んだ結果と考えられる。続く中期前葉の新保1式期には遺物の出土が認めがたい事から居住は行われなかったと見られるものの、現在的には南加賀地域での典型的な器形と施文を持つ新保1式土器は未発見と考えられいる型式であり、福井県で出土している該期の土器群が（註10）、能登地域とは施文構成や器形の成形などに地域差が認められる事から、南加賀地域での把握の視点に再考が求められているとも言える。新保2式に比定した第11号住居址出土の深鉢（103）等が、候補として上げられるのであろうか。

新保2式期には丘陵北側の尾根筋に沿う配置で、第8・14・3・12号住居址の4棟が展開すると判断した。最大規模としての4棟であり、同時に居住していた可能性は薄いのではなかろうか。先の新保1式の把握によって大きく左右されると思われる。長楕円形の住居址での同時性を推定した第8・12号住居址の間隔は南北方向で約60mであり、とても、集落とは言えない配置状況である。それは、小谷を越えた庄が屋敷C遺跡の縁辺部での在り方との理解が必要・十分条件として把握しなければならないと言える。

新崎1式期での土器の出土が希薄であるのは新保1式土器と類似した状況が胚胎している可能性が考えられ、南加賀地域でのさらなる幅広い編年的見直し作業が必要と見られるが、ここでは、新崎2式期から差し引いた形で住居址の配置を想定した。南北方向に距離を置いた第2・8号住居址の2棟である。

新崎2式期は南加賀地域でも類例の多く認められる時期で、その比定は比較的容易である。前時期と同様に南北に離れた第4・5号住居址の2棟が当てられる。これまでは住居址の平面プランは長楕円形をなし、住居内土坑の設置もなされて伝統的な平面形態が保持されていた段階と想定できる。

上山田式期以降では4棟が推定でき、やはり南北方向に大きく離れる。北側の住居址群はこれまでとは異なる占地状況を示しているのが、伝統的な配置状況が失われた結果と言え、継続的な設置が推定される第8号住居址系列とは別の家族が進出した事が想定される。平面プランにおいても長楕円形から円形プランに近づいて小型化し、住居内土坑の設置も行われなくなる。伝統的な居住形態が失われつつあるのは経済的基盤が変化し集落構成が流動化していく時期と見られ、古府Ⅱ式土器の南加賀での爆発的な展開が用意されつつある段階に当てられる。4棟を推定したが細かく時期設定を行えば半減以下になる可能性が高いと思われるが、いかにも資料が不足している。

本丘陵で長期に渡って継続し居住していたのは、壁が接するように構築されている中央地区の第2・4・8・11号住居址の4棟であり、前半段階で共存していたのは北側の第5・8号住居址群の、都合2群だけと位置付けられ、各型式ごとに1棟づつと言う配置を取ると考えた。本丘陵だけで一時期2棟前後との配置は集落規模を云々出来るレベルのものではなく、また、これまで幾度も但し書きが付くという事で述べてきた庄が屋敷C遺跡本体の集落構成に注目しなければならない。が、本遺跡での在り方が数量的に増加しただけの形が大集落との恐れは無きにしもあらず、とも思われ、円環を閉ざした形での庄が屋敷A遺跡ムラの形を問題として提起していきたい。県内で集落が2分される在り方での構成が想定できるのは、中期中葉の標識遺跡でもある宇ノ気町上山田貝塚である（註11）。丘陵の南北に分かれて貝塚が築かれ、北貝塚は下位が崩落している為に継続期間に疑問符が付加されるものの、南貝塚が後期前半まで継起的に土器型式が辿れるのに対し、中期前半段階での断絶が想定されるのである。つまり、それ以後はただひとつだけの集団での居住域として推移した可能性が考えられる。しかし、集団が家族単位であるのか数家族の集団であるのかの判断は難しいと言えるが、血縁的な結びつきが基本と思われる。

南加賀地域では小松市念仏林遺跡でほぼ集落全域で調査が実施され構成が把握されている（註12)。５棟の竪穴式住居址、10基の遺物集中区が検出され、出土土器は新崎２式から上山田式土器に比定される。新崎２式期には第１・３・Ｋ２号住居址の３棟が、上山田式期には第２・（Ｋ２）の２棟が上げられ、最終段階として古府式期のＫ２号住居址の１棟だけとなり、成立段階から暫時縮小していく傾向が見て取れる。また、庄が屋敷Ｄ遺跡でも新崎式から上山田式期の４棟の竪穴式住居址が検出されていて、２群構成を取り類似した盛衰を辿ると推定できる。本遺跡を含めて念仏林遺跡・庄が屋敷Ｄ遺跡の３遺跡は、新崎２式段階で長径600～1000cmの比較的大型の竪穴式住居を建て上げて居住を始め、住居の規模を縮小させる形で古府式段階へと移行していると考えられ、大家族的な居住形態から漸移的に減少している事を指すものと想像できる。各遺跡がいわゆる古府Ⅱ式段階にまで継続しない要因については軽々に判断はできないが、大家族集団での経済的基盤が崩壊し、個別家族単位での生活形態に移行していく流れが新たな地平として想定される。本遺跡群の平成８年度に調査を実施した灯台笹下遺跡、灯台笹ながげ遺跡では、古府Ⅱ式期の所産と見られる単独と２棟だけの住居址が検出され、限定された期間内での居住を考慮しても個別家族ごとの生活基盤を反映していると考えられ、中期においては該期が極めて大きな画期であると思われる。また、同時に実施した宮竹あつ坂遺跡では古府Ⅱ式期を盛期とする10数棟の集落址が検出され、従来からの集落址と孤立住居が併存している様相が可能視でき、親村・子村・分村などの固定的な視点での集落認識だけでなく、季節的移動を含んだ流動的側面での取り組みが必要と思われ、機械的な集落領域の分布においても条件を付さねばならないと考える。

本遺跡を含めて中期前半期の住居址群には重複関係は見られるものの、切り合う関係が極めて少ないという在り方が特色として指摘できる。集落を完掘したと言える庄が屋敷Ａ・Ｃ・Ｄ遺跡、念仏林遺跡での展開の在り方は、旧の竪穴の痕跡が総体として認識できる時期での構築が考えられ、集落内部での規制、同一地点への固執等と共に、旧の住居に使われている柱材等の再活用が意図された面が可能性として上げられるのではと思われる。それは、旧の住居址の平面形態を殆ど変えない形での再構築が事例として上げられる事にも現れていると言え、本遺跡の第８号住居址、念仏林遺跡のＫ３号住居址などで見られる。継続的な住居の在り方から耐久期間の問題、それを受けた形での土器型式の継続年数などが具体的な問題として視野に入れられるのではと想定でき、本遺跡での比較的単純な在り方は、逆の意味で好資料を提供していると考えている。また、別の視点では本遺跡が年間を通して定住されていたかは若干の疑問点が上げられる。竪穴式住居の存続期間を明瞭に区切る術を持たないが、各住居からの出土土器は深鉢大小器形の数個に浅鉢が加わるというのが一般的で、石器構成においてもセットがようやく組上がるという在り方は、4・5型式にもなる長期間の居住を示しているとは感じられない事である。また、埋葬施設と想定できる土坑は、楕円形の石が検出できた２基（SK111・113）と、疑問が残るが北側に集中する土坑群（SK102～105）を上げうるに止まる。庄が屋敷Ｄ遺跡でも数基、念仏林遺跡では確定できないという在り方は示唆的である。また、念仏林遺跡での住居址の特色として、５棟の住居址のうち炉址を確認で出来たのは１棟だけという検出状況は、平面プランの長軸に載せた土坑の掘削は炉の位置を影として意図している状況が認められ、焼土面が検出できないのは季節的な背景を示している可能性が考えられる。

本集落は新保式期から上山田式期にかけて、１型式２棟程度の住居址が季節的に限定して定住した集落と判断され、遺跡は結果として環状集落址となったと言える。大家族集団から個別家族へと基盤が変化していく時代の流れが、季節的な移動定住につれて醸成された時期と考えた。これらの想定は縄文時代中期の社会的・経済的根幹に触れる問題であり、本遺跡だけで推測できるとは言えない。それは、南加賀地域での中期編年の改革的な見直しを含めて、庄が屋敷遺跡群、能美丘陵地域、南加賀地域、北陸地域へと、個別から全体へ、全体から個別へと相互に普遍化できる形の中で捉えなければならない問題と思われ、ここでは、本遺跡だけでの遺構・遺物の総体からの考えを提示したもので、今後の叩き台となれば幸いである。

（註）

1　橋場和彦　1993「庄が屋敷Ａ遺跡」『能美丘陵東遺跡群　Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
2　四柳嘉章　1973「甲・小寺遺跡」穴水町文化財保護専門委員会
3　沼田啓太郎・上野与一・小村茂　1973「柴山潟底縄文貝塚の調査」小松市立博物館
4　米沢義光　1986「鹿島町徳前Ｃ遺跡（Ⅱ・Ⅲ）」石川県立埋蔵文化財センター
5　沼田啓太郎　1976「金沢市大桑町中平遺跡報告」『石川考古学研究会々誌　第19号』石川考古学研究会
6　加藤三千雄　1988「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観』小学館
7　滝川重徳・松山和彦　1993「庄が屋敷Ｄ遺跡」『能美丘陵東遺跡群　Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
8　樫田　誠・望月精司　1988「念仏林遺跡」小松市教育委員会
9　西野秀和　1978「莇生遺跡」辰口町教育委員会
10　西中遺跡発掘調査団　1982「西中遺跡－発掘調査略報一」福井県美山町教育委員会
11　高堀勝喜・平口哲夫・小島俊彰　1979「上山田貝塚」宇ノ気町教育委員会
12　松山和彦　1993「念仏林遺跡」石川県立埋蔵文化財センター

Ⅳ　大口小松原遺跡

1　地形

いしかわサイエンスパーク整備事業用地に含まれる丘陵地は、ほぼ中央部を南北に分ける深い谷によって東西で異なる地勢を形成し、性格の異なる遺跡群を立地させる。馬の背状の広い平坦地が広がる東地域の丘陵上には、旧石器時代のキャンプ地跡、縄文時代の集落跡、古代の焼土坑群、山林寺院跡が平坦面、緩斜面上に展開している。一方の西地域の狭い尾根が連なる丘陵は小さな谷を介在して独立性の強い在り方を示し、縄文時代の狩猟場跡、住居址群、古代の焼土坑群、中世の墓群、経塚群、山林寺院が、狭い尾根上、緩斜面上や谷地形を占地して構築されている。

大口小松原遺跡は西地域の南端部に位置し、最高所で標高135mの南北方向に長い平坦地を持つ丘陵上に占地する縄文時代と古代の複合遺跡である。丘陵の南側には大口集落から伸びる谷地形の平坦地が広がり、谷水に依存した水田耕作が行われていた。谷の大部分は盛土で造成されたが、大口集落側の水田は現在でも耕作が行われている。西側には平野部の宮竹集落に下る谷地形が入り込み、大口と平野部をつなぐ道路が谷に平行して設置されていた。谷と南の谷平地との境界には、平安時代後期に比定される大口窯跡群が展開していた。東側は深い鞍部をおいて若干標高の上がる長滝長尾遺跡の占地する丘陵と向き合い、南側は急傾斜して東西に延びる谷に落ち込む。急傾斜面の裾部には、改良窯の炭窯が見られた。

平坦面は平面楕円形を呈し、南北方向の長さ約120m、東西方向の幅約40mの規模を測り、北半部分に東西方向の谷が入り込む形となる。北西には狭い鞍部をおいて尾根筋が延び若干の平坦面を形成する。東西の両側面は平坦部分から徐々に高度を下げ、標高130m前後から急崖へと移行する。一方の南北方向の傾斜面は、緩傾斜面を持たずに急崖となって谷に落ち込む地勢で、南北方向が険しい丘陵である。頂上の平坦面に登るには、南北方向の急崖面を回り込み、南側の谷地形を利用するのが比較的容易な登坂路と考えられ、西側に隣接する長滝長尾遺跡へのルートも同様な迂回が必要であったと思われる。

2　調査経過

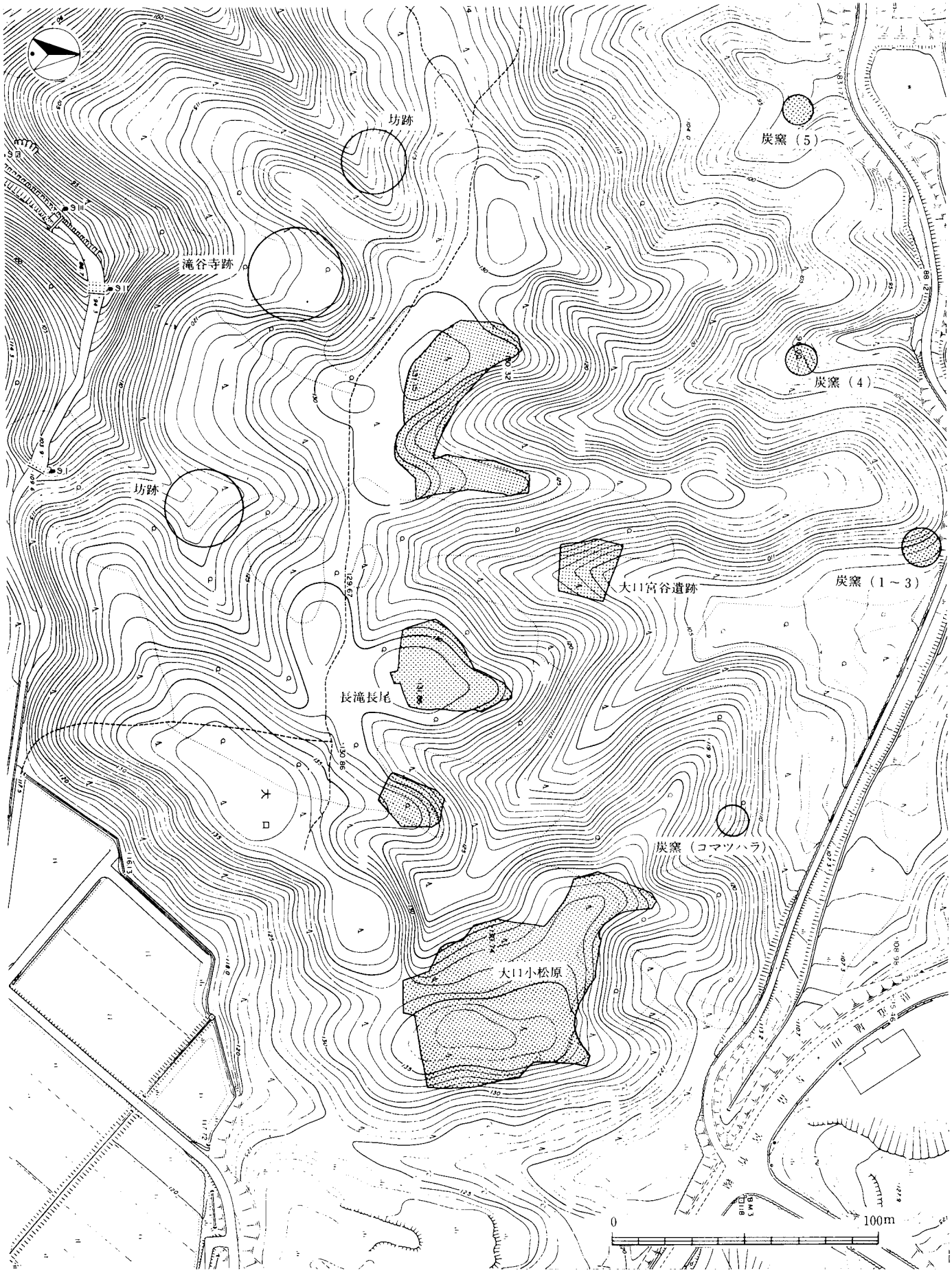
平成５年度の発掘調査は、４月当初には庄が屋敷Ａ・Ｃ遺跡および大口小松原遺跡の一部の調査を実施する計画で立案していた。４月からの各遺跡での現地調査は、順調に推移した。Ａ遺跡の調査範囲は広大であるものの包含層の堆積は認め難く、10棟を越える住居址が遺存していたものの遺構・遺物密度が希薄であった事などから、８月半ばには調査を終了する事ができた。また、Ｃ遺跡においても縄文時代中期初めの56棟の竪穴式住居址を検出する成果を上げられたが、住居址ごとの複合や住居址内の出土遺物は少なく、包含層の形成は見られたものの限定された地区であった事等から10月半ばには航空測量を実施し調査を終える事ができた。これらの経過と結果を踏まえ、当初計画を見直し新たな遺跡の調査を実施する計画を立案し、土地開発公社と協議を持ち、変更契約を締結した。

大口小松原遺跡を東端として長滝長尾遺跡、長滝宮谷遺跡が立地する一連の丘陵は、４月当初の段階で雑木処理が終了していた事から、庄が屋敷Ａ遺跡の調査が終了した８月12日から、重機による表土除去作業を開始し、旧盆開けから本格的に作業を始めた。

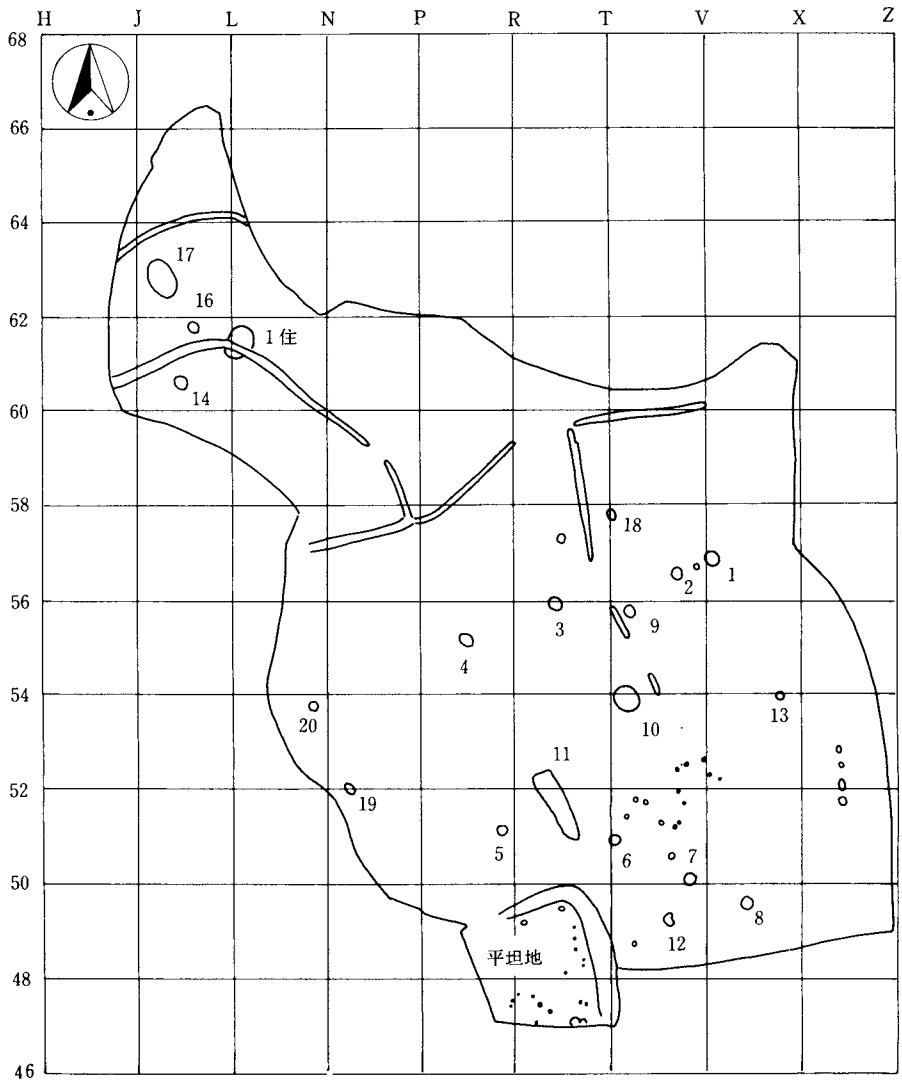
調査日誌（抄録）平成５年８月以降

８月12、17日　大口小松原遺跡の重機による表土除去作業

８月18、19日　重機による表土除去作業、丘陵頂上部平坦面での切り株処理



第65図　大口小松原・長滝長尾遺跡地形図（1/2000）



第66図　大口小松原遺跡区画配置図（1/800）

8月20日　重機による表土除去作業

8月23～27日　重機による表土除去作業、頂上部での切り株処理、長滝宮谷遺跡での人力による表土除去作業

8月30、31日　重機による表土除去作業、頂上部での切り株処理

9月1～3日　長滝長尾遺跡での重機による表土除去作業、調査区での切り株処理作業

9月6日　長滝長尾遺跡での切り株処理作業

9月7・16日　航空測量のために庄が屋敷A・C遺跡での清掃作業

9月17・20～24・27～29日　大口小松原遺跡の遺構検出作業

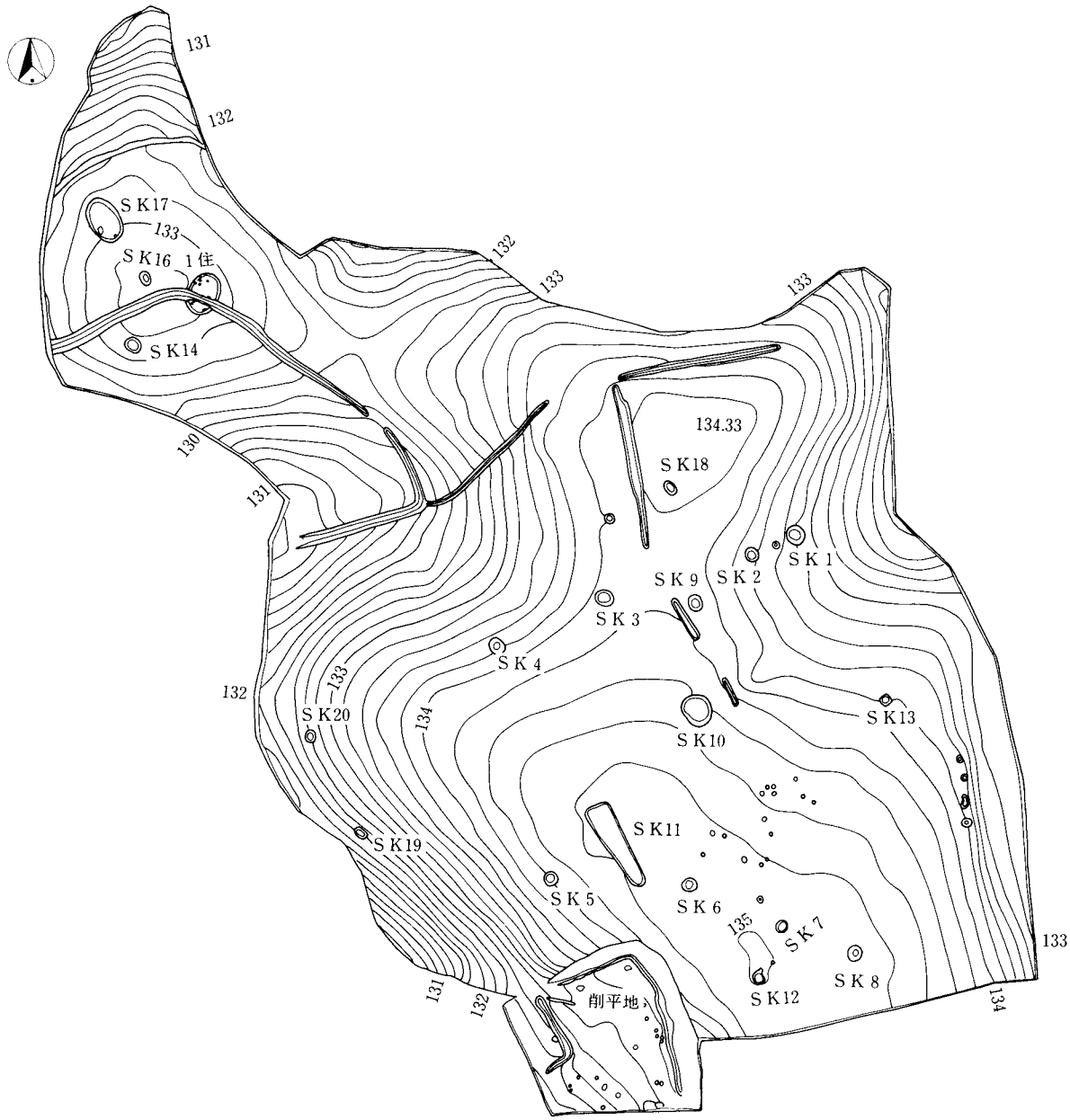
10月1日　大口小松原遺跡の遺構検出作業

10月4～7日　大口小松原遺跡の遺構検出作業、住居址・土坑の掘り下げ

10月12～15日　大口小松原遺跡での遺構検出作業、土坑実測作業、長滝長尾遺跡での遺構検出作業

10月19～22日　大口小松原遺跡の土坑実測・遺構検出作業　炭窯跡の調査

10月25～29日　大口小松原遺跡の遺構実測、長滝長尾遺跡の遺構検出作業、炭窯跡の発掘



第67図　遺構配置図（1/600）

11月１・２日　炭窯跡の実測、大口小松原遺跡の遺構実測、長滝長尾遺跡の遺構検出作業

11月４・５日　大口小松原遺跡の全景写真の撮影、長滝長尾遺跡の遺構検出、遺構実測作業、炭窯跡の調査

11月８～10日　長滝長尾遺跡の住居址、土坑の掘り下げ・実測作業、炭窯跡の発掘

11月12・14日　長滝長尾遺跡の遺構検出、炭窯跡の実測、現地説明会

11月15～19日　長滝宮谷遺跡の遺構検出・実測作業、炭窯跡の調査、長滝長尾遺跡西端拡張区の重機による表土除去作業及び切り株処理作業

11月22日　長滝宮谷遺跡実測

11月25・26日　長滝長尾遺跡の切り株処理作業、炭窯跡の実測

11月29・30日　炭窯跡の実測作業

12月２・６～10日　長滝長尾遺跡の遺構検出

12月15日　器材搬出作業、現地作業は本日にて終了。

3　層序と遺構の配置

本遺跡での雑木伐採後の微地形は、墳丘などの目に付く高まりは認められず、調査区の南西地区での平面方形プランの削平面を観察できるだけで、他は通常の丘陵尾根地形をなしていた。丘陵は南北方向に長方形をなして緩傾斜面を延ばすが、厳密には北西方向に振れた形で広がる。南北方向での長さ約90m、幅約45mの範囲が緩斜面の規模である。尾根筋の北部に、丘陵内の谷が東西方向に入り込み、殆ど標高を変えないで鞍部を形成している。小谷地形を越えた北端は、北西方向に延びて標高を増す狭い尾根筋が広がり、頂上部を越えてから痩尾根となって北西方向の谷に落ち込む。

丘陵内の微地形に相呼応する形で各遺構が占地している。平坦面が広がる南地区の中央部には縄文時代中期の土器を包含したピット群が見られ、竪穴こそ確認できなかったが住居址の立地が推定された。平坦面の西側には伏せ焼き法炭窯の形態を持つ長大な焼土坑１基と、埋葬に関連すると推定される礎石を配した平坦面が、南西向きの斜面に構築されているのが検出された。いずれも古代の所産と見られ、調査区内の各所で配置されている焼土坑とも関連すると考えられる。丘陵内小谷が入り込んで尾根幅が狭まる北側地区には、小谷を繋ぐような配置で東西方向に並ぶ陥穴群が検出された。縄文時代中期に掘り込まれた土坑群で微地形を読み込んだ立地の在り方と見られ、狩猟方法に関してのひとつの手がかりと考えられる。北西部分は痩せ尾根が北西方向に延びるが、標高が高まる位置に縄文時代の竪穴式住居址が検出された。平坦地での先の住居址と並び単独立地を示す在り方は、短期的に構築されたと思われるが、多数の竪穴式住居址が並ぶ通常の集落構造を見ていく上で、新たな視点を提供する資料と位置付けられる。なお、北部の小谷および尾根筋に、幅50～100cmの溝の掘り込みが見られるのは、丘陵が畑地として開墾された段階での所産と考えられる。構築時期の特定は困難であるが、中世以降であろうか。

層序については、これまで実施してきた遺跡の状態と格別の変化は見られず、表土層約10cmが全体を被い、遺物や炭化物を含む暗茶褐色土層が10～20cmの厚さで堆積し、小谷斜面や東および西側斜面では層厚が増す傾向にあり、濁茶褐色の地山漸移層を多少形成し地山面に移行する。遺物の包含は南地区の中央部分で若干量を認めたが、調査区全体では極めて希薄な状態を示す。地山は全体では淡黄褐色粘質土が広がるが、南の西側地区では赤褐色の強い粘質土が認められ、斜面側には鉄分が板状になった礫が露呈していた。

4　検出した遺構と遺物

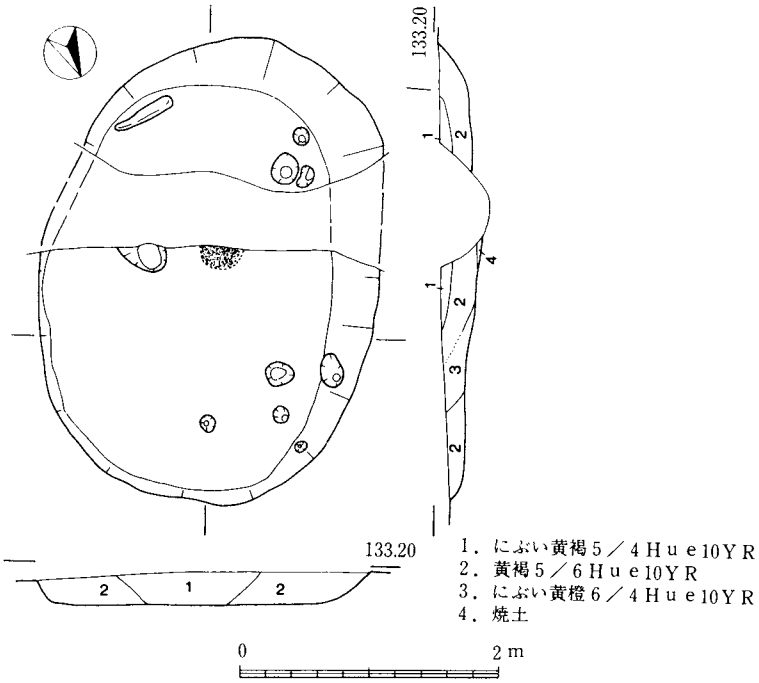
(1) 竪穴式住居址

第１号住居址（第68・69図、図版25）

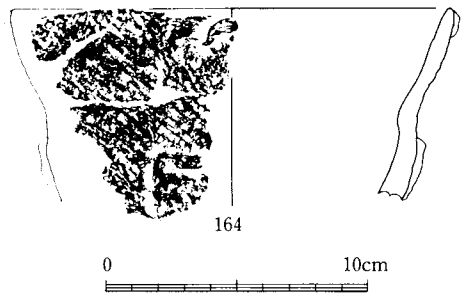
遺構　調査区の北西端部、中央部の丘陵平坦面から小谷を挟んで、北西方向に延びる狭い尾根上で検出した竪穴式住居址である。丘陵の平坦部は東西のふたつに分離し、間に小谷が入り込んで鞍部を形成する。分離された西側の丘陵は頂上部分に狭い緩斜面が広がり、標高約133.3mの最高所から若干高度を下げた東側に占地し、L62グリッドに大部分が含まれる。前面に谷が落ち込む事から、本遺跡の中では最も眺望の開けた占地で、手取川扇状地と日本海、約20km先遥かの金沢駅前の高層ビル群を臨むことが出来た。能美丘陵東遺跡群の中でも屈指の眺望と言える。

周辺地区の遺構検出の段階では、平面的に落ち込みを把握することは出来ず、僅かに覆土が地山土と異なるのを認めるだけで、撹乱が想定される状態であった。丘陵頂上部には尾根筋を南北に分ける形での幅約100cm、深さ約40cmの地境の為の溝が掘り込まれていて、溝覆土を掘り下げたところ溝壁面に火熱を受けて変色した部分が発見された。溝の掘削の際の焼土の可能性も考えられたが、壁面を平面とする事なく内部に広がる状態から住居址炉址と推定でき、周辺地区での再精査を行い平面プランを確定した。

住居址の平面プランは長軸方向を南北に置く楕円形を呈し、長径364cm、短径260cm、深さ15～28cmの規模を測



第68図　第1号住居址実測図（1/60）



第69図　第1号住居址出土土器実測図（1/3）

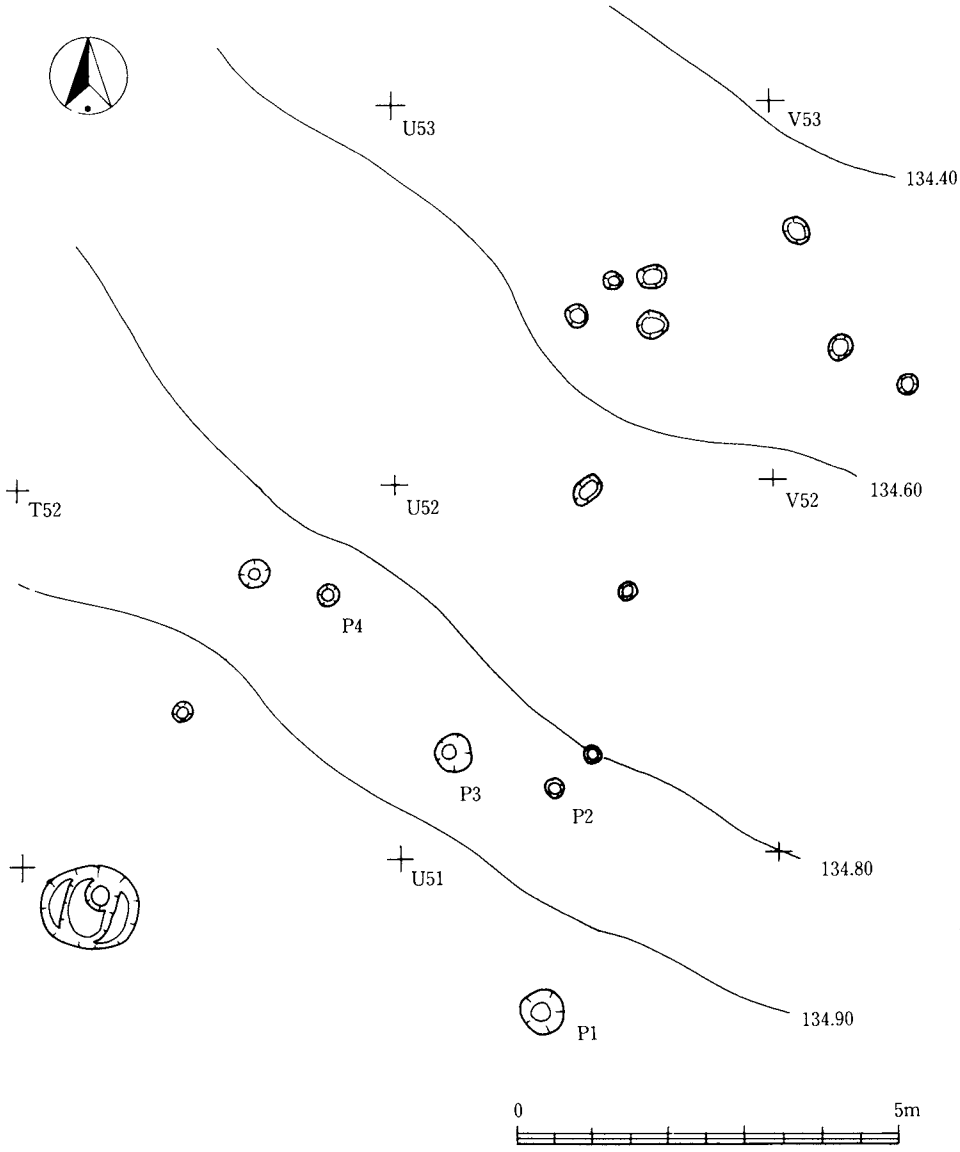
る。覆土は地山土に類似する黄褐色土で、腐食による変色の度合いは弱く中央付近で褐色が強くなると言う程度であった。覆土からの出土は、土器片1点が北側の覆土上層から得られ、南側の掘り込み線に沿う長さ約50cmの棒状礫が見られただけである。床面は平坦ではなく、炉址近くが最も深くなり周辺に向かって浅くなる状態で、鍋底状を呈している。床面には主柱穴と判断できるものはなく、若干の小ピットが東側の掘り込みに沿って検出できたものの木根跡の可能性が高いと見られる。炉址は住居址の中央から僅かに南に寄せた地床炉で、径約35cmの円形プランに推定されるが、溝開削により南半分を欠損する。

遺物　1例だけの出土である。口径17cm、現器高7cmに図上復元される鉢型土器である。器面全体に浅く斜縄文が転がされ、括れ部から口縁帯が長く延ばされ端部に粘土紐による小突起が付される。体部にも同じく矩形をなす貼付が施されるが、施文構成は不明である。内面の調整は粗雑で、凹凸の残る撫でが施され、括れ部分は丸味を帯びた成形である。色調は外周と内面は大きく異なり、器表面は口縁端部で煤の付着の影響から淡黒褐色を呈し、以下は二次的火熱による淡橙色を、内面全体は淡黒褐色をなす。胎土には若干の砂粒と多くの焼土粒が混和され、粘土質の強い焼成仕上がりである。所産時期は、粘土紐を加飾する手法から前期段階とも考えたが、体部に括れを持ち、口縁が長く延びる器形や胎土の在り方から中期後葉に入る（古府Ⅱ式）段階以降での所産と推定したが、現在のところ類似例は検索出来なかった。

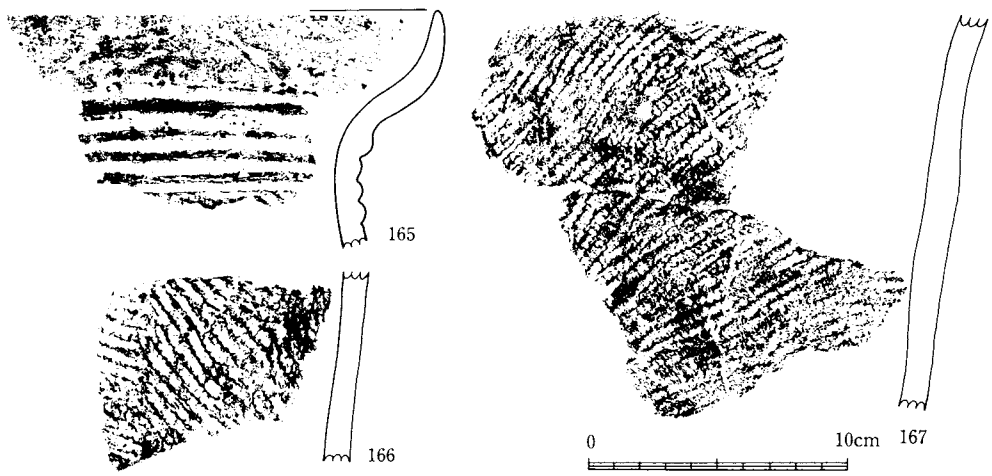
遺物の出土量は絶対的に少ないという状況や縄文時代住居の通例的な立地条件から外れた占地、小規模の住居址が単独で立地する在り方から、季節的に限定され短期間での滞在に止まった住居址と判断される。これは、集落単位での移動を示すのではなく、家族単位または目的が絞り込まれた単位での居住を示すものと思われる。

ピット群（第70・71図、図版26）

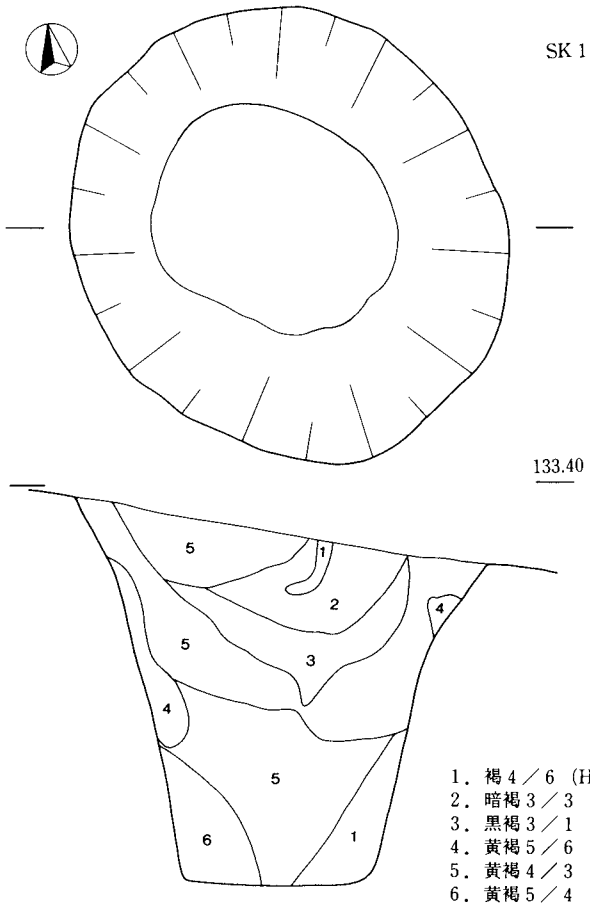
遺構　調査区の南地区、丘陵平坦面の中央部分を占地しているピット群である。T52・U51～53・V53グリッドの広い範囲にまたがる。東西、南北両方向とも約20mの範囲に、径20～50cmのピットが不規則な状態であるが集中して検出された。いずれのピット覆土にも炭粒が混入し、ピットに番号を付したものには土器の出土が見られた。ピットの周辺で焼土面の精査を実施したが、特定するには至らなかった。ピット群だけで住居址と断定は出来ないが、1～2棟程度が占地した可能性は高いと思われる。

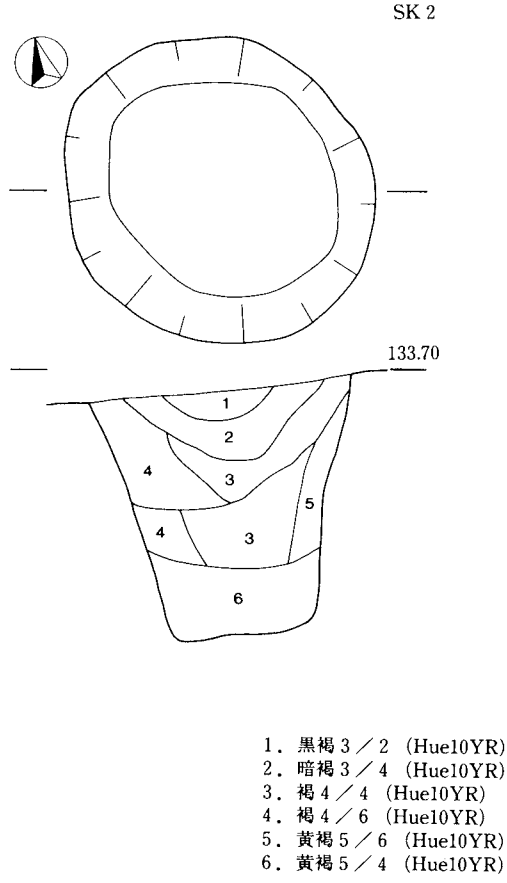


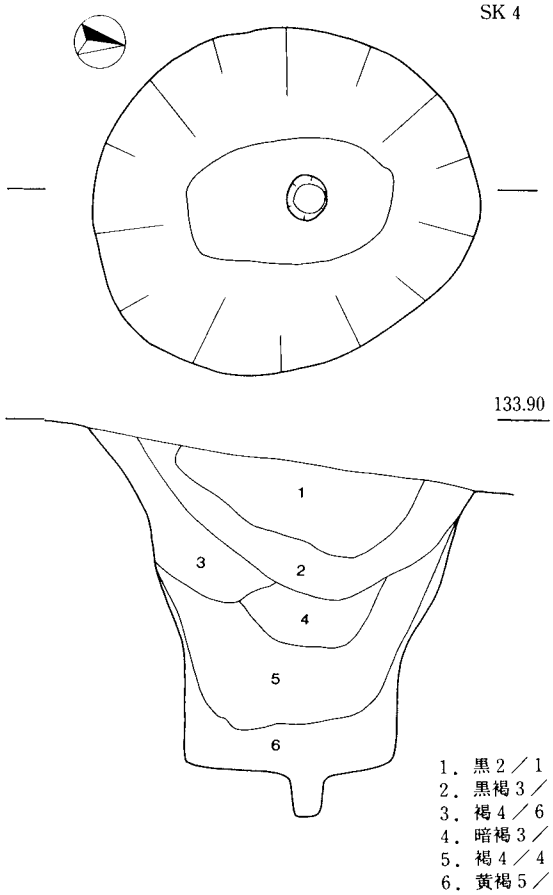
第70図　ピット群平面図（1/100）

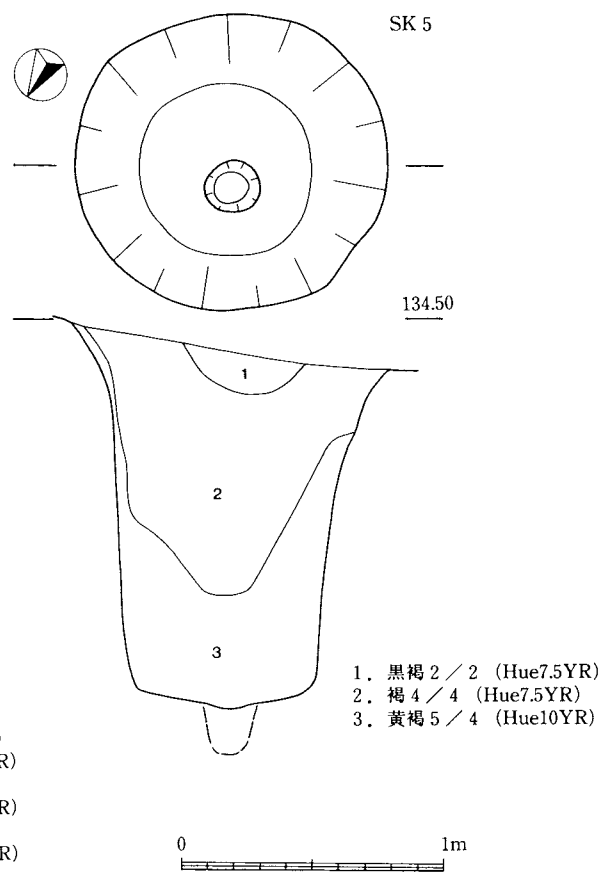


第71図　ピット内出土土器拓影・実測図（1/3）









第72図　土坑実測図（1）（1/30）

遺物　165、166はＰ３ピットから出土したもので、接合することは出来なかったが同一個体の可能性が推定される。165は口径26cmに復元される大型深鉢の口縁部である。外湾して立ち上がる口縁は素文に整えられ、口唇部に向けて器壁が薄く成形されている。頸部には貼付された隆起線文が１条巡り、さらに半隆起線文３条が平行して加飾され、その下は縄文が施される。黄褐色から淡褐色を呈し、口縁の一部に煤の付着が見られる。胎土は僅かに焼土粒が含まれる程度で、良好である。166は類似した在り方を示し、内面での撫で調整が丁寧に面が取られるのが観察できる。167は器壁が厚く成形される事から大型の深鉢胴部片に推定でき、Ｐ４ピットから出土した。暗茶褐色を呈し、胎土に微砂粒が多量に混和され、器表面に目立つ状態となる。

(2) 落とし穴

平面形が楕円形を呈し、径、深さ共に１ｍを越える落とし穴とされる土坑は、本遺跡で７基が検出できた。床面に１個の小ピットを掘り込むのが通例で、過半数の５基で認められた。配置は調査区の北部、東西両方向から入り込む谷を結ぶように直線的に配置される群と、南側の平坦地、斜面上に単独立地を示す群とに分けられる。直列的に配置されるのは、東から第１、２、９、４号土坑で、間に位置する第３号土坑も含めて位置付ける事ができる。各土坑は谷の緩斜面上に構築され、単独立地の第５、８号土坑でも平坦地ではあるが、傾斜変換線に寄せた形での占地である。各土坑のいづれも出土遺物は極めて希薄で、時期を確定できるだけの資料は検出できなかった。その中で、深さが１ｍに達しないSK３で前期末葉の朝日下層式が出土しているのが留意されるが、調査区全域で出土を見るのは中期後葉の所産時期を想定されるものであり、各土坑の所産時期を示す可能性が高いと想定している。

SK１（第72図、図版27）

ほぼ東西方向に列状に配置される陥穴列の東端に位置しているもので、東側に傾斜するＶ57グリッドに位置している。西方向約270cmにSK２が配置される。

平面楕円形を呈し、主軸方向を等高線に直行させる形で北西方向に置き、長径180cm、短径160cm、深さ150cmの規模を計測する。床面は平坦に整えられ、掘り方に沿う形で平面形は楕円形をなす。掘り方の上半は傾斜が付いた状態であるが、下半部においては直立に近い状況の円筒状をなすのが特徴的である。覆土の中央部分が黒褐色を呈するのは、下層部分が間隔を置かずに埋没したのに対し、窪地状部に自然腐植土が堆積した為と推定される。本土坑からの遺物は皆無である。

SK２（第72図、図版27）

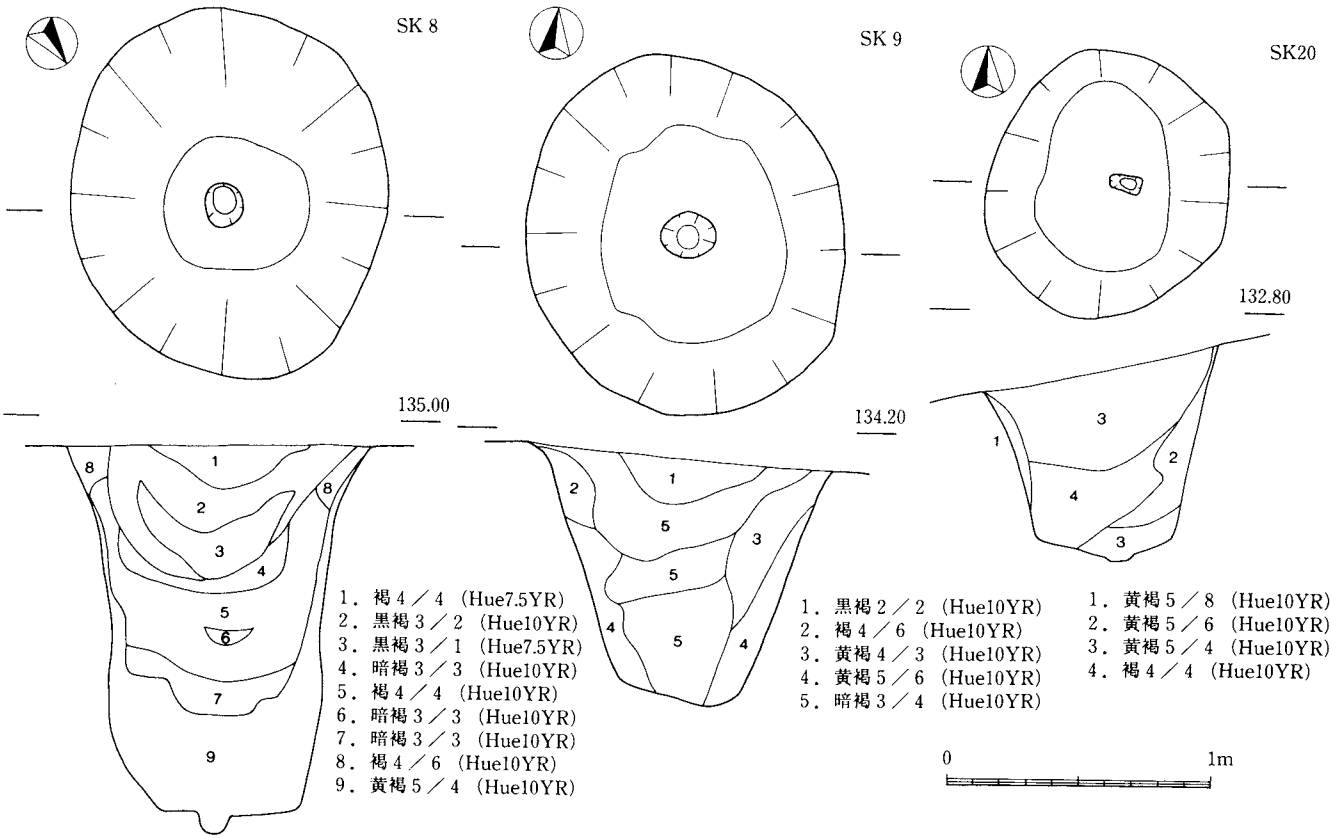
調査区の北東地区、北東に傾斜していく谷斜面に立地する土坑で、U57グリッドに位置する。北東に位置するSK１との間隔より開いて、南西方向約５ｍにSK９が配置される。

平面プランは北西方向に長軸を置く楕円形を呈し、等高線に対して長軸を平行に近い形に置いて掘り込まれる。長径126cm、短径114cm、深さ102cmの規模を測る。床面は平坦ではあるが、谷側に傾斜を付けた状態となっていた。掘り方は全体的に外に開く断面形の掘削で、覆土の下層位には排土した黄褐色土が厚く堆積する状況を示し、自然腐植土は掘り方検出面での上位置で僅かに認められる状態であった。覆土から遺物の出土は得られなかった。

SK４（第72図、図版28）

調査区の北西、南西から入り込んでくる小谷に面した傾斜面に立地する土坑で、直列的に配置される土坑群の西に当たり、Ｐ56グリッドに位置している。列状配置の西端に当たるSK20は南南西約17ｍに置かれ、北西方向約17ｍには鞍部を挟んでSK９が配置される。また、同方向で約９ｍにはSK３が立地している。

平面形は南北方向に主軸を置く楕円形をなし、等高線に対し直行する占地である。長径148cm、短径133cm、深さ135cmの規模を測り、床面の北側に寄せて小ピットが掘り込まれる。径および深さとも約17cmを測る。掘り方は上半部分はラッパ状に外に開く成形をなすが、下半部分は直立に近い形で掘り進まれる。覆土は円筒部をなす下層部は掘削土が流土となって堆積した褐色、黄褐色土が見られ、上層部には腐植土層の黒色土、黒褐色土が深く窪むような形で入り込んでいる。黒色土には礫が見られ、中期中葉以降の土器片３点が出土した。



第73図　土坑実測図（2）（1/30）

SK 5（第72図、図版27）

調査区の南側、尾根筋の平坦面が西側の谷に傾斜していく変換線上のQ52グリッドに立地する。北側の直列する土坑群とは離れ、北方向約19mにSK 4 が配置される。同じ単独立地を示すSK 8 は、東南東方向約25mに位置する。

平面形は楕円をなし、等高線に対し直行する形で主軸が置かれる。ほぼ東西方向の長径は120cm、短径115cm、深さは底面まで140cmの規模を測る。底面は径67cmの円形の範囲で平坦に整えられ、中心からずれた位置に小ピットが掘り込まれ、径、深さとも20cmを測る。掘り方は上端部分が傾斜が緩く開く形であるが、大部分は垂直に近い形で掘削され、円筒状の形態である。覆土は検出面の中央部分で自然腐植土が限定された範囲で認められただけで、下層位は黄褐色、褐色土が厚い層をなして堆積しているのが他の土坑には見られない特色と考えられる。覆土からの遺物の出土は見られなかった。

SK 8（第73図、図版29）

調査区の南端、丘陵尾根の東側に占地し、東緩斜面に近い平坦面地区にあたり、V50グリッドに含まれる。単独立地を示す土坑で、最も近いSK 5 までの距離は25m、北側の列状配置の土坑群とは32mの間隔がある。

平面形は南北方向に長軸を置く楕円形を呈し、長径143cm、短径122cm、深さ145cmの規模を測る。床面は掘り方平面とは異なる形で、東西方向に長径を置く楕円形をなし、平面プランの中央に小ピットが設置される。径15×18cm、深さ10cmを測る。断面形は上半部分が外に開き、下半部は直に近い形で立つが、下位には崩落の為か抉れるような状態をなす。覆土は縦方向に入り込むラインが目立ち、通例の堆積状態と異なる様相を示している。最も深く掘り込まれた面の他に、2面が想定され、再掘削を行った結果を反映しているのではと考えられる。しかし、床面と想定する面での特別な状態は観察できなかった。覆土からの出土遺物は皆無である。

SK９（第73図）

調査区の北西、丘陵尾根筋が幅を狭める鞍部に立地する土坑で、東西方向に列状に配置されている中央に当たり、Ｔ56グリッドに位置する。

平面形は南北方向に長軸を置く楕円形をなし、長径140cm、短径124cm、深さ97cmの規模を測る。床面は平坦ではなく、東側に傾斜する形で整えられ、小ピットが掘られる。径22×16cm、深さ15cmの大きさで、掘り方プランの中心に位置する。掘り方の断面形は傾斜が付いたラッパ状をなし、覆土には壁面に平行するラインが認められるのが注意される。先のSK８と同じ性格が想定される。自然腐植土の黒褐色土は、検出面での中央部にレンズ状に落ち込む形で検出されたのと、整合性が認め難い在り方を示すと言える。覆土から中期中葉以降の土器片10点が出土しているが、小片の為図示できなかった。

SK20（第73図）

調査区の北西部、尾根筋の平坦部から大きく外れ、比高差約２ｍ程下がった急斜面上に立地する。M54グリッドに含まれ、直列配置の土坑群の西端に位置する。北北東約17ｍにSK４が配置される。

平面プランは等高線に並行する長軸を持つ楕円形で、長径105cm、短径92cm、深さ83cmの規模を測る。斜面上で検出された為に西側半分が大きく傾斜する。掘り方断面はラッパ状に開く形の断面形を呈し、掘り方に沿う形で底面も平面楕円形をなす。底面は中央部分に緩く傾斜する形をなし、東側に寄せて小ピットが掘り込まれる。径７×12cm、深さ３cmの大きさである。覆土に自然腐植土が見られないのは、傾斜面での立地から流失してしまった為と判断される。覆土は丘陵の斜面上からの流れ込みが顕著に見られる状況で、遺物の検出は見られなかった。

(3) 土坑

陥穴や焼土坑などの性格の明らかな土坑以外をまとめて記述する。各土坑においては出土遺物が認められない事から、時期的にも不明とせざるを得ない。

SK３（第74図、図版28）

調査区の北部、広い丘陵平坦面が鞍部となって北側の丘陵に接続する地区に当たり、Ｒ56グリッドに含まれる。列状配置の陥穴のラインに乗る位置で、東方向約6.5ｍにSK９が、西南西約９ｍにSK４が配置される。

平面形は北西方向に長軸を置く楕円形プランを呈し、長径150cm、短径134cm、深さ52cmの規模を測る。断面は底面を含めて鍋底状を呈し、中央部分が最も深くなる成形となる。黒褐色土の腐植土が褐色土によって被われる状況を示すのは他には見られない在り方である。全体的にはレンズ状堆積を示すが、褐色土が底部近くにまで落ち込んでいる状態は、小さな風倒木痕が介在した為ではと推定される。覆土からは、中期中葉以降の土器片19片の他に、前期後葉の朝日下層式期の小片３点の出土が見られた。

SK６（第74図）

調査区の南側、丘陵尾根の平坦面で検出した土坑で、土器片を包含していたピット群に隣接するＴ51グリッドで検出された。

平面形は東西方向に長軸を持つ整った楕円形プランで、長径122cm、短径110cm、深さ30cmの規模を測る。覆土は上下２層の褐色土層で、腐植土が顕著ではないと言う特徴が上げられる。土坑は東西に段を形成する二段掘りで、底面の北側に木の根による撹乱と見られる不定形な落ち込みが付随する。覆土からの遺物は見られなかった。

SK７（第74図）

調査区の南地区、丘陵平坦面の中央部で検出した土坑で、Ｕ51グリッドに含まれる。本土坑の北側にはピット群が展開し、西方向約９ｍにはSK６が、東方約５ｍにはSK８の陥穴土坑が配置される。

平面形は東西方向に長径を持つ楕円形プランで、105cm×95cm、深さ13cmの規模を測る。掘り方は傾斜を付けた形状で、床面は全体に平坦に整っている。覆土は褐色土の１層だけで、出土遺物は検出されなかった。

SK10（第74図、図版26）

調査区の中央部、平坦面が北に延びて鞍部を形成する手前で検出した土坑で、Ｔ54グリッドに大部分が含まれる。傾

斜変換線上を占地し、北側の谷には直列配置の陥穴群が、南側にはピット群が配置される。検出当初は大型の落ち込みである事から住居址の可能性を念頭に置いたが、出土品も見られず住居址と確定する事は出来なかった。

平面形は尾根筋に長軸を持つ楕円形プランで、長径233cm、短径250cm、深さ17cmの規模を測る。掘り方の断面形は緩傾斜の皿状を呈し、底面は平坦な状況を示す。床面の北と南に寄って小ピットが入り込むが、いずれも木の根の撹乱穴と思われる。

SK14（第74図）

調査区の北西に位置する痩せ尾根上で検出した土坑で、K61グリッドに含まれる。痩せ尾根は平面三角形に緩傾斜面が広がり、東の頂点に第１号住居址が立地し、北側の頂点にSK17が配置される。住居址との間隔は約５ｍである。

平面形は東西方向に長い楕円形プランを呈し、長径141cm、短径123cm、深さ26cmの規模を測る。断面形は全体が鍋底状の在り方を示し、中央部分が最も深くなる形態である。覆土は地山土の変色した黄褐色あるいは鈍い黄褐色土が堆積し、若干の自然小礫の出土があるだけで、遺物は見られなかった。

SK16（第74図、図版28）

調査区が北西部に拡張した形となった痩せ尾根上で検出した土坑で、K62グリッドに位置する。独立丘陵状の頂上部に立地し、先のSK14は南方向約５ｍ、東の第１号住居址は約３ｍの間隔を置くだけである。

平面形は南北方向に長い楕円形を呈し、長径121cm、短径88cm、深さ21cmの規模を計測する。掘り方の断面は全面に傾斜が付けられ、底面は東側に傾斜した形で平坦である。覆土は暗い色調の黄褐色土が東側に片寄る状態で堆積していた。覆土からの遺物は見られなかった。

SK18（第74図）

調査区の北部、南の丘陵が馬の背状の鞍部を置いて北の丘陵につながるが、頂上部の緩傾斜面に立地する土坑で、T58グリッドに含まれる。本土坑の南側の傾斜面には、直列配置の陥穴群が構築され、最も接近するのはSK２の約８ｍである。西と北側には幅約１ｍの溝が配されるが、畑地耕作あるいは地境の為の溝と推定される。

平面プランは南北方向に長軸を置く長楕円形で、長さ121cm、幅75cm、深さ17cmの規模を測る。壁は傾斜の付いた掘り方で、底面は平坦な状況である。覆土はにぶい褐色を呈する土で充たされ、遺物の出土は見られなかった。

SK19（第74図）

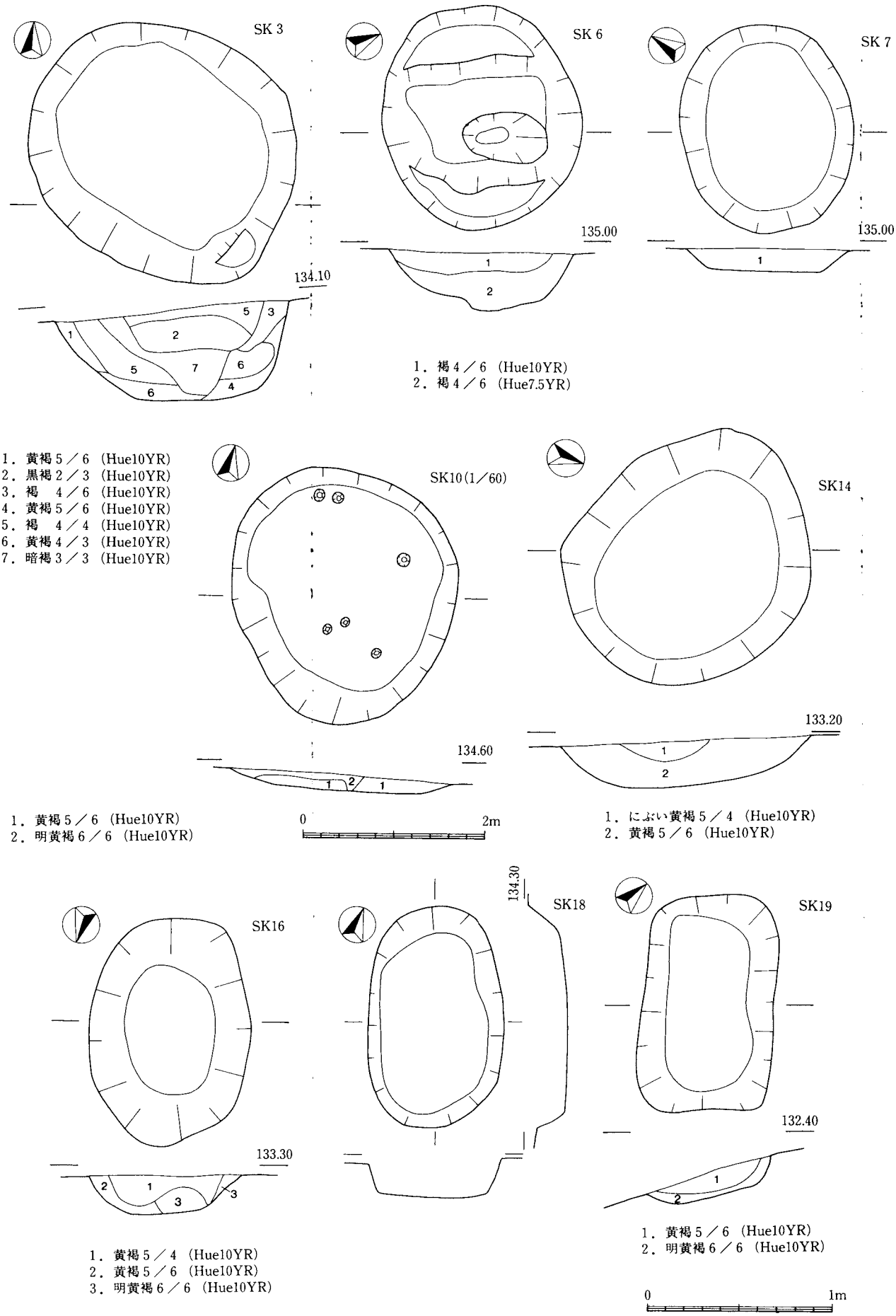
調査区の南側、尾根筋平坦面から大きく外れる西側斜面で検出した土坑である。斜面は一定の角度で落ち込み、土坑周辺での変換は見られない。N52グリッドの北端に立地する。周辺に遺構は少なく、北方向約８ｍにSK20が配置されるばかりである。遺物が見られない事から、時期を確定する事は出来ないが、古代での所産を推定している。

平面形は等高線に並行する主軸を持つ隅円長方形プランで、長さ118cm、幅72cm、深さ20cmの規模を測るが、急斜面に位置する事から西側部分の掘り方は大きく損なわれている。底面においても、斜面での立地を反映し全体に西側に傾斜する形での検出である。覆土は暗褐色土、褐色土の２層が確認され、上層の暗褐色土の下位が水平位置を示しているように観察される。

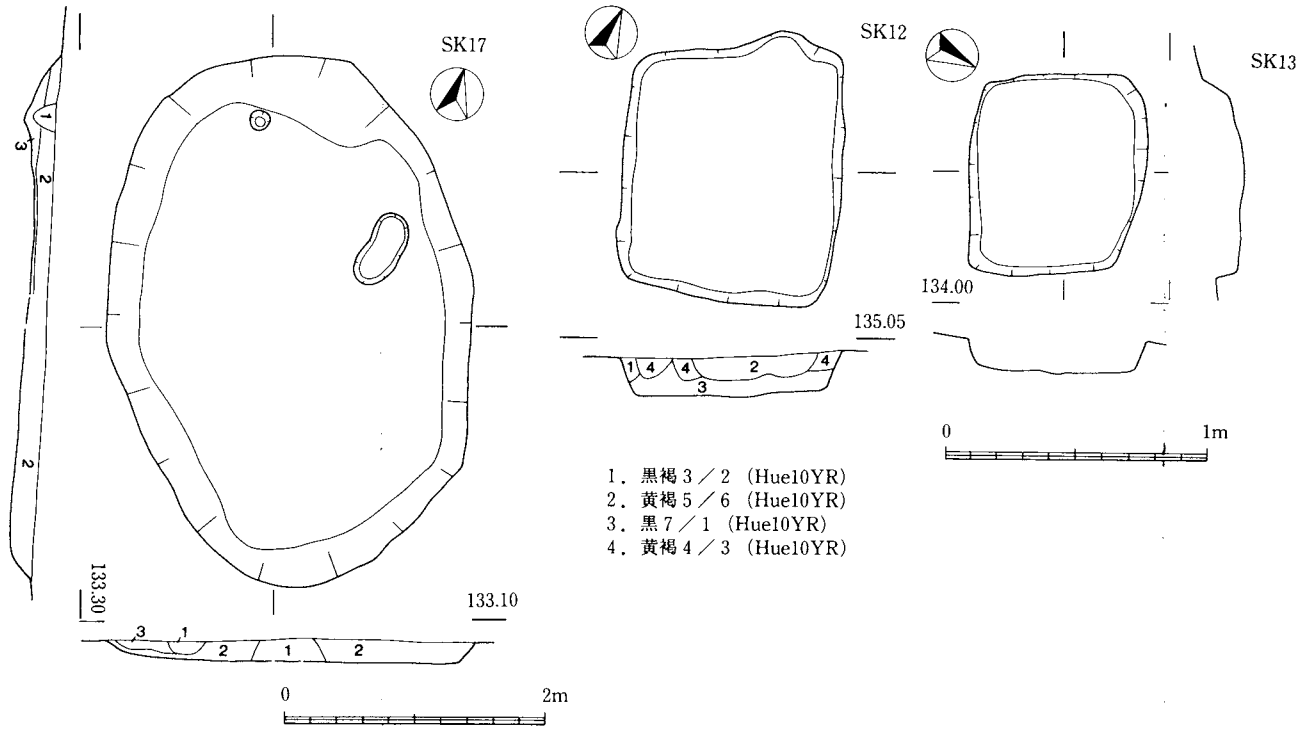
SK17（第75図、図版25）

調査区の北西地区、独立丘陵状に突出した頂上部で検出した大型土坑で、J63グリッドに大部分が包括される。略三角形状をなす丘陵頂上部の北側緩斜面上に立地する。同丘陵には第１号住居址が検出された事から周辺部での精査を進める過程で、SK14・16等と共に検出したもので、住居址の可能性が想定された。

平面形は南北方向に主軸をおく長楕円形で、長径410cm、短径282cm、深さ18cmの規模を測る。断面は北側地区では皿状を呈して緩やかに落ち込み、対する南地区では角度がが付いた形態を取る。床面は全般的には平坦ではあるが、中央部分が高まり周辺部分に傾斜するという状況を示す。緩い傾斜の北地区には不定形な平面形の落ち込みが見られ、木の根の撹乱穴かと推定された。覆土からは遺物の検出は見られず、撹乱穴の可能性が高いと思われる。



第74図　土坑実測図（3）（1/30）



1．黒褐３／２（Hue10YR）
2．黄褐５／６（Hue10YR）
3．黒７／１（Hue10YR）
4．黄褐４／３（Hue10YR）

1．褐４／４（Hue10YR）
2．にぶい黄褐５／４（Hue10YR）
3．褐４／６（Hue10YR）

第75図　土坑実測図（4）（1/30）

(4) 焼土坑

壁面が焼土面が見られ、覆土に細かな炭化物が入る焼土坑は２基が検出された。後述する窯状焼土坑と共に、古代における埋葬施設と一種と考えている。

SK12（第75図、図版29）

調査区の南端で検出した土坑で、U50グリッドに含まれ、丘陵平坦面の中央部に立地する。西方向約６ｍには古代の削平地の掘り込み線が、北西方向約12ｍには、窯状焼土坑SK11が占地する。重機による表土除去の段階から焼土坑と判別でき、熱によって変色した壁の断面が廻るのが容易に確認できた。

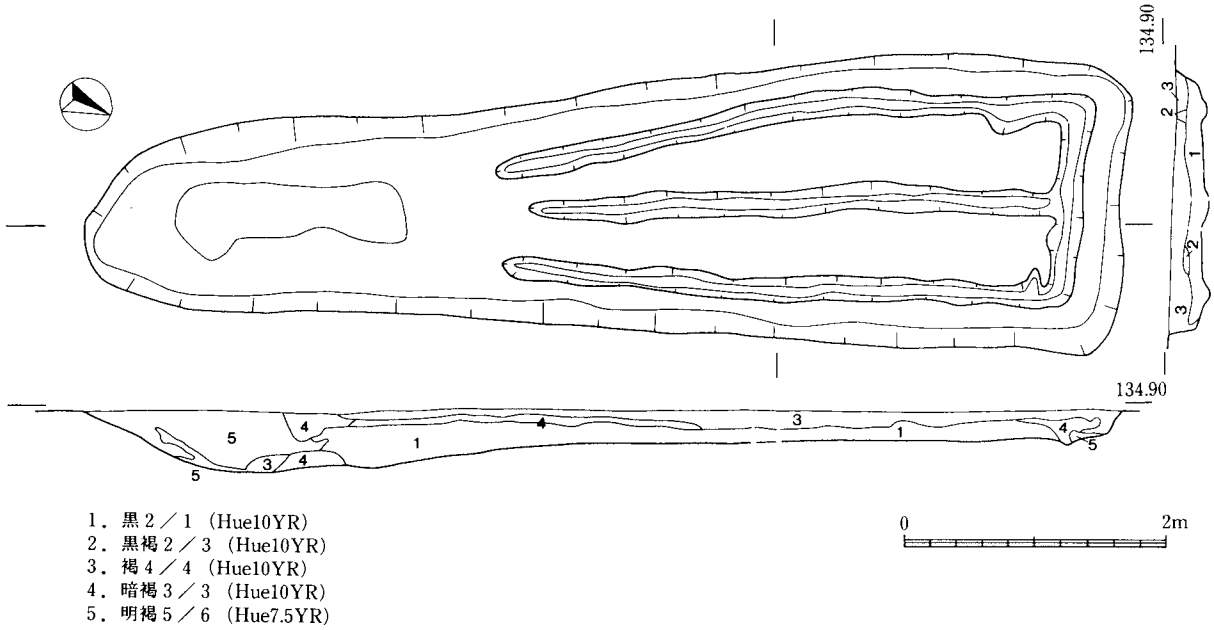
平面形は北東隅が突出する長方形をなし、南北方向での長さは100cm、幅85cm、深さ15cmの規模を測る。直に近い形で立つ壁面全体が赤褐色ないしは暗黄褐色を呈して厚く焼け付き、平坦に整えられた床面でも一部を除いて赤褐色の焼土面を形成していた。床面に接する覆土は細かな炭化物が多量に含まれて黒色をなし、上層部には炭粒を混じえた黄褐色土が見られる。土坑が開口した状態で放置されたのであれば、自然堆積の状況が層の境界に表れると推定されるが、埋め戻された状態を示すものと判断される。北東隅にピットが検出されるが、焼土壁が切り込んでいる事から焼土坑構築以前のものと判断した。

覆土からの遺物の検出は見られなかった。

SK13（第75図）

調査区の東側斜面、W54グリッドに位置する焼土坑で、本遺跡の表土除去の最初に注意された遺構である。南西方向のSK12からは約25ｍの距離がある。小谷が北側に入り込んで斜面が急になるが、瘤状に迫り出した緩斜面上に立地し、平野部側からは陰になる位置であるが、微地形での立地を考慮していかねばと思われる。

平面形は等高線に並行して主軸を置く整った方形プランを呈する。北東方向での長さ78cm、幅67cm、深さ10cmを測る。壁は直に近い立ち上がりを示し、北西隅を中心にしてコーナーに焼土壁が形成される以外は、焼土面の遺存は弱く検出面での縁で焼土粒が見られると言う状態であった。床面は凹凸はものの構築以後の撹乱と推定され、当初は平坦に整っていたものと考えられる。覆土から遺物は見られなかった。



1．黒２／１（Hue10YR）
2．黒褐２／３（Hue10YR）
3．褐４／４（Hue10YR）
4．暗褐３／３（Hue10YR）
5．明褐５／６（Hue7.5YR）

第76図　土坑実測図（5）（1/60）

（5）窯状焼土坑

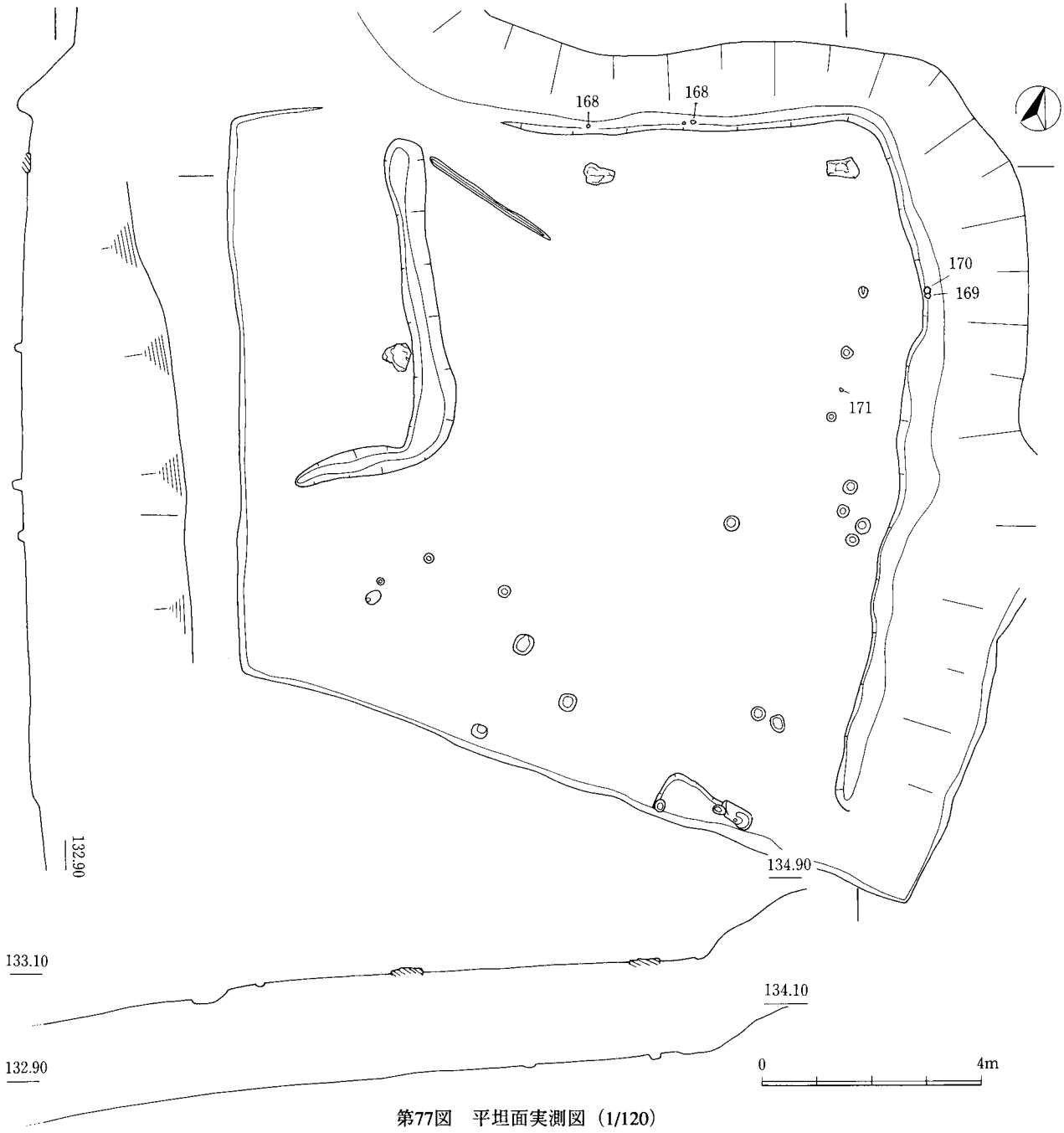
SK11（第76図、図版30）

調査区の中央部、丘陵平坦面が傾斜を付け始める変換線の手前に構築される大型土坑で、Ｒ52・53、Ｓ51・52グリッドにまたがって検出された。南方向約５ｍには、古代の遺物を出土した削平地の掘り方ラインがあり、南南東約12ｍにはSK12の焼土坑が位置する。

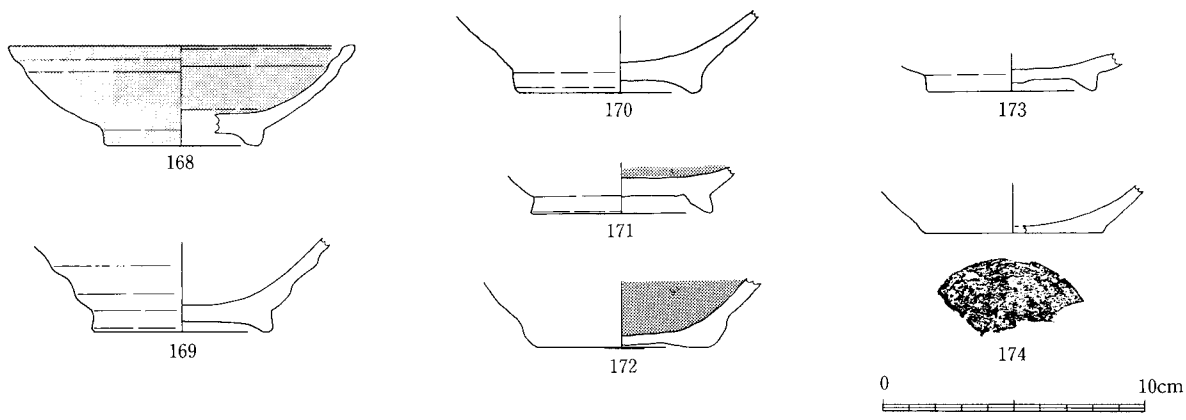
検出段階では褐色土が長楕円形に広がる状況で、細かな炭粒を包含するのが見られた。掘り下げを行う過程では、幅の狭くなる南端部分で地山土の下に炭粒を含む褐色土が潜り込む状況が見られ、検出範囲より長さが大きく延長される結果となった。

平面形はおおむね長方形をなすが、細部での特異な形状を捉えれば笏状をなすというのが適切な表現と言える。北側部分はコーナーを付ける方形を呈し、南側に向けて幅を狭めて行き、南端はコーナーを付けずに尖り気味に丸く 納める。長さ705cm、北端部の幅227cm、南端部での幅150cm、床面までの深さ23cmの規模を測る。床面には幅のある北半で平面形がフォーク状となり、北端部で繋がる形に掘り込まれた溝が配置される。溝は壁面から10～16cm、先端部が内側に弯曲した南端の、最も離れる位置で25cmの間隔を開ける。溝の幅は15～20cm、深さ４cmほどのもので、断面形は丸味を帯びる。床面は溝の掘り込まれている部分から細かな炭粒が覆う状態で、10～30cmの厚さで堆積し、床面の状況により層厚を変化させるが、上面部分での変化が認め難いという状態が指摘されるのは、本土坑を再掘削しなかった事を示していると言える。床面は全面が火熱により赤褐色ないしは暗黄褐色に変化し、酸化・還元作用を同時に受けた状況を示している。南端のすぼまる地点では、床面は緩やかに傾斜し長さ180cm、幅42cmの窪地を形成する。窪地の覆土は、地山土である明褐色土が炭粒を含んだ褐色、暗褐色土に被さる状態であり、埋め戻した状況を示すと考えられた。覆土の在り方や床面の状況から、複数回の使用をなしたものとは考えられず、一度きりの燃焼と考えられる。北西コーナーには小ピットの掘り込みが認められた。覆土からの遺物の出土は認められなかった。

本土坑は、溝に細身の材を敷き、その上に燃料となる材を敷き詰めて、火を掛ける伏せ焼き法炭窯跡との類似が指摘されるものであるが、隣接して構築されている削平地との関連が濃厚と想定され、古代における埋葬施設の１形態と推定され、焼土坑に繋がる性格を持つものと考えている。



第77図　平坦面実測図（1/120）



第78図　平坦面、周辺出土土師器実測図（1/3）

(6) 平坦面

遺構（第77図、図版31）

調査区の南西隅、尾根の平坦面が西側に傾斜する位置に造成された平坦面で、南向きを意図したものと考えられる。本丘陵の標高の最も高い位置からは陰になる地点で、また、北西方向に伸びる丘陵の奥まった場所であり、平野部からは全くの死角になる地点が選択されているとも判断できるが、焼土坑との関連を考えるならば南方向を特別視した形態と思われる。丘陵西斜面にＬ字状に切り込みを入れた造成平坦地は、Q48～50、R48～50、S48～50、T48・49グリッドの広い範囲を占める。北方向約５ｍには窯状焼土坑のSK11が、東方向約７ｍの間隔を置いて焼土坑のSK12が配置される。

造成平坦面は南端での傾斜が変換する位置までとして約13m、東西方向は段差が生じている南北方向に走る溝までとして約９ｍの方形プランを呈する。傾斜面にかかる西側部分は排土置き場との想定が得られるが、大きく傾斜が変わる位置までの長さは約14ｍの距離を測る。全体での面積は約180㎡余りであるが、西側の排土地区を除外すれば約110㎡程度の範囲である。

等高線に直行する位置で削平の入る北側は約80cmの比高差を測り、等高線に並行する位置で掘削される東側では120cmを越える比高差を測る。壁面は北東隅部分での立ち上がりは急激で、東壁の南に下るに従い緩やかな形状となり、自然傾斜面に擦り付く形へ移行する。北側壁においても同様の形で推移し、全体的には丸味のある緩やかな傾斜となる。壁面に並行して排水溝がＬ字形に巡り、覆土から少量の土師器高台椀が造成平坦面側から落ち込む状態で礎石列に近い周辺で出土した。削平面を限る事にもなる溝は、北側辺では直線的であるが、東側では幅を変え蛇行するような形での配置となるのが注意される。溝の幅は30～60cmまでの幅があり、深さは約10cm程度である。

礎石列は排水溝から50～70cmの間隔を開け、東西方向に２個が検出された。北側の礎石は平面長方形を呈し、長さ56cm、幅40cmの大きさを測る。上面は凹凸はあるものの全体としては平面的であるが、柱の痕跡は認められなかった。石の端部に丸味はなく、河原から運搬されたものではないと判断される。西に390cmの距離に、同様に東西方向に長軸を持つ礎石が据えられる。平面形は三角形を呈し、長さ57cm、最大幅40cmの規模を測り、やはり、上面での柱痕跡は認められなかった。石は凝灰岩質の丸味を持つもので、河原から運ばれた可能性がある。各礎石での芯々間の距離は450cmを測る。

平坦部は全体的に谷側に緩傾斜し、周辺部に小ピットを配しているが、撹乱穴と想定できるもので遺物の出土が見られたのは、南東隅での不定形落ち込みだけで、礎石列に対応するような遺構は検出できず、当初からの結果かと思われた。

本遺構は調査当初から削平地であると判断できたが、畑地耕作に懸かるものとの想定で掘り下げを実施していった。表土の下層を除去する段階で、土師器の細片が出土し、礎石と見なされる石の検出によって、ようやく古代での所産と判断された。検出した礎石は２個だけであり、建物跡を確定する事が困難と見られ、調査範囲を拡張して対となる礎石の検出を目指した。が、予測に反して２個以外には礎石列の検出はなく、抜き取り穴等も見られないという状況が確認され、当初から礎石は２個だけであり、恒久的な建物跡ではなかったと推定された。

本遺構の性格は、立地状況から山林寺院に類する堂跡の可能性を想定したが、礎石列が完結せず、排水溝が蛇行して建物跡が想定し難い在り方や、遺物量が少量で土師器高台椀に限定される事などから、期間的に限定された建物跡の推定は可能視出来るが、その性格は本遺構だけで押さえきれないと思われる。先に報告した本遺構の北側に構築された窯状焼土坑（SK11）を埋葬施設の１形態と推定したが、本遺構の掘り方や配置が揃えられていて、方位を意識した可能性が高く、ふたつの遺構は密接な関連性を持つと判断される。

類例を上げるのは難しいのであるが、造成平坦地は埋葬に付随する儀礼を行った場として位置付けられ、２個の礎石の並ぶ北端部での構築物が儀礼の主要な舞台であったと考えられ、通例の焼土坑に埋葬された人々との階層差を想定せざるを得ないと言える。

遺物（第78図、図版33）

少量の出土に止まり、土師器椀に限定される。168～171は平坦面、周溝覆土からの出土で、他は周辺グリッド

から得られた。168は北辺周溝覆土から出土したもので、口径13.6cm、器高3.9cmに復元できた高台付椀である。強く外展して伸びる口縁で、端部でさらに外展させる為に内面に稜の付く成形である。底面での切り放し手法は欠損している事から明確ではなく、高台は丸味のある貼付高台となる。内外面に丹彩が施された痕跡が見られるが、大部分は剥落した状態となっている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土微砂粒の混和が目立ち、焼成は堅緻に上がっている。169は底径７cmを測るもので、外回りは直に立ち、内側は傾斜を付けた状態で貼付している。底部での切り放し手法は明瞭には観察できない。色調は淡褐色を呈するが、内面側では黒褐色のくすんだ状況となっている。器表面に淡橙色の痕跡が認められ、丹彩が施されていたと考えられる。胎土には微砂粒及び若干の砂粒が混和され、焼成は良好と見られる。170は底径7.3cmを測るもので、周溝から出土した。底面の切り放しは糸切りで微かに痕跡が認められる。高台は切り放された底面の端を巡る形で貼付される。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には微砂粒の混和が多量になされる。器表面の調整は風化が進行している為に明確には捉えらず、塗彩されたかは不明である。171は平坦地の東端で検出した内黒土器で、底径7.1cmを測る。口縁部を全く欠いているが、底面が平坦に近い状況であることから外に大きく開く器形が想定される。底面は糸切りと推定されるが泥漿によって撫で消されている。高台は先端が尖る形で成形されたもので、外側に踏ん張る形で取り付けられる。内面には滑らかに光る黒色部分が見られるが、大部分は風化した肌面が露呈し、淡黒褐色を呈する。器表面の色調は淡黄褐色を呈し、胎土には若干の微砂粒の混和が見られるが、焼成は堅緻である。以上の土師器高台椀は個々に異なる色調、胎土を示しているのが特徴と見られ、それぞれが持ち寄られた結果ではないかと推定される。

172～174は周辺のＳ48、Ｒ50、Ｓ56の各グリッドから出土した土師器椀で、いずれも遺存状態は不良である。172は高台部を欠損したと見られる内黒土器で、淡灰褐色を呈し、胎土には多量の微砂粒が混和される。173は外に踏ん張る形で、端部が尖り傾向の高台が貼付されるもので、淡黄褐色を呈し、肌面は荒れ、少量の砂粒が胎土に混和される。174は高台の付かない坏で、灰褐色を呈し、胎土に若干の砂粒と多量の微砂粒が混和され、風化が進行しているものの焼成は堅緻である。

図示しなかったが、他に２点の土師器高台付椀の出土が見られる。

資料の中には須恵器の製品を含まれず、土師質の供膳具のみで占められるが特色である。土師椀の胎土に微妙な差は認められるが類似した器形を取り、小型土師皿が出現する以前の段階、10世紀前半頃の比定が考えられる。

(7) 遺構外出土遺物

縄文時代の遺物は、住居址の検出できた北半部では極めて少数で、丘陵平坦面南東地区に集中する傾向にあり、破片点数を表示した第80図のような状態で散布していた。総破片点数は386点で、その内遺構覆土からの出土数は38点である。石器の出土状況においても土器に類似した状況を示す。出土土器は、SK９土坑から出土した前期末葉の資料を除き、中期後葉の所産時期が想定される資料で占められる。破片の分布はピット群の検出されたＴ52グリッドに集中するものの、東地区、北地区と丘陵頂上部を外した形の環状を呈しているように見られるが、鞍部に直列配置された陥穴群に沿う事による結果と思われ、陥穴周辺およびピット群周辺という散布状況と見られる。

土器（第79・80図、図版33）

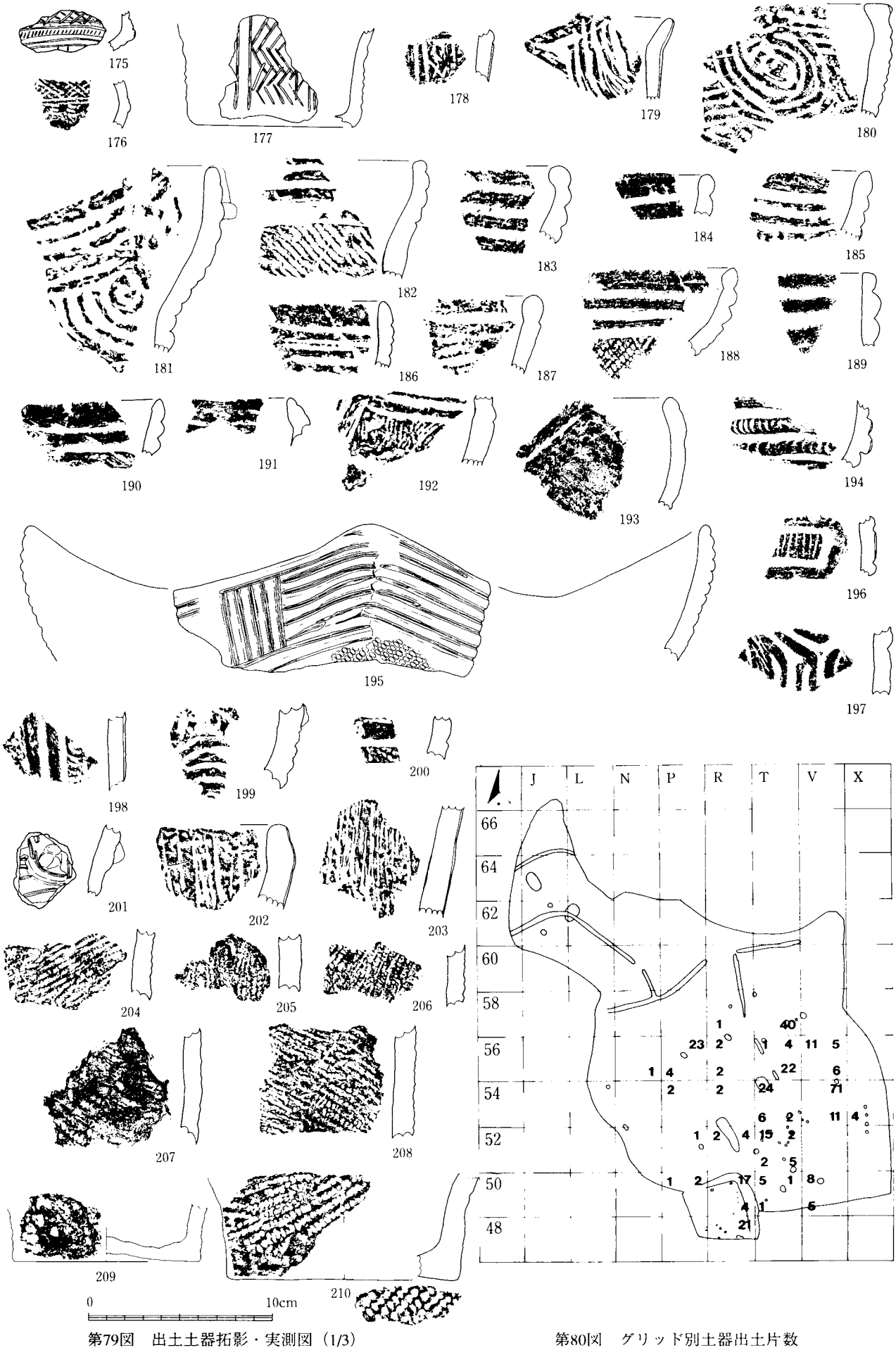
175～177はSK３から出土したもので、前期末葉朝日下層式に比定される。175は強く屈折する口縁部片で、細身の半裁竹管状工具を使用した半隆起線文での斜格子目文が口縁帯に施文される小型深鉢と想定できる。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒の混和は少なく精良で、焼成も良好である。176も同じく口縁端部片であるが、屈曲度が弱くなっている。口縁帯は斜格子目文で、屈折部には泥漿を貼付して小さく弯曲して施文される列点状の半隆起線が施文される。淡黒褐色を呈し、胎土は良好で、焼成は並である。177は底部を欠く胴下半部片で、底部径９cmに復元された。縦に配された無文帯に区画された文様部に、並行するジグザグ文が施される。器表の色調は淡橙色を呈し二次的火熱による変色が顕著に見られるが、内面は淡黒褐色をなし凹凸が激しい事から、表面が剥離した可能性が高いと判断される。胎土には一定量の砂粒が混和されているが、器表面では目立たず良好と言える。

178は胴部破片で、縦の半隆起線文で区画された狭い区画内に斜格子目文が充填される構成を取る。上山田式で

の所産と推定される。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には微砂粒が混和され、焼成堅緻である。179は口唇部を欠損している為に口縁端部とは断定できないが、口縁端部で外反する深鉢と思われる。粗雑な形で平行半隆起線文が斜め方向に垂下し、空白部分に残部処理的な三叉状文が施文される。内面での撫で調整は丁寧で、微砂粒が目立つものの整えられる。色調は淡褐色を呈し、胎土には多量の微砂粒が混和され、焼成は良好である。基隆帯や渦巻文は見られないものの上山田様式での所産と推定される。180は口唇部に向けて器壁が漸移的に肥厚し、口唇で面を取る形で納める深鉢口縁部である。口唇に沿う隆帯から短い隆帯が垂下し、隆帯上に爪形文が強く施される。「し」の字状の弯曲した隆帯を囲む形で、掘りの浅い渦巻文が施文される。内面は横方向の撫で調整が施され、胎土に砂粒は多いものの比較的平坦に整えられる。渦巻文の隆帯が口唇部から繋がる形で施文される事から、半隆起線文が弱いものであるが上山田式土器での位置付けを考えたい。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には多量の微砂粒の混和が見られるが、焼成は良好である。

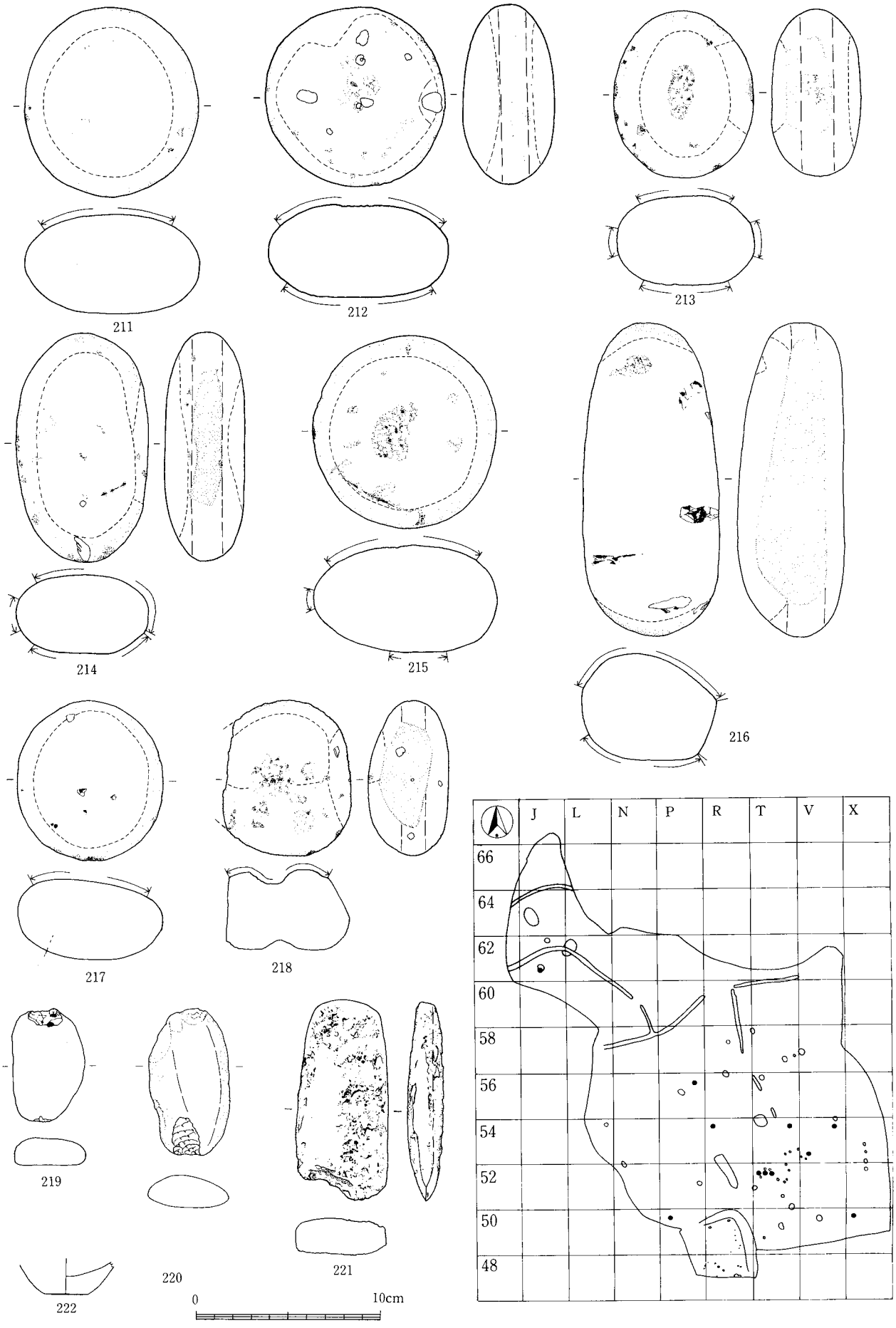
181から210までの土器片は、中期後葉の古府式土器に大方が含まれると判断できるもので、本遺跡での主体的な時期を示すものと考えられ、小破片で図示できなかった大部分も該期での所産と推定している。181は波状口縁深鉢の波頂部片で、口縁帯に平行半隆起線文が引かれ、屈曲する頸部に渦巻き文が、波頂端部に貼付文が加飾される。波頂部の尖る形態は南加賀地域での特徴的な深鉢器形で、上山田式期以後の地域的な発展過程を見ていく上での重要な位置にあると考えられる。色調は淡黒褐色を呈し、胎土には砂粒の混和より焼土粒と見られる角の取れた粒の混和が目立つ状況を示し、以前の胎土とは異なる配合での土器造りを反映していると言える。

182は端部で内屈する形で立ち上がる深鉢で、口縁部文様帯は半隆起線文で区画された横位縄文帯と考えられるが、縦方向での区画手法が捉えきれない。淡茶褐色を呈し、胎土に角のない砂粒の混和が目立ち、焼成は堅緻である。183は幅広の半隆起線文が施文され内面端部が屈曲する口縁部で、黄褐色を呈し、胎土に焼土粒と微砂粒が少量混和される。184は尖り気味の口唇で、淡茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。185も尖り気味に納めた口縁部で、爪形文が置かれる半隆起線文が湾曲している事から、波状口縁深鉢と推定される。全体に風化が進み、濁褐色を呈し、胎土に若干の微砂粒が混和される。186は波状口縁部片で、粗雑な半隆起線文が施される。内面には貼付した粘土のつなぎ目が見え、尖り気味の口唇に納める。淡灰褐色を呈し、胎土には多量の砂粒、微砂粒が混和される。187は口唇が丸く肥厚し、内外面ともに段が形成される波状口縁部片と思われる。口縁には明瞭ではないが粒の大きな縄文が施文される。灰褐色を呈し、胎土には多量の砂粒が混和される。188は平口縁深鉢に想定でき、幅広で高さのある半隆起線文が巡り、口縁帯に縄文が施される。内面の口唇は厚みを出して角を意図した面が見える。色調は淡褐色を呈し、胎土には焼土粒が混和され、焼成は良好である。189は波状口縁片で、内面が直線的な立ち上がりを示す。半隆起線文は上端に傾ける形で施文され、幅広で丈の高い平行線文である。淡褐色を呈し、胎土に僅かの焼土粒が混和される程度の精良で、焼成も良好である。190も波状口縁部片で、口唇尖り気味に成形される。褐色を呈し、胎土に砂粒の混和が多い。191は口唇部に貼付を施して内屈させ尖り気味の成形を施すもので、文様部には浅めの半隆起線文が巡る。灰黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。192は波状口縁部の口唇部を欠くもので、区画内には撚糸縄文が施文される。内面は凹凸のある調整で、胎土に少数の砂粒が混じる程度で、焼成も良好である。193は波状口縁の波頂部片で、端部の内外面共に半隆起線文の片側部分が残る形での沈線が巡っている。口縁帯には明確ではないが、粒の大きな縄文が施文される。淡茶褐色を呈し、胎土には多量の微砂粒が混和され、焼成は良好である。194は横走りと見られる基隆帯を持つ破片で、隆帯上に爪形文が施される。淡黄褐色を呈し、胎土には多くの砂粒が混和され、焼成は並である。本例は基隆帯が明確である事から、上山田式期での所産が推定される。195は口径37cmに復元される波状口縁深鉢で、平行半隆起線文で口縁帯を加飾するが、縦位置での施文が見られるのが特徴的である。平行半隆起線文は波頂部で方向を変える継ぎ目が残る。頸部には縄文が施文される。内面は撫でによって整えられる。暗褐色、茶褐色を呈し、胎土には焼土粒の混和が顕著に見られ、焼成は並である。平行半隆起線文で口縁文様帯とする資料は、加賀地域での古府式期以降と見られ、縦方向での加飾が特徴的な施文と捉えられ、加賀地域での型式編年において貴重な資料と考えられる。196は半隆起線文で方形に区画された内に平行沈線が施されるもので、淡茶褐色を呈し、胎土に焼土粒の混和



第79図　出土土器拓影・実測図（1/3）

第80図　グリッド別土器出土片数



第81図　出土石器実測図（1/3）

第82図　グリッド別出土石器点数

が認められる。197は半隆起線文での渦巻文が施文される部位での錯綜した状態での施文と考えられる。施文の空白部には残部処理的な形での粗雑な平行沈線文が加えられる。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には焼土粒の混和がなされるが目立つものではなく、器表面全体は肌理の細かな仕上がりである。198は体部下半と見られる資料で、幅広の半隆起線文で縦位置に流し、空白部に粗雑な爪形文が施文される。淡黄褐色を呈し、胎土は良好で微砂粒の混和も少ないと見られる。199は基隆帯のある渦巻文部片で、半隆起線文は粗雑な状態で施文される。200は幅広の半隆起線文に区画された内部に縄文が施される小片である。201は粗雑な半隆起線文で囲まれた中に小突起が付される小型土器で、あるいは、上下が逆になる可能性がある。淡茶褐色を呈し、胎土には焼土粒は見られず微砂粒が定量混和されて良好である。202、203は厚手に成形された縦沈線文が施文された深鉢片である。口縁部を内屈させる形で立ち上がる平口縁の通例的に認められる深鉢で、古府式期後半以降に特徴的に出土する。203の体部片は二次的火熱により橙色に変色し、内部に炭化物の付着が顕著に認められる。204～208は縄文施文の体部片である。無節縄文の204、207、ＲＬの208、縦縄文の206、木目状撚糸文の205と異なる処理が施される。205は器壁が厚くなるのが特徴的で、中期前葉の新保２式期での所産と考えられるが、他の体部片は中期中葉以降の時期と推定される。204、206では二次的火熱による変色が顕著で、内面には炭化物の付着が見られる。炭化物は207でも見られる。208の内面は縦方向での撫で調整がなされている。色調は橙色、淡黄褐色、褐色で、胎土には微砂粒の混和が顕著に見られ、焼土粒の混入は204、207で少量が認められる。209は底径10.4cmを測るもので、内底面の中央部が盛り上がる形で成形される。内底面には炭化物の付着は認められないが、1.5～２cm上がった部分から顕著な付着が見られる。外底面では撫でによる為か網代痕は観察できない。外面は二次的火熱による変色が全体に見られる。210は底径12.8cmを測るもので、体部から底部に掛けて一段絞り込むような立ち上がりを示す。内面では底面から約４cm上がった位置から炭化物の付着が見られる。網代は筵状の編み方が想定され、緯の粒が目立つ形で経が細目の繊維と推定される。器表は全面に二次的火熱により橙色を呈し、胎土は若干の微砂粒が混和されるが良好で、焼成も良い。

本遺跡の土器での時期幅は、前期末葉の朝日下層式から中期後葉の古府式段階までと考えられるが、量的には古府式段階での所産が他時期を圧倒していると考えられる。住居址は１棟だけで、土器の集中箇所とは距離を置いている事から、落とし穴群での活動を位置付ける土器群の在り方と推定して大過ないであろう。

石器（第81・82図）

211～218は磨石類で218を除いて完形品なのが特色と言え、手取川の河原石を活用したものと推定できる。211は片面での磨き面が見えるもので、側面や端部での使用痕は確定できない。212は両面ともに雨垂れ状の窪みと狭い範囲での磨き面が捉えられる。213は両面での浅い窪みと側面での敲打痕が残る。214は両面での磨き痕及び側面での敲打痕が残るもので、片側面では面取りに近い形での使用痕が見られる。215は両面に浅い窪みと狭い範囲での磨き痕が見られる。216は長楕円形の面取り石で、片側面だけの使用痕が残り、両面に微かな磨き面が認めら

第５表　大口小松原遺跡出土石器一覧表

番号	名　称	石　　質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(g)	遺存状態	出土地点	備　考
211	磨石	細粒砂岩	104	95	54	740	完形	T52	
212	磨石	火山礫凝灰岩	98	98	51	700	完形	T52	
213	磨石	中粒砂岩	90	76	49	472	完形	X50	
214	磨石	中粒砂岩	125	72	42	610	完形	T52	
215	磨石	粗粒砂岩	105	101	58	860	完形	Q56	
216	磨石	火山礫凝灰岩	171	73	58	960	完形	U54	
217	磨石	粗粒砂岩	88	80	43	451	完形	V53	
218	磨石	アルコーズ砂岩	85	70	44	344	一部欠	SK14	
219	打欠石錘	火山礫凝灰岩	61	39	14	47	一部欠	W54	
220	打欠石錘		81	43	18	77	完形	P50	
221	磨製石斧		110	51	19	189	一部欠	R54	

れる。217は両面ともに顕著な磨き痕が確定できる。218は両面共に深い窪みが付いた凹石で、側面で面を取っているようにも見えるが、風化が進んでいる為に確定は出来ない。

219、220は河原礫の両端に打欠を施した通有の製品で、219では裏面に打欠き過ぎた為に欠損した状態になったと見られる。

221は全面に風化が進行し磨き面の一部を確認できるだけであるが、全形での状態は保たれている。断面形で胴部の半ばが膨らみ、頭部で半円形の成形がなされる定角式の磨製石斧である。刃部は大きく欠損しているが丸刃と想定できる。

弥生土器（第81図）　222はT51グリッドから出土した底部片で、弥生土器に推定した。底径2.4cmの小型品で、色調は灰黄褐色を呈し、胎土には均質な状態で多量の微砂粒が混和されている。底部面には二次的火熱による橙色の変色が顕著に残される。底部が小型化する月影式期での所産と思われる。

5　まとめ

(1) 縄文時代

本遺跡は能美丘陵東遺跡群の中で、最も標高の高い丘陵に立地する縄文時代の狩場跡及び居住域として利用された地区であり、古代には葬送場として位置付けられた丘陵であった。

縄文時代の遺物の出土は全体的に少量で、全形を復元できる資料には恵まれなかった。最初に縄文人の足跡が辿れるのは前期末葉、朝日下層式期の段階で、尾根筋鞍部を横断する形で配置された陥穴群の覆土からの土器の出土が見られた。いずれの破片も上層位置からの出土であり、陥穴を構築した時期を示していると即断はできない。

中期、上山田式期から古府Ⅰ式期にかけて、調査区南側の尾根筋平坦面に比較的多くの遺物の出土が見られ、遺物や炭化物を包含したピット群が複合する事から小屋掛け程度の簡易な住居を構えた可能性が推定できる。東西に走る陥穴群の配置状況から、南方向からの追い込みが行われたと見られ、簡易な施設とは複合しない可能性も考えられる。出土土器には粗雑な施文を持つものが目立ち、165のように他地域との交流が推定できる資料が含まれているのは注目できる。

陥穴は東西方向の鞍部に設置された5基の群と南側に単独設置に近い類に分けられるが、西斜面側の陥穴を介して有機的に結べば、南と東から追い込んだ獲物を捕らえる確率はかなり高まるものと想定できる。いずれにおいても出土遺物は限定される事から前後関係等は確定は出来ないが、中期古府式期前後での所産に位置付けておきたい。

丘陵北西端部で検出した竪穴式住居址は1棟だけで、単独立地の背景を見ていく上での好資料である。平面楕円形を呈し、長径364cmの小型住居址で、緩傾斜した床面の中央に地床炉が置かれるという形態である。覆土からの遺物の出土は1片だけに限られ、また、北陸地域では類例を検索できないという特異な器形と施文を施す資料であった。中期後半段階に仮に位置付けたが、今後の重要な検討問題である。

(2) 古代

本丘陵でも例に漏れず、緩斜面、尾根上に壁の焼け付いた焼土坑3基が検出された。その中で特筆されるのは、平面形が笏状を呈する長さ705cmの窯状焼土坑である。床面全体に細かな炭化物が覆い、北側部分に丸太材を置いたと見られる三叉状に分離していく掘り込みが作り付けられている。覆土下層においても厚く炭化物層が見られ、それを覆うような形で暗褐色土、地山質土が堆積していた。炭化物層と上層との間に焼土層などの形成は見られず、火勢が衰えた段階で埋め戻した事が想定できる。燃焼材と想定できる炭化材は少量しか得られなかった事から、藁などが火化用の燃料に使用されたと推定される。同土坑の北西隅には小ピットの掘り込みが見られ、墓標ないしは幟用の柱を建てる穴と想定している。土坑から約5m南側の斜面を切り崩して造成した平坦面が認めら

れ、極めて関係が深い施設が置かれたと痕跡と推定した。造成面の丘陵側には排水用の溝が鍵状に配置され、覆土からは10世紀前半段階の土師器の椀類が出土した。焼土坑からの遺物が得難い状況の中で貴重な資料と位置付けられる。造成平坦面の北端に２個の礎石が原位置を保った形で見られ、当初は礎石建物跡を想定したが、柱穴跡を含めても検出できず、当初から２個で完結する施設の礎石と考えた。窯状焼土坑の葬送に関連しての設置であろう。窯状焼土坑の類似遺構を上げるのは困難であるが、庄が屋敷Ａ遺跡の斜面裾に見られた等高線に平行して設置されていたSK115・116があり、平成７年度に調査を行った宮竹うっしょやまＡ遺跡では斜面上に隣接して掘立柱を付随させる幾つかの事例が上げられる。詳細については、後日の宮竹うっしょやまＡ遺跡での報告に期したい。

V　長滝長尾遺跡

1　地形

本遺跡は、大口小松原遺跡の西側に谷地を挟んで相対する丘陵上に立地する。丘陵はおおむね東西方向での幅のある尾根筋を貫くが、分水嶺ともなり南北の両方向に小さな谷を派生させる。北側には東西に走る深い谷へ落ち込み、谷沿いに長滝集落に至る林道が敷設されている。南側にも同様の小谷が形成され、窪地状となる谷頭に整地を施した平坦面が、幾筋かの谷で確認できる。最も広い造成面では礎石建物と推定できる礎石列や路跡・水場跡などが良好な状態で確認できる。古代から中世にかけて信仰を集めた滝谷寺跡に推定される。小谷を落ちきった所にほぼ東西方向に流れる小河川があり、落差がそれぞれ異なる七つの滝が連なり形成される。滝谷寺跡の前面に立地する二の滝が最も高低差があり、平野部近くにおいては意外と思われる瀑布で、降雨の際には迫力が一層増す状況となり、瀑音が谷全体に響き渡る。

本遺跡の主要部は、尾根筋の東西方向の長さ約300m、南北方向で幅約100mの範囲に広がり、鞍部を介在させながら西側に標高を下げていく。尾根筋の平坦部は樹枝状に伸び広がり、東側地区では南北方向の尾根筋が独立したような地形を形成し、西地区では尾根筋を東西方向に変換した形で伸びていく。

本遺跡は東西に長く展開する尾根筋全域を含むのであるが、滝谷寺跡を周辺地域を含めた形で現状保存が諮られた事から開発区域が北側に移動し、北方向に派生する枝尾根地区３地点での調査となった。

2　調査経過

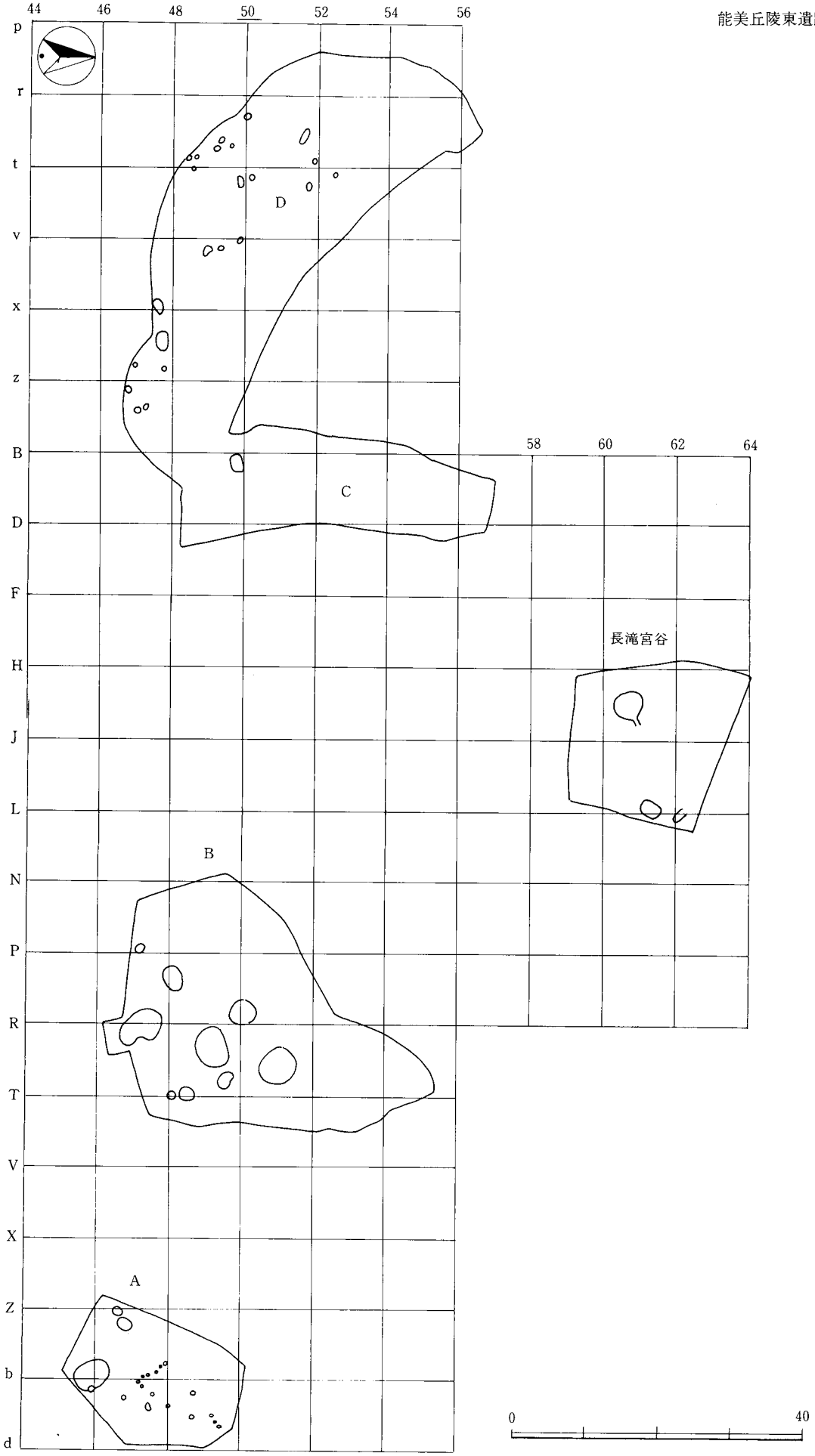
大口小松原遺跡の調査終了後に引き続き、本遺跡の遺構検出作業を東側の丘陵上（Ａ地区）から実施し、順次西側丘陵へ調査を進めた。調査全般の流れは、前章の大口小松原遺跡の調査経過に記述したので省略するが、西端調査区（Ｄ地区）は当初の開発区域が変更された事を充分に把握し切れていなかった為に準備が出来ず、調査は翌年の平成６年春に調査を実施しているので、章を改めて記述した。

3　遺構の配置と層序（第83～86図）

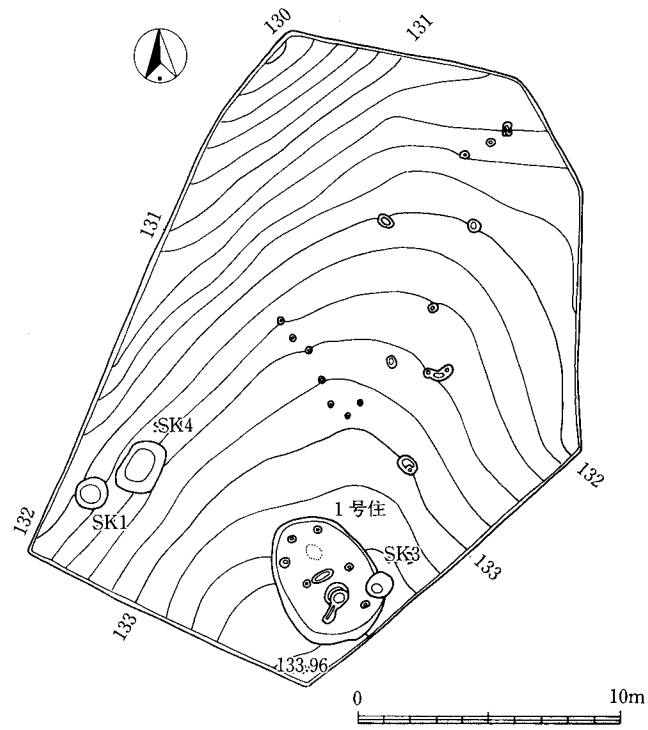
本遺跡の調査は丘陵尾根から北側に派生する幅の狭い枝尾根に限定している事から、丘陵頂上部の縄文時代中期集落跡の中核部分は不明であるものの、手がかりは得られたものと言える。分離した各枝尾根での遺構の配置状況を見ていきたい。

本遺跡の東端に当たるＡ地区は、南側に広がる平坦面から北方向に派生した狭い尾根の端部に位置する。南の頂上平坦面は略長方形を呈し、南北方向の長さ約70m、東西方向での幅約40mの規模を測り、西側則辺が高まり北東方向に緩傾斜を付けて落ち込んでいき南東方向に小谷が入り込んでいる。調査区は平坦面から北方向に一段落ち込み、さらに緩傾斜を付けて尾根幅を狭め急傾斜となる。傾斜が強くなる斜面上に、第１号竪穴式住居址と土坑数基が配置されていた。土坑と住居址は切り合い関係にあり、所産時期が異なるものと推察できる。住居址は広い平坦面とは直接的に結びつくものではなく、西側に展開していく尾根筋の広めの鞍部に展開していると考えられる住居址群との関わりが大きいと判断される。

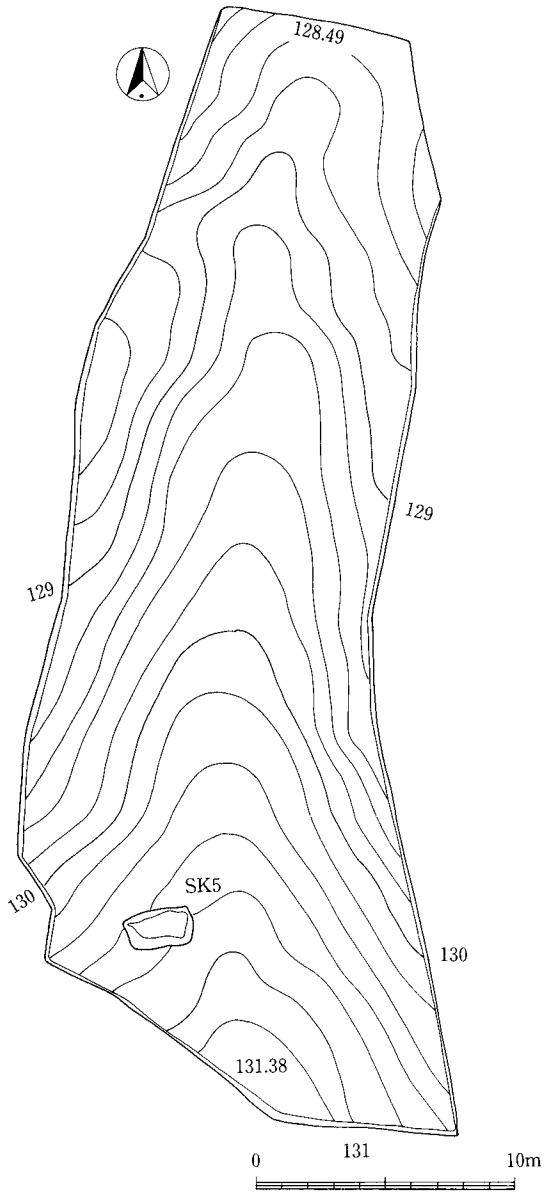
Ａ地区の尾根から約30m西に設定したＢ調査地区の尾根は、東西に主脈の走る尾根筋から派生して独立丘陵状を呈し、三方が急傾斜となって北の谷に落ち込んでいく。南北約50m、東西約30mの丘陵は、東側に寄せた形で



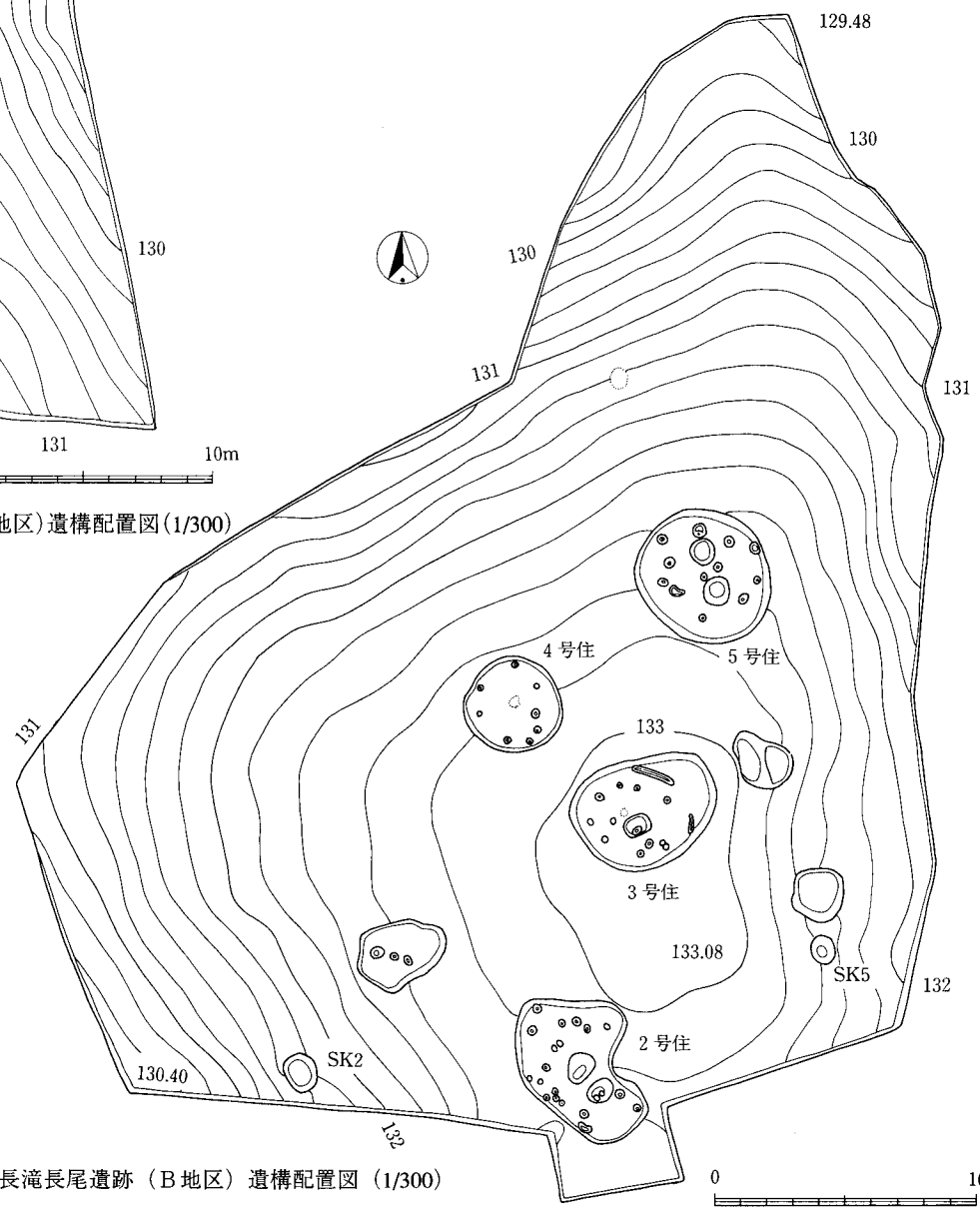
第83図　長滝長尾遺跡・長滝宮谷遺跡区画配置図（1/800）



第84図　長滝長尾遺跡（A地区）遺構配置図（1/300）



第86図　長滝長尾遺跡（C地区）遺構配置図（1/300）



第85図　長滝長尾遺跡（B地区）遺構配置図（1/300）

尾根筋が通り、西側に緩傾斜面を形成させる。検出した４棟の竪穴式住居址群は、東側の頂上部に集まる形で配置され、それぞれが約２～５ｍの間隔を開け、重複する住居址は見られなかった。東側の斜面には縄文時代の土坑、緩傾斜となる西側では焼土坑が立地している。

Ｃ地区は主脈の尾根筋から北側に派生する幅の狭い尾根で、頂上部は馬の背状の地形を形成する。本地区での遺物の出土は皆無で、遺構も調査区南端で焼土坑１基が検出されたに止まる。Ｃ地区の尾根を派生させた南の主脈は幅のある緩斜面を形成し、北西方向に幅を広げ高度を上げていく。丘陵頂上は全体的には緩傾斜であるが、端部においては瘤状の高まりが形成される地勢となる。

Ｄ地区は北西方向に伸びる尾根の北側部分に当たり、焼土面や焼土坑、性格不明の土坑群が検出された。出土遺物は少量に止まり、東側の谷の部分で散発的な状態での出土であった。

各調査区の層序においては、大口小松原遺跡での在り方に類似し、表土層約10cm程度が被い、その下に軟質の暗茶褐色土層が約10～20cmの厚さで堆積し、地山面は黄褐色粘質土である。Ａ地区には土器や石器が包含されていたが、Ｂ地区では北西斜面での出土が目立つ程度である。Ｃ地区では包含層の形成は希薄で、南端で見られるだけと限定され、大部分は表土層直下で赤褐色粘質土の地山面が現れた。

調査グリッドは大口小松原遺跡でのグリッドを延長させる形をとり、アルファベットの大文字・小文字・大文字という順序で東西方向での５ｍグリッドを延長、設定していった。南北方向での区画はアラビア数字の区画をそのままに移動させ、北西隅の杭でグリッドを呼称した。

4　検出した遺構と遺物

（1）竪穴式住居址

第１号住居址（第87～90図、図版35・36）

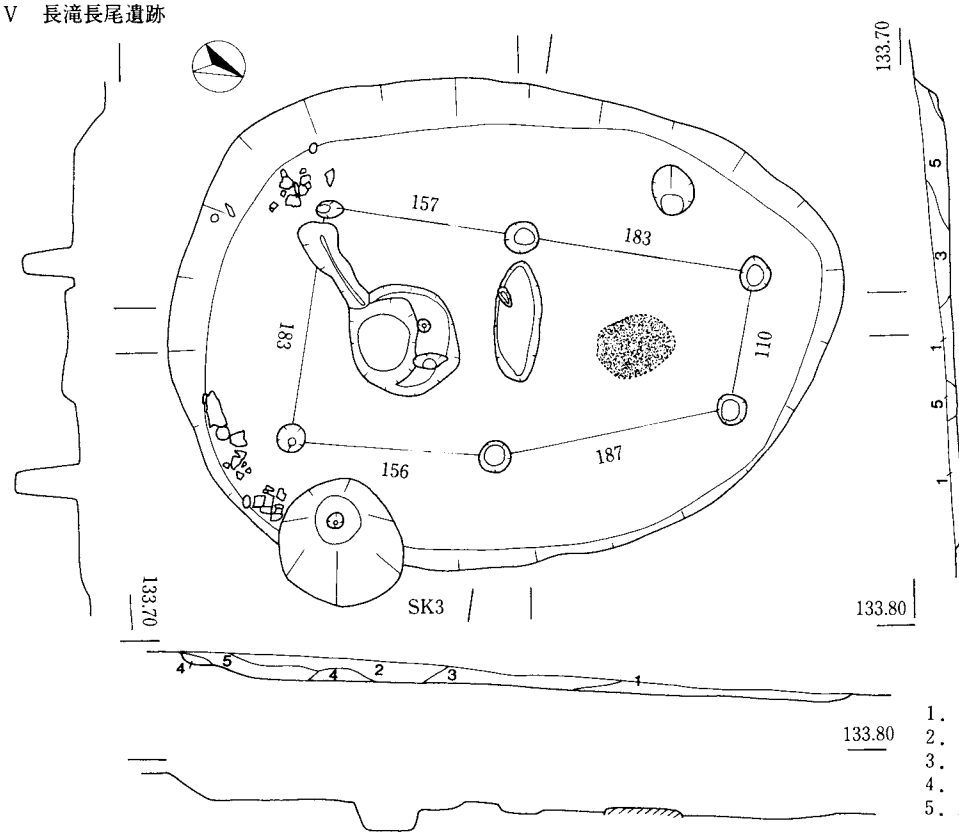
遺構　調査区の西端に位置する尾根で１棟だけ検出した住居址で、傾斜変換線から離れた緩斜面上に構築される。枝尾根である為に尾根幅が狭く、微地形的には東側に主軸が走る状況で、北西側に一定程度の緩斜面が広がり、その緩斜面に土器片が散布している状況が見られた。住居址からの眺望は良好とは言えず、東側には大口小松原遺跡が遮り、西側はＢ地区の尾根が迫り出す地形の中にあり、谷間の尾根上という状態である。表土除去の段階から土器片の出土が顕著に認められ、褐色の住居址覆土が楕円形となって現れた。住居址掘り方の南東隅にはSK３が切り込む形で設置される。

住居址の平面プランは、長軸方向を尾根筋に置く南北方向に長い長楕円形を呈し、長径530cm、短径385cmの規模を測る。深さは尾根側の南地区で20cmの堆積が認められたが、傾斜が強くなる北側では５cm程度と薄くなる。さらに、南端と北端の床面は最大で35cmという比高差が生じる状況となったが、主軸線上での土坑と炉址との検出面での差は10cmほどと値は小さくなり、居住当時での比高差は殆ど感じられない状態であったと思われる。覆土は褐色、にぶい褐色土層が地形の傾斜に沿う形で北方向ないしは東方向へと層理を見せて堆積していた。覆土からの遺物は層厚のある南地区での出土が顕著で、住居址の壁に沿う状況で２ヶ所での纏まりが見られた。

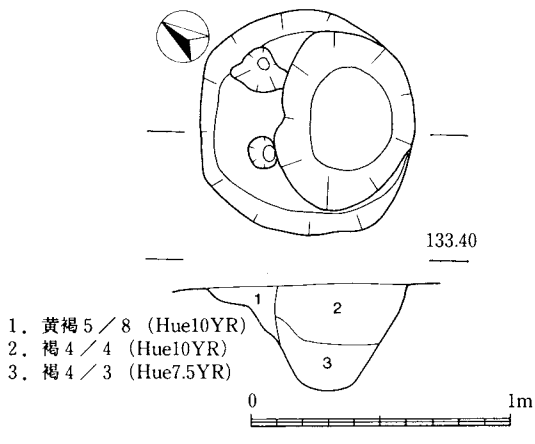
壁の立ち上がりは皿状を呈した緩やかな傾斜で、壁面下での溝の構築は認められなかった。長軸に載せた配置で、北側には地床炉と判断される焼土面が見られる。平面形が楕円形を呈し、60×50cmの範囲で赤変が認められる。炉址から約１ｍの間隔を置いて、二段掘りの土坑が設置される。土坑は平面楕円形をなし、南側に段を設けた掘り方で、長径88cm、短径82cmの規模を測る。深くなる南側では長径70cm、短径50cm、深さ42cmである。覆土は住居址本体と同じ褐色土が水平方向に堆積していた。覆土からの遺物は４片の土器、２片の輝石安山岩剥片であった。土坑の南東隅から幅約15cm、長さ70cmの溝が丘陵尾根側の壁に向けて掘り込まれ、排水用の溝と想定される。

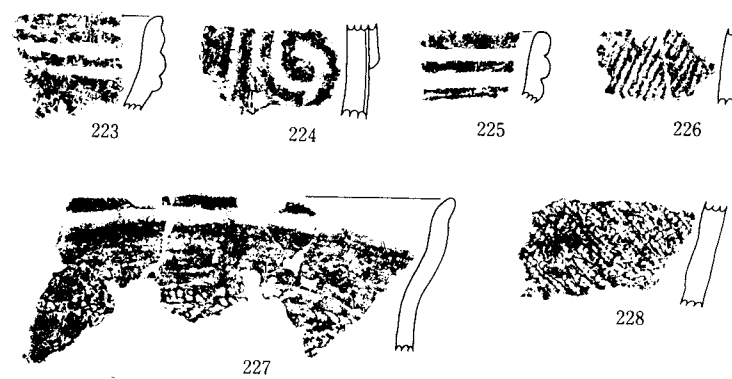
主柱穴は６個と考えられ、北側に幅を狭める配置で、炉址、土坑を囲う形を取る。

土器　223は内屈する口縁帯で、２条の半隆起線文が巡る。灰黄褐色を呈し、胎土は良好であるが、焼成は並である。224は基隆帯の付く体部片で、半隆起線文で基隆帯周囲に区画文様を構成する。暗灰褐色を呈し、胎土には

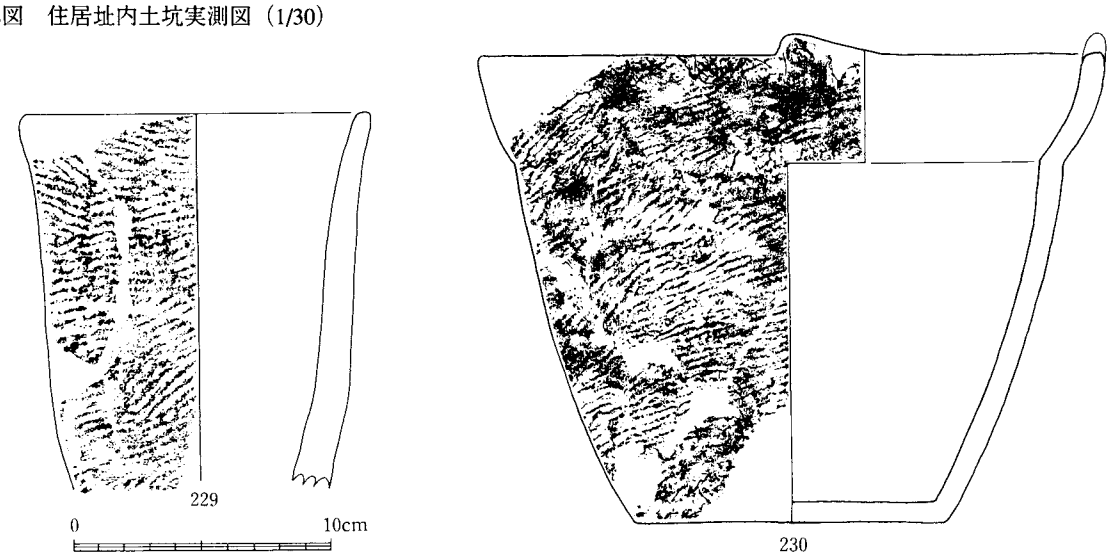


第87図　第1号住居址実測図（1/60）

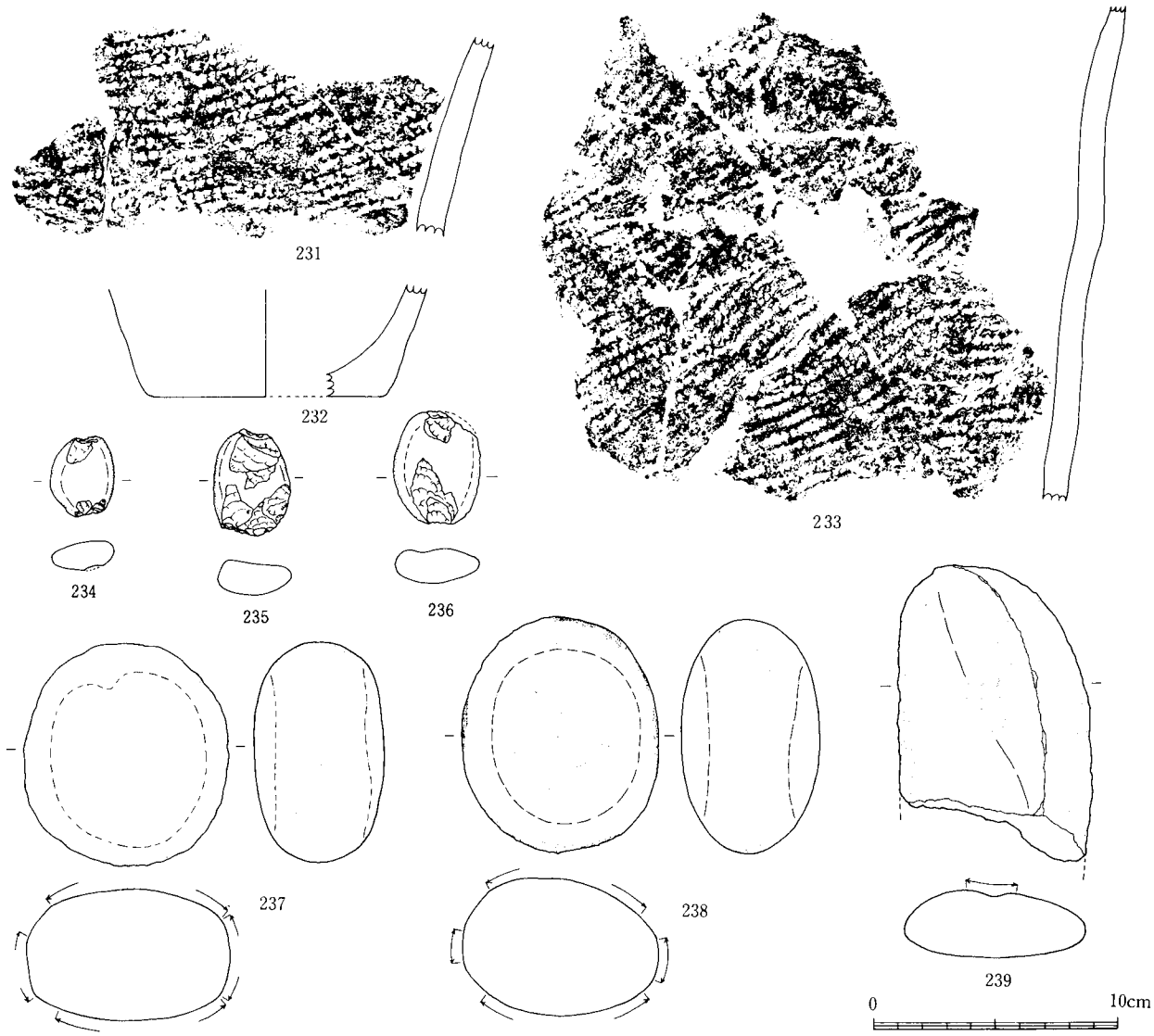




第88図　住居址内土坑実測図（1/30）

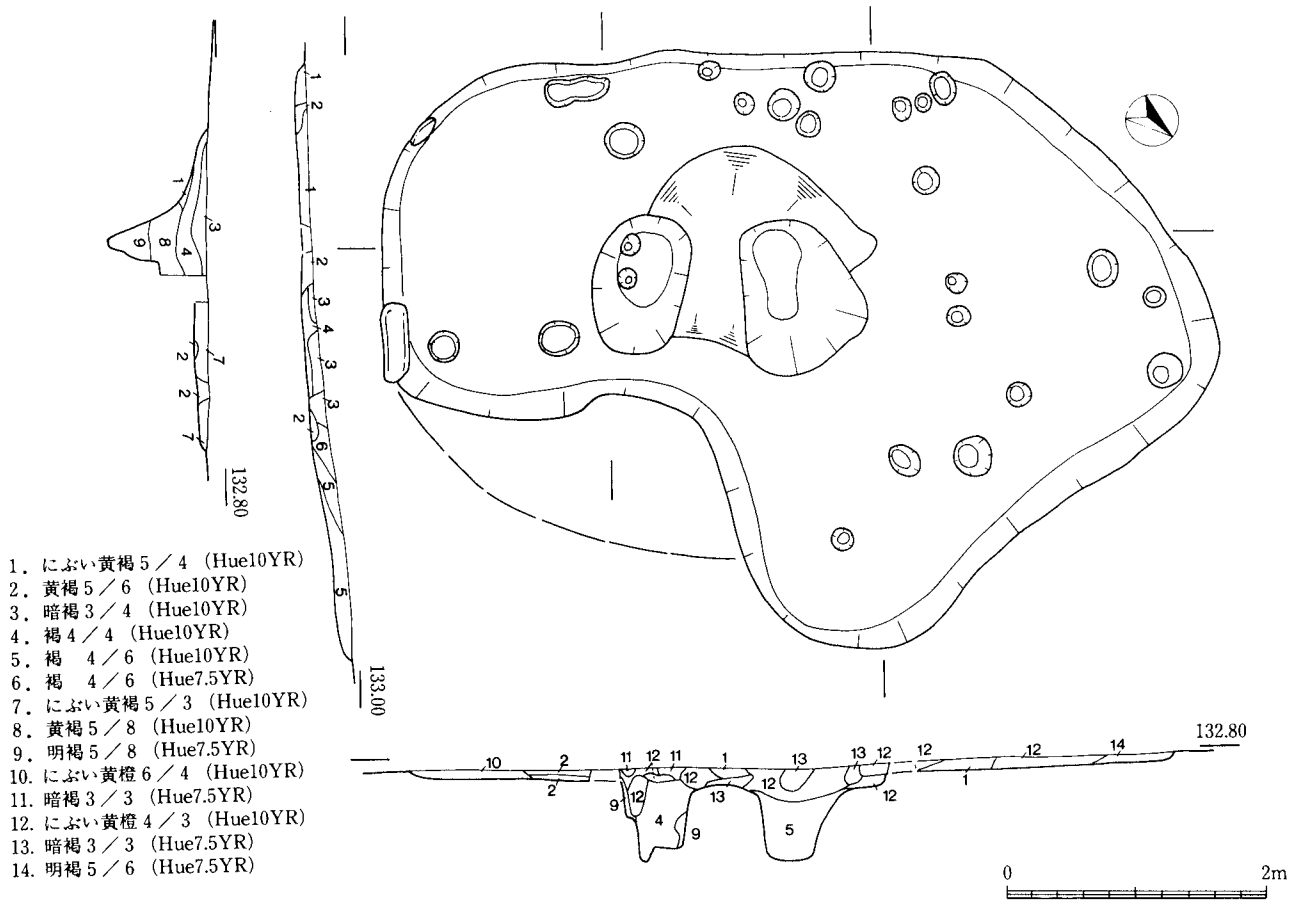


第89図　第1号住居址出土土器拓影・実測図（1/3）

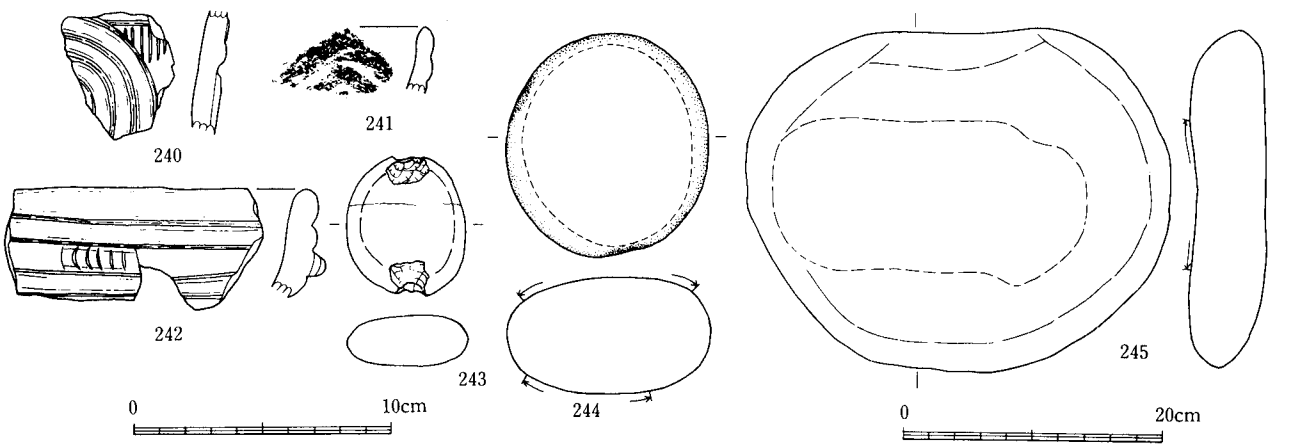


第90図　第１号住居址出土土器・石器実測図（1/3）

多量の微砂粒が混入する。225は彫りの深い半隆起線文が巡る口縁部片で、暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒が若干量混和され、焼成は堅緻に見える。226は器表に煤の付着が見られ、弯曲する事から頸部付近の断片と推定される。淡茶褐色を呈し、胎土には定量の微砂粒が混和され、焼成は並である。227はキャリパー状口縁の形態を辛うじて止めている口縁で、端部が突出する形に貼付が施され内面に段が形成される。口縁帯は横方向での撫で調整が入念に施されて無文帯に整えられ、頸部には押圧した縄文が見られる。器表には煤の付着が顕著で、色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が顕著である。228は焼土粒の大きなものが見られる体部片で、堅い撚りの縄文が細かく施文されるが、内面では継ぎ目部が盛り上がる形態を残す粗雑な調整で、割れている部分も継ぎ目の横方向である。淡褐色を呈し、焼成は良好である。229は口径13.6cm、現器高14.5cmに図上復元できる小型の深鉢である。下端は器厚が厚みを増す事から底部近くと想定でき、現器高と大きな差異はないものと想定される。図上では判然としないが、口縁部は外に開き、底部近くでの体部は外膨らみの器形を呈し、単純なバケツ状器形ではない。内面の調整は撫でによって整えられ、継ぎ目部分は全く消し去られ、炭化物の付着は見られない。上半部は煤の付着が顕著で、下半部は二次的火熱により橙色を呈する。胎土には微砂粒が混和され、焼成は並である。230は口径24.2cm、器高19.1cmに復元される深鉢で、口唇に突起が付された入り字状口縁である。内湾気味に立つ口縁部が明確で、頸部での内面には稜線が形成される。231、233は同一個体の深鉢体部片で、大型土器が想定できる。器面全体にＬＲの斜縄文が施され、内面には継ぎ目部分での凹凸はあるものの平滑に整えられる。器面には煤の付



第91図　第２号住居址実測図（1/60）



第92図　第２号住居址出土土器・石器実測図（1/3・1/6）

着が顕著に見られ、色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒、微砂粒が多量に混和される。232は底径10cmに復元できる深鉢の底部片である。内面での立ち上がりが弯曲した在り方を示す事から、浅鉢器形の可能性も考えられる。色調は灰黄褐色を呈し、胎土には微砂粒の混和が多く、器面はザラ付いた状態である。

石器　234～236は打欠石錘で、小型の３点が出土した。不整楕円形の河原礫で、長軸の両端を打ち欠いて紐掛け部成形している通有の製品で、いずれも片面側では剥離部上下が繋がるような状態となり、片面側からの打撃が行われた可能性が高い。237は両面に磨き面、側縁部は面取り状になるもの。238の両面はいびつな面となるが、片寄った位置で磨き面が認められ、側縁部には面の形成が弱い形での使用痕が見られる。239は長楕円形の石材が半分ほど欠損しているもので、片面に比較的深い窪みが１箇所設けられ、長軸線に載せて小さな窪みが付く。

輝石安山岩の剥片５片、80ｇが見られるが、製品は検出されなかった。

時期　入り字状口縁の深鉢の在り方から、新崎式から上山田式までの幅で考えねばならないが、半隆起線文をつける深鉢片は古府式段階まで下るように思われる。しかし、壁面近くでの出土状況から上山田式期での所産と推定したい。

第２号住居址（第91・92図、図版38）

遺構　北側に派生する尾根は鞍部をおいて標高を上げる独立丘陵状地形のＢ地区には、４棟の住居址が配置されていたが、尾根筋の通る南側の鞍部に近い位置で検出したのが本住居址である。北約５ｍに第３号住居址が位置する。

平面形が歪んだ楕円形を呈するのは、北東側に風倒木痕の撹乱が入り込んでいる為に明確な形での掘り方が捉えきれなかった為である。

平面プランは長楕円形を呈し、尾根筋に並行する長軸の南北方向で655cmを計測することが出来るが、短径である東西方向の幅は東側に地山が隆起している風倒木痕の為に確定するまでには至らなかったが、住居址の中央に配置されている貯蔵穴からの折り返しから約360cm程度と想定される。

竪穴式住居址中央部に、住居址長軸と直行する配置での２基の土坑が検出された。北側の土坑は、平面楕円形を呈し、長径122cm、短径95cm、深さ約60cmを測る。掘り方は全体に丸味を帯びた状況を示し、覆土はほぼ均質な褐色土であった。土坑の南側部分は幅50～60cm程度の皿状をなした落ち込みが巡っている。南側の土坑の上面を覆う状態が土層断面で検出された事から、土坑には新旧の関係が成り立つものと考えられる。南側の土坑は整った形での楕円形を呈し、長径110cm、短径72cm、深さ約50cmを測る。底面は平坦であるが、端部に深さ15cm程度の２個のピットが掘り込まれている。

床面は南北方向で傾斜は目立たないが、丘陵の等高線に直行する東西方向では傾斜が強く西に向けて傾き、比高差は25cmにも達する。風倒木痕によって地山が持ち上がっいる為と言える。床面でのピットは北側部分に不規則な配置で検出されたが、木の根の撹乱によるものと判断できるものが目立ち、柱穴として確定できるまでには至らなかった。南端部には石皿状の扁平な河原石が掘り方に沿うような状態で出土した。また、隣接した東側には長さ60cmの石が、住居址検出面での上面で出土したが、当時の生活面での配置と推定する事が可能と思われる。

炉址は床面では面として確定できるものは認められず、若干の焼土粒が覆土で見られる程度であった。

遺物の出土量は覆土が浅いこともあり、極少量であった。

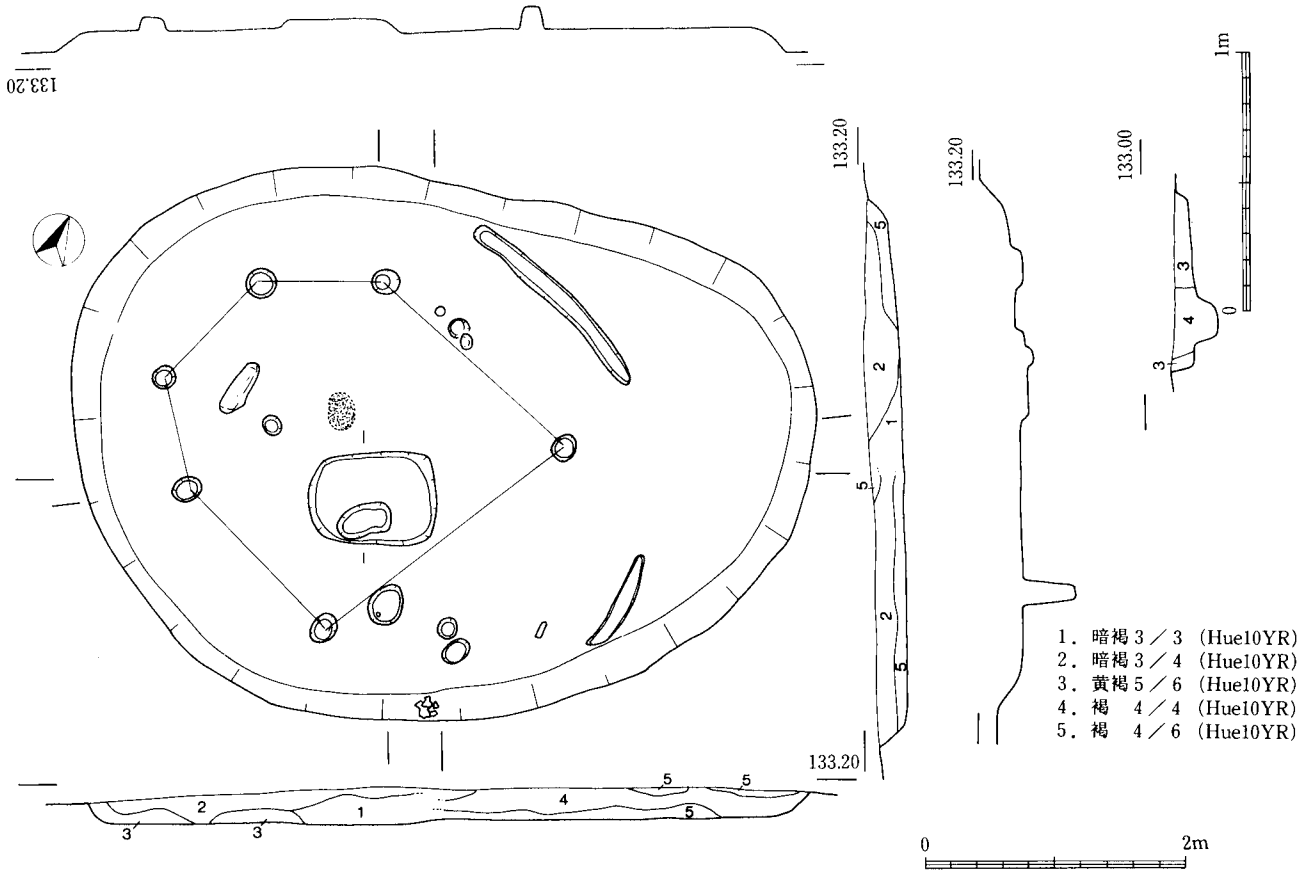
土器　240は渦巻文の深めの半隆起線文が引かれている断片で、余白部に篦先による連続刻み目文が施される事から、上山田式期の深鉢片と想定される。内面は比較的丁寧な撫でによって面が整えられる。暗褐色を呈し、胎土には若干の砂粒が含まれる。242は口縁が内屈する深鉢で、幅広の平行半隆起線文が巡らされ、屈曲部に隆帯が貼付される。隆帯上には粗雑な形での爪形文が刻まれる。色調は橙色から暗褐色を呈し、胎土には多くの焼土粒、砂粒の混和が認められ、全体的に砂気の弱い仕上がりである。半隆起線文や胎土の在り方から、古府式期の所産が想定できる。241は波状口縁深鉢の波頂部片で、全体に磨耗が進んでいる為に幅広の半隆起線文が微かに確認される状態である。色調は淡灰褐色を呈し、胎土には焼土粒の混和が見られる。古府式期であろう。

石器　石器の出土も少なく、打欠石錘、磨石、石皿が各１点づつ出土しただけである。244の磨石は、両面共に平滑になった擦り面が認められる完形品である。245の石皿も完形で、長軸に平行した位置に幅11cm、長さ20cmの窪みが敲打によって掘り込まれているのが、痕跡として見る事が出来る。擦り面は窪みが付けられた部分を中心にし、全体に広がる。

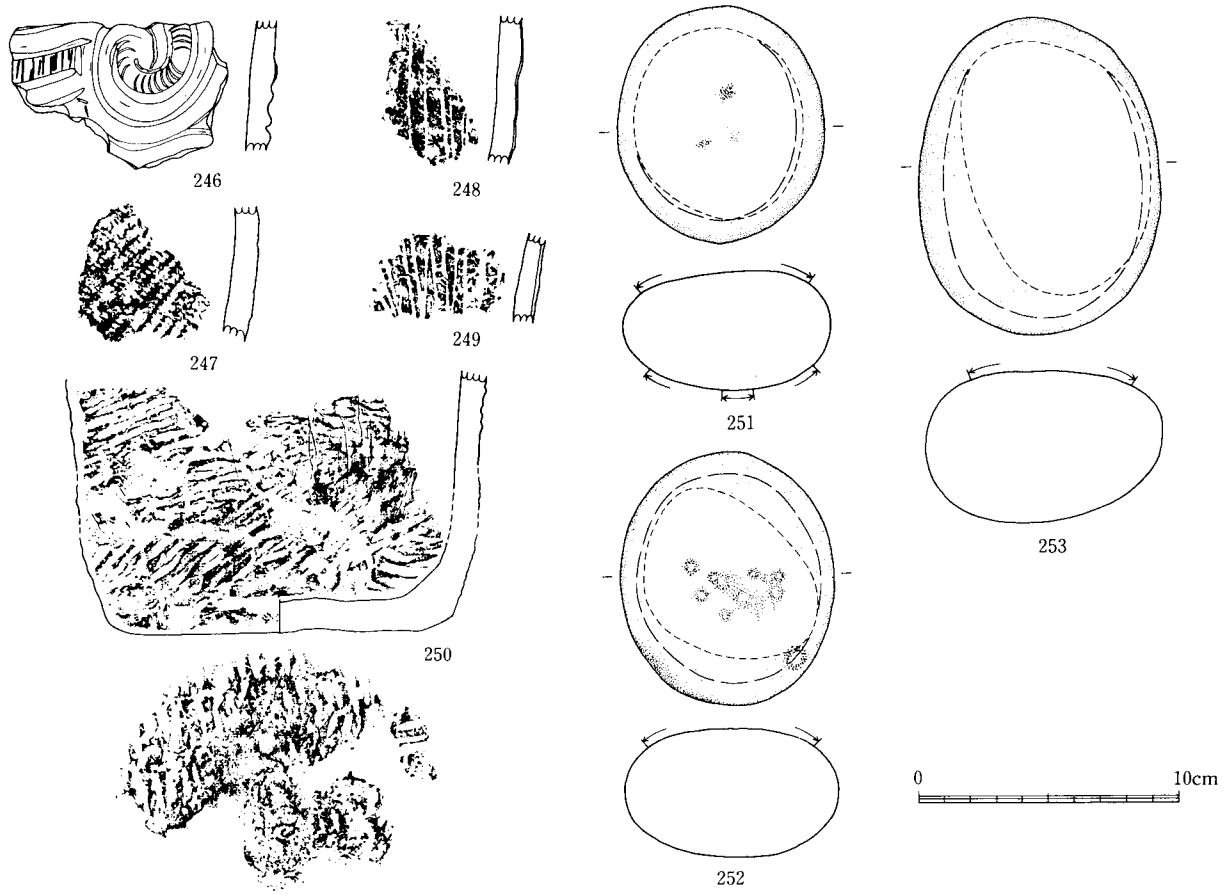
時期　中期古府式期での位置付けが考えられ、複数の住居址内土坑の在り方から前後幅を広げた形で考慮しなければならない。

第３号住居址（第93・94図、図版39）

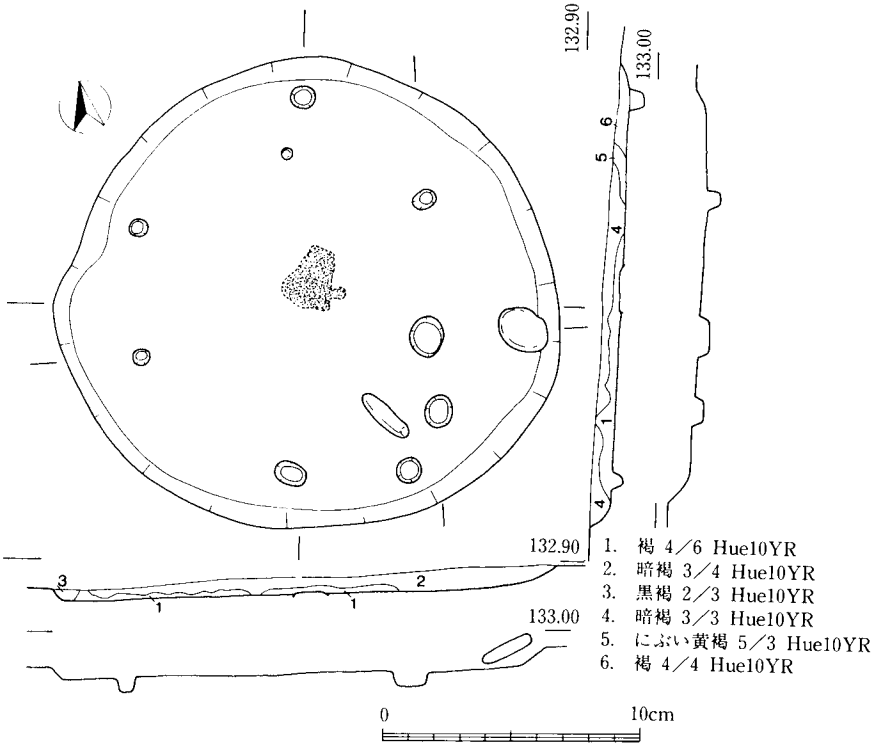
遺構　Ｂ地区丘陵の標高の最も高い位置（標高約133m）を占地している竪穴式住居址で、北側に手取川扇状地



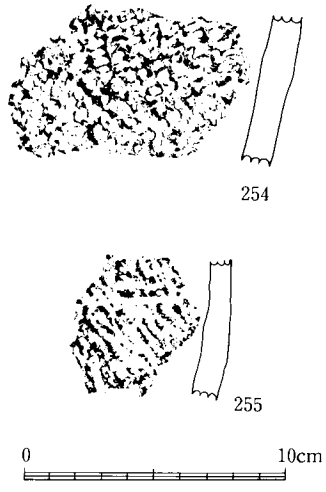
第93図　第3号住居址実測図（1/60）



第94図　第3号住居址出土土器・石器実測図（1/3）



第95図　第４号住居址実測図（1/60）



第96図　第４号住居址出土土器
拓影実測図（1/3）

の眺望が広がる。住居址を中央にした形で、丘陵の頂上平坦面が南北方向に長い形で広がり、東西方向に主軸を置く持つ形で掘り込まれる。北西方向約２ｍに第４号住居址が、北方向約５ｍに第５号住居址が配置される。

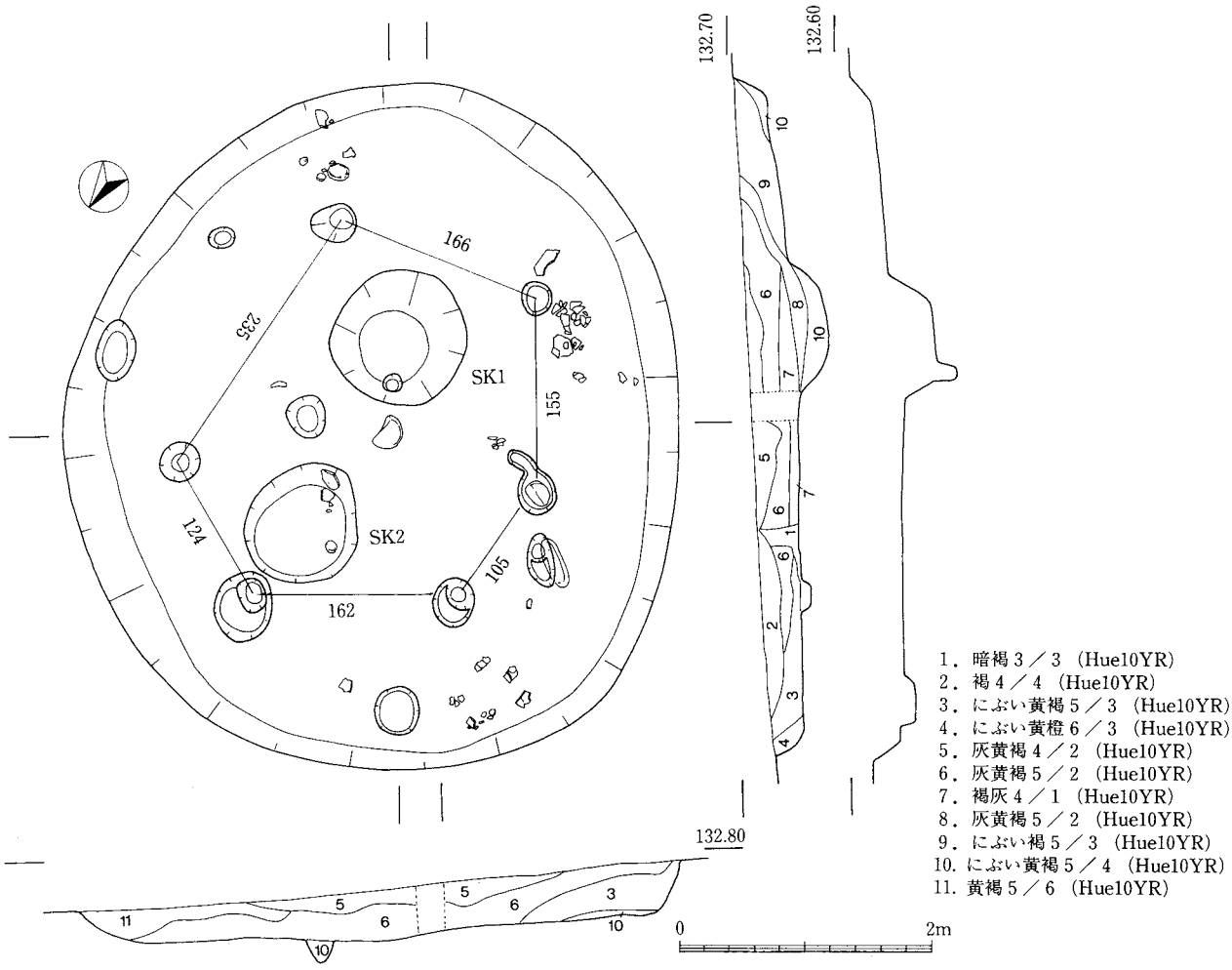
住居址の平面プランは長楕円形を呈し、長径525cm、短径420cm、検出面からの深さは約26cmの規模を測る。覆土は大きくは上下の２層に分離され、上層は暗褐色系統、下層は地山土に類似する土であり、床面の精査の段階では判然とは捉えきれなかった。覆土からの遺物の出土は少なく、上層から長さ50cmに近い棒状の河原石や礫が見られ、南側の掘り方面に沿う位置で土器が見られる程度であった。床面は平坦と想定されるが、明確には把握できず、焼土面のある炉址が浮き上がる状態まで削り込む形となった事から確定はできない。床面の東側には壁下から伸びる形の溝が、ハの字形に検出された。幅約14cm、深さ５cm程度のもので、中間の約130cmばかりが抜ける状況となる。本集落の中で壁溝が巡らされている住居址は見られず、また、向き合う部分での溝は確認できない事から木の根による撹乱の可能性が考えられる。が、床面でのピットの配置が溝を越えない形で検出されている事から住居内での区画を示す事とも見られ、北東側の地区が撹乱によって住居址に含めた事も考えられ、性格については明確には出来なかった。

炉址は地床炉で、住居中央から西側に寄せた位置で検出された。平面楕円形を呈し、長さ30cm、幅20cmの小規模なものである。床面の確定が困難であった為に、炉址全体が検出面から浮き上がる状況となった。

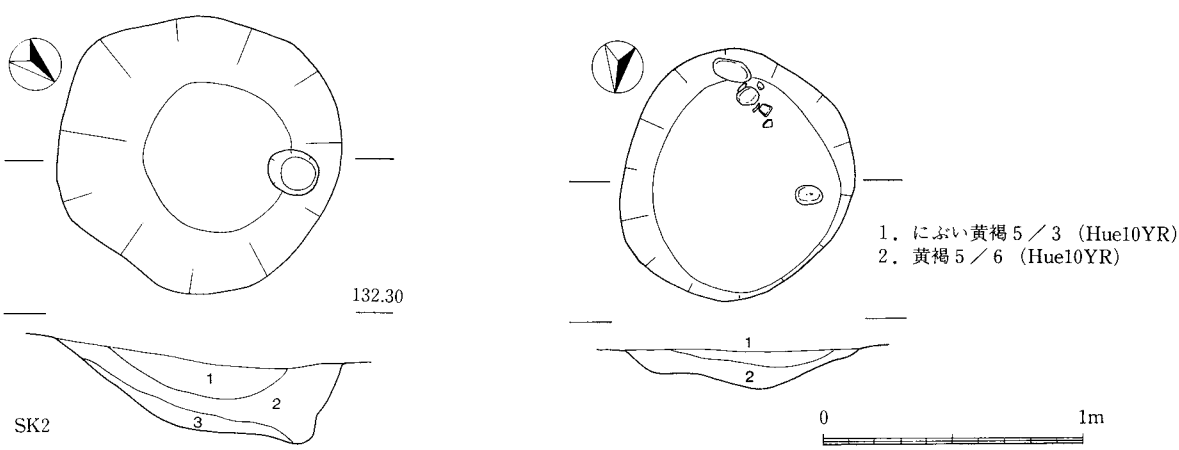
貯蔵穴は二段掘りで、炉址に南側約20cmに隣接し構築される。住居址の長軸に平行した平面長方形プランを呈し、長さ100cm、幅70cm、検出面からの深さ10cmの規模を測る。深く掘り込まれる部分は、片側に寄せられた位置で楕円形を呈する。長径43cm、短径22cm、深さ８cmを測り、土層断面から浅い部分を切り込んで作られた事が想定できる。

住居の主柱穴は４本主柱に、出入口部を推定される２本が加えられる形で考えたが、確定は出来ない。

土器　246は比較的小型の深鉢体部片で、隆帯となる渦巻文が主文様である。周囲の半隆起線文は上端側が深くなる形で施文が施され、余白部には縦位短線が篦先によって入れられる。器表面の色調は二次的火熱により淡橙色を呈し、内面は暗褐色で下側に炭化物の付着が見られる。胎土は器表に砂粒が目立たない状況で、遺存状態を含めて良好と言える。内面の調整は撫でによる押さえだけで止められている。基隆帯が横方向へ伸びる形が推定



第97図　第５号住居址実測図（1/60）



第98図　住居址内土坑実測図（1/30）

でき、余白部での処理文様の状況から上山田式期ではなく古府式期での所産と考えたい。247は撚りの細かな縄文が施文され、内面が丁寧に磨かれた体部片で淡褐色、内面は淡橙色を呈する。胎土には微砂粒が若干混入する程度で、焼成と共に良好である。248、249は同一個体と見られる深鉢片で、縦方向の篦先による沈線文が密に施文される。器表面の色調は淡茶褐色を、内面は暗褐色を呈し、胎土には細かな焼土粒の混和が顕著に見られ、遺存状態は良いとは言えない。250は壁面近くから出土した大型深鉢の底部で、底径12cmに復元される。施文は無節斜縄文で粗い形で施文し、底面には網代の簾状圧痕が残る。器表面は火熱による明橙色を、内面は灰褐色を呈し、一部に炭化物の付着が見られる。胎土は大きな砂粒や焼土粒が混和され、焼成は並である。本住居址の土器群は、247を除いては古府式土器の範疇に含まれると判断される。

石器　完形の磨石が3点出土した。251は片面に傷のような窪みが残るもので、両面に磨痕が認められる。252、253は片面だけに磨痕が見られる。

時期　古府式土器と見られるものの出土から、古府式期での所産と位置付けたい。

第4号住居址（第95・96図、図版40）

遺構　南北に尾根筋が伸びる西端に位置する竪穴式住居址で、傾斜変換線の手前の平坦面に立地し、南東約2mに第3号住居址、北東約4.5mに第5号住居址が配置される。

平面プランは丘陵尾根筋と交差する東西方向に長い楕円形プランを呈する。長径392cm、短径368cm、検出面での深さは15cmの規模を測る。覆土は暗褐色系の土が丘陵の尾根側に寄る東側で目立ち、北側および西端地点では地山土に類似する黄褐色、褐色系の土が分層出来る状態で堆積している。住居址の丘陵内での位置を反映したと考えられる。遺物の出土は少なく、縄文施文の深鉢体部の3片が見られるに過ぎない。覆土の上層部に長さ約45cmの棒状を呈する河原石と長径40cmの扁平な礫が見られたが、それらの表面に使用痕の確認は出来ず、道具ではなく住居に付属した性格を有すると考えられる。他の住居址でも出土が見られる事から、時期的に限定される状況での住居に付随する一般的な在り方と思われる。

炉址は地床炉で、中央部に不定形な平面形で検出された。長さ50cm、幅50cmの規模で、全体が床面から3～6cm程度盛り上がる形での検出となった。

床面は全体的に北及び西に傾斜する形をとり、主柱穴と想定されるものは見られず、掘り方近くに配置される径15cm前後の小ピットの配置が、本住居址での柱穴痕跡と想定せざるを得ない。

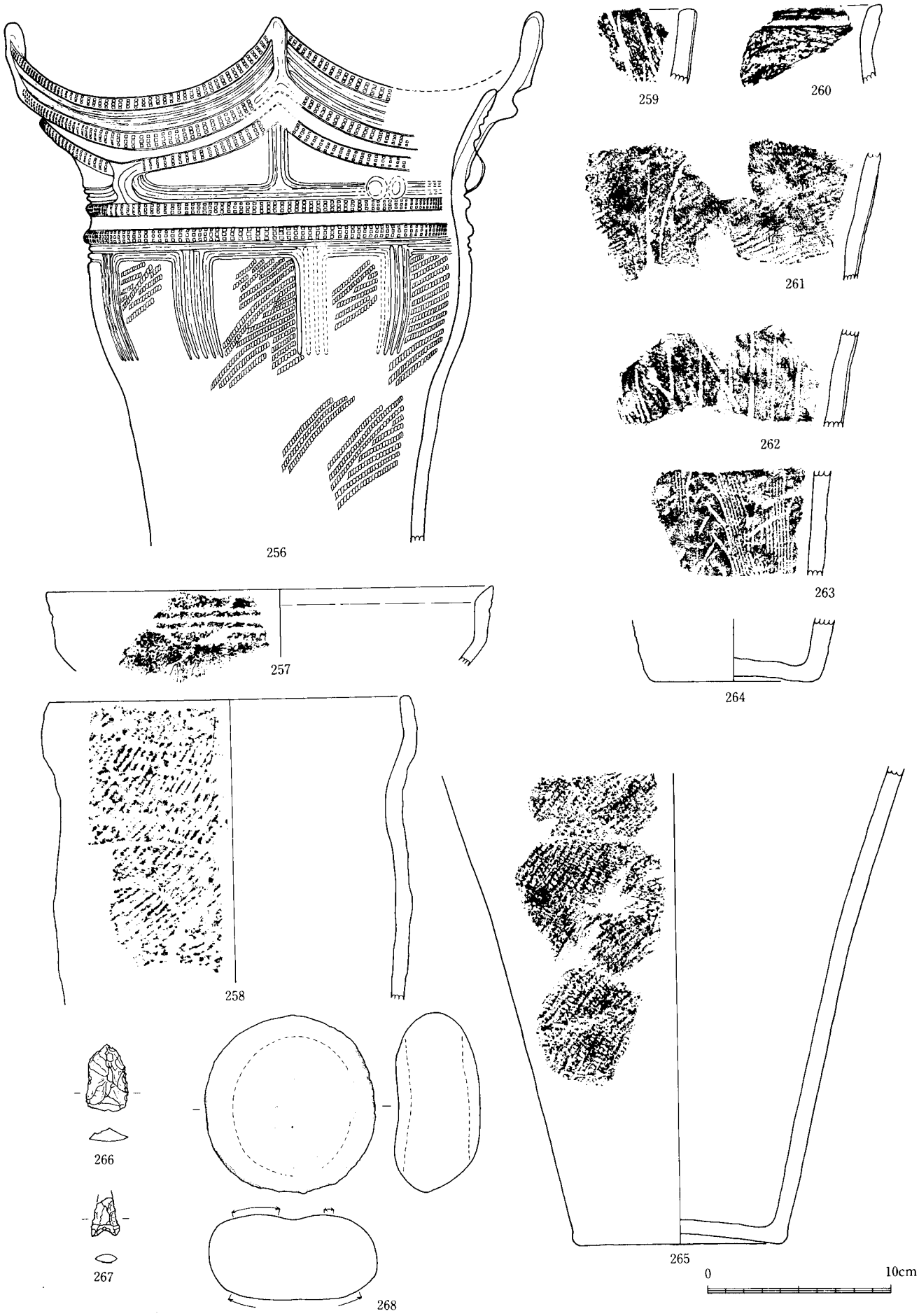
土器　254は厚みのある体部片で、大型深鉢片と推定される。縄文は粒の大きなもので、器表の乾燥がある程度進んだ段階で施されたと想定される。破損部の割れ口の芯部に炭化物が線状に入り込んでいるのが見られ、体部にヒビが入っても使用していた状況を示すと思われる。内外面とも灰褐色を呈し、胎土に若干の砂粒の混入が認められる程度の状態で、焼成も良好である。255は単節斜縄文が巡らされた体部片で、先の254と共に上下の判別が付けがたい。内外面とも輪積みの凹凸が残る粗雑な成形で、内面の撫でも粗略である。暗茶褐色を呈し、胎土には微砂粒、砂粒が多く、焼成も良くない。

時期　所産時期の想定は困難であるが、古府式期以降が推定される。

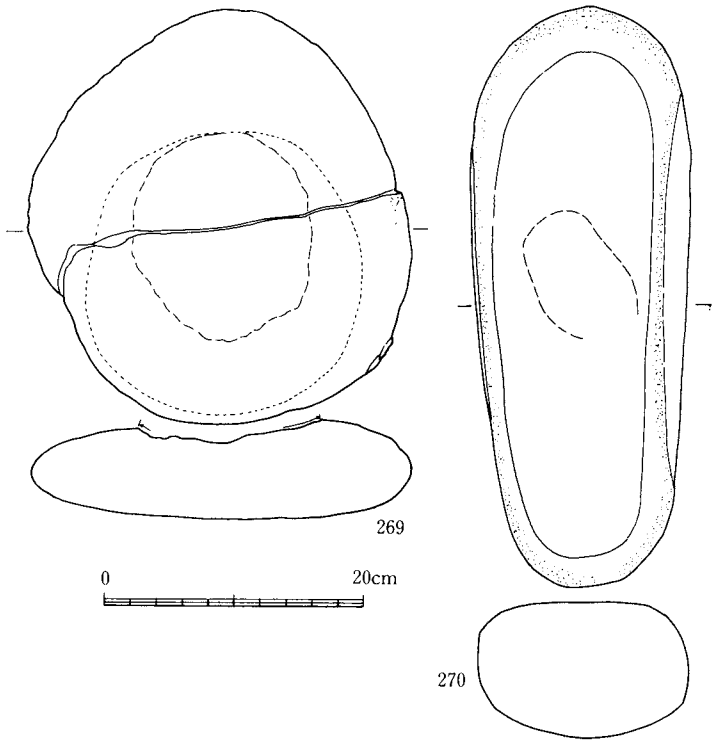
第5号住居址（第97～100図、図版41）

遺構　南北に伸びる丘陵の北端に当たり、傾斜面が変換する地点に立地する。尾根幅は狭まり、住居址から約25m北で崖状となり谷に落ち込んで行く。

平面プランは尾根筋に平行して長軸を置く整った楕円形で、長径546cm、短径490cm、床面までの深さは43cmの規模を測る。平面規模や深さにおいては本集落址の中での最大級である。覆土は中央部での腐植土層が目立つ状況で、丘陵内での占地を反映した形で谷側の北および東に向けて傾斜する形で堆積しているのが見られた。尾根側に当たる南端では、最も早くに堆積した地山土に類似する黄褐色系統の土層が見られた。覆土内からの遺物の出土量は、他の住居址での在り方とは際立った違いを見せる。覆土の中層から下層位での出土が目立ち、特に、



第99図　第５号住居址内出土土器・石器実測図（1/3・1/2）



第100図　第５号住居址出土石器実測図（1/6）

尾根側に当たる南、西側地区の壁面に隣接する位置での出土が顕著であった。また、第２・４号住居址でも見られた様に、40cmを越える棒状の河原礫及び扁平な礫が出土している。

床面は全体に凹凸の残る在り方を示すが、特に掘り込みが最も深くなる南地区で、段状となるのが留意された。床面全体は丘陵の傾斜に沿うように南から北に向け、西から東に向けて傾斜する状態で検出され、最大での比高差はそれぞれ20cmを測る。

床面で２基の土坑が検出された。住居の中央から南に寄った位置に、平面円形の土坑が設置されている。径111cm、深さ27cmの規模で、南側の掘り込みは緩い傾斜である一方、北側では角度が強くなる違いが見られた。覆土は褐色系統の土がレンズ状に堆積し、開口した形での使用状況が想定される。北側に位置する土坑は僅かに楕円形プランを呈し、長径100cm、短径90cm、深さ15cmを測る。床面は起伏のある状態で、僅かであるが焼土粒が検出された事から炉址であると判断された。南の掘り込み面近くで浮いた状態で磨石と土器片が出土した。

柱穴は炉址と土坑を囲む形で、主軸方向に梁を渡す形での６本主柱と想定される。

土器　256は貯蔵穴から一括出土した深鉢を図上復元したもので、４波頂を付ける典型的な古府Ⅱ式土器である。口径・器高ともに約30cm程度に復元でき、頸部で括れて口縁部が外反して立ち上がり、腰部が張って体部が絞り込まれる器形をなす。波頂部には内面にまで伸びる状態で隆帯が貼付され、口縁部に平行する状態で波頂を繋いで隆帯が延ばされる。隆帯上には連続櫛状具刺突文が密に施され、頸部と接近する位置には縦の突起が貼付される。頸部の隆帯に挟まれた狭い空白部は、撫でによって無文帯として調整される。隆帯間に施文される狭い半隆起線文は中央部が尖り気味になる施文となる。色調は茶褐色を呈するが、体部での破片は火熱による変色が顕著に認められ、全体に煤の付着が見られる。胎土には若干の砂粒が混和され、遺存状態は良くない。257は口径25cmに復元できる浅鉢で、口縁部と体部のつなぎは面を形成せずに収め、口縁端に平行半隆起線文が施されるが、確認は出来ないものの施文が集約される部分があると想定される。口縁内面には面が形成され、段が付けられる。淡褐色を呈し、胎土には微砂粒、焼土粒が多量に含まれる。258は口径20cmに復元でき、口縁部がキャリパー状に成形された縄文施文の深鉢である。器表には輪積みの凹凸が見て取れる状況で、破損も接合部分から剥がれたという状態である。内面の半ば程の位置に炭化物の付着が見られる。色調は灰黄褐色を呈し、胎土に若干の砂粒、

焼土粒が見られ、焼成は並である。259は口唇に面を付け、縦の不揃いな沈線が引き下ろされる深鉢片である。暗茶褐色を呈し、胎土には微砂粒の混和が著しい。260は外反する口縁を持つ深鉢で、端部に撫でが施された沈線が巡る。縄文施文の後に撫で調整が施された為に、縄文の状態が判然とは見られない。内面は全体が黒褐色をなし、丁寧に磨き調整がなされる。胎土は精良で、焼成も良好である。器形や胎土、調整の在り方から、他地域からの搬入品の可能性が高い。261は篦先による２本の沈線が見られる体部片で、全面に浅い形の縄文が施文される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土に微砂粒が若干見られる程度と良好で、焼成は堅緻に上がる。器表には煤の付着が見られる。262は厚手の成形の体部片で、疎らな状態で縦沈線が施される。茶褐色を呈し、胎土に多くの砂粒が混和される。263は木目状撚糸文が施文された体部片で、輪積み接合部から剥落した状態である。色調は黄褐色を呈し、胎土は精良で砂粒は殆ど確認できない。264は底径9.4cmを測るもので、窪み底に成形される。底面は撫でがなされている為に網代痕跡は不明である。淡茶褐色を呈し、胎土に多くの砂粒が見える。265は口縁部を欠損しているが、一括出土であり復元できた深鉢である。底径11.8cm、現器高26.4cmを測る大型品で、上げ底に成形される。

本住居址の編年的位置は、256の深鉢に示される古府Ⅱ式期に当てられ、257の浅鉢、259、262などが加わるものと見られるが、263の木目状撚糸文、258の口縁部が膨らむ深鉢は中期前葉に遡る位置付けが想定される。

石器　266･267は石鏃で、粗雑な成形である。266は大型品であるが、剥片の側縁に調整を加えて簡略に整えた製品である。輝石安山岩質の剥片は４片、50ｇ、フリントの剥片３片、3.47ｇ、石英粗面岩３片、22.3ｇが得られているが、石核は出土しなかった。267は先端を欠損したもので、両面調整で成形している。

268は両面に複数の窪みが見られる凹石で、深く抉られる製品は希少である。また、両面共に磨き面が見られ、側縁部には敲打による不規則な欠損部が認められる。

時期　典型的とも言える古府式土器の出土から、本集落址の中で最も新しい時期の古府Ⅱ式期での所産と判断される。

(2) 土坑

本遺跡での東側のＡ・Ｂ地区で検出した土坑は５基であるが、検出順に番号を振り込んで発掘を行っている事から時期的に縄文時代から外れる土坑も含むことになり、性格については個々に記述した。

SK１（第101図、図版42）

長滝長尾遺跡の東端、Ａ地区で検出した円形の土坑である。南北に伸びる丘陵の西側斜面、小谷のはじまる地点に近い位置に当たる。北東に隣接してSK４が位置し、東約７ｍに第１号住居址が配置されている。斜面に立地する事から微妙に平面形が変わると言え、等高線に平行する南北方向は122cm、直行する東西方向の規模は126cm、尾根側での深さは約20cmを測る。床面は平坦に整えられるが、傾斜に沿う形で西側に低くなる。覆土は３層に分層でき、褐色、暗褐色が尾根側から被さるように堆積している。覆土からの遺物は認められなかったが、焼土坑に当たると考えられる。

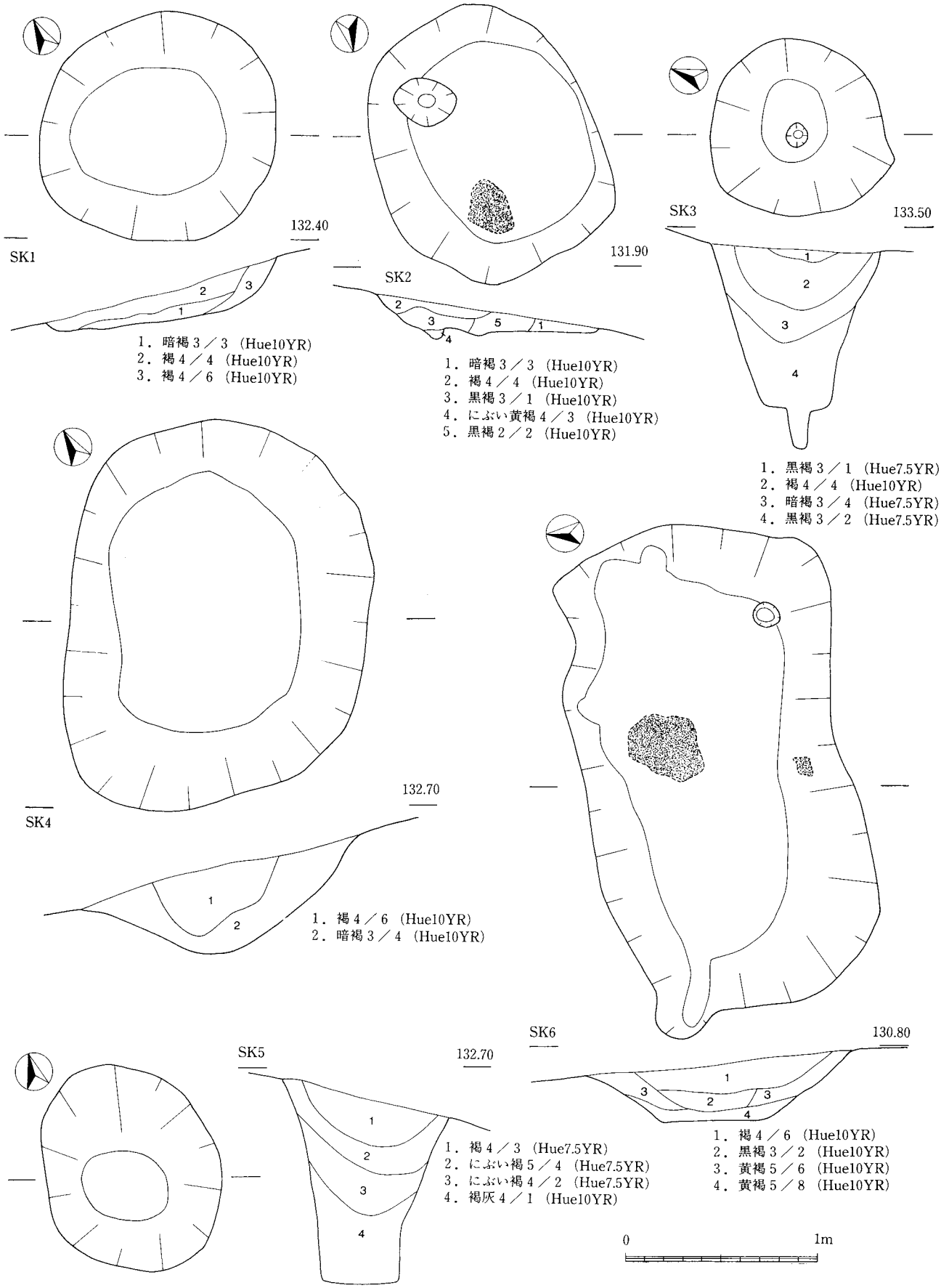
SK２（第101図、図版42）

Ｂ地区の西側傾斜面で検出した焼土坑で、先のSK１土坑に類似する立地状況を持つ。東側約８ｍに第２号住居址が位置している。

平面楕円形を呈し、等高線に沿う南北方向の長さは141cm、東西方向では120cmの規模を測る。掘り込みは尾根側で約20cmの深さを持つが、谷に向いた西側では殆ど深さを捉えきれなかった。掘り込みの壁は緩やかな立ち上がりを示し、床面は全体に谷側に傾斜するが整えられ、北側に焼土面が残る。また、木の根による撹乱穴が幾つか見られた。覆土は黒褐色、暗褐色が炭化物を交えて塊となって堆積している状況が見られ、埋め戻された状況を示すものと推定される。覆土からの出土品は見られなかった。

SK３（第101図、図版42）

Ａ地区の尾根上で検出した土坑で、第１号住居址の掘り方と切り合い関係をもって検出されたが、住居址との前後の状況は断面では捉えきれなかった。



第101図　土坑実測図（1/30）

平面楕円形を呈し、東西方向の長軸96cm、南北方向91cm、深さ90cmの規模を測る。掘り方は直ではなく斜め方向に立ち上がり、床面は東西方向に長軸を持つ楕円形をなす。長径44cm、短径34cmの規模で、西側に寄った位置に径13cm、深さ20cmの小ピットが掘り込まれる。覆土は黒褐、暗褐色土がレンズ状堆積をなし、自然堆積が想定される。形態から通例的な陥穴と推定される。覆土からの遺物は上層部から土器片が得られた。土器からは切り合う住居址に近接する時期に推定されるが、陥穴の構築時期は明確にはできない。

SK４（第101図、図版43）

Ａ地区の西側斜面で検出した土坑で、南側に隣接してSK１の焼土坑が構築されている。

平面形は等高線に平行する長軸を持つ長楕円形をなし、長径210cm、短径156cm、深さ60cmの規模を測る。壁面は凹凸のある傾斜面で、床面は平坦面を持たない状況である。覆土は暗褐色土が壁面に沿う形で入り込み、中央部分で層厚が薄くなる状況を示し、地山質の褐色土が塊状に乗る。覆土では若干の炭化物が入り込むが、遺物の出土は見られない事から風倒木痕の可能性が極めて高いと判断される。

SK５（第101図、図版43）

Ｂ調査地区の南東部、丘陵頂上部の平坦面が傾斜面に移る変換線上に立地する陥穴である。西方向約７ｍには第２号住居址が、北西方向約６ｍには第３号住居址が配置される。北側約50cmに隣接している土坑の掘り下げを実施したが、不定形で床面も明確でない事から、風倒木痕ないしは木の根による撹乱と想定された。また、本土坑から約６ｍ北側に位置する土坑においても同様の撹乱穴と判断している。

平面形は等高線に平行する長軸を持つ楕円形プランで、長径114cm、短径93cm、検出面からの最大深度は112cmを測る。掘り方の北部分は二段掘りのように段が形成され、掘り込みは南に寄った位置にあたる。壁面の上部はやや傾斜の付いた形であるが、過半部では直に近い形で掘り進められ、床面は平坦に整えられる。床面には小ピットは検出されなかった。

覆土は中央が窪む形の単純なレンズ状堆積で、黒色土の形成が弱い事から短期間の内に埋没したことが推定される。覆土からの出土品は得られなかった。

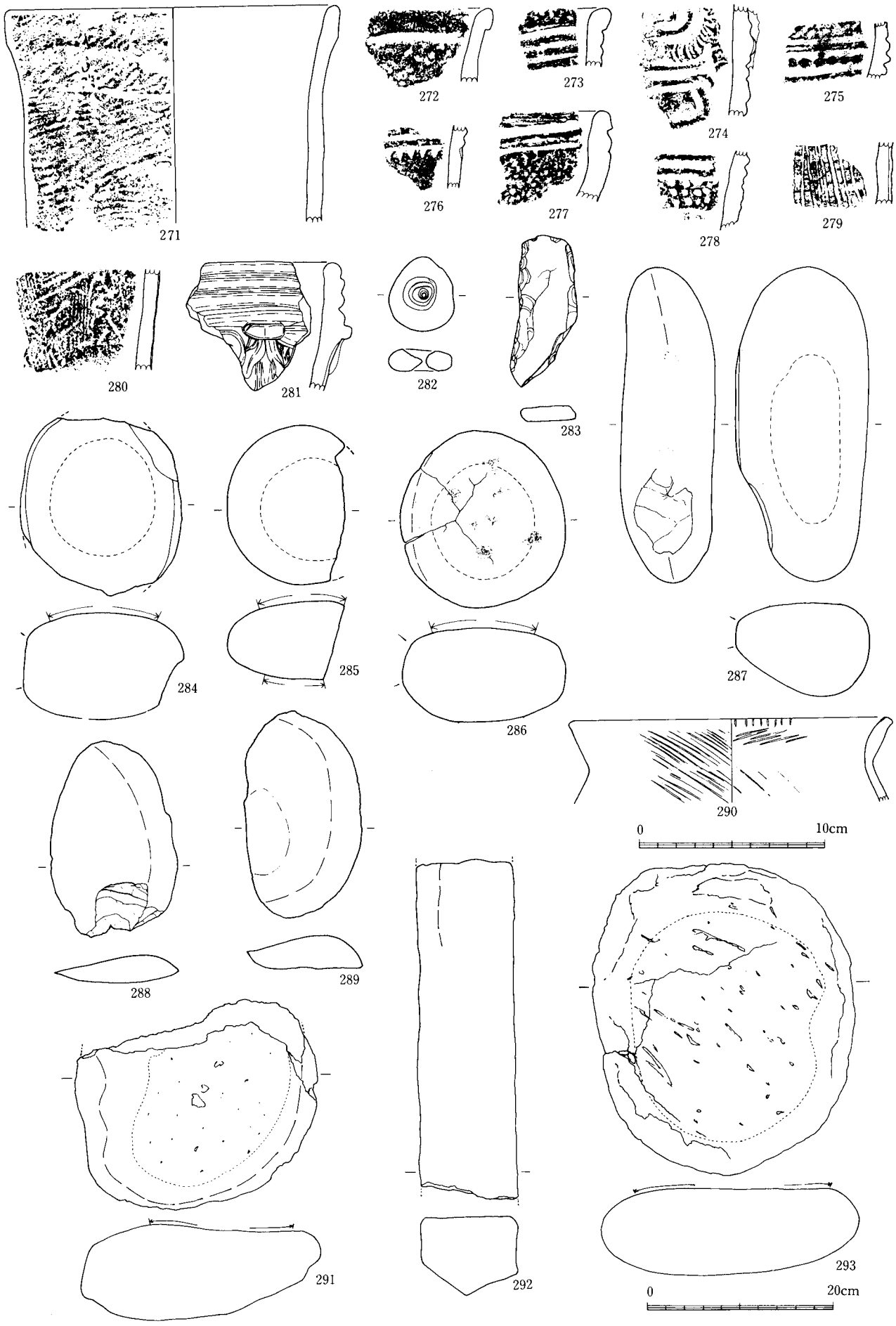
SK６（第101図、図版43）

調査区の西端に当たるＣ調査区の尾根上で検出した焼土坑である。Ｃ区は痩尾根が北側に伸びる尾根幅約４～５ｍの丘陵で、東西に急傾斜となって谷に落ち込んでいく。層序は10～20cmの表土層の下に若干の地山漸移層が覆い、地山は赤褐色粘質土が広がる。東西に伸びる主脈の尾根に接する地点では、数点の縄文土器を検出した暗褐色土が10～15cmの厚さで表土層下に見られたが、面的には限定される。痩せ尾根の地山である赤褐色粘質土は大口小松原遺跡の西側急斜面で見られた土層と類似するのであるが、長滝長尾遺跡のＡ・Ｂ調査区では見られなかった性質の地山面であった。

Ｃ調査区で検出された唯一の遺構で、尾根筋に直行する形で長軸を持つ平面長方形を呈しているが、凹凸のあるいびつな形状となるのが特徴的である。東西方向の長さ275cm、南北方向の幅134cm、深さ30cmの規模を測る。覆土の中央部には焼土粒が炭化物を介在させて塊状になり、壁面に付くものと中央部に位置するものとが見られたが、面として把握できる状態ではなく、火を覆う状態で戻された土が焼けたものと判断される。壁面は傾斜をつけて掘り込まれ、床面は焼土塊を境として段が形成される。壁面の所々に炭化物を含む小ピットが検出され、焼土坑構築当初からのものか、木の根の撹乱によって入り込んだものかの判別は難しいが、配置状況に規則性が弱く、形態が不揃いであることから撹乱の可能性が高いと判断している。覆土からの出土品は皆無である。

（3）出土遺物（第102図、図版53）

土器　271・272はSK３の覆土から出土した。271は口径18cmに復元できる粗製の深鉢である。僅かに括れる頸部から外傾して口縁部が伸び、口縁帯には粘土紐を貼付して境を成形する。口唇は面が取られて整えられ、微妙に立ち上がる部位が見られる所から波状よりも小さな突起が付されていたと推定される。内面は撫でにより整えられるが、下半では粘土紐の継ぎ目部分がひび割れとなるのが観察できる。体部下半は火熱により荒れ、上半は



第102図　出土土器・石器実測図（1/3、1/6）

薄く煤の付着が全体に掛かる。暗茶褐色を呈し、胎土には多くの砂粒の混和が認められる。272は粘土紐で盛り上げた口縁部突帯が特徴的な深鉢であるが、全形は不明である。内面は丁寧に磨き調整が施され平滑に整えられる。濁茶褐色を呈し、胎土には多量の砂粒が混和される。明茶褐色を呈し、焼成は良好である。SK３からは他に体部片が出土し、粗雑な施文の半隆起線文も見られる事から、古府式期での所産と推定される。

273は口唇端部を肥厚させた深鉢口縁で、浅めの半隆起線文が引かれる。内面の調整は丁寧で平滑となる。砂粒、焼土粒の混和が見られ、明茶褐色を呈し、焼成は堅緻である。274は爪形文が置かれる基隆帯が見られる体部片で、やや細目の半隆起線文が引かれる。上山田式期段階での所産と想定できる。微砂粒の混和が目立つが焼土粒の混入は認められない。淡茶褐色を呈し、焼成は並である。275は隆帯上に粗雑な爪形文が、半隆起線文間の残存空白部に篦先による刺突文が施されるもので類例の少ない資料と思われる。古府式期での位置付けを想定される。淡黄褐色を呈し、胎土は良好で、焼成は並である。276は小型深鉢に推定できるもので、無文に調整された端部に半裁竹管状工具による連続刺突が施されている。新崎２式土器に位置付けられ、茶褐色を呈し、胎土、焼成は並である。277は波状口縁深鉢の口縁部で、内面側が弯曲している事からキャリパー状形態に成形されたと思われる。半隆起線文は幅広の粗雑な形で１条が施される。淡黄褐色を呈し、微砂粒の混和は見られるが精良で、焼成も良好であり、上山田式期での位置付けが想定できる。278は体部片で、半隆起線文の間に３列の刺突文が充填される。櫛状工具によるものではなく、先端が丸く細身の棒状工具である。淡黄褐色を呈し、胎土に若干の微砂粒の混和が見られる。濁茶褐色を呈し、焼成は並である。古府式期での後半段階に位置付けられる。279は粗製深鉢の体部片で、縦方向の沈線文が粗雑に施文される。器表面には煤の付着が顕著に見られ、胎土に焼土粒の混和が多い。焼成は堅緻である。古府Ⅱ式土器段階での所産であろう。280は木目状撚糸文が施文された体部片で、淡黄褐色を呈し、胎土に僅かの焼土粒の混和が見られるが良好で、焼成はやや甘い。前期末から中期前葉にかけての位置付けが考えられる。281は南加賀で通有的に見られる古府式土器の深鉢口縁で、粗い平行半隆起線文が巡り、低い隆帯で頸部との境を作り、渦巻文が施文される施文構成を取るもので、主文様部に粘土紐を横に貼付する突起がつけるのが特色である。濁黄褐色を呈し、胎土は並であるが遺存状態は良くない。

包含層での土器の出土は極めて限られた形であり、多くは古府式期の資料で一部に中期前葉まで遡る例も見られるという状態で、竪穴式住居址からの出土状況に類似する傾向にある。また、東側の大口小松原遺跡での状態にも重なると言える。

石器　282は扁平な河原礫の中央に穿孔を施した凝灰岩質の完形品で、P50グリッドから出土した。穿孔部は大きく窪ませた形で両面からなされ、中央部で範囲を狭めた位置で貫通させる。内面には横方向の擦痕が顕著に認められるが、紐を掛けて擦れた状況は見られない。縄文時代での所産と判断するには躊躇される製品であるが、縄文時代以降での位置付けはさらに困難と思われる。

283は小型扁平な打製石斧で、先端部を欠損している。図示した面に自然面が認められ、平滑な状態となるが、使用によるものとは考えにくい。284～287は磨石類で、284は片面に微かに磨痕が見られ、遺存する片側面に面取り痕が残る。端部、側縁部が大きく欠損するのは強い衝撃を受けた結果と見られる。285は半欠品で、両面に磨痕が見られる。286は片面の磨痕と片側面の面取りが見られる完形品である。287は長楕円形の片側縁に面取りが見られるもので、各面での磨痕は石質の関係からか判別できない。

288、289は河原礫からの剥片石器である。石核と想定できるものの出土は認められない事から、剥片のみを遺跡に持ち込んだと推定できるが、側縁部での微調整や使用痕が認めがたい事から用途は全く不明である。

291･293は石皿で、各々片面に平滑になる面が見られる。292は角柱状の石材で、両端は共に欠損している。面の一部に平滑になる部分が見られ、なんらかに使用したものと考えたが、住居の入口部の踏み台ともなりうると言える。

290は弥生時代中期に比定できる甕の口縁部片である。本丘陵での弥生時代の資料の中では最も古い段階の資料である。出土位置は長滝長尾遺跡Ｄ地区の丘陵から北側に落ちきった位置で、後節で記述する第５号炭窯が立地する急傾斜面で表採した。口径17.6cmに復元され、内外面ともに刷毛調整が施される。口縁端部は外展気味に延ばされ、内面

に縦の刻み目が入れられる。口縁部には煤が付着している。淡褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

4　まとめ

本遺跡は北側に派生して伸びる丘陵上に立地する中期中葉、古府式期を盛期とする集落遺跡である。調査地域が丘陵平坦面からは離れた位置にあるところから、集落全体では10棟を大きく越える規模をもつものが推定できる。時期的には中期前半までは遡らず、中葉段階の上山田式期が開始時期と見られ、古府II式期後半段階での放棄が想定される。検出できた5棟の住居址は、切り合い関係がなく出土遺物にも恵まれない事から型式ごとに確定していく事はできないが、想定としては、第5号住居址が最も新しい時期に当てられ、第1号住居址が上山田式期での位置付けが可能であろう。そして、第3号住居址が同時期での所産と推定されるが、住居址内土坑の設置位置が長軸からずれ、中央に寄せている事からの疑問が残り、再考を要すると言える。第2・4号住居址は共に資料的に恵まれないものの古府式期に当てられる。4棟が検出されたB地区の住居群は継起的な流れが想定でき、A地区では南側に隣接して古府式期以降の構築が考えられる。古府II式土器を出土した第5号住居址での特色は、炉址と見られる部分が土坑となって検出された事であるが、石囲炉の炉石を撤去した為とも考えられ、壁面での焼土面が遺存し難かったと推定している。

遺物量は先の庄が屋敷A遺跡の住居址群に準じる状態と言え、包含層の形成もA地区南側での形成が想定されるだけであった。土器の中で注目されるのは、第5号住居址の図上復元を行った深鉢である。4波頂の深鉢は隆帯と櫛状具刺突文が目立ち、頸部の無文帯の施文と体部下半部で括れる成形の在り方は注目される。

第6表　長滝長尾遺跡出土石器一覧表

番号	名　称	石　　質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(g)	遺存状態	出土地点	備　考
234	打欠石錘	凝灰岩	32	27	12	14	完形	1号住居址	
235	打欠石錘	凝灰岩	43	31	16	24	完形	1号住居址	
236	打欠石錘	凝灰岩	46	35	15	27	完形	1号住居址	
237	磨石	粗粒砂岩	94	86	55	640	完形	1号住居址	
238	磨石	中粒砂岩	99	82	57	620	完形	1号住居址	
239	磨石	中粒砂岩	125	79	28	344	半欠	1号住居址	
243	打欠石錘	凝灰岩	54	47	20	68	完形	2号住居址	
244	磨石	細粒砂岩	87	79	45	426	完形	2号住居址	
245	石皿	細粒砂岩	330	260	55	8000	完形	2号住居址	
251	磨石	細粒砂岩	91	81	46	500	完形	3号住居址	
252	磨石	中粒砂岩	99	83	50	602	完形	3号住居址	
253	磨石	中粒砂岩	123	92	59	990	完形	3号住居址	
266	石鏃	輝石安山岩	36	23	7	6.51	完形	5号住居址	
267	石鏃	輝石安山岩	21	15	5	1.27	先端欠	5号住居址	
268	磨石類	中粒砂岩	98	94	49	660	完形	5号住居址	
269	石皿	輝石角閃石安山岩	330	300	72	9000	完形	5号住居址	
270	石皿	砂岩	450	168	108		完形	5号住居址	
282	重飾品	凝灰岩	41	37	12	18	完形	P50	
283	打製石斧	緑色凝灰岩	85	39	8	36	欠損	P48	
284	磨石	粗粒砂岩	104	90	54	718	欠損	b48	
285	磨石	細粒砂岩	88	70	43	352	欠損	Z47	
286	磨石	凝灰岩	97	89	50	556	完形	S49	
287	磨石	凝灰岩	184	74	54	1014	一部欠	S49	
288	礫剥片	珪化白色凝灰岩	110	71	16	127	－	P48	
289	礫剥片	珪化白色凝灰岩	114	64	10	140	－	P48	
291	石皿	安山岩	266	220	109	8000	一部欠	S49	
292	柱状石	安山岩	384	114	90		完形		
293	石皿	輝石角閃石安山岩	346	284	94	13500	完形	O49	

Ⅵ　長滝長尾遺跡（Ｄ調査区）

1　地形と層序（第103・104図）

長滝長尾遺跡は東西に伸びる平坦地の広がる尾根と、主脈から派生する支脈上に立地する縄文時代、古代の遺跡であるが、東西に広がる尾根上での遺構配置に粗密が認められる。縄文時代では東側のＡ・Ｂ調査区とこれに隣接する広い尾根上に集落遺跡が展開しているものと判断され、古代では傾斜面上に焼土坑が散在する形で構築されている。Ｃ・Ｄ調査区の尾根をを派生している西側主脈での遺構確認は実施していないが、縄文時代には陥穽穴などを構築する狩猟場としての性格が想定され、古代・中世においては焼土坑の配置や主脈の南側斜面に展開する滝谷寺跡の境内地での性格が考えられる。

東西方向の主尾根が西端部でＴ字状に平坦面を広げ、北側に若干の鞍部をおいて北西方向に丘陵を持ち上げる。南方向へは間隔を開けた支脈が伸びて、滝谷寺跡の造成面を区画している。

Ｄ調査区は北西に伸びる尾根の先端部及び東側の谷部が調査対象で、先に調査したＣ調査区の西側に隣接している。調査区は東西方向に長い不整長方形をなし、東西約68ｍ、南北約23ｍ、面積約1.500㎡の範囲である。東側の谷部には褐色、暗褐色の厚い流土が堆積し、若干の縄文土器を包含していたが、数量的にまとまる傾向は希薄である。尾根の頂上部に当たる西側地区では、約15cmの表土層、約10～15cmの黄褐色地山漸移土層が地山面を覆っていたが、遺物の包含は希薄である。遺物は縄文中期の断片的な資料で、石器においても製品は得られず、黒曜石、輝石安山岩の剥片が１例づつ出土したに止まり、遺跡の地形的性格を的確に示唆するものと判断された。

2　遺構

検出した遺構は、西側の尾根上と東側谷部傾斜面とに大きく分かれるが、総数21基の土坑は陥穽穴、焼土坑、木の根の撹乱穴が想定され、性格による立地の違いが推定でき、ふたつの焼土面の立地と関連する可能性が想定される。土坑からの出土品は皆無であった。

SK１（第105図、図版46）

西側の尾根上平坦面に立地する小土坑で、平面プランは東西方向に長軸をおく楕円形をなす。長径59cm、短径48cm、深さ20cmの規模を測る。立ち上がりは急角度で、床面は平坦に整えられる。覆土は上下２層に分離され、上層は暗褐色、下層は褐色を呈し、上層が落ち込むような形での堆積である。

SK２（第105図、図版46）

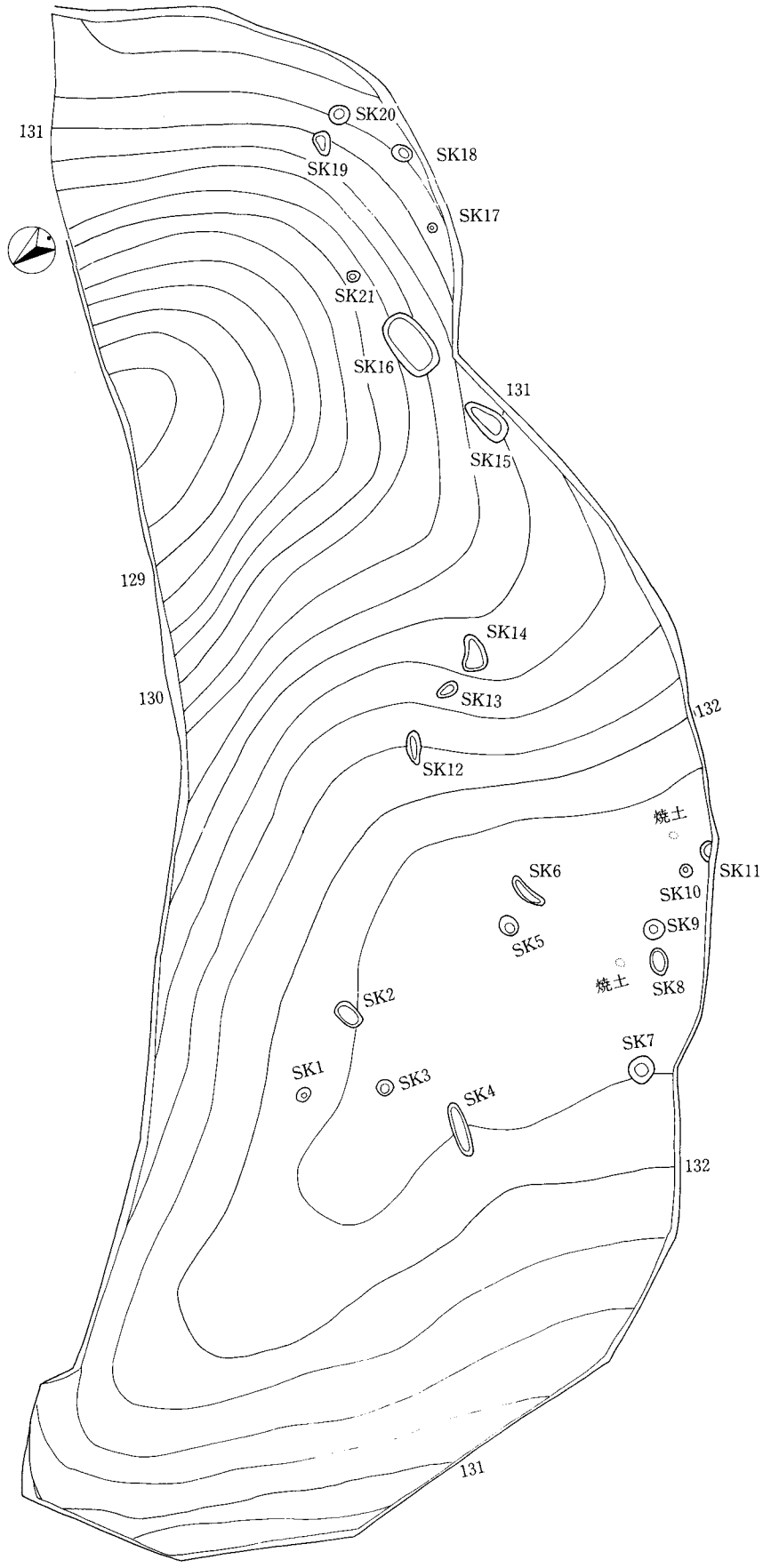
西側尾根に立地する土坑で、SK１の南方向約４ｍに位置している。平面不整楕円形を呈し、長軸を東西方向に置く。長径133cm、短径87cm、深さ８cmの規模を測る。立ち上がりは皿状の形態を示し、床面は平坦である。覆土は地山質土に類するにぶい黄褐色が見られることなどから、撹乱の可能性が高いと思われる。

SK３（第105図、図版46）

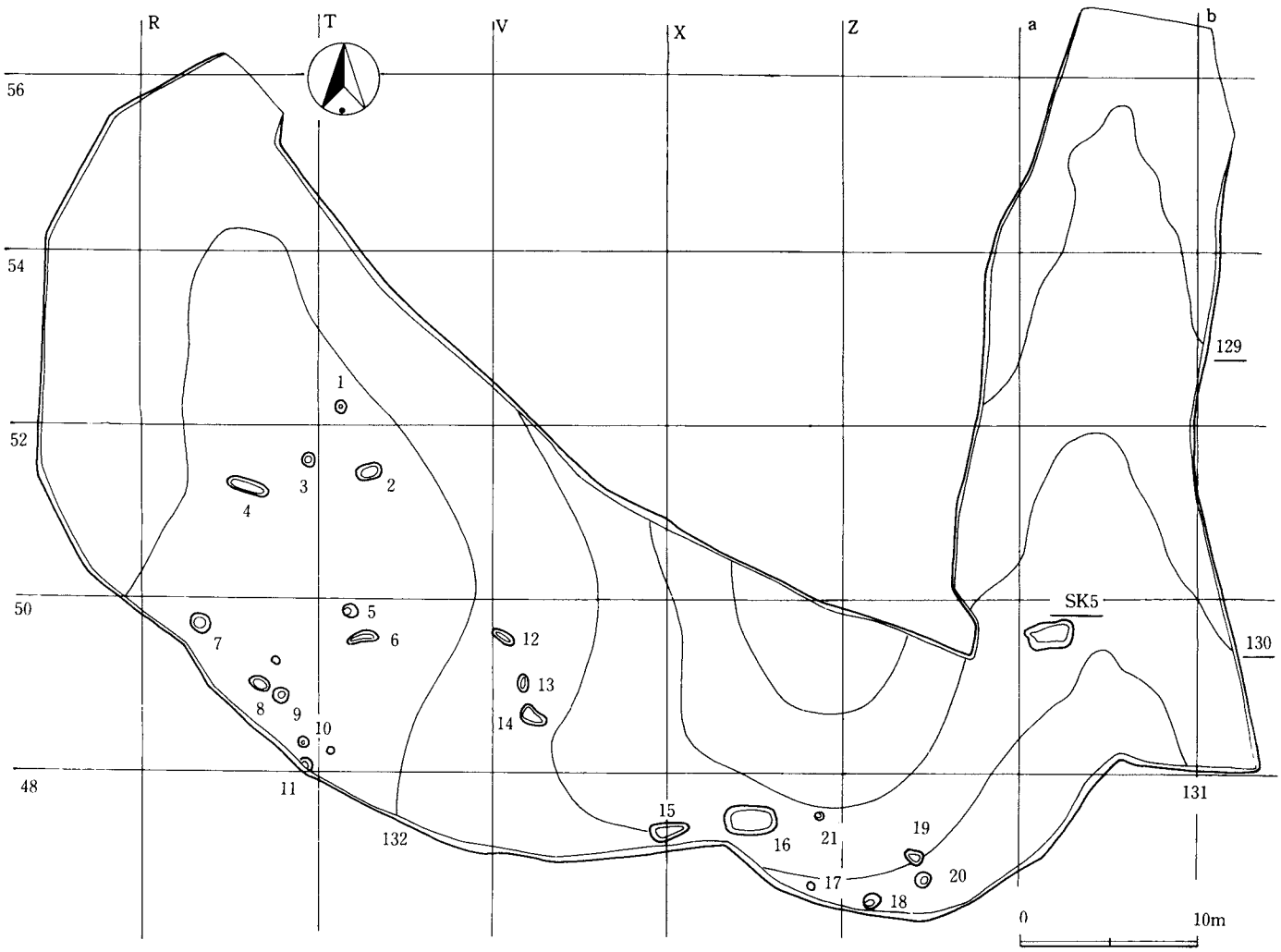
西側尾根の平坦面中央に位置する小土坑で、SK２の西側に隣接している。平面プラン円形を呈し、径55cm、深さ13cmの規模を測る。立ち上がりは角度があり、床面は比較的整えられていて、落ち込みに接した小ピットが見られる。覆土は地山質に類似する褐色土で、土坑の性格としては撹乱の可能性が高いと思われる。

SK４（第105図、図版47）

西側尾根上に立地する長楕円形の土坑で、東西方向に長軸を置く。長軸240cm、幅57cm、深さ17cmの規模を測る。落ち込みの立ち上がりは、長辺で異なり片側は傾斜が付き床面とのつながりが皿状となるが、他辺は角度が強く



第103図　長滝長尾遺跡（D地区、1994年）遺構配置図（1/300）



第104図　長滝長尾遺跡D地区区画図

床面が一段深くなる状態である。床面は片寄りの傾斜面となり、全体的には捻れたような床面を形成していることから、撹乱穴の可能性が高いと思われる。

SK５（第105図、図版47）

西側尾根の平坦面に立地する小型土坑で、東西方向に長軸を置く平面楕円形プランを呈する。東西方向の長径85cm、短径65cm、深さ32cmを測る。掘り込みは角度が付いて面が取られ、床面は平坦に整えられる。覆土は上下の層に分離でき、下層位は地山質土に類似する黄褐色土である。覆土からの出土品は見られなかった。

SK６（第105図、図版47）

西側尾根の平坦部に立地する長楕円形の土坑で、SK５土坑の南に位置している。長径は丘陵等高線に対して直行する形を取り、長さ174cm、幅47cm、深さ17cmの規模を計測する。覆土は２層に分けられ、地山質土に近い在り方を示している。床面は片側が僅かに低くなる形態をなし、平面プランでの弯曲した形状からSK４に類似した在り方と言え、撹乱穴の可能性が高いと判断される。

SK７（第105図、図版48）

調査区の西端に位置している土坑で、尾根上平坦面での検出である。尾根の高まりに平行する形で長軸を置く平面プラン楕円形を呈する。長径110cm、短径95cm、深さ23cmを測る。覆土は上下に分離でき、断面形は弧状を描く皿状を呈している。覆土からの出土品は見られず、撹乱穴の可能性が高い。

SK８（第105図、図版48）

西側尾根の頂上部に位置している平面長楕円形プランの土坑である。東西方向の長径は117cm、短径69cm、深さ10cmの規模を測る。断面形は皿状を呈し、覆土は地山土より暗い色調の暗褐色土である。覆土からの出土品は見られなかった。東側には径約30cmの焼土面が見られ、関連が想定される。

SK９（第105図、図版48）

西側尾根の頂上平坦面に位置している土坑で、SK８土坑の東側に隣接している。平面楕円形プランを呈し、長径86cm、短径78cm、深さ27cmの規模を測る。覆土は上下２層に分けられ、等分ではなく片側に寄った状態である。立ち上がりは西側と東では傾斜が異なった形となり、床面もそれに沿うように傾いている。断面形状は深い皿状を呈し、床面には２個の小ピットが検出された。覆土からの遺物は見られず、撹乱穴の可能性が高いと思われる。

SK10（第106図、図版49）

西側丘陵平坦面で検出した小土坑で、平面隅円方形プランを呈する。長軸58cm、短軸48cm、深さ18cmを測る。床面は平坦に整えられ、覆土は明褐色土が堆積しているだけと単純で、出土品は見られなかった。平面プランと断面形状は比較的整った形態を示しているのが注意される。土坑の東側に隣接して、径約30cmの焼土面が検出されていて、関連を持つ可能性が考えられる。

SK11（第106図、図版49）

西側丘陵の平坦面、調査区の南端で検出された小土坑で、調査区外に伸びている部分がある。SK10土坑の南側に隣接している。平面プランは楕円形をなすものと思われるが明確ではない。検出した部分での長径は78cm、深さ12cmの規模を測る。掘り込みは皿状を呈するもので、床面には掘り方に接して小ピットが検出された。径28cm、土坑床面からの深さは22cmの規模を測る。覆土はにぶい褐色をなして、地山土とは明確に異なる色調を呈している。覆土からの遺物は認められなかった。

SK12（第106図、図版49）

調査区西側丘陵の東緩斜面に位置する土坑で、平面長楕円形を呈する。長さ138cm、幅65cm、深さ約23cmの規模を測る。傾斜面に立地していることから、北と南の掘り方検出面のレベル差は32cmを測る。長辺での掘り方の角度は大きく異なり、南辺では深く、角度が強くなった状況で、床面全体が南側に傾斜する形態を取っている。覆土は褐色土が堆積しているだけである。土坑の形状から南側に倒れ込んだ風倒木痕の可能性が高いと判断される。

SK13（第106図、図版50）

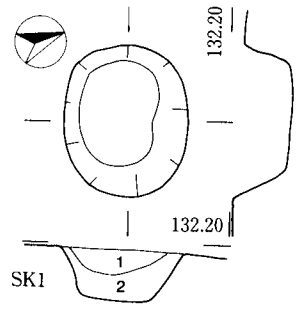
西側丘陵の東緩斜面に位置する土坑で、SK12土坑の南側に隣接している。平面プランは楕円形を呈し、等高線に平行する形で長軸が置かれ、長径105cm、短径50cm、深さは傾斜があることから端部で差が大きく、中央部で16cmの規模を測る。掘り方は斜面側の北端を除いて強い角度で掘り込まれ、平坦な床面とは弧線を描いてつながる。覆土はレンズ状堆積の２層に分離される。形状から撹乱穴とは言えないように判断される。

SK14（第106図、図版50）

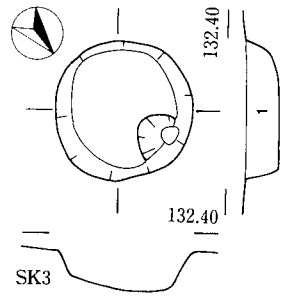
西側丘陵の東斜面に位置する土坑で、SK13土坑の南側に立地している。平面プランは三角形状をなす不定楕円形で、長軸157cm、最大幅114cm、深さ13cmの規模を測る。掘り方は緩い傾斜が付く形態で、床面は平坦に整っている。覆土は上下２層に分離できるが、下層位は地山漸移層に相当するものと思われる。覆土に炭化物を含まないことから、撹乱穴の可能性が高いと思われる。

SK15（第106図、図版50）

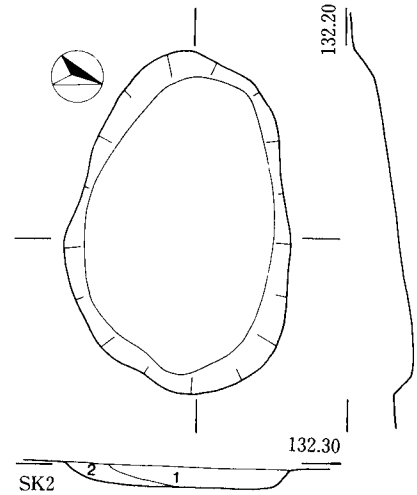
調査区の東側は、C調査区の丘陵との谷間にあたる地形である。検出した土坑群は谷間を臨む傾斜面を占地し、主たる遺構は東西に走る主脈尾根上に展開している事が推定される。平面プランは不整楕円形を呈し、長径224cm、短径98cm、深さ21cmの規模を測る。断面形は皿状を呈し、全体に丸味を帯びた状態となる。覆土は暗褐色から地山漸移層の黄褐色へとレンズ状に堆積している。床面は長軸に当たる位置で中央部が窪むような成形である。覆土からの出土遺物は見られなかった。



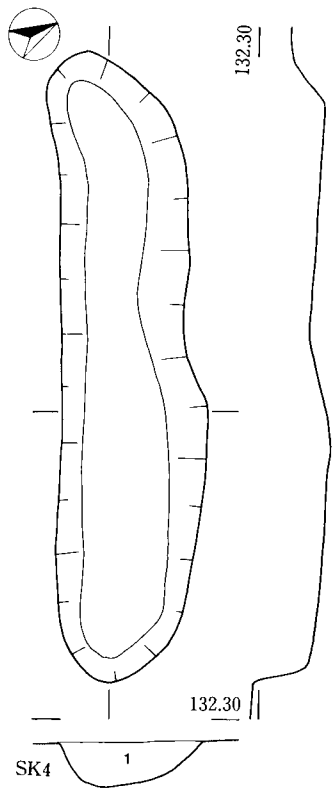
1. 暗褐 3／3 Hue10YR
2. 褐 4／4 Hue10YR



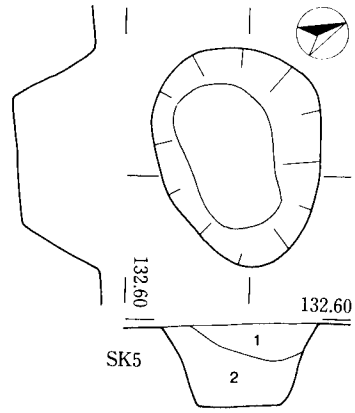
1. 褐 4／6 Hue10YR



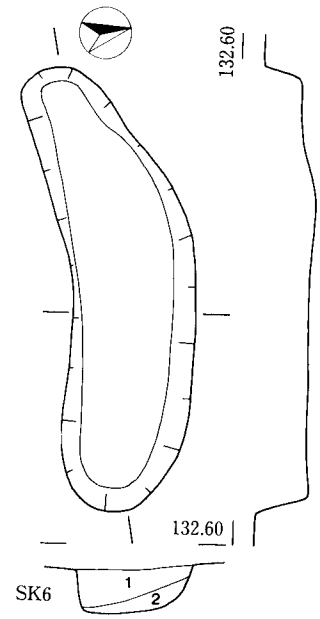
1. 灰黄褐 5／2 Hue10YR
2. にぶい黄褐 5／4 Hue10YR



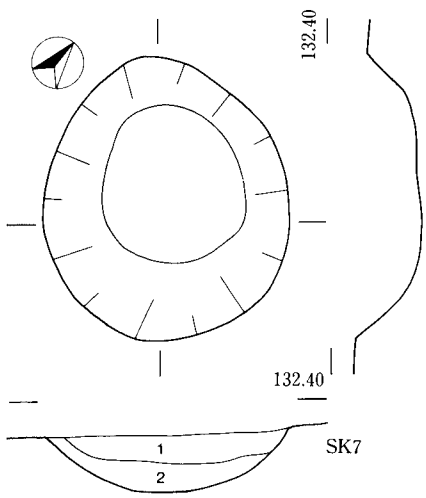
1. 褐 4／6 Hue7.5YR



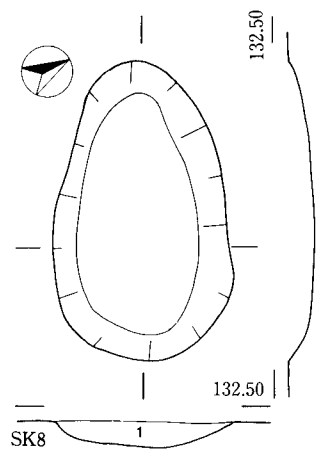
1. 褐 4／6 Hue10YR
2. 黄褐 5／6 Hue10YR



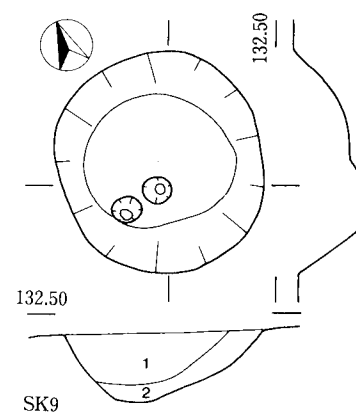
1. 褐 4／6 Hue10YR
2. 黄褐 5／6 Hue10YR



1. にぶい黄褐 4／3 Hue10YR
2. 黄褐 5／6 Hue10YR

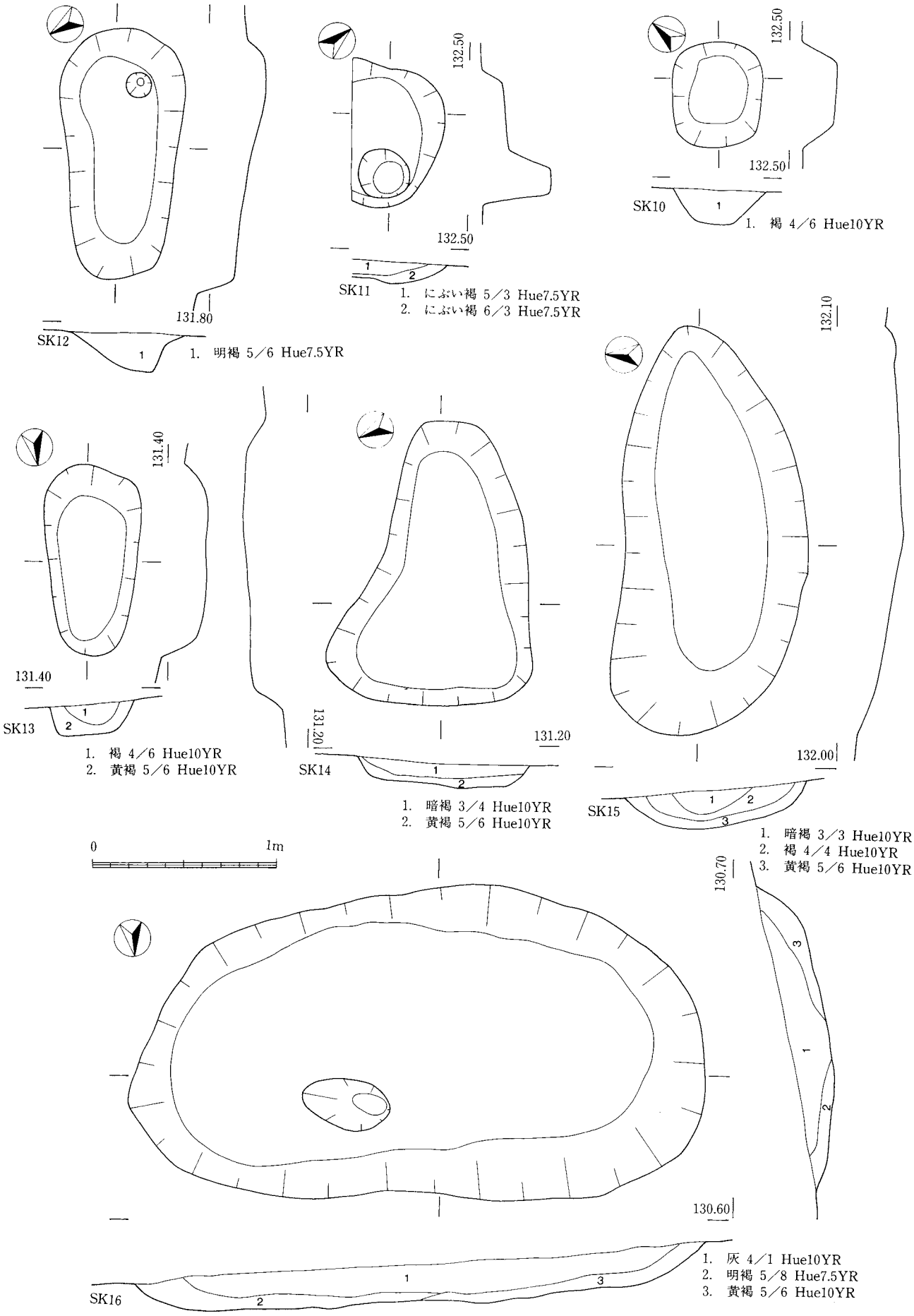


1. 暗褐 3／3 Hue10YR

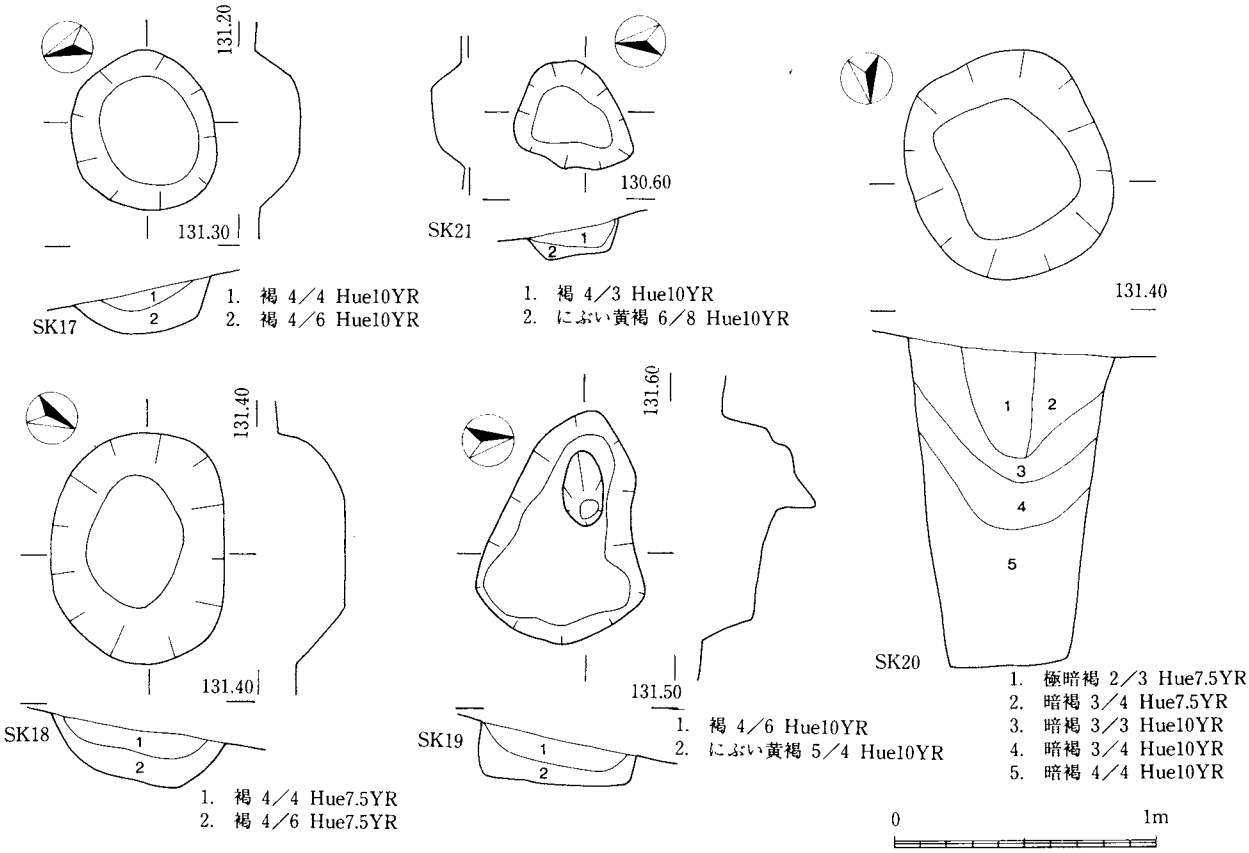


1. 褐 4／6 Hue10YR
1. 黄褐 5／6 Hue10YR

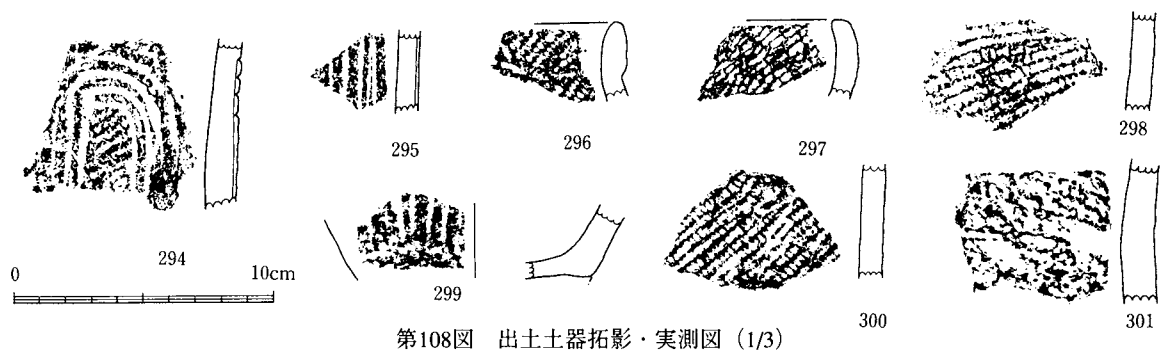
第105図　土坑実測図（1）（1/30）



第106図　土坑実測図（2）（1/30）



第107図　土坑実測図（3）（1/30）



第108図　出土土器拓影・実測図（1/3）

SK16（第106図、図版51）

調査区の東側、谷を臨む傾斜面に立地する大型の土坑で、西方向約２ｍにはSK15土坑が配置されている。平面プランは長楕円形を呈し、長軸は等高線に対して平行した位置に置かれる。長径315cm、短径168cm、深さ35cmの規模を測る。長径部は傾斜面での立地から、検出面での比高差は約30cmがある。覆土は灰褐色土が床面までレンズ状に堆積し、掘り込み傾斜に沿う形で暗褐色、黄褐色土が堆積している。床面は平坦に整えられ、谷側に臨む位置で面が形成されたようだ。断面形は皿状を呈する。

SK17（第107図、図版51）

調査区の東側、谷頭に位置する小ピットで、平面楕円形を呈する。長径63cm、短径54cm、深さ20cmの規模を測る。覆土は暗い褐色土が上層部に浅く堆積し、下層は地山質土の褐色土であり、撹乱穴の可能性が高いと判断される。

SK18（第107図、図版51）

調査区の東地区で検出した楕円形プランの土坑で、等高線に平行する形で長軸が置かれている。長径90cm、短径68cm、深さ26cmの規模を測る。傾斜面にあることから、検出面での比高差は約13cmを測る。断面形は皿状を呈

し、覆土は上下２層に分割される。上層は暗い褐色をなし、下層は黄褐色土が堆積している。

SK19（第107図、図版52）

調査区の東側、谷の傾斜面で検出した不整楕円形プランの土坑である。長径91cm、短径66cm、深さ20cmを測る。床面の西側には不定形の小ピットが見られ、斜め方向に落ち込むのが認められた。断面形においても均質な掘り方ではない事から、木の根による撹乱の可能性が高いと思われる。

SK20（第107図、図版52）

調査区の東側、Ｃ調査区に伸びる尾根筋に立地している。周辺グリッドからは他地点に比較して多くの縄文土器片が出土している。平面プランは楕円形を呈し、南北方向の長径は86cm、短径76cm、深さ130cmの規模を測る。壁面は直に近い立ち上がりで、床面は平坦に整えられるが、小ピットは検出されなかった。覆土は中央部が大きく窪む堆積状況で、下層に下がるに従い褐色土の明度が上がる事から、自然堆積状態を示していると考えられる。覆土からの出土遺物は見られず、構築時期を推定するのは困難であるが、Ａ調査区及びＢ調査区で１基づつの検出が見られた土坑と同一時期の可能性が高いと判断され、中期中葉段階と思われる。

SK21（第107図、図版52）

調査区の東側、北側に落ちる谷を臨む傾斜面で検出した土坑である。平面不整楕円形を呈し、長径48cm、短径40cm、深さ12cmを測る。平面形態や傾斜した床面、覆土の状況から撹乱穴の可能性が考えられる。

3　出土遺物（第108図、図版53）

出土品は少量であり、住居構築地区からは離れている為と考えられる。出土位置についても限定され、流土層が最も厚くなるＣ地区とＤ地区との境界部の谷部での出土が多い。

294は縄文施文の体部に、粗い形状で半隆起線文が施文されるもので、二次的火熱により明茶褐色を呈している。胎土には砂粒、焼土粒の混和が見られ、焼成は良好である。295は半隆起線文が縦に入る体部片で、胎土に微砂粒の混和が多い事から古府式までは降らないと思われる。濁黄褐色を呈し、焼成は堅緻である。296は口縁端部が外傾する成形となる粗製深鉢で、端部は粘土紐の貼付で肥厚させ段を形成する。茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。297は内弯して納める口縁で、無節縄文が転がされる。口唇、内面とも丁寧に面を取る調整が施され、器表は暗褐色、内面は灰黄褐色を呈する。胎土には微砂粒が混和され、焼成は良好である。299は底部片と見られるが、外底面が剥落したような状態で器壁が薄くなる。体部に縦の半隆起線文がある事から、精製深鉢の底部と思われる。色調は淡茶褐色を呈し、胎土に微砂粒、焼土粒の混和が見られ、焼成は良好である。

298・300・301は縄文施文の体部片である。301は砂質性の薄い胎土で、古府Ⅱ式土器以降の製品と考えられる。淡茶褐色から茶褐色を呈し、いづれも焼成は良好である。

4　まとめ

本地点での調査で多数の土坑が検出されているが、大部分は自然現象での撹乱と見られ、幾つかの焼土面と陥穴と推定できる土坑が人為的な遺構と考えられ、出土遺物の量にも遺構の希薄さを反映していると認められる。

Ⅶ　長滝宮谷遺跡

1　地形（第109図）

大口小松原遺跡、長滝長尾遺跡が占地する丘陵は、東西方向に尾根筋を延ばし、間隔をおいて北、南方向に支脈の尾根を派生させる地形を形成している。尾根上の平坦面には縄文時代の集落址、平安時代の焼土坑群が配置され、支脈に挟まれた谷地形には古代から中世にかけての山林寺院跡および近代の製炭窯跡群が構築されていた。

長滝宮谷遺跡は、長滝長尾遺跡の端部である北側に派生するＢ調査区とＣ調査区の尾根に挟まれた谷地形の、急傾斜面がやや緩やかになる変換点付近に平坦面を造成し石を組み上げて窯体を構築している近代の炭窯跡である。前庭部の標高は約112ｍを測り、南東尾根である長滝長尾遺跡Ｂ調査区の標高は約133ｍである事から20ｍを越える比高差があるが、さらに北側に下りきって丘陵を大きく分断する谷までの比高差は約12ｍ程度であることから、東から西に下る谷地形を運搬路として意図した選地であることが想定される。 本窯跡から北方約50ｍの長滝長尾遺跡Ｃ調査区の丘陵端部に当たる地点には古代まで遡る可能性のある３基構成の炭窯跡が見られ、尾根筋端部を挟んで西側の谷間には２基の改良窯跡が認められた。また、宮谷を遡った東側の丘陵裾には大口コマツワラ炭窯跡が構築されている。東西の谷間には町営の林道が長滝集落に向けて降るが、昭和40年代までは谷間には溜池が築かれ狭小な谷水田が営まれていた。

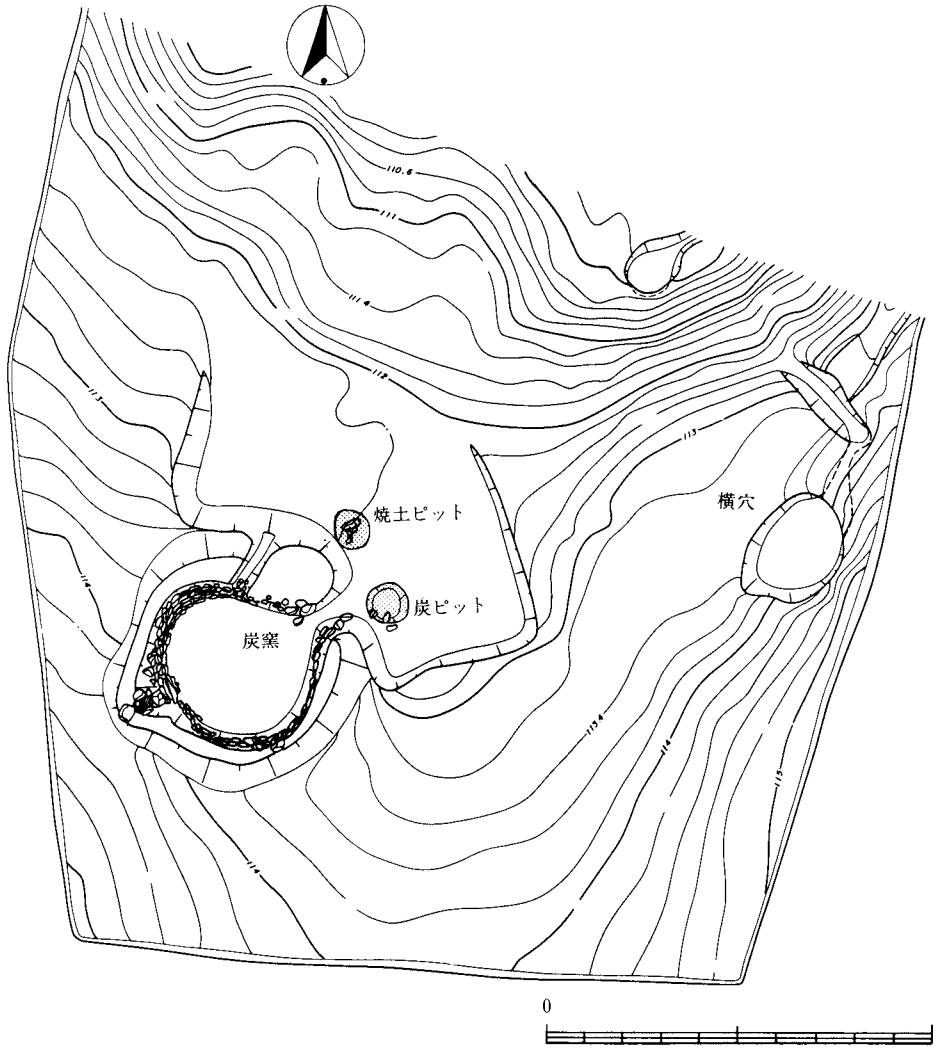
発掘調査は窯体および性格不明の穴を明確にすると共に、窯体前面に想定できる造成平坦面での作業場などの検出を目的として調査範囲を定めた。平面形は台形状をなし、東西方向で約18ｍ、南北方向で約19ｍで、調査面積は約410㎡である。調査区画は長滝長尾遺跡のグリッドを延長させる形で振り込んでいる。窯体が確認できることから、重機での表土除去作業は行わず、人力での表土除去から実施した。

2　炭窯跡（第110図、図版54～57）

検出した遺構は、近代に位置付けされる炭窯跡１基と性格不明の横穴１基の都合２基である。出土遺物は、釉薬の掛かった瓦片、茶褐色に発色した陶器片であり、ともに昭和期のものと判断され図示はしなかった。炭窯跡は丘陵内で発見された炭窯の中で、最大規模と想定できるもので、少人数では操業、維持管理が出来がたいと思われる。

窯体は西側の斜面に奥壁を置き、焚口部を谷側に向ける楕円形の平面プランを取る。南北方向での外径約700㎝、内径376㎝、煙道部を含む東西方向での外径は約750㎝、内径約380㎝の規模で、直に立ち上がる壁での遺存高はおおむね約180㎝を測り、煙道部では270㎝の高さにまで盛り土が遺存していた。壁の厚さでは、断ち割りを行わなかったので確定した数値ではないが、下場で約150㎝程度の厚みを平均値として持つものと想定される。遺存している壁の高さが煙道部と壁体とのレベル差で見ると約90㎝を測り、煙道部がほぼ旧状を保存している事から、僅かに外開きに立つ壁は現況から天井部を形成する形で巡らされるものと想像される。窯体は傾斜面に構築されている事から、奥壁のある西側地区で大きく掘り込まれ、東側の焚口部では壁体全体が盛り土である成形手法を取ると言え、壁面に積み上げられた石積みの下場のラインが地山面であり、煙道部で最も深くなり約150㎝の深さにまで下げられたと見られる。さらに、焚口部では谷間に堆積する自然腐植土が極端な状況で厚みを増す状況から、窯体部での掘削土の一部は焚口部および前庭部に盛り土されたと推定される。

壁面の積み上げられた石は地山には含まれない石で、谷間を西に下った位置の崖面に露出している岩が想定でき、僅かな距離ではあるが炭窯まで搬入したと想定できる。岩の中には少数であるが、角が取れて丸味を持ち自



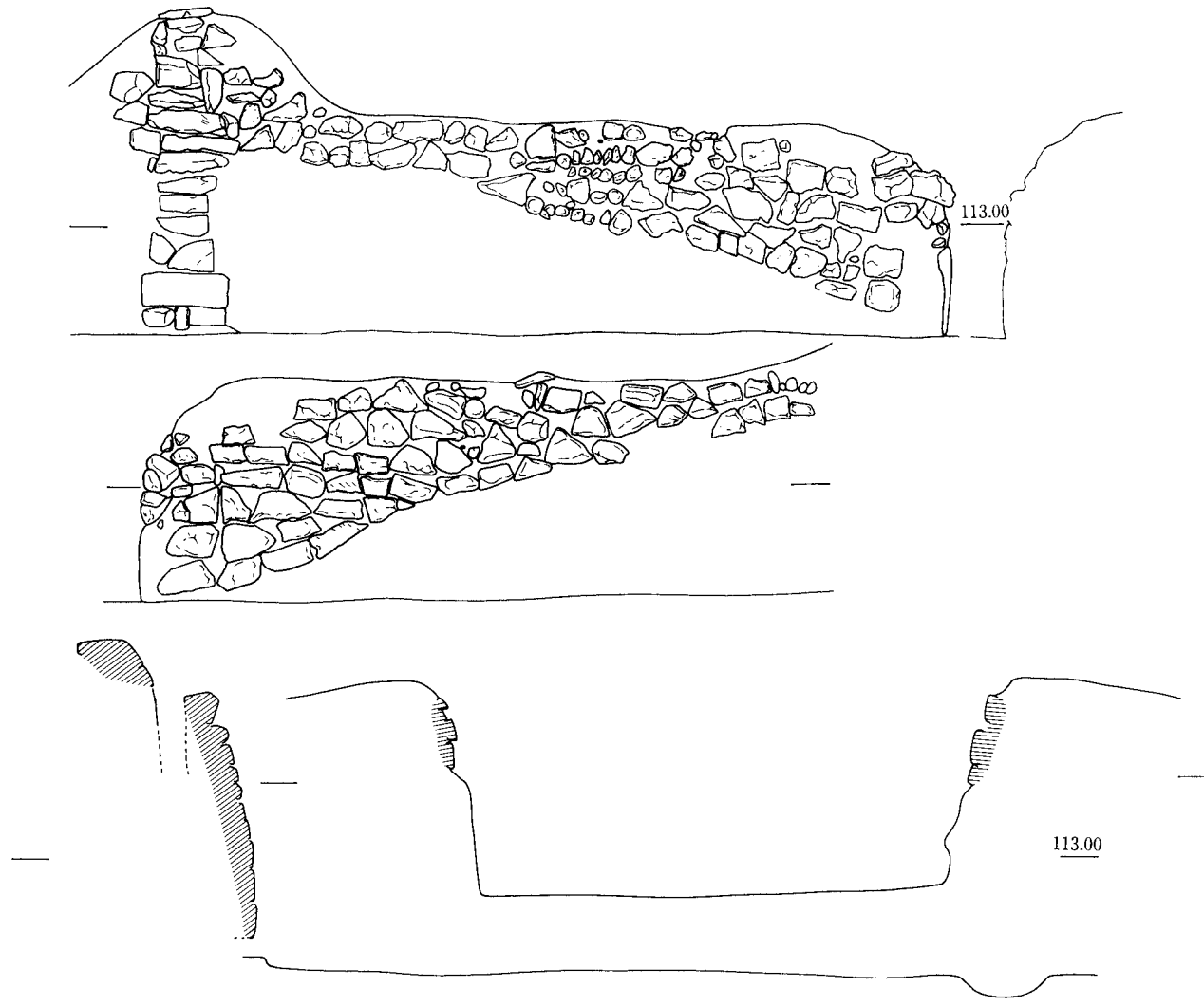
第109図　長滝宮谷遺跡実測図（1/200）

然面が見られるものがあり谷川での採集も推定できる。北側の壁の中程は岩が不足した為に丸石が埋め込まれているのは、同地点が壁面構築の最終位置であったとも考えられる。石の構築は焚口部の位置を定めた後に、焚口に連なる袖の部分に約三段に積み上げて壁体の高さまで積み上げたと考えられる。一旦積み上げられたレベルで水平を測り、奥壁側に向けて石を巡らせていく。積み上げられる石の間は直接的には接触せず、間に地山土が充填されるのが基本形である。また、石積み手法において基本的な石垣構築に携わった経験のない人が積み上げたと見られる。それは、焚口部での隅石を全く意識していない手法や根石に重ねられる石が類似した大きさで、縦方向の境が下から上にまで通るという形で現れている。旧状が保たれているのは、積み上げられて年数が余り経過していないことや雨水の影響を受けにくいという立地状況、均質な石材で揃えられている事などが上げられる。

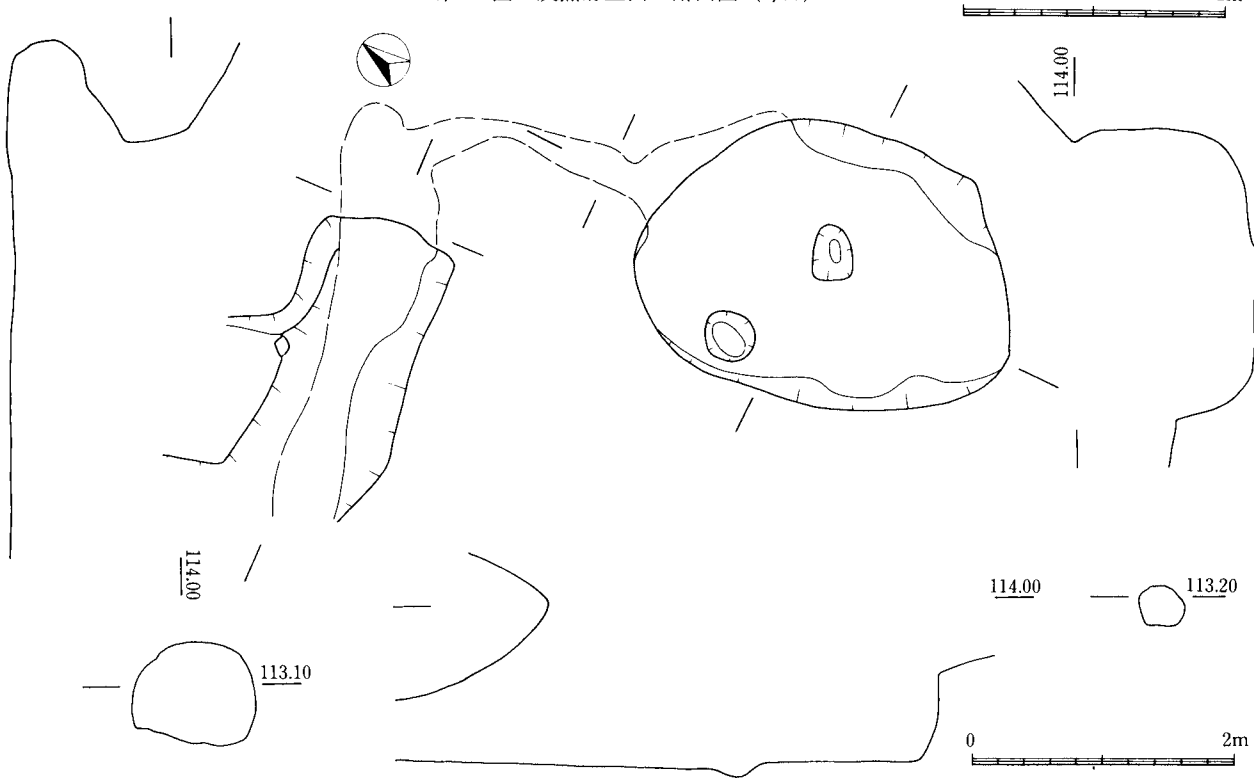
煙道部は奥壁に設けられ、床面からやや高まった位置に方形の煙道入口が開けられる。最下段での石は中央部に板状の石を縦に使い、その上に大振りな石で押さえる。開口していたのは板石を間にして北側であり、南側部分の礫がはめ込まれたものと考えられる事から、排煙を調整する為の措置と想定される。煙道部の板石は粘土によって間が埋められ、さらに焼成や煤などによって補強されている事から遺存状態は良好である。排煙口は方形に石が配置され、調整用の板石が載せられているのが見られ、旧状を保っていたと推測できた。

床面は河原礫を含む地山土であり、土質は砂質の傾向が強いとみられ、丘陵上とは粘性が違うと見られる。礫混じりの床面では熱による変色は殆ど確認できず、薄い炭層が全体を覆う形となっていた。壁直下では若干傾斜するようにも見られたが、排水溝などの施設の構築は確認できなかった。

焚口部は幅44cm、高さ約130cmの規模を測る。焚口部の外の南側に、径100cmの炭粒の充満したピットが、北側



第110図　炭窯跡立面・断面図（1/60）



第111図　横穴実測図（1/60）

には礫が含まれている焼土ピットが検出され、通有の形態を持っていると推測できる。

窯の焚口前面は斜面側に削平を施して平坦地が造成され、窯壁に沿う形で面が西側に広がり、北へは若干の緩傾斜をつけて伸びている。平坦面は作業場として位置付けられるが、建物跡などを推測される礎石、ピットは検出できなかった。平坦面から北東側斜面裾には、丘陵から滲み出す定量の湧水地が見られる。

3　横穴（第111図、図版57）

調査区の北東隅、長滝長尾遺跡Ｂ地点の丘陵裾に立地する横穴である。分布調査の際に炭窯跡と共に天井部が崩落した横穴が認識され、中世段階で丘陵内で検出される地下式横穴跡の可能性が考えられていた。

入口部は北西方向を向き、幅110cm、長さ約200cmが開いた状態で、さらに天井が遺存する部分で約100cm程奥に入る。天井部の残る位置での規模は、幅95cm、高さ70cmの楕円形をなす。奥壁から斜面に平行する形で、南西方向に約180cmの長さで通路が延びる。通路の幅も高さも極めて狭く、径約35cm程度の楕円形をなしている。普通の大人が通過できる幅ではないと思われる。入口部での地山は黄褐色粘質土であるが、奥壁、通路、本体部は黄褐色砂質土が堆積している層位で、腐植土の形成は薄く、堅い面が検出できた位置で止めたので、それぞれの位置で拡張できる余地はないものと考えている。

本体の平面形は楕円形をなし、通路部分を延長させた形で長軸がおかれている。長径294cm、短径220cm、高さ約150cmの規模を測り、床面、天井部とも丸味が強い形で掘り込まれる。床面は中央部で僅かに面が形成されるだけで、長軸、短軸方向ともに断面形が皿状をなす。落ち込んだ天井部を含めて、内部からの出土遺物は皆無で、腐食土層の形成は弱いものであった。

本横穴の構造から人間が関わって構築したものとは考え難く、丘陵内に棲息する中小動物が掘り込んだ可能性が考えられるが、入口部が一方にしか作られていない点での疑問が残る。

Ⅷ　炭窯跡

1　長滝宮谷第１～３号炭窯跡（第65・112～115図、図版58・59）

長滝宮谷遺跡の巨大な炭窯跡を始めとして、宮谷周辺には多くの炭窯跡が分布していて、大口コマツハラ炭窯などで発掘が実施されてきた。宮谷遺跡の炭窯跡の調査に平行して、分布調査時点で炭化物が検出されている部分においてもトレンチを拡張するなどの確認調査を実施した。長滝宮谷遺跡の窯跡が構築されている同一丘陵の北側斜面に炭層を含む土層が認められた事から、約100㎡の範囲で斜面側を拡張して平面的に掘り下げを行ったが、まとまった状態での炭層の広がりは確認できるものの炭窯などの遺構は確認できず作業場や製品の仮置き場などの形で一時的に使用された地点と想定された。

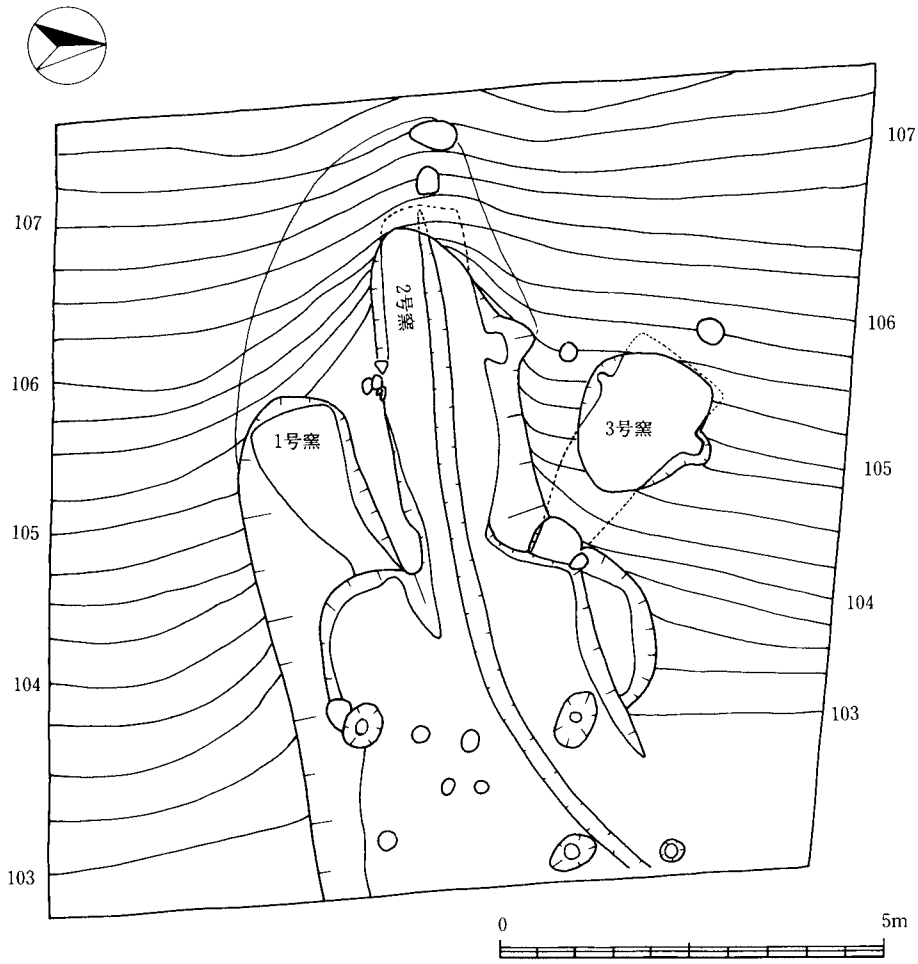
長滝宮谷第１～３号炭窯跡は、確認調査を実施した同丘陵の北端に立地している炭窯跡で、調査開始前は中央部が縦方向に窪む程度の自然丘陵の形状が保たれている状態で、須恵器窯跡と類似した在り方をなしていた。斜面上には杉、桧が植林されて年月がさほど経過しない若い木が等間隔に生えている状況である。窪んでいる地点を取り込む形で、平面方形の形で調査範囲を設定した。等高線に平行する南北方向で約11m、直行する東西方向で約10.5m、面積約115㎡である。

斜面の上から表土除去作業を進め、煙道出口での確認は比較的簡単に行えたが、窯体本体、前庭部については、流土が予想を大きく上回る状況で厚く堆積していた為に作業は難渋した。調査当初は窪んでいる地点での１基だけと想定していたが、地山面が検出されるに従い北に隣接して１基が、さらに、前庭部での確定から南側に１基が検出され、都合３基構成の炭窯跡と確定した。丘陵裾は長滝宮谷遺跡の谷筋にあたり、谷水が流れている。

流土層および地山面にのる炭化物層から遺物の出土は見られなかったが、炭化物層に含まれる炭に材の形をとどめるものが皆無というのが、ひとつの特色と思われる。

第１号炭窯は３基並列する南端に占地するもので、構築途上で放棄されている為に操業した痕跡が確認されなかった窯である。先行する第２号炭窯での焼成が出来なくなり、替わる窯として掘り進まれたと推測される。平面形は焚口部が狭く、奥壁部に向けて幅を広げる笏状を呈する。現況での長さ約３m、奥壁での幅120cmの規模で考えられるが、検出した掘り方での幅は約2.5mを越える状況が認められ、第２号炭窯に接近しすぎた為に壁が崩落したものと推測できる。床面は若干の傾斜が付けられ面が整えられるが、煙道部の掘り込みは全く見られず、また、第２号炭窯側の側壁部が弯曲した形となる事から、側壁部の掘削の途上での崩壊と考えられる。

第２号炭窯は平面プラン隅円長方形をなすもので、３基構成の中で最も古くに作られ、長期間操業した炭窯である。焼成室の長さ420cm、幅120cm、高さ約75cm（新段階約150cm？）、焚口部の幅約70cmの規模を測り、床面は全体的に焚口部に向けて僅かに傾斜している。床面は奥壁側での焼け付きは焚口部に近い側程には強くはない状況が認められ、全体に細かな炭化物層が数cmの厚さで全面を覆っていた。焼成室には排水用の溝が、中央部、側壁直下の都合３本が掘り込まれている。中央の排水溝は幅約30cm、深さ約５～10cmの規模で、奥壁の煙道部から入れられ、焚口部分から丘陵の傾斜に沿わせるように北側に流路を振り込んで配置されている。側壁直下の排水溝は、北側では壁面幅のみで完結する形をなし、南側では前庭部まで導く形での掘削が行われる。丘陵での地下水の量が違っていた為の差異と想定出来る。煙道部は側面に１個づつ、奥壁に１個の、３個が設置されている。奥壁部の煙道入口部は上下の２個が検出され、補修を繰り返しながら操業していた事が考えられる。奥壁の手前での土層断面では、下層から焼土層、黄褐色土層、焼土層、黄褐色土層の層序が見られ、その上に礫を配置したような褐色土層の堆積が乗る状況となっていた。焼土層は崩落した壁面と考えられ、最低回数として２回の崩落が起こったと推測できるが、炭層が入り込まない状況から内部に炭が残っていない段階での落盤と思われる。煙道



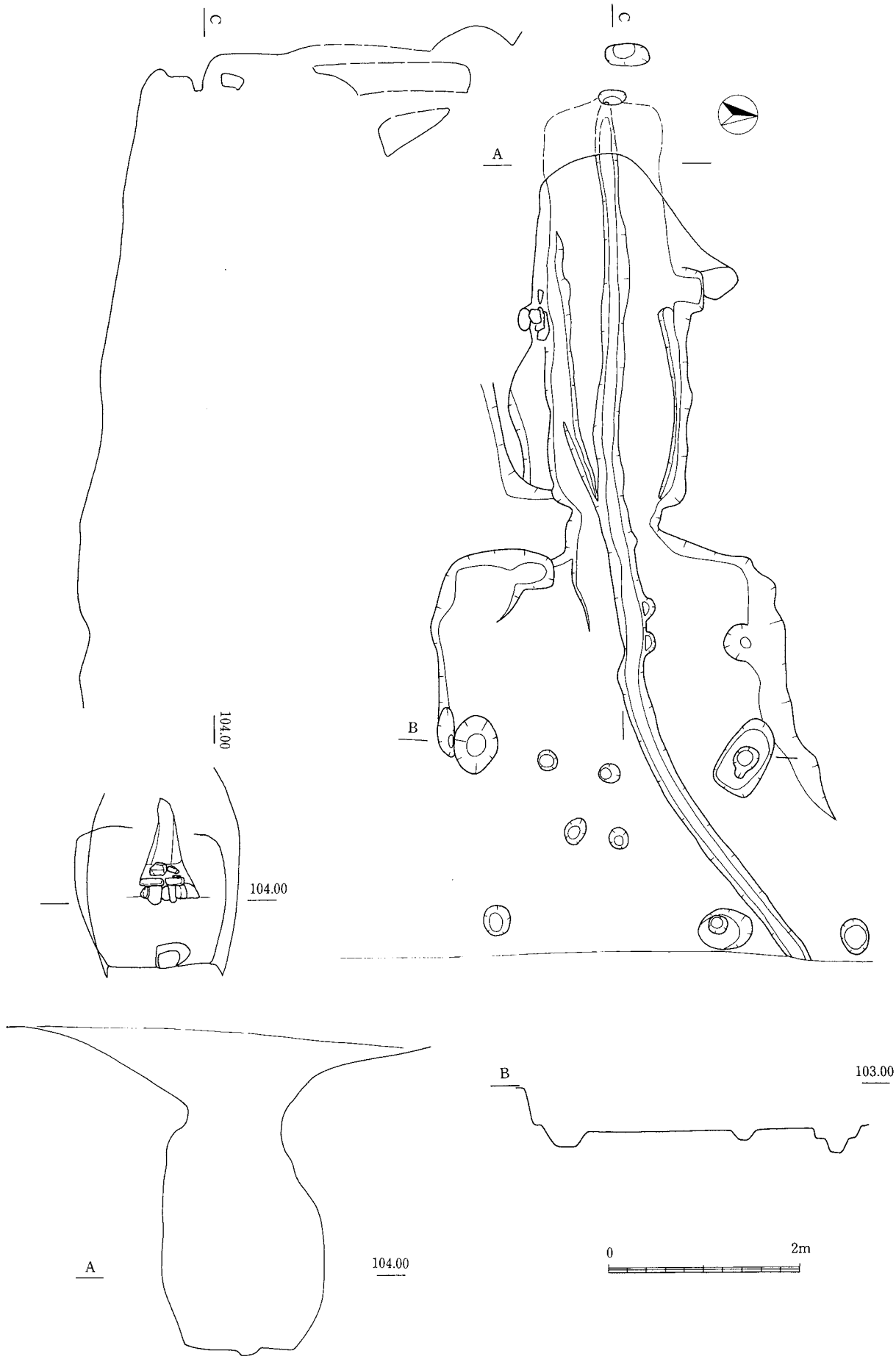
第112図　第１～３号炭窯跡実測図（1/100）

部の入口が高さにして約70cmの差を測り、新しく再掘削が行われた煙道は奥壁をさらに掘り進めた位置で構築されている。その為に奥壁側の煙道の出口部は前後に大きく離れた位置に開けられる形を取る。しかし、側壁側の煙道部は損壊が軽微であったと見られ若干の修正で継続使用されている。奥壁の煙道入口の当初は素掘りの形態であるが、新規のものは礫を組み合わせて小口が３ヶ所に開く形態となる。側壁は堅く焼け付いて焼土化しているが、床面近くでの遺存であり、大部分は崩落した状況である。

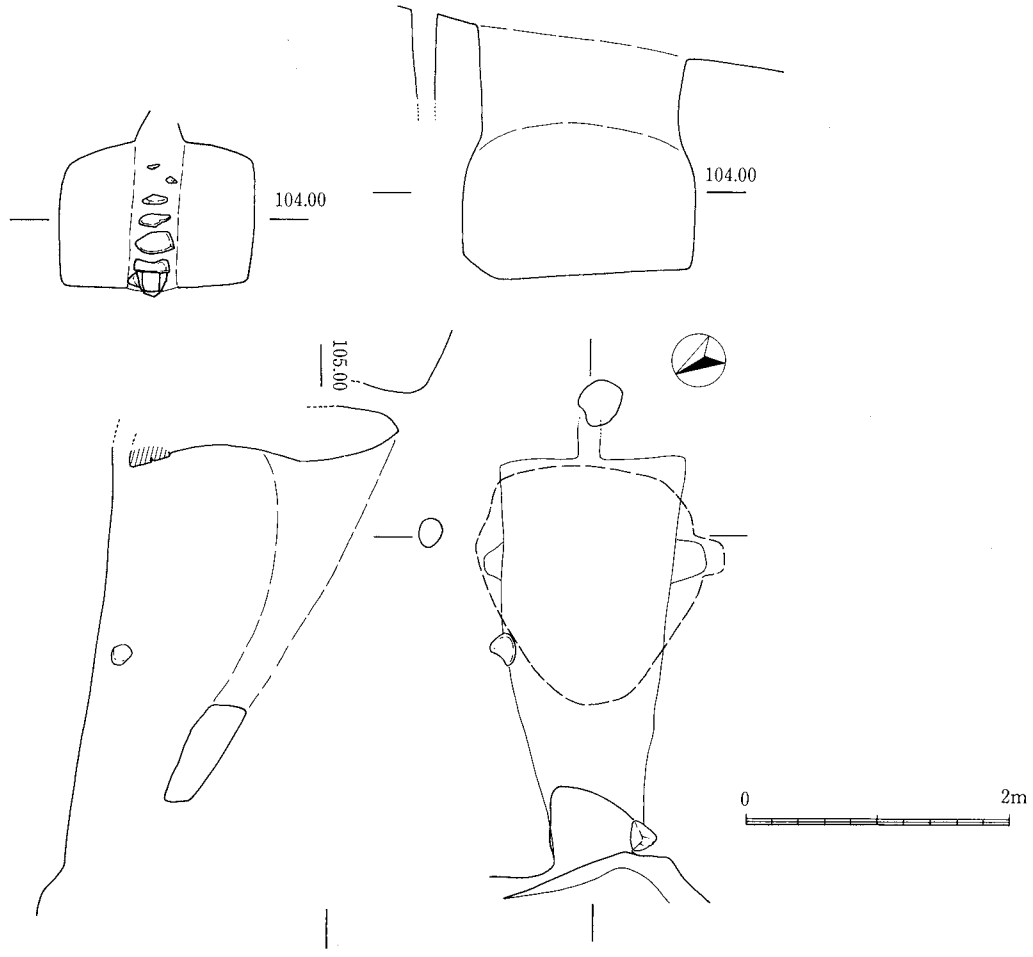
前庭部は谷側に傾斜を付けるものの面が形成され、幅約2.5m、長さ４mの範囲で検出され、柱穴に想定できるピットが認められ、簡略ではあるが覆い屋が建てられていたと考えられる。

第３号炭窯跡は北端に構築されたもので、床面の高さなどから第２号炭窯の新段階以降での掘削と見られ、第１号炭窯の構築が失敗に終わった後に実施されたと想定される。それは、第２号炭窯に主軸方向を揃えた第１号が完成できなかった状況から、立地状況を再考し、主軸方位を第２号炭窯から離れる方向で掘削されている事から推測される。その為遺存状態は比較的良好で、焚口部の天井部が遺存していた。平面プランは笏状をなし、奥壁部が最も広がり、角が立つ形態を取り、長さ320cm、奥壁部の幅145cm、焚口部の幅60cm、奥壁部の高さ約120cm、焚口部の高さ70cmの規模を測る。床面は焚口に向けて傾斜が付けられるが、排水溝などの施設の構築は見られない。煙道は奥壁中央、両側面の奥壁側に寄せた位置の３ヶ所に設定されている。奥壁の煙道は奥壁に溝を掘り窪めた後に、石を貼り付ける形で組み上げていく。側壁の煙道は窯体に対して斜め方向に立ち上げる成形で、双方共に遺存状態は良くない。天井部の形状は中央部が崩落している事から確定は出来ないが、奥壁部での在り方から中央部が若干高まるものの方形プランをなすと考えられる。

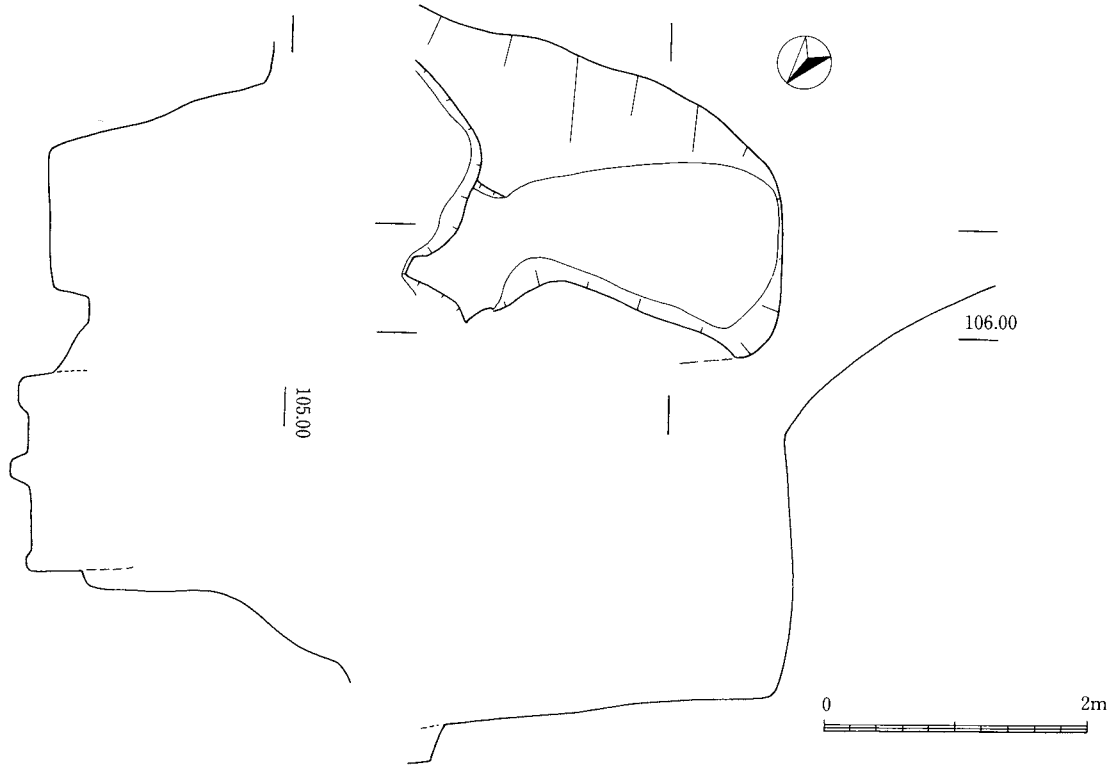
これら３基の炭窯は、焚口部の床面レベルの高低差から第２号、第１号、第３号という順序で構築されたと見



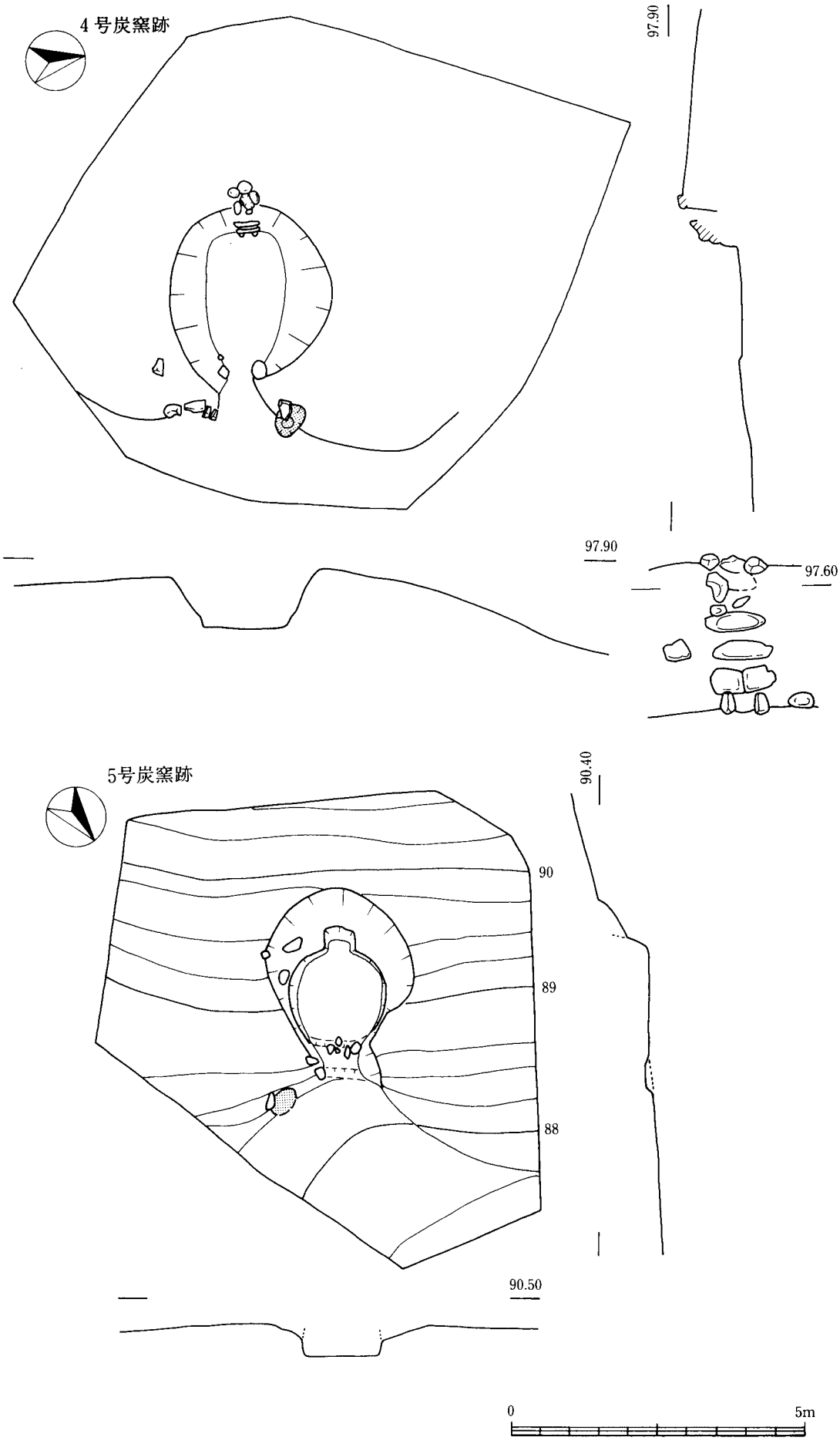
第113図　第２号炭窯跡実測図（1/60）



第114図　第３号炭窯跡実測図（1/60）



第115図　第１号炭窯跡実測図（1/60）



第116図　第４・５号炭窯跡実測図（1/80）

られ、第２号、第３号は繰り返し操業が実施されたと推測できる。第２号炭窯の段階には前庭部に簡略な掘立柱建物が配されていたと見られるが、第３号炭窯の時期では検出できなかったが、同様の施設が置かれたものと思われる。炭窯そのものの覆屋の状況は発見できなかったが、降雨に備えての簡略な施設がなされたものと推測される。

時期的には遺物の出土がない事から確定は困難であるが、第２号の長方形プランから第３号の笏状への形態の変化から、古代での製鉄遺跡から検出される床面の傾斜が強く、長大な長方形プランをなす炭窯からの変遷が推測できる。第２号では床面の傾斜が弱く、長さも短くなる形態から後出的と見られる。そして、笏状プランへの変化を遂げる状況から、古代末から中世段階での位置付けを想定したが、今後の類似資料の検出を待って再検討が必要である。

2　第４号炭窯跡（第65・116図、図版60）

長滝長尾遺跡Ｃ地区の北に伸びる丘陵の東端斜面に第１～３号炭窯跡群が立地し、同一丘陵の西側斜面裾に設置されているのが、近代での改良窯の本炭窯である。第１～３号炭窯跡群から直線距離で約80ｍを測る。

微地形的に見ると窯跡は丘陵斜面での立地ではなく、東西両方向からの斜面から独立したような谷間の微隆起瘤中央に位置している。谷間の崩落ないしは地滑りを起こした様な地形である。東側斜面裾には谷水が北に向けて流れている。炭窯は頂上部に掘り込まれた焼成室に、焚口部が斜面裾に開口する形を取る小型の炭窯である。

平面楕円形プランを呈し、焼成室の長さ250cm、幅135cm、焚口部の幅36cmの規模を測る。焚口部の両側面には土止めの為の石が貼り付けられ、底面では内部に約40cm入り込んだ位置まで赤変した部分が見られたが、焼成室の手前半分では床および壁の焼け付きは明瞭ではない状態であった。奥壁側は壁の立ち上がりで堅く焼け付いた面が見られるが、上半では崩落の為明瞭には捉えられなかった。煙道部は溝状に掘り込み板石を貼り付ける形で構築され、高さ105cmを測る。出口部で礫が円形に配されているのが見られる事から、旧状を保っていると想定でき、窯体そのものが大きくはない事を示していると思われる。煙道入口は長い礫を両脇に置き、その上に蓋をするような形で大きな石を載せ順次同大の石で上に延ばす形である。

3　第５号炭窯跡（第59・116図、図版61）

本炭窯跡も近代での所産と見られる改良窯である。長滝長尾遺跡Ｄ地区が立地する丘陵が北側に向けて支脈を派生させ、長滝集落へと流れる谷川に向けて高度を下げている。第４号炭窯は東側約90ｍの距離を測る。窯跡は谷地形に落ち込む直前の斜面上に構築される。焚口部を東側に開口する形で、東斜面に焼成室を掘り込む。焚口部直下には谷水が北側に流れていて、周辺での作業場などの施設を想定できる平坦面は認められなかった。

平面プランは略楕円形を呈し、斜面の等高線に対して直行する位置で長軸を設定する。煙道部側の斜面は円形状に段を形成しているのが見られるが、崩落に因るものではなく炭窯構築の際に天井部を覆う目的で採土されたと推測され、繰り返し操業を行った可能性は薄いのではないかとも考えられる。床面での長径は160cm、短径144cm、現況での壁の高さは28cm程度で、床面は平坦に成形される。奥壁の煙道は円形のピットとなる形で遺存しているが、石を張り込むなどの施設は検出できなかった。焚口部では焼土面が顕著に認められ。焼け付いた礫が焼土層の中に埋め込まれている状況が見られた。前庭部は傾斜するものの僅かの平坦面が成形されたと考えられる。

調査範囲の中での遺物の出土は見られなかったが、煙道部の位置する丘陵斜面から、先に図示した弥生時代中期の甕口縁部を表採している。

本炭窯跡は簡略な作業での構築が想定される小型の炭窯で、繰り返し操業したとは考えにくい状況を示していると考えられた。壁の立ち上がりがあまり遺存していない事や、周辺部の掘削が天井部へ供給されている可能性が高い事から伏せ焼き法に近い手法がとられたとも考えられる。

Ⅸ　滝谷寺跡

1　地形（図版62）

滝谷寺跡は本丘陵での最初に実施された昭和63（1988）年の現地踏査で確認された遺跡である。平成２年の秋に、大口小松原遺跡・長滝長尾遺跡等の試掘調査の際に、礎石列が認められる主要地区の周辺地点で試掘調査が行われ、広い範囲で遺構が展開しているのが確認された。長滝長尾遺跡が展開する東西方向に伸びる丘陵から派生する支脈および谷斜面に配置される５面以上の造成面が推測でき、東西方向約350m、南北方向約100mの範囲が想定された。

長滝長尾遺跡のある丘陵は、標高138mの東端の尾根が最も高く、標高130m前後の高さを保ちながら西側に尾根筋を延ばしながら細かく支脈を南北方向に派生する。北方向に伸びる丘陵上には縄文時代の住居址、陥穴跡が配置されているのが調査によって確認され、主脈上の平坦面には縄文時代中期集落址の主要部分が展開しているのが確実視され、古代から中世にかけての滝谷寺跡と複合していると見られた。主脈から南側に延びる尾根筋には明確ではないが造成平坦面が見られ、尾根筋に囲まれた谷間の３ヶ所に造成平坦面が構築されているのが確認できた。東西丘陵は支脈を派生させながら高度を下げ、長滝集落背後の谷水田に落ち込んでいく。丘陵の南側は崖状に近い急斜面を形成して、七ッ滝が形成される谷川に落ち込む。七ッ滝を間にして向き合う形での南側の丘陵は、急傾斜面を北に向けて高度を上げ標高155mの痩せ尾根頂上へと上る。

2　遺構の配置

寺跡においては一部で試掘調査を実施しているものの、遺跡の確認が主要な目的である事から遺構や建物配置については表面観察に止まる。

二の滝に南面する滝谷寺跡で最も広い造成面は、三方が丘陵尾根筋に囲繞されている谷地に尾根裾を掘削し南北に段差を設けた平坦面で、南北約50m、東西約20～30mの広さがある。北奥の平坦面には東西棟と推定できる礎石列が見られ、東側斜面裾に径約１mの小土坑が開口しているのが知られ、地形的な在り方から閼伽池が可能視できる。建物跡と北側斜面裾とは距離が在るように見られる。礎石列の周辺表土層から小型土師質土器の破片の散布が見られた。北側の平坦面の南縁には数段程度の石垣列が構築され、中央からやや東に寄せた位置に、幅１m強の石垣で区画された路状の窪地が南側に直線的に延びていく。石垣列の内側は段を付けて高まり、東西両面ともに人頭大の石が散らばる事から、２棟を越える建物跡が想定でき、造成面全体では少なくとも３棟程度の建物が存在したと考えられる。路状の窪地は南端で斜面に取り付き、南西方向へ急斜面を下っていく山道となるが、途上で崖崩れの為に途切れた状況となるが、四の滝より下で谷川淵につながると思われる。道と平行して最も落差のある二の滝が臨まれ、滝谷寺の名称の由来を伺わせる。

主要造成面から東方約50m、幅のある尾根筋を越えた谷地奥に平坦面が確認された。平坦面は狭く、南北約６～８m、東西約10～２m程度の規模で、試掘調査で河原石１個が検出されている。造成面から下では丘陵斜面の自然状況の形態を止めていると見られた。谷地を10m程度下った東位置には緩やかな谷地が合流し、区画された面が造成され人頭大の石が列状に配されているのが見られ、施設の構築が想定される。しかし、隣接して近代の炭窯跡が東緩斜面に築かれている事から即断は出来ない。谷筋は緩やかに下り、一の滝近く川縁へ容易に抜ける事が出来る。

滝谷寺跡の西側丘陵を越えた谷地にも、造成面があるようにも見られたが、遺存状態は不良で明確には捉えに

くい状態である。試掘調査では9世紀前半代の土師器甕口縁部片と10世紀代の土師器高台付内黒土器底部片の出土が見られた。また、東谷部では9世紀前半代の須恵器甕胴部片の出土があった。滝谷寺は真言宗系寺院として中世に栄えたと位置付けされているが、9世紀代の古代での創建が推測できる状況も考えられる。

3　まとめ

滝谷寺跡で9～10世紀代の遺物の出土から古代からの創建も想定できるが、山林寺院としての体裁が整うのは中世段階と思われる。丘陵内の小字名では、滝谷寺跡は「寺屋敷」と呼ばれ、七ッ滝を挟んだ対岸には「賽の磧」（「行塚」）と通称される径約5mの塚が立地している。長滝集落までの丘陵地内には「てちょぼ」、「うえんぼ」、「じょうみやま」、「三昧谷」、「ひちどうがらん」、「川向」などの地名が見られ、本丘陵への歴史的解明への手がかりと思われる。

さらに、丘陵の西側端部には、延喜式に記載されている「瀧浪社」（多伎奈美神社）や隣接していた長滝経塚が知られ、平成6年度に発見され調査が実施された長滝墓山C遺跡（経塚）や宮竹墓谷中世墓群等が新たに加わり、本寺跡周辺の宗教的遺跡の濃密な展開は新たな視点での歴史的究明を要請していると考えられる。

報告書抄録

ふりがな	のみきゅうりょうひがしいせきぐん
書名	能美丘陵東遺跡群　II
副書名	いしかわサイエンスパーク整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	三谷　正輝・西野　秀和
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター
所在地	〒921　石川県金沢市米泉4丁目133　TEL　076-243-7692
発行年月日	西暦　1997年8月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうやしき 庄が屋敷A	いしかわけんのみぐん 石川県能美郡 たつのくちまちみやたけ 辰口町宮竹	17323	12108	36度 26分 52秒	136度 35分 38秒	19930407～ 19930917	6,800m²	区画整理（いしかわサイエンスパーク整備）に伴う事前調査
おおぐちこまつばら 大口小松原	のみぐんたつのくちまちおおくち 能美郡辰口町大口	17323	—	36度 26分 27秒	136度 35分 32秒	19930813～ 19931105	3,800m²	同　上
ながたきながお 長滝長尾	のみぐんたつのくちまちながたき 能美郡辰口町長滝	17323	12097	36度 26分 27秒	136度 35分 21秒	19930902～ 19931112 19940704～	3,200m²	同　上
ながたきみやたに 長滝宮谷	同　上	17323	12096	36度 26分 32秒	136度 35分 21秒	19930823～ 19931122	400m²	同　上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
庄が屋敷A	集落跡	縄文	竪穴住居　13軒 土坑墓　2基	縄文土器 石器	
大口小松原	集落跡	縄文 古代	竪穴住居　1軒 陥穴　基 建物跡　1棟 焼土坑　3基	縄文土器 石器 土師器	
長滝長尾	集落跡	縄文 古代	竪穴住居　5軒 陥穴　3基 焼土坑　4基	縄文土器 石器	
長滝宮谷	炭窯跡	近代	炭窯跡　1基 横穴　1基	釉薬瓦	

図版1　庄が屋敷A遺跡

調査前の状況（北東から）

表土除去作業（北から）

同上（南から）

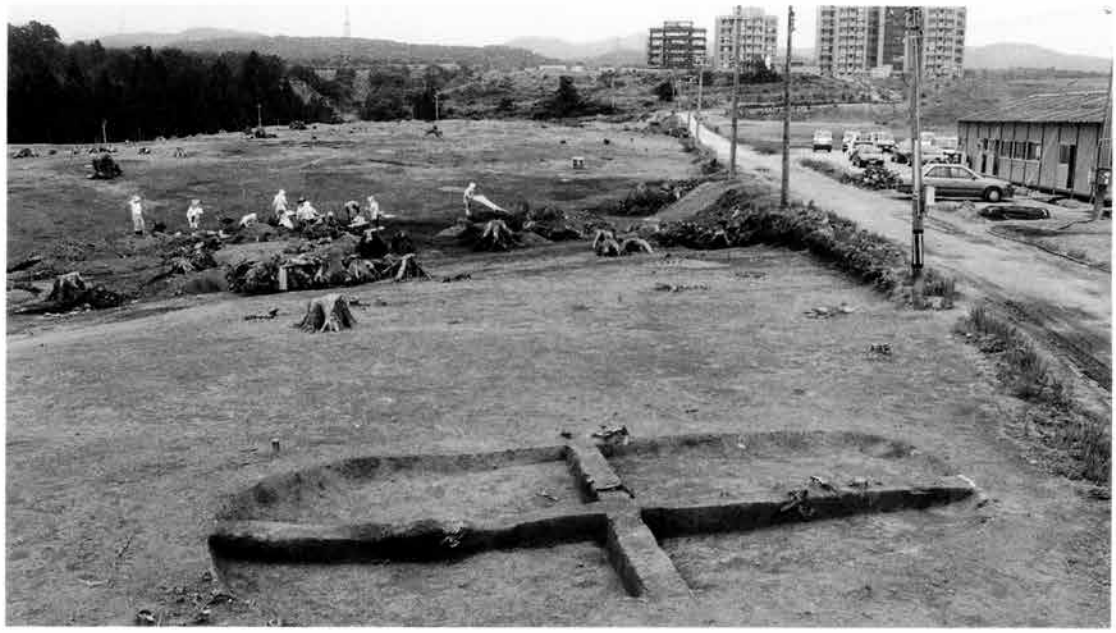
図版2　庄が屋敷A遺跡

住居址群近景（北西から）

第2号住居址全景（西から）

同上（東から）

図版3　庄が屋敷A遺跡

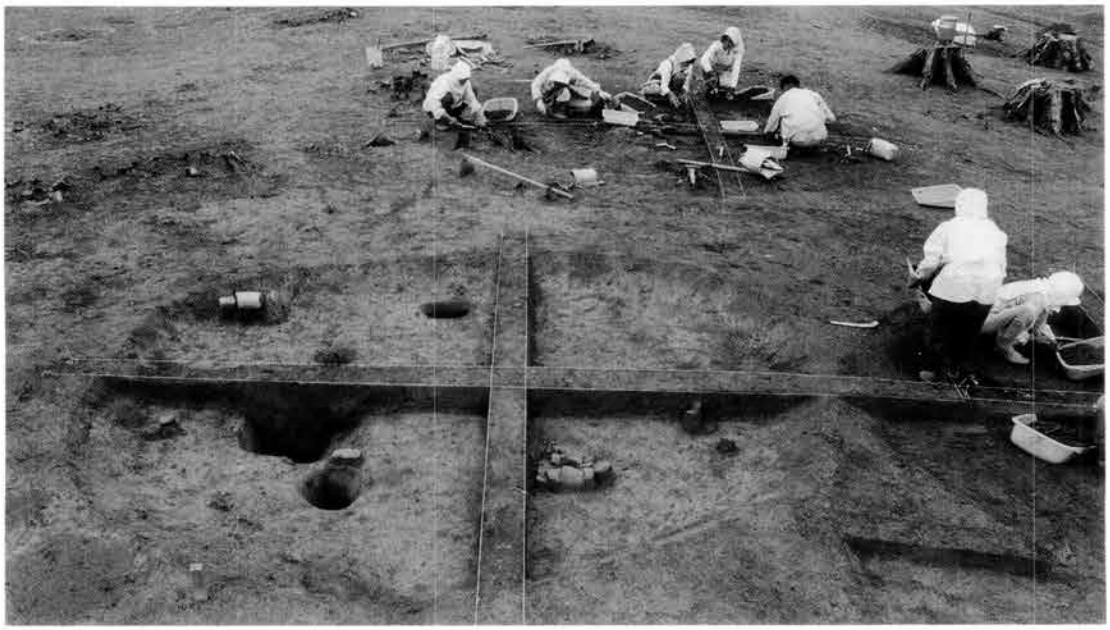


第3号住居址土層断面

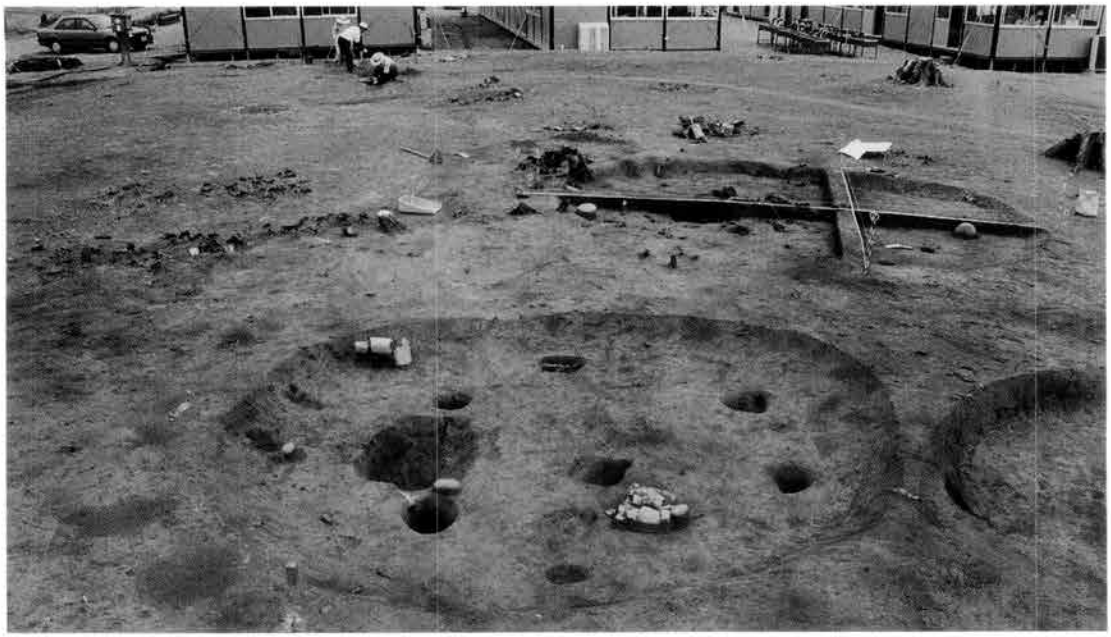
同上　発掘状況

同上　全景（南から）

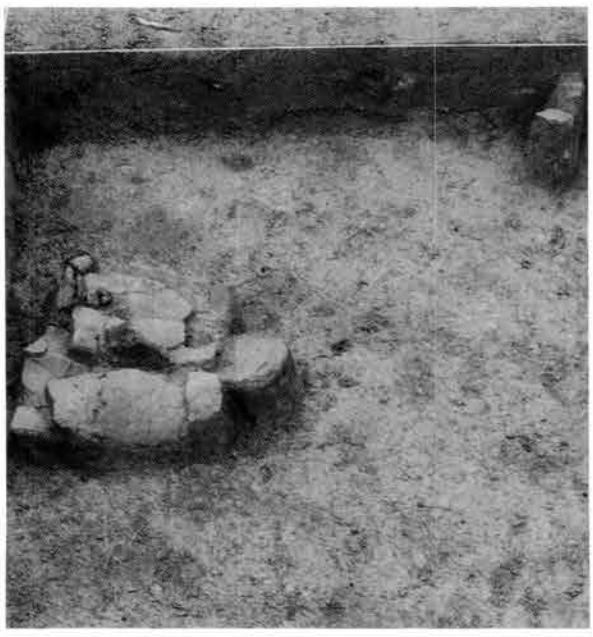
図版4　庄が屋敷A遺跡



第4号住居址土層断面



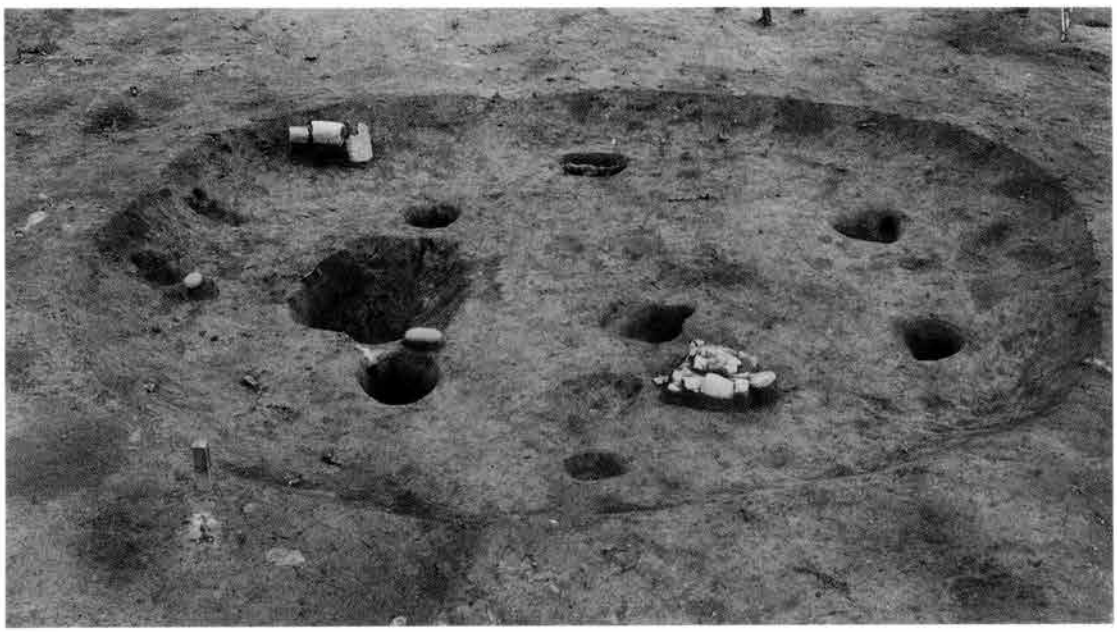
同上　全景



右・ピット内の炭化物
左・遺物出土状況

図版5　庄が屋敷A遺跡

右・土坑全景
左・土坑の土層断面



第4号住居址全景（北から）

同上　全景（東から）

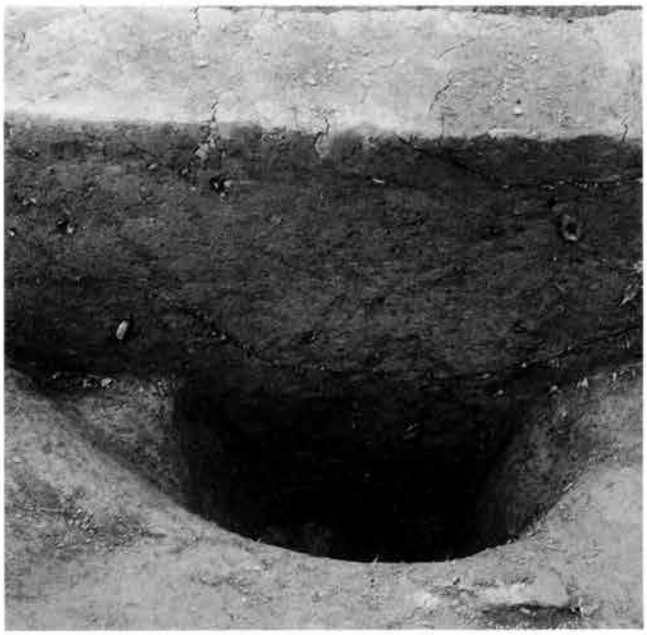
図版6　庄が屋敷A遺跡

第5号住居址発掘状況

同上　全景（北から）

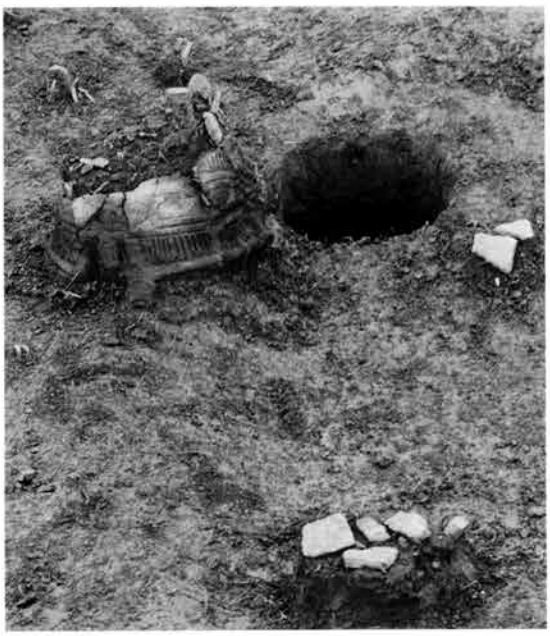
同上　全景（南から）

図版7　庄が屋敷A遺跡



右・土坑内部
左・土坑の土層断面

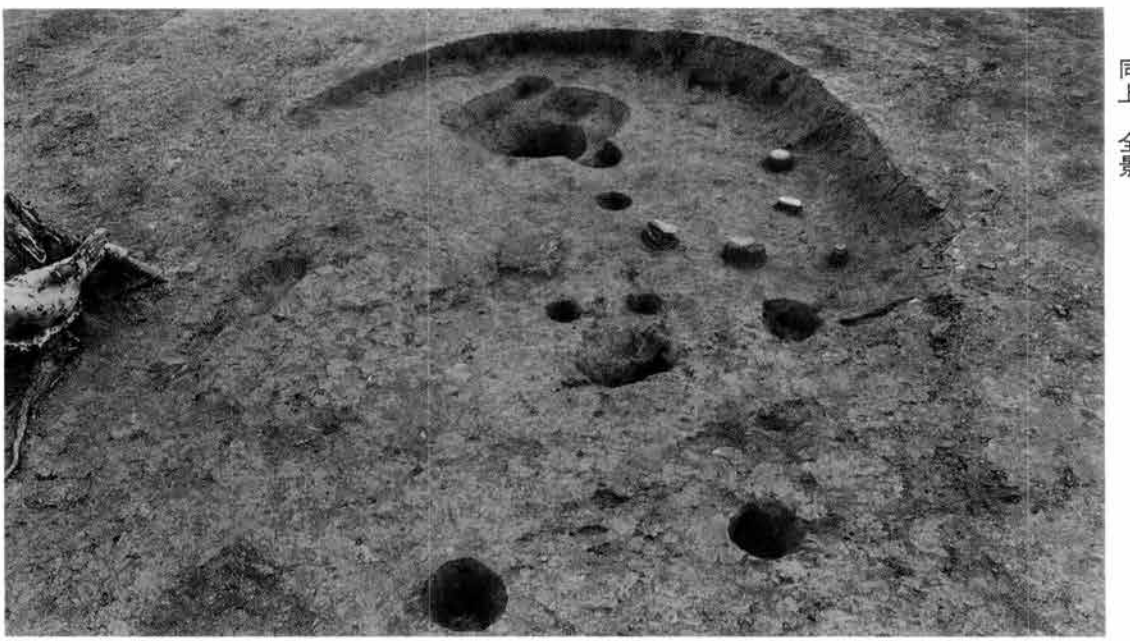
第5号住居址遺物出土状況



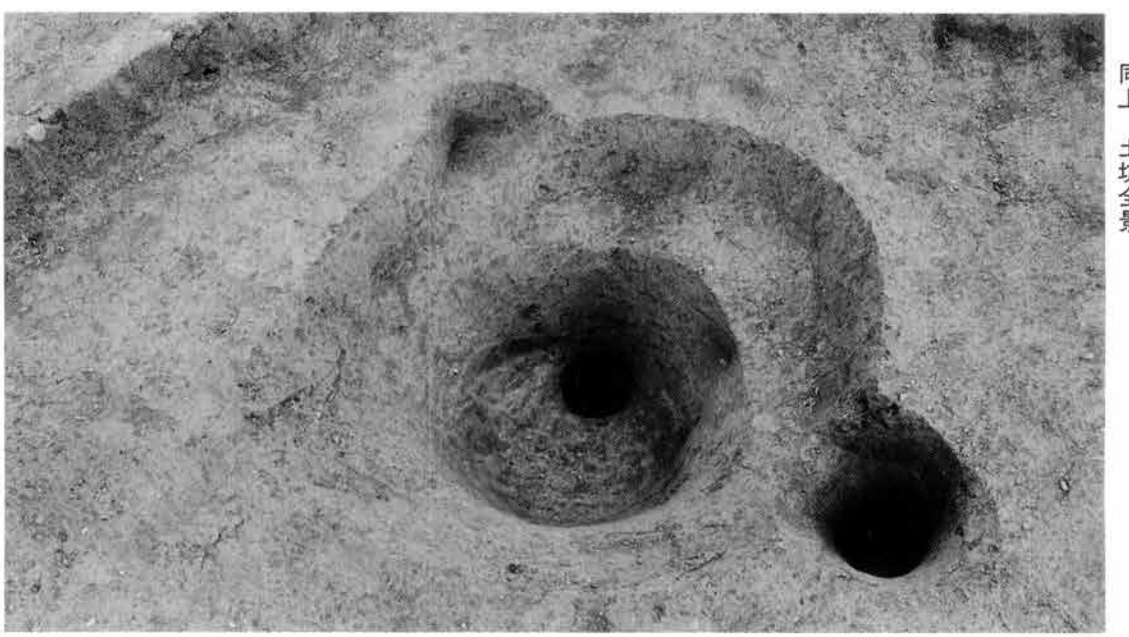
同上

図版8　庄が屋敷A遺跡

第7号住居址土層断面



同上　全景

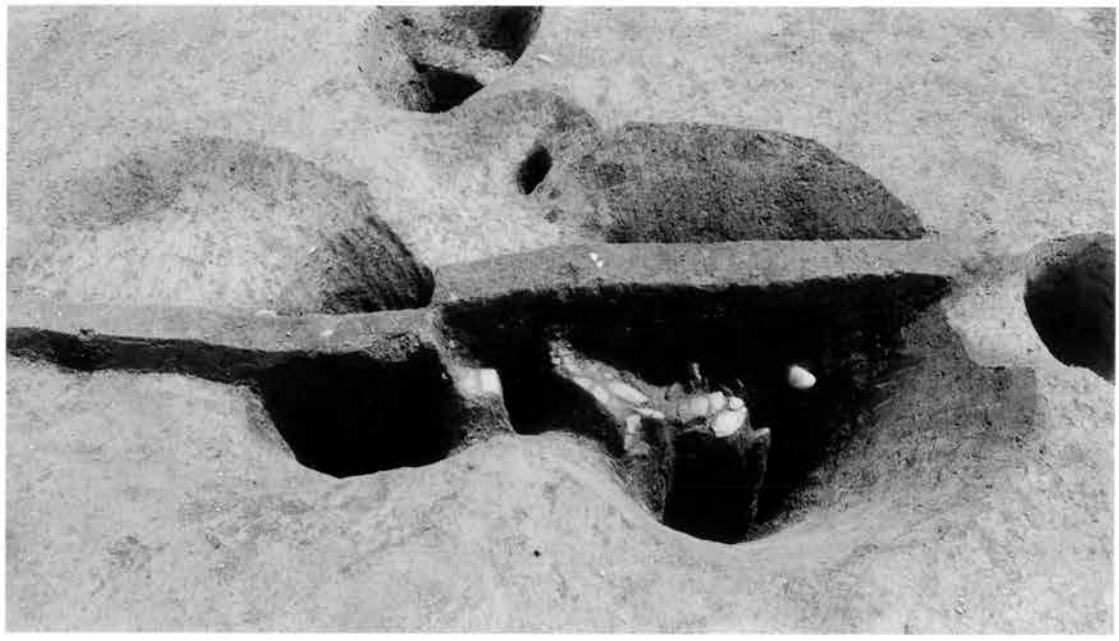


同上　土坑全景

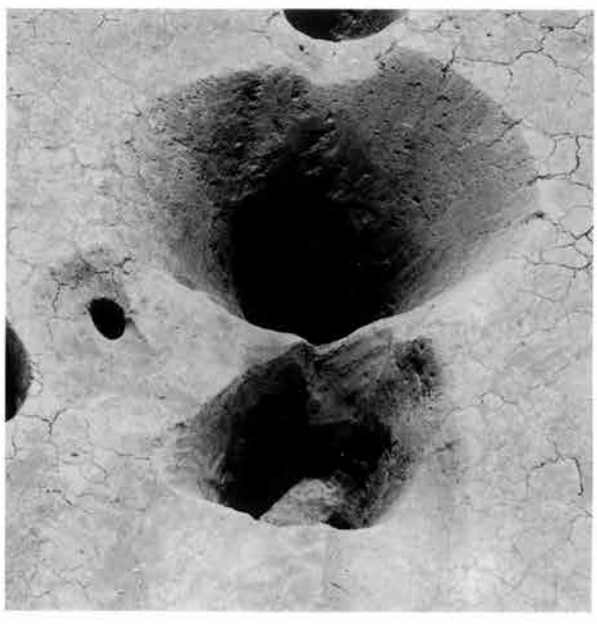
図版9　庄が屋敷A遺跡

第8号住居址全景

同上　土坑断面



右・土坑全景
左・遺物出土状況



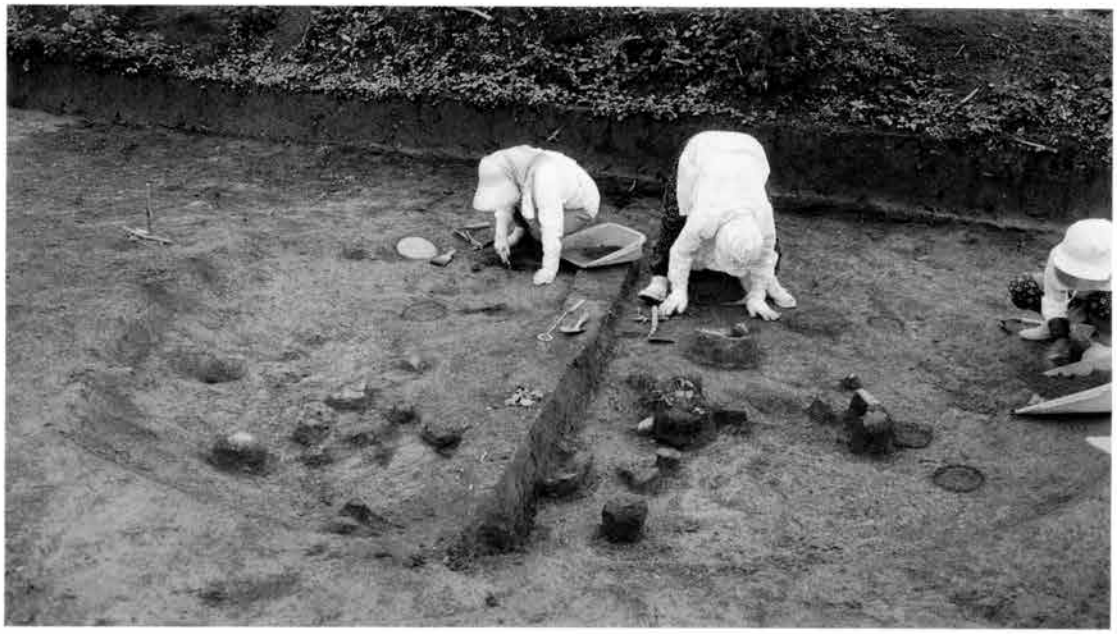
図版10　庄が屋敷A遺跡

第6号住居址全景

第9号住居址全景

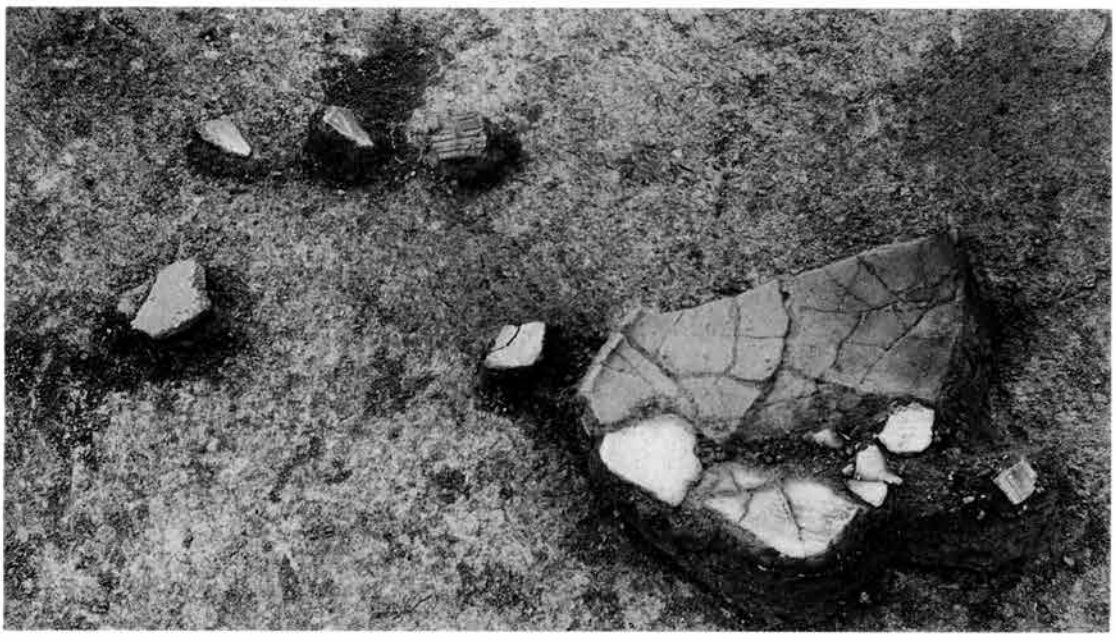
第14号住居址全景

図版11　庄が屋敷A遺跡



第10号住居址発掘状況

同上　全景



同上　遺物出土状況

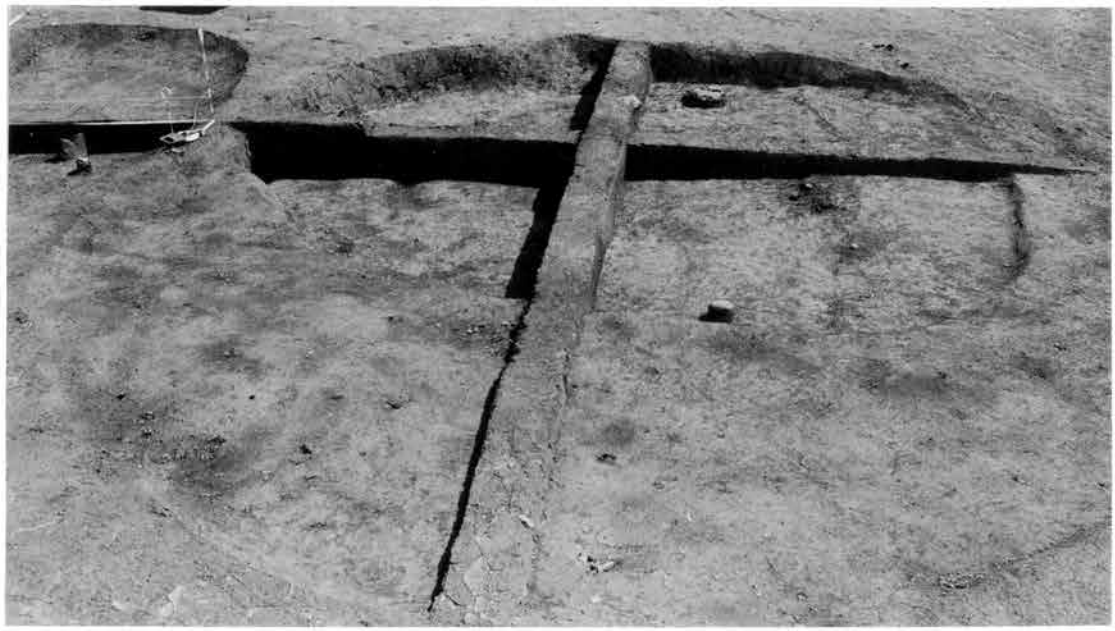
図版12　庄が屋敷A遺跡

第10号住居址遺物出土状況

同上

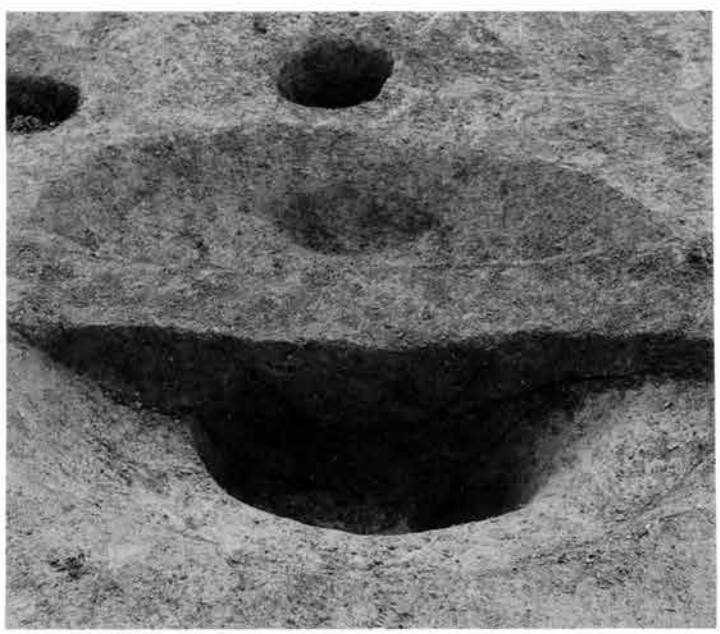
同上

図版13　庄が屋敷A遺跡



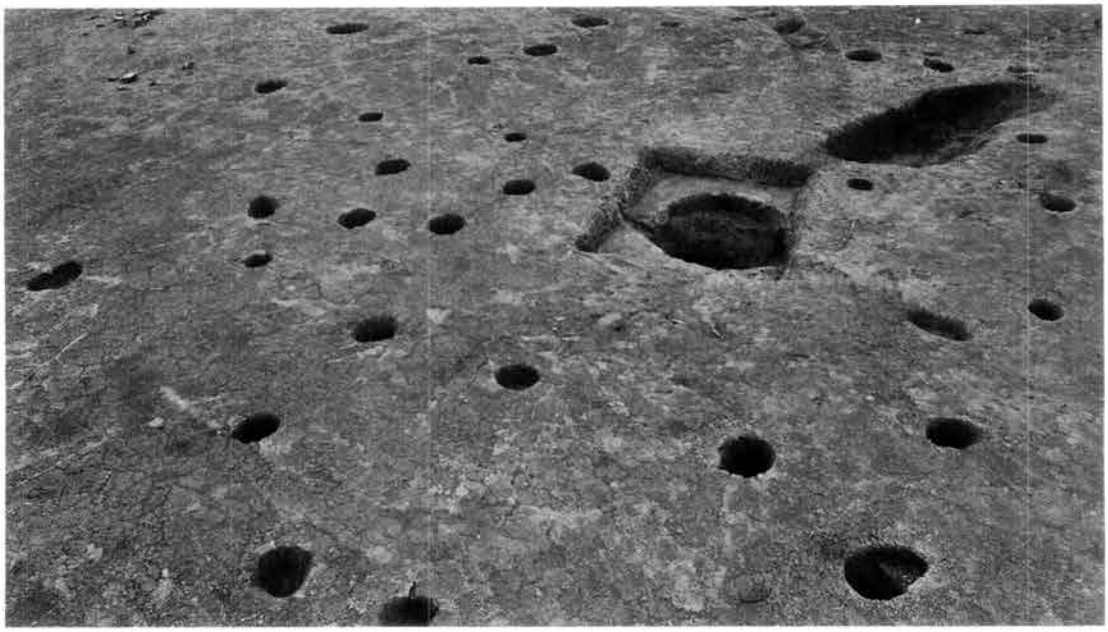
第11号住居址土層断面

同上　全景

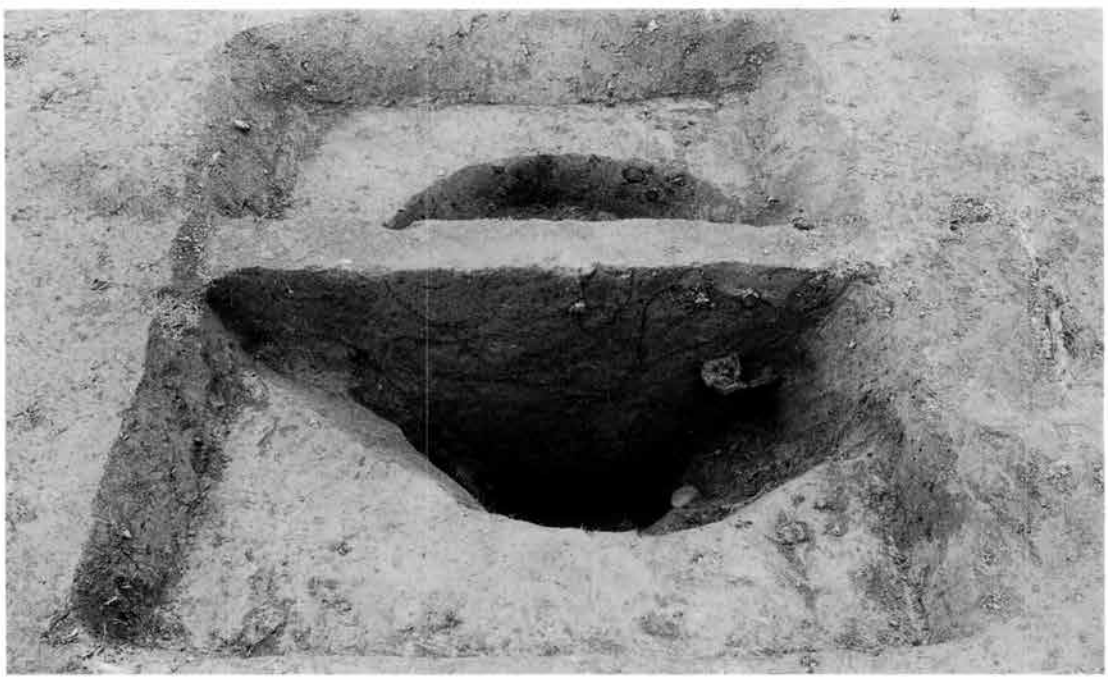


右・土器出土状況
左・土坑の土層断面

図版14　庄が屋敷A遺跡



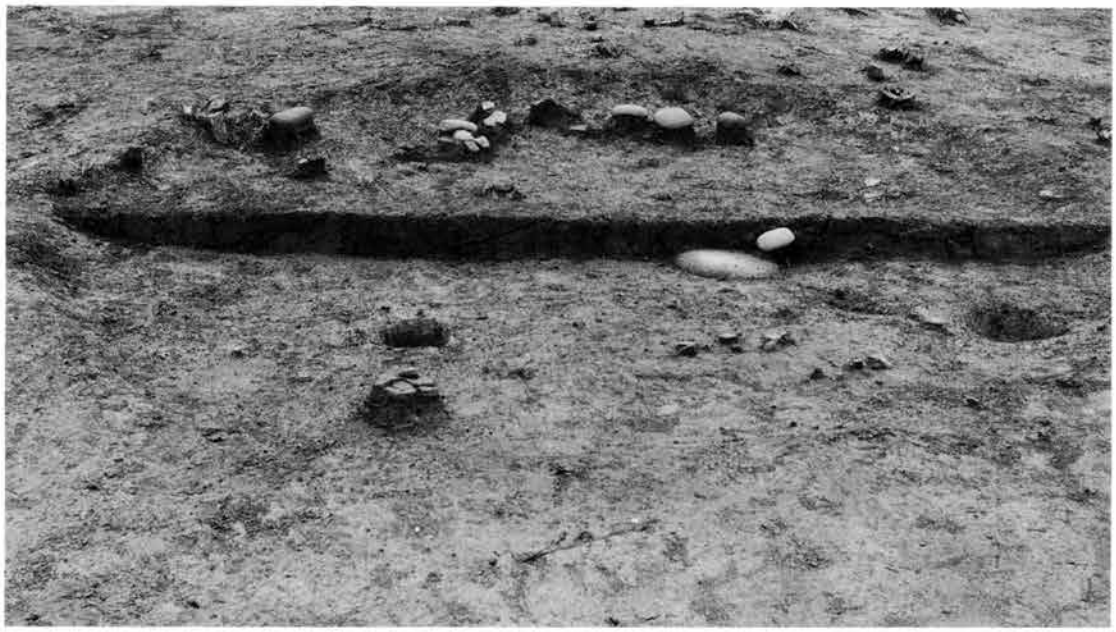
第12号住居址全景



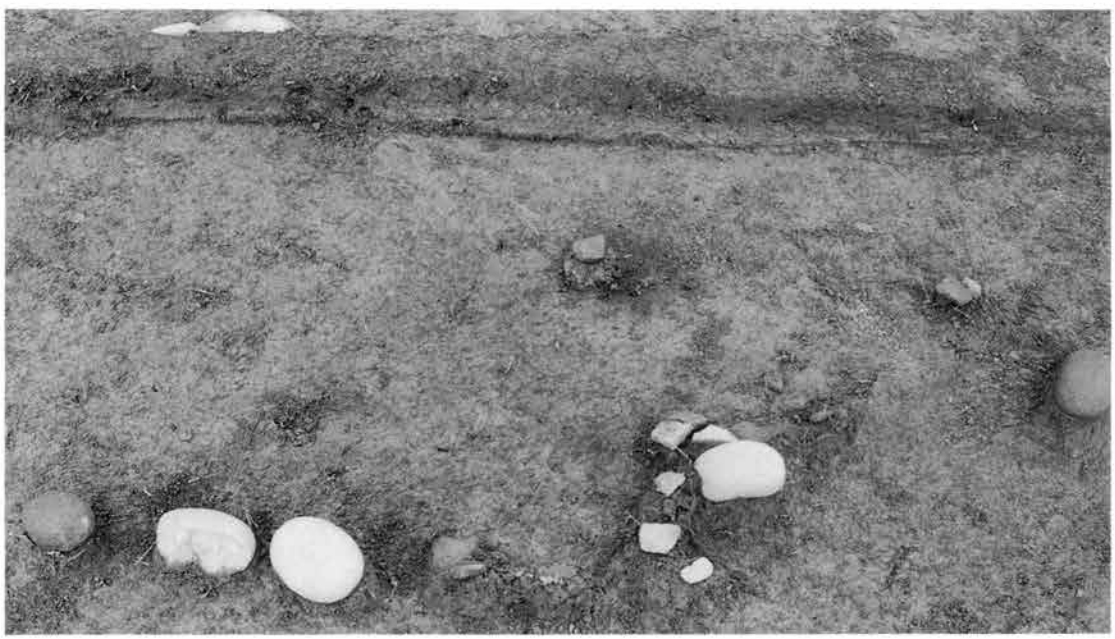
同上　土坑断面

同上　遺物出土状況

図版15　庄が屋敷A遺跡

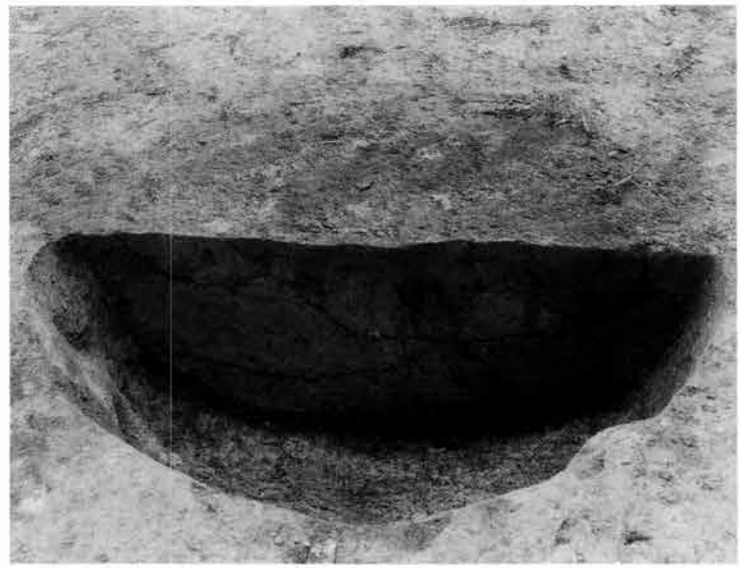


第13号住居址土層断面

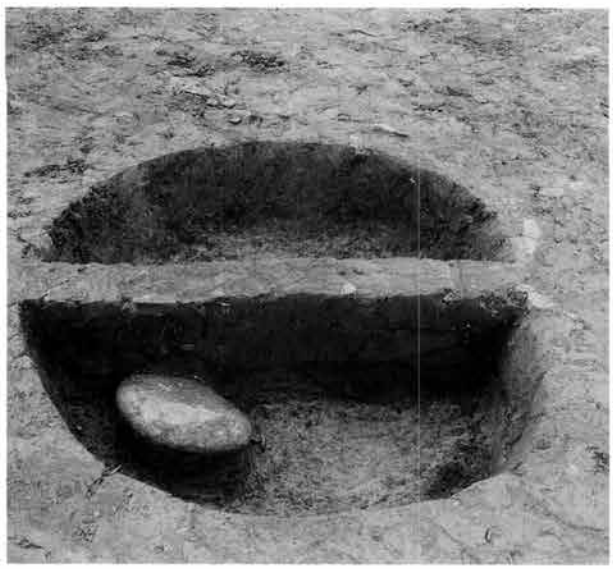


同上　遺物出土状況

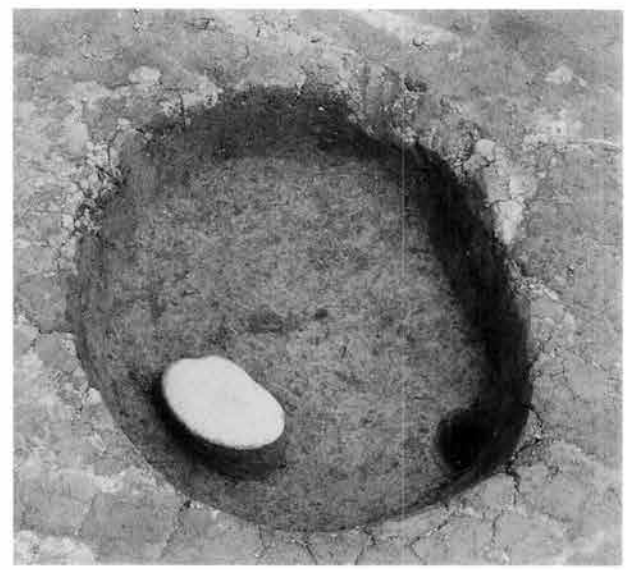
同上　全景



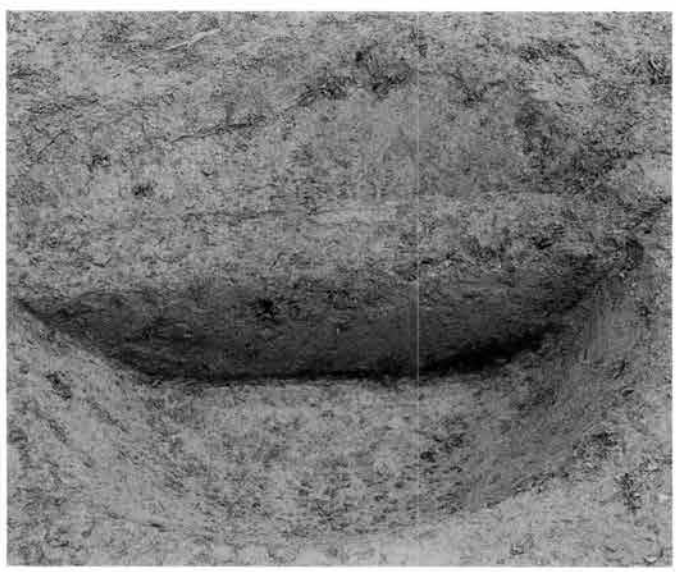
ＳＫＩＩ２土層断面



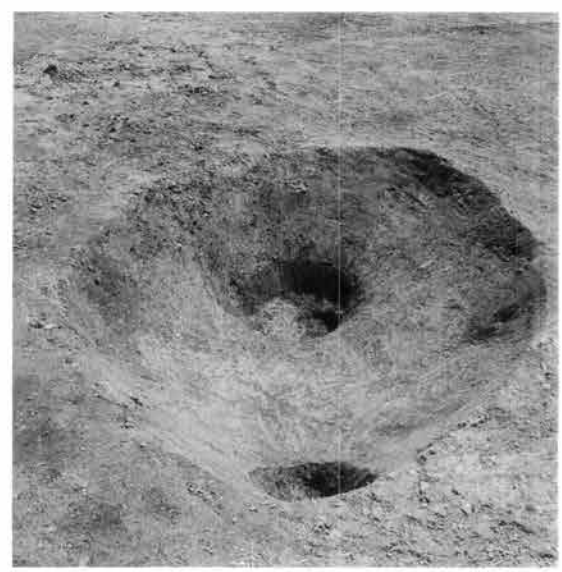
ＳＫＩＩ３土層断面



ＳＫＩＩ３



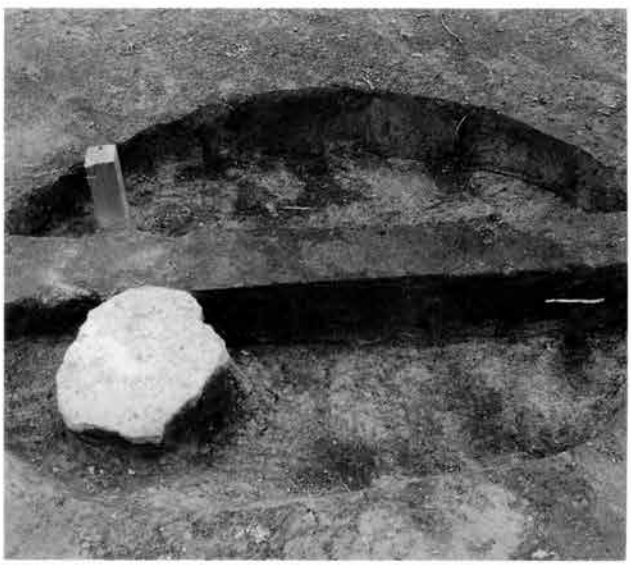
ＳＫＩＩ４土層断面



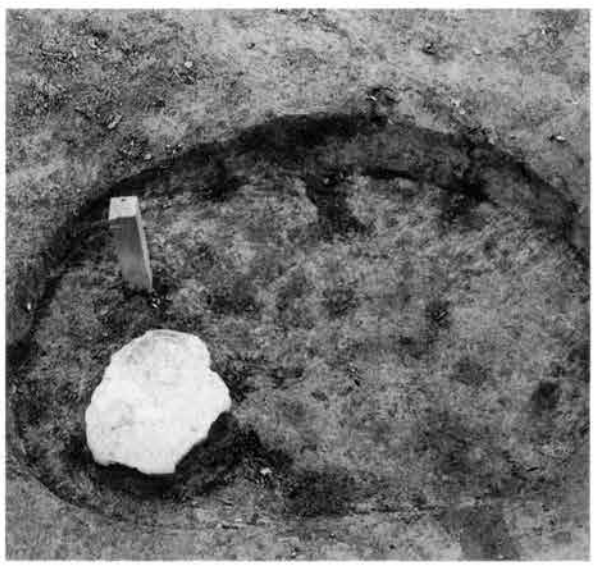
ＳＫＩ０８

ＳＫＩＩ０土層断面

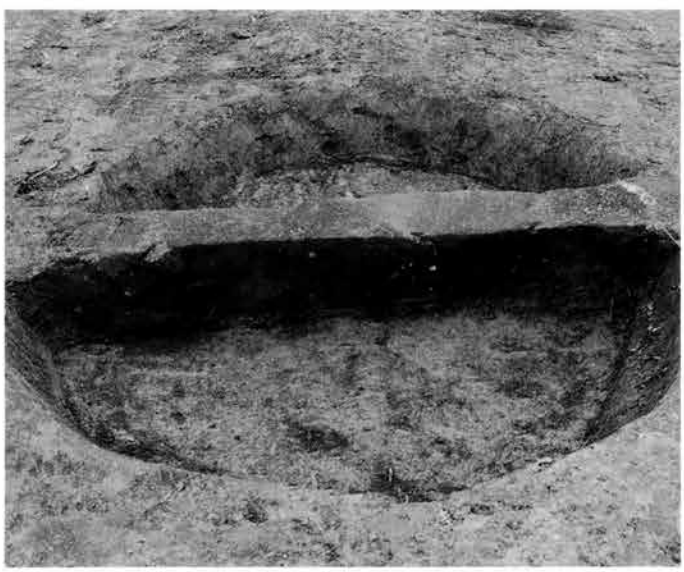
ＳＫＩＩ０



ＳＫＩＩＩ土層断面



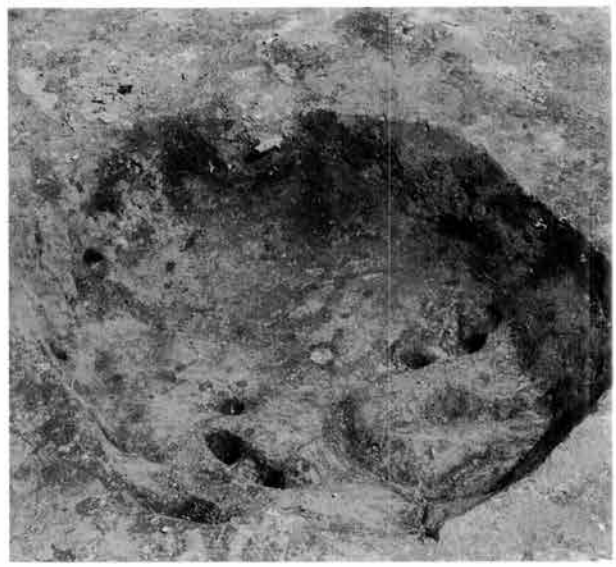
ＳＫＩＩＩ



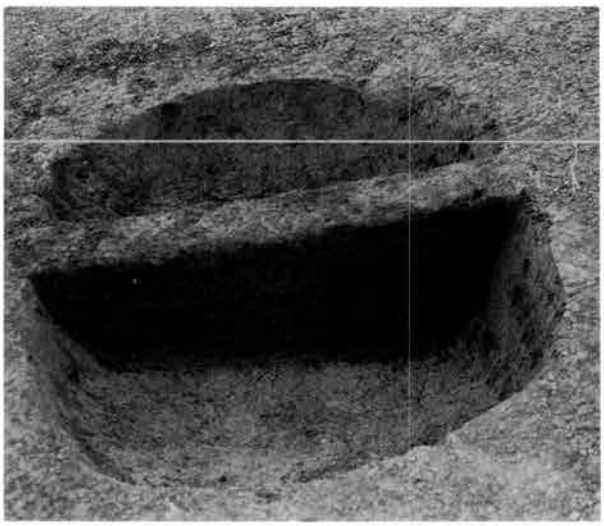
ＳＫＩ０３土層断面

図版18　庄が屋敷A遺跡

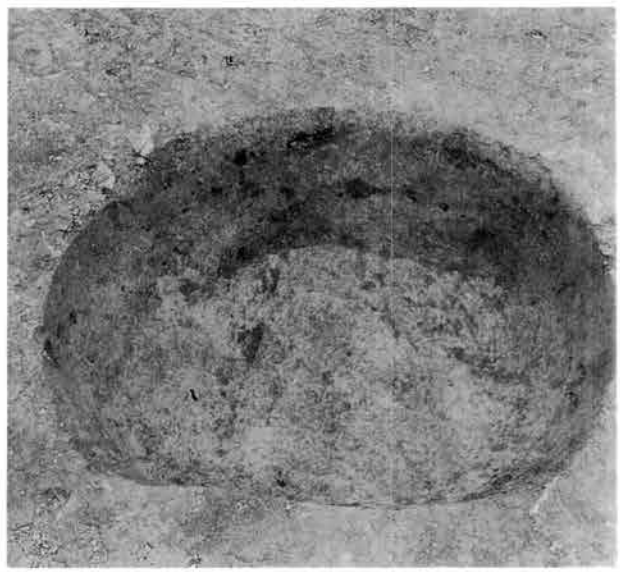
SKI02



SKI05



SKI07土層断面



SKI07

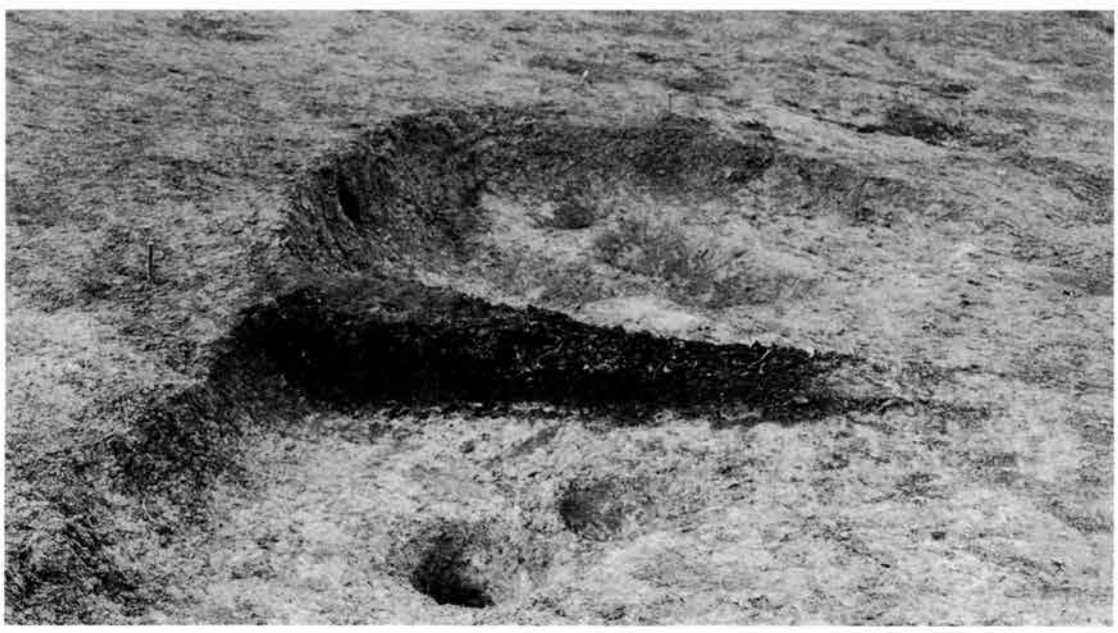
庄が屋敷C遺跡を望む

図版19　庄が屋敷A遺跡

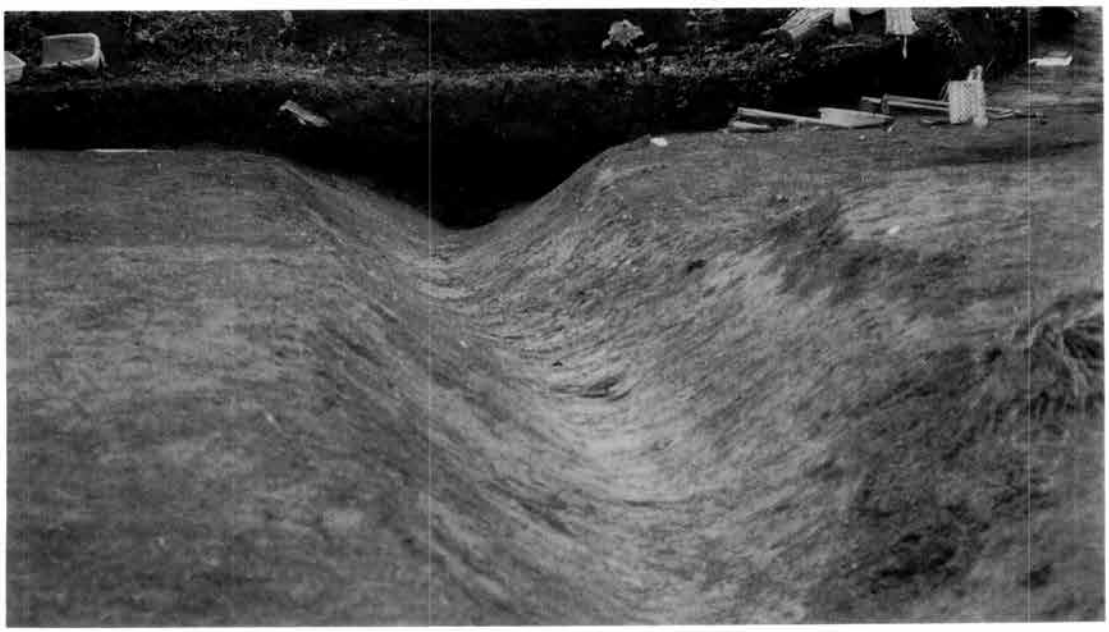
SKII5・II6検出状況

同上　完掘状況

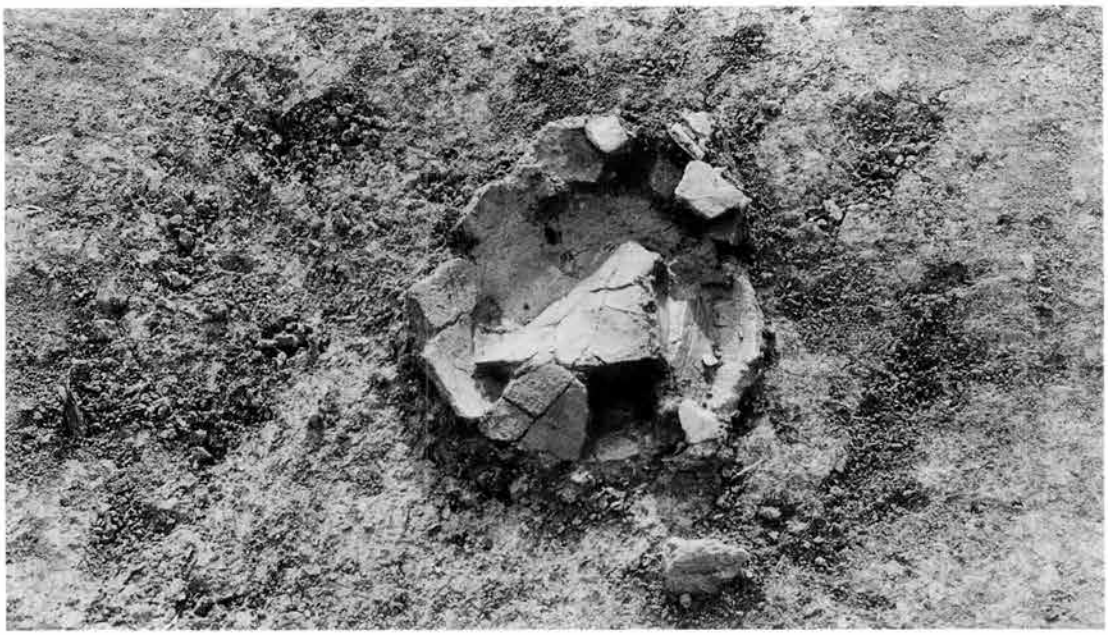
SKII5



図版20　庄が屋敷A遺跡

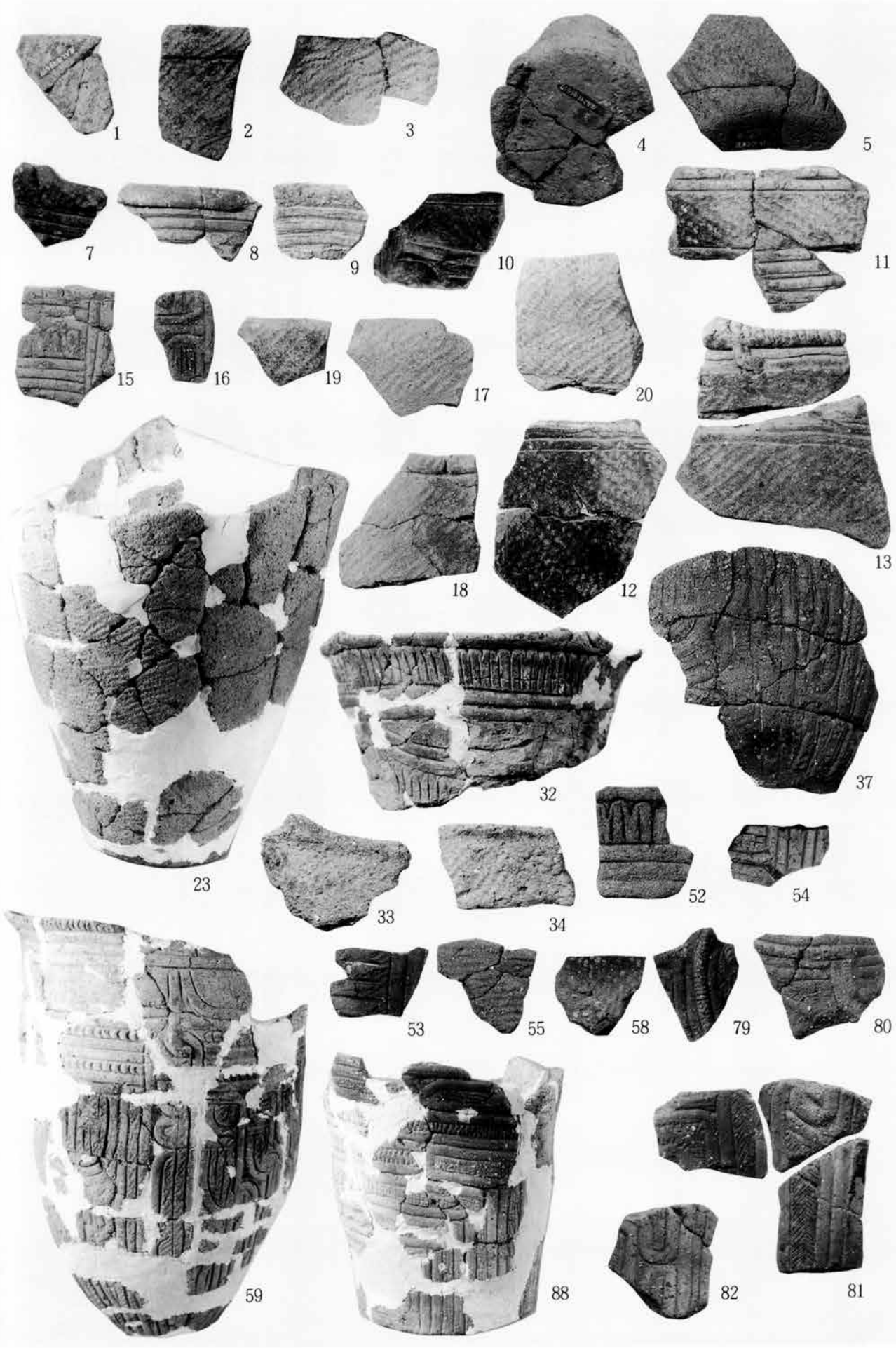


路跡検出状況

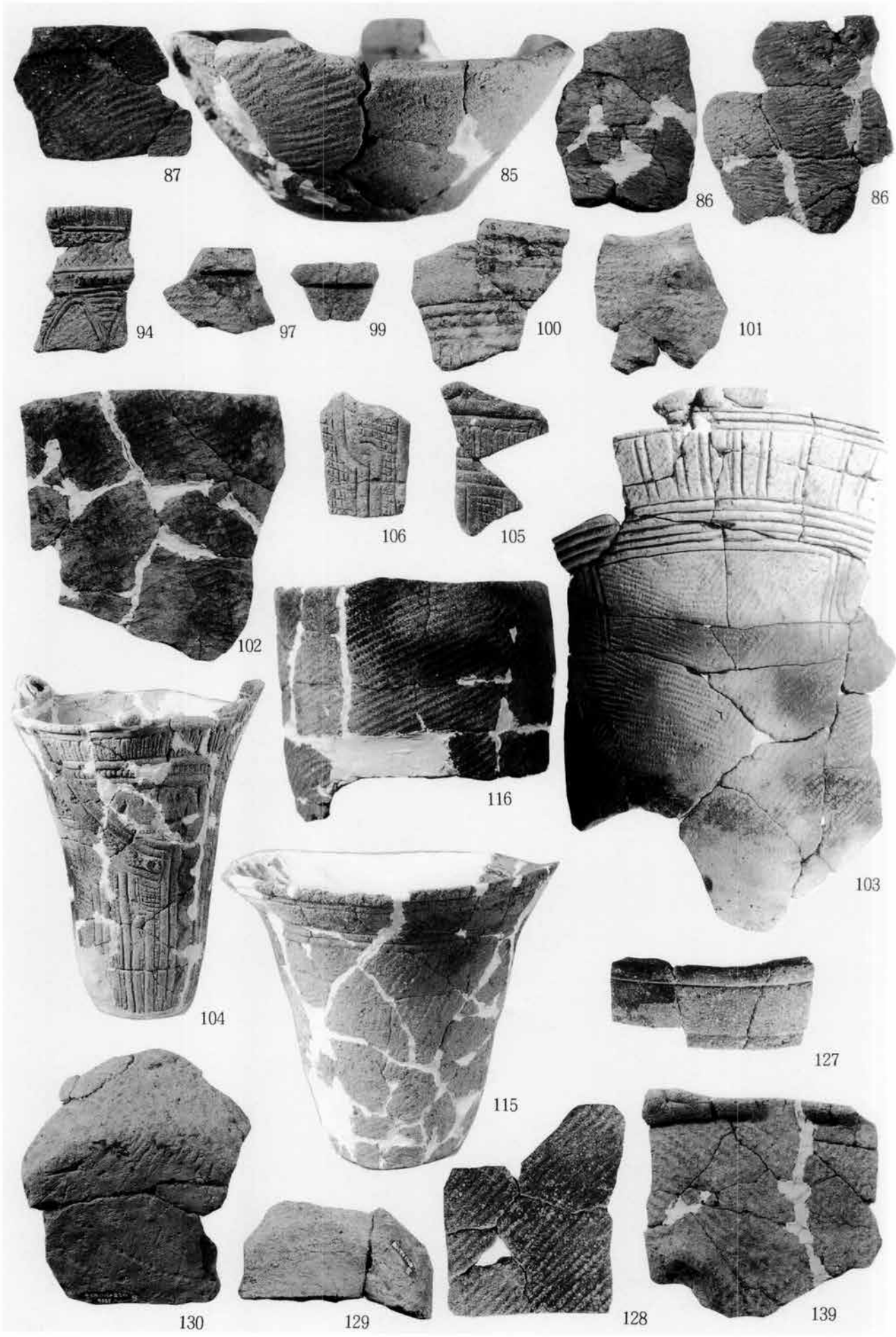


一括土器出土状況

北東部確認調査


1
2
3
4
5
7
8
9
10
11
15
16
19
17
20
13
18
12
23
32
37
52
54
33
34
53
55
58
79
80
59
88
82
81

出土土器


87
85
86
86
94
97
99
100
101
106
105
102
116
103
104
115
127
130
129
128
139

出土土器

図版23　大口小松原遺跡

調査前遠景（北から）

調査前近景（北西から）

調査状況（北から）

図版24　大口小松原遺跡

調査区全景（北から）

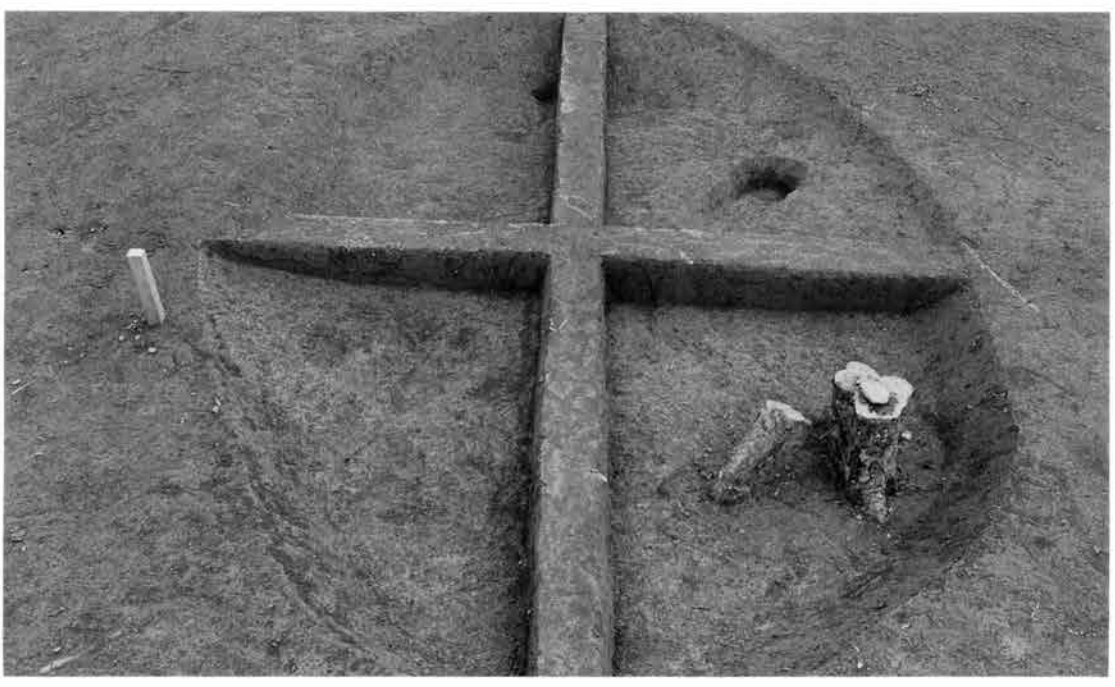
同上（南から）

同上（北西から）

図版25　大口小松原遺跡

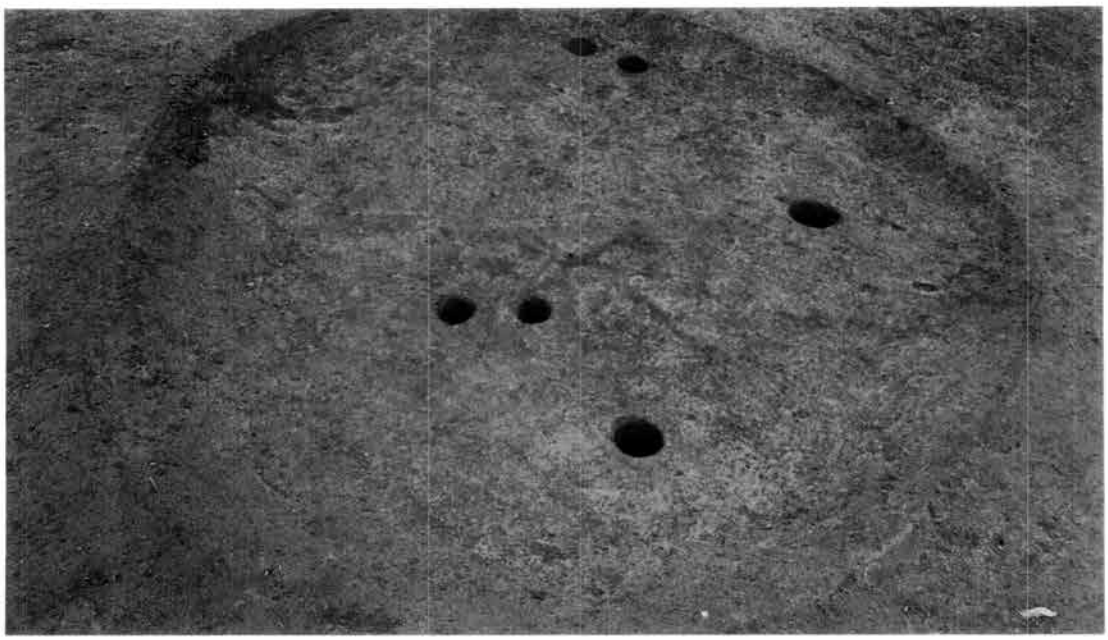
第1号住居址土層断面

同上　完掘状況

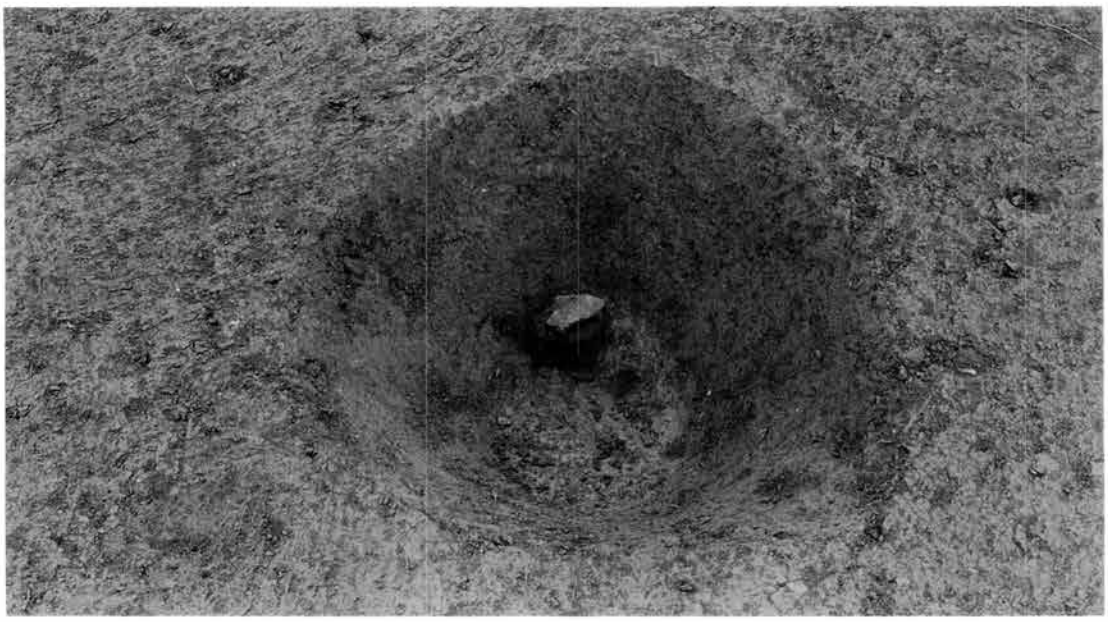


SK17

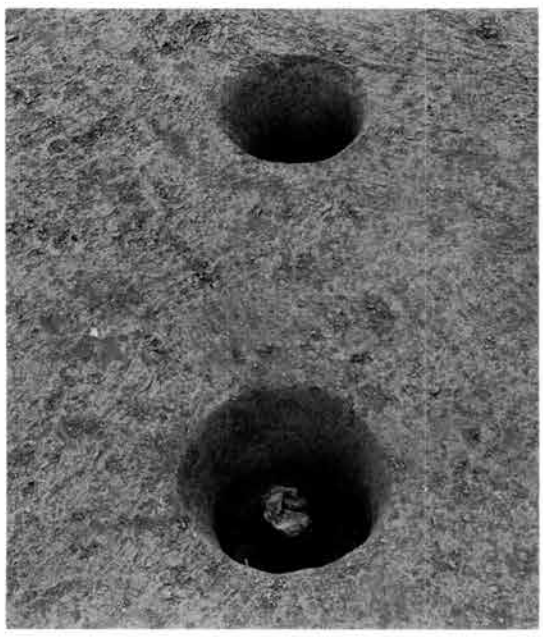
図版26　大口小松原遺跡

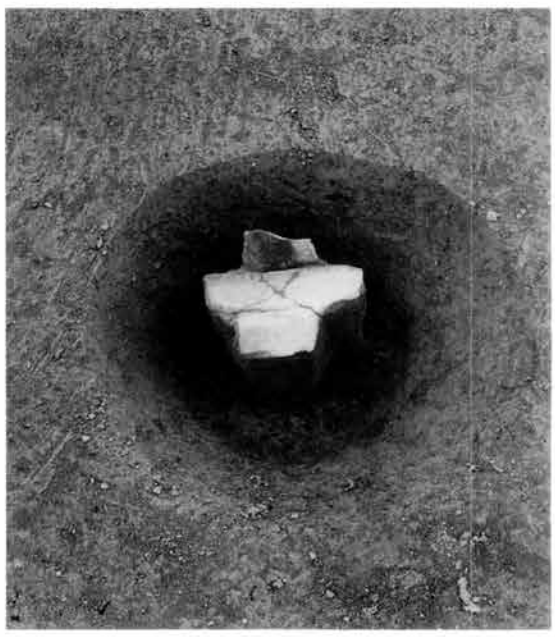


SK10



ピット内遺物出土状況





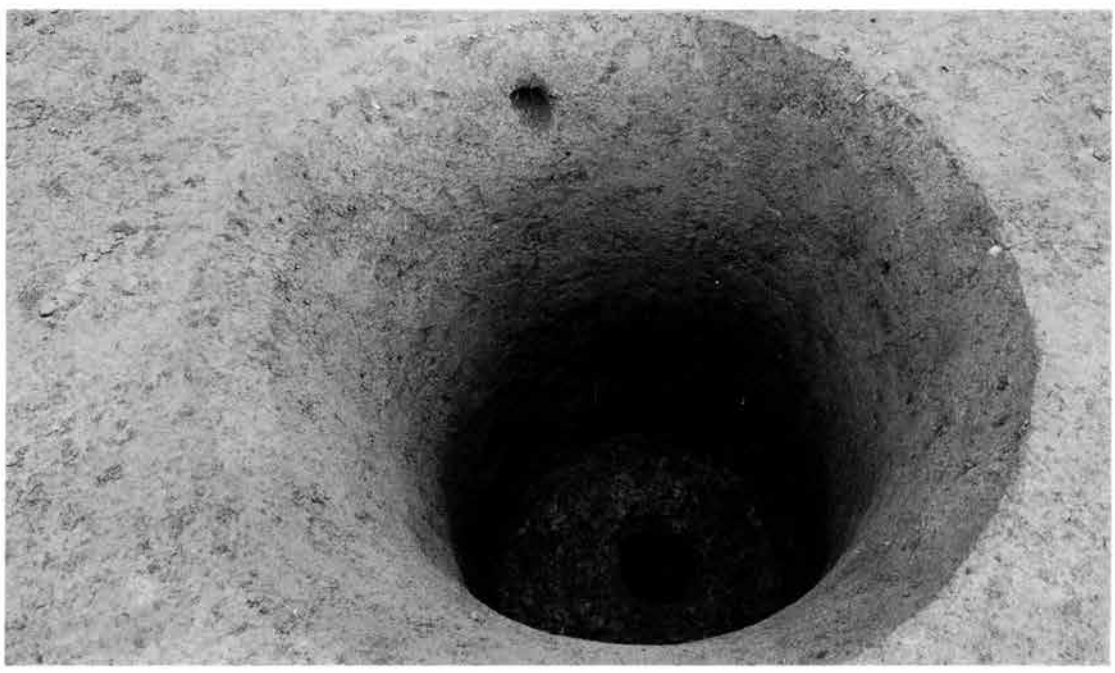
同上

図版27　大口小松原遺跡

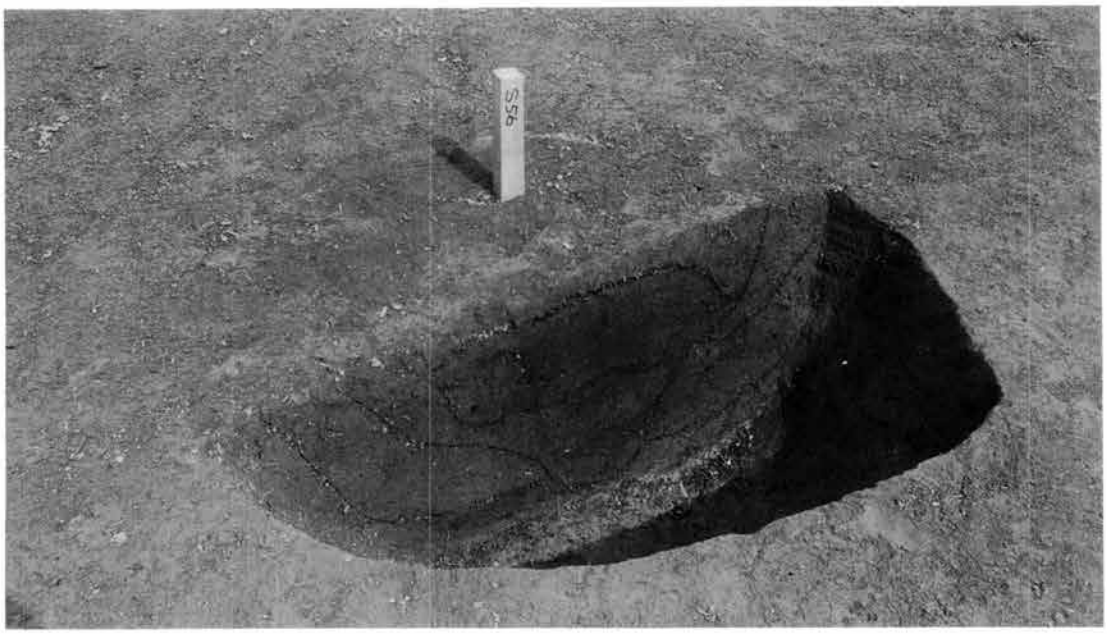
SK1

SK2

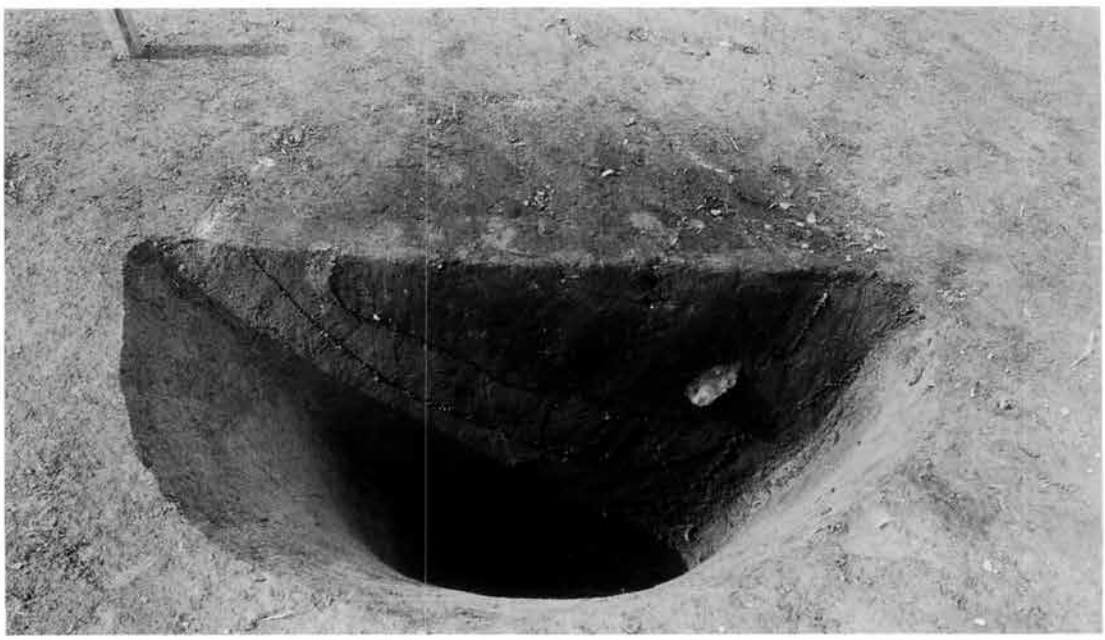
SK5



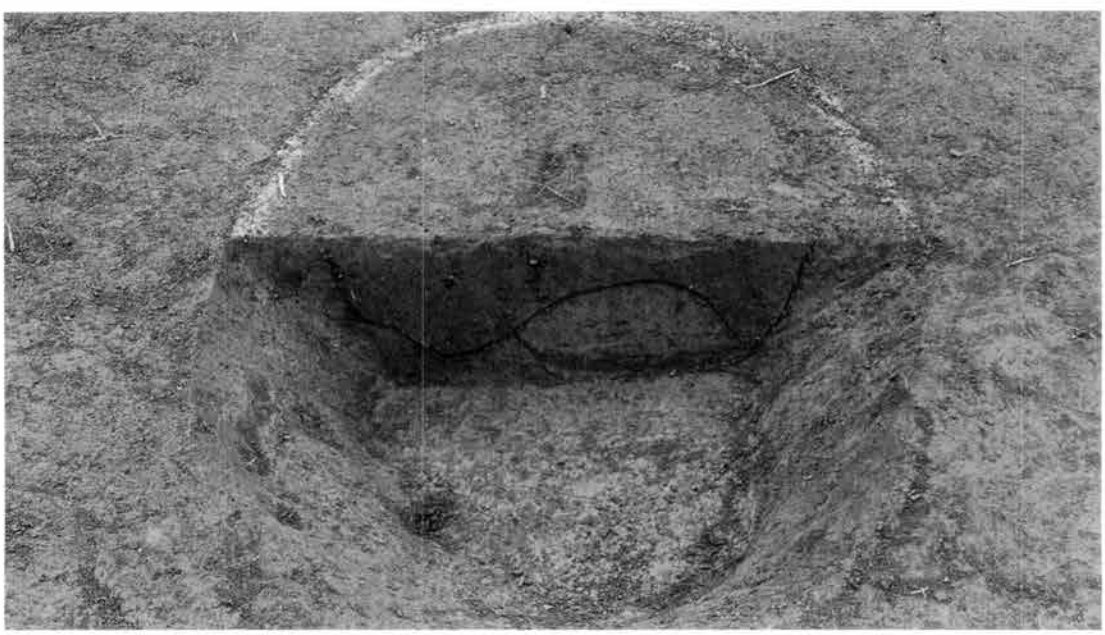
図版28　大口小松原遺跡



SK3

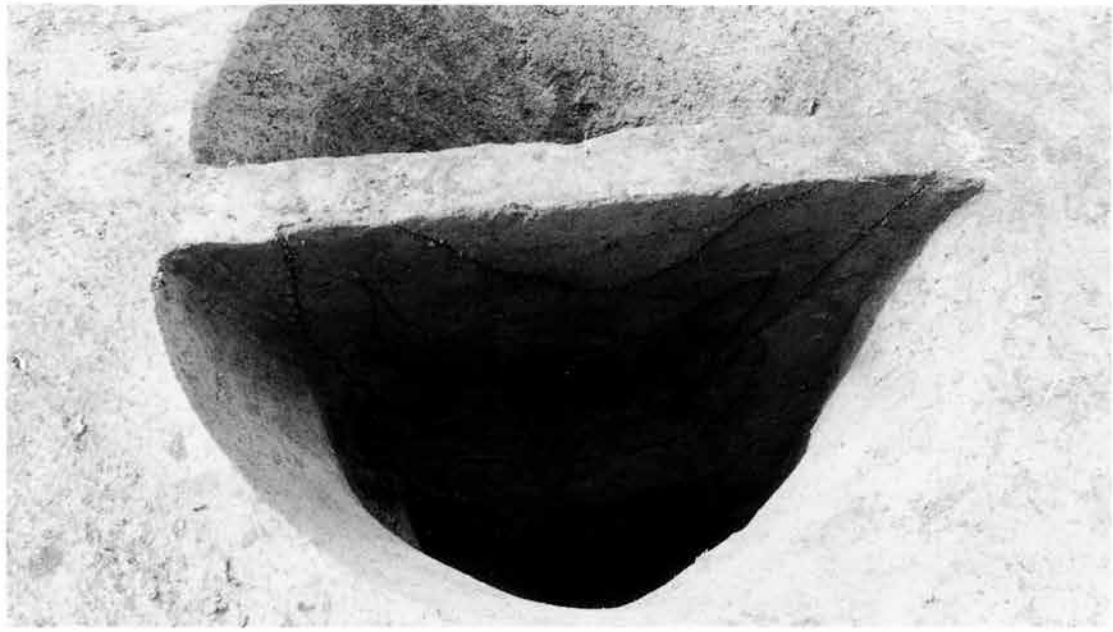


SK4

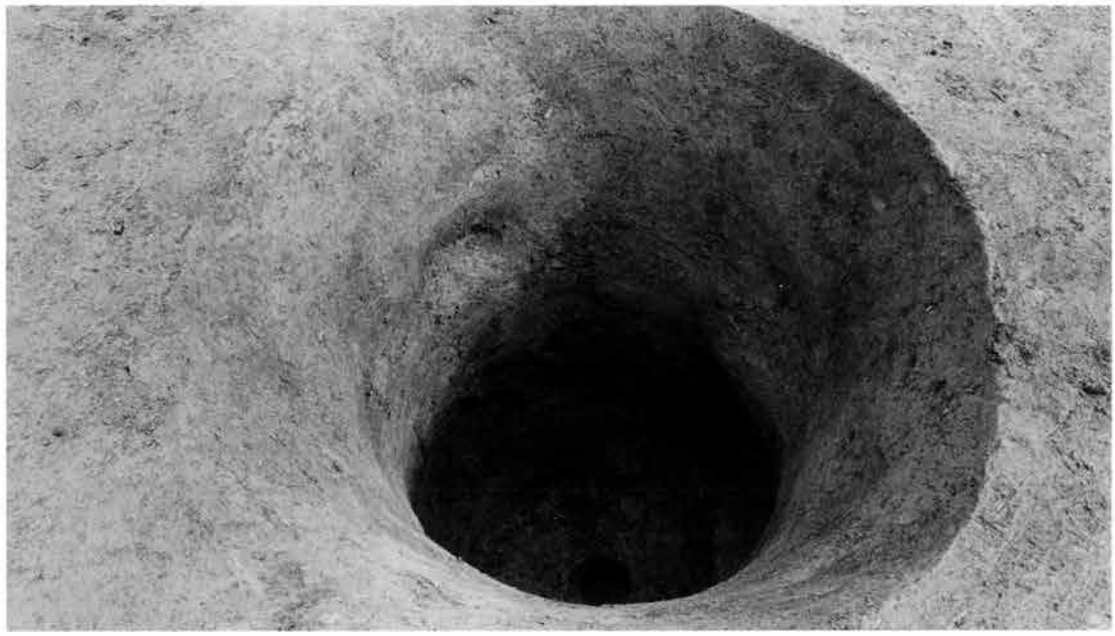


SK16

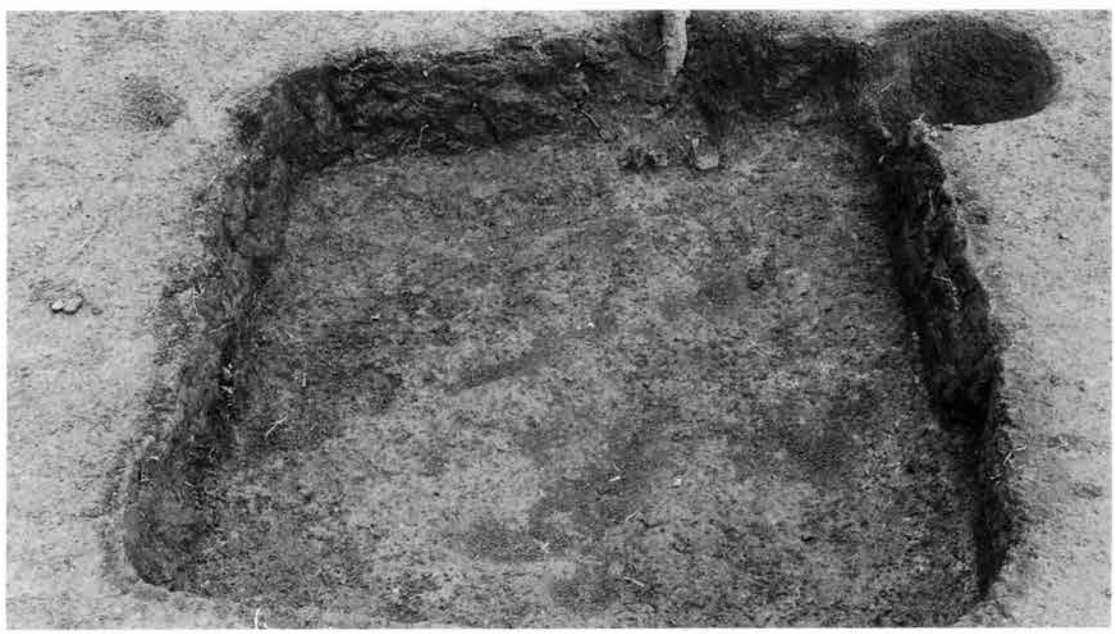
SK8土層断面



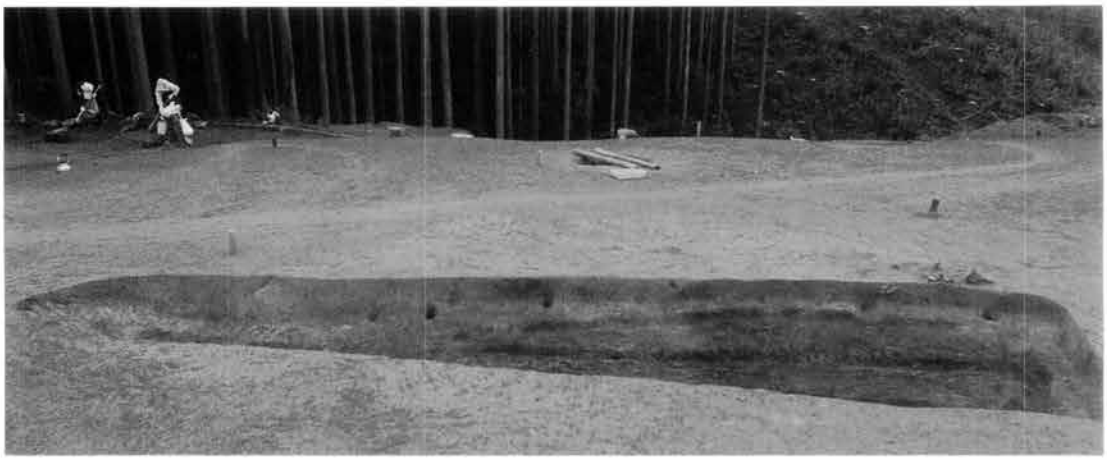
SK8



SK12

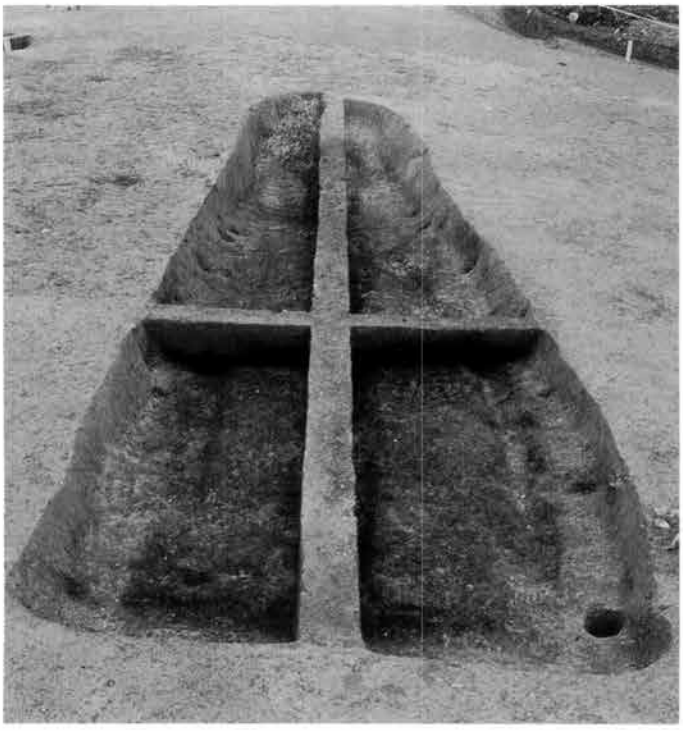


図版30　大口小松原遺跡



SKII完掘状況

同上　土層断面



同上

図版31　大口小松原遺跡

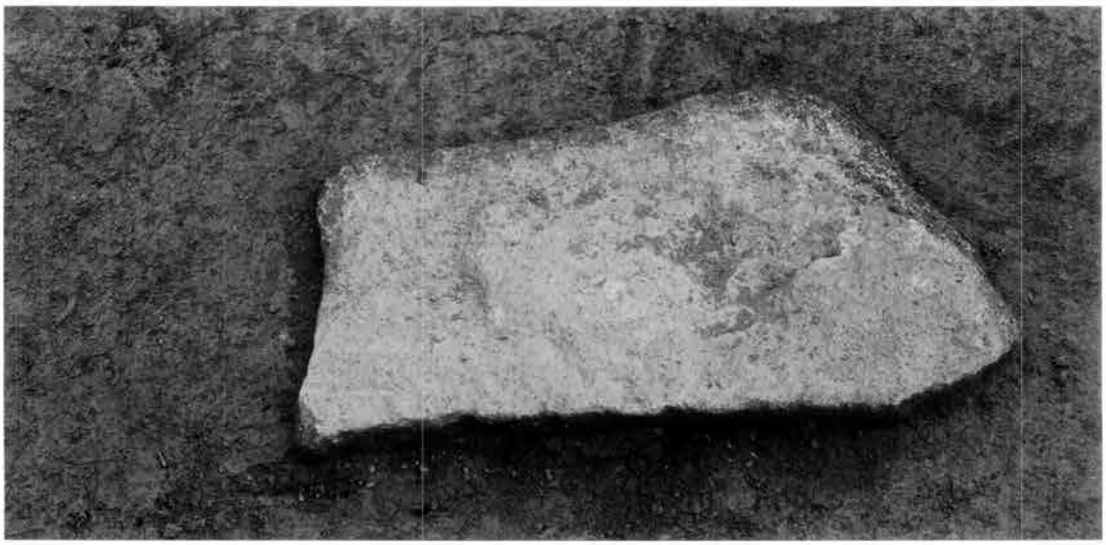
造成平坦地全景（東から）

同上（北から）

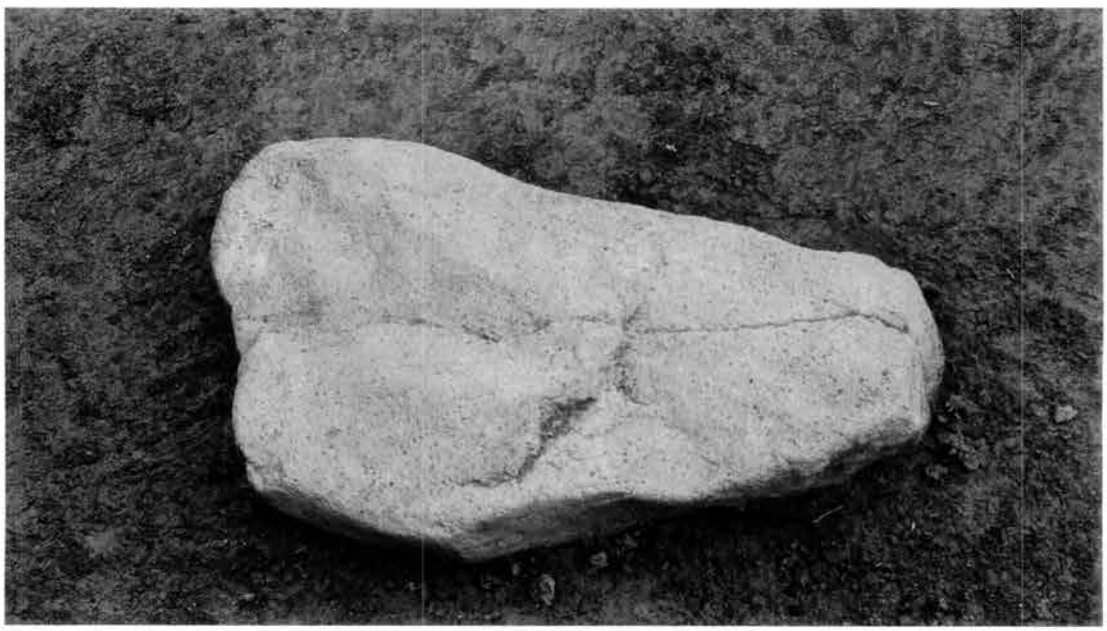
同上　礎石と排水溝

図版32　大口小松原遺跡

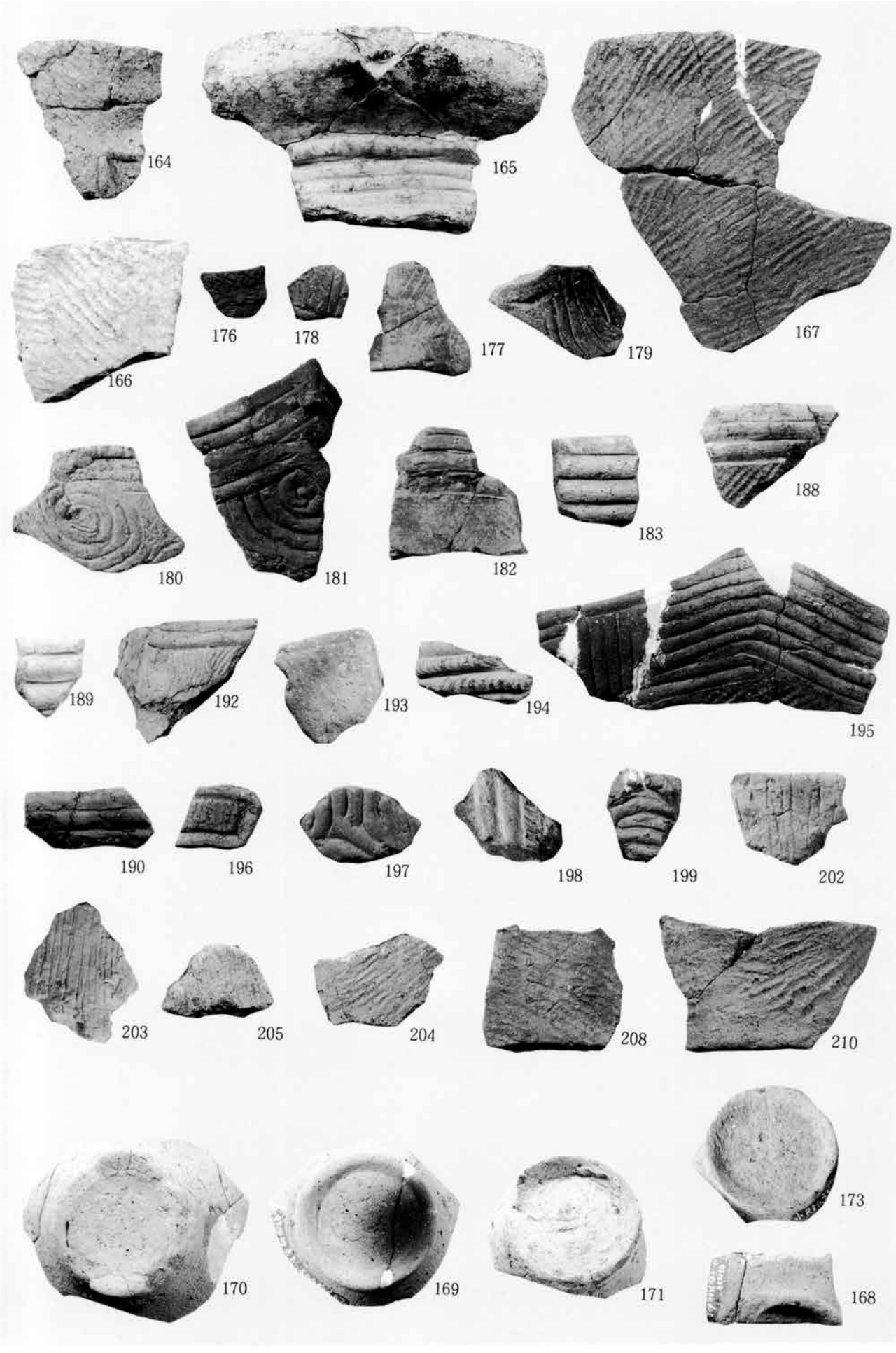
右・土師器の出土状況
左・溝の検出状況



礎石



同上


164
165
167
166
176
178
177
179
180
181
182
183
188
189
192
193
194
195
190
196
197
198
199
202
203
205
204
208
210
170
169
171
173
168

出土土器

図版34　長滝長尾遺跡

調査前遠景（北から）

同上（東から）

同上（北から）

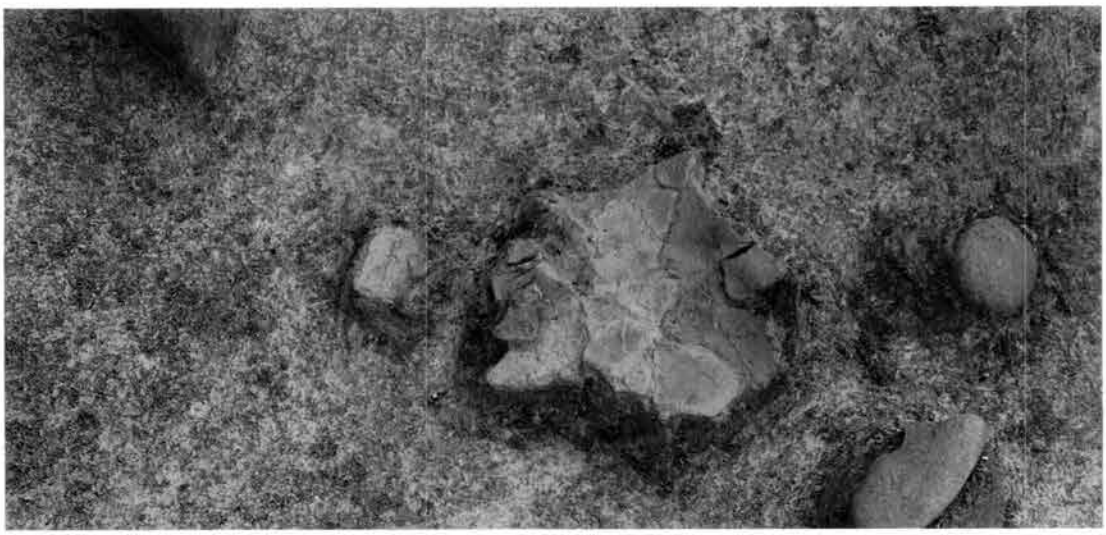
図版35　長滝長尾遺跡

第Ⅰ号住居址全景（南から）

同上　遺物出土状況

同上　完掘状況

第1号住居内土坑断面



床面遺物出土状況

同上

図版37　長滝長尾遺跡

調査区全景（西から）

同上（南から）

同上（北から）

図版38　長滝長尾遺跡

第2号住居址土層断面

同上　完掘状況（東から）

同上（南から）

第3号住居址遺物出土状況

同上　完掘状況（北から）

同上（南から）

第3・4号住居址

4号住居址遺物出土状況

同上　完掘状況

図版41　長滝長尾遺跡

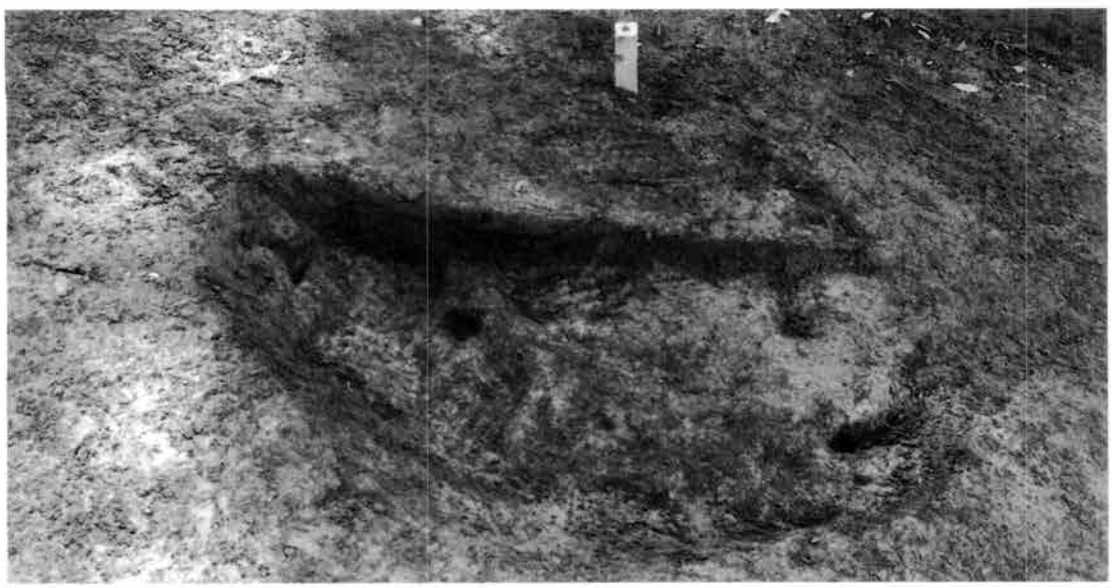
第5号住居址土層断面

同上　完掘状況（北から）

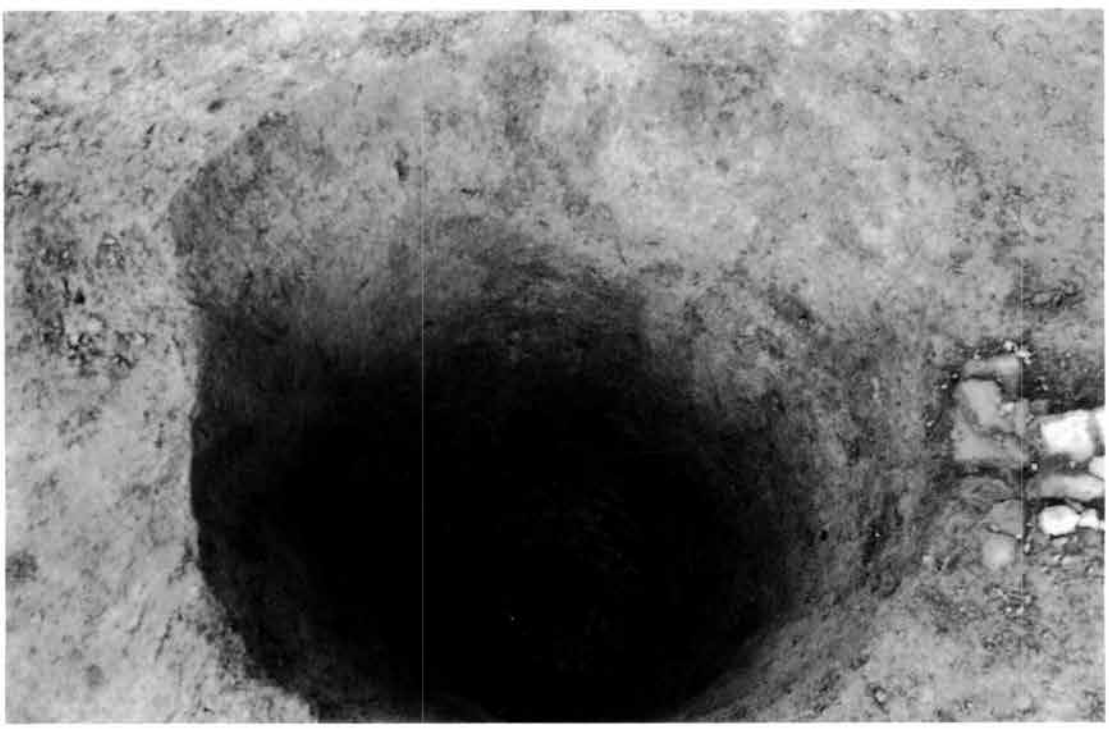
住居址群近景

図版42　長滝長尾遺跡

SK1



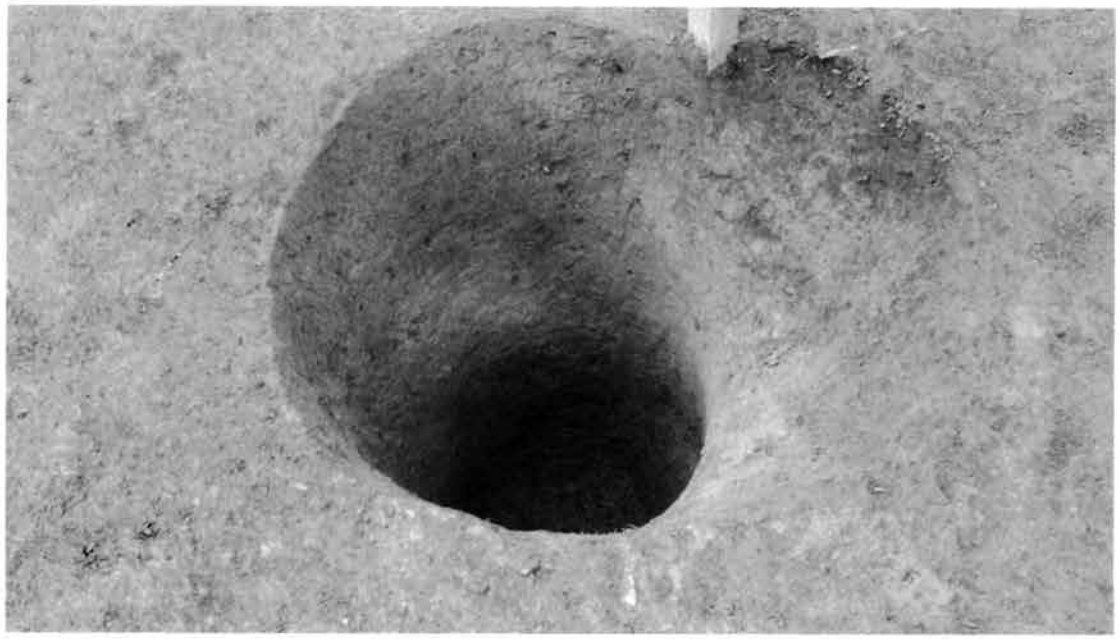
SK2



SK3

SK4

SK5



SK6

図版44　長滝長尾遺跡

C地区全景（北から）

同上（南から）

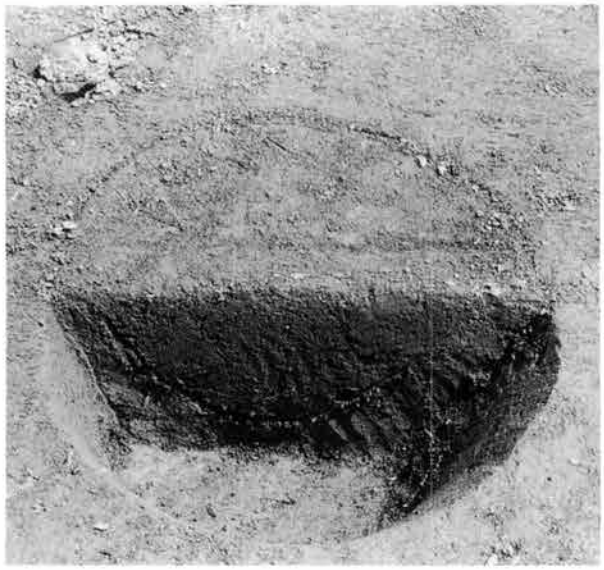
C地区からB地区を望む

図版45　長滝長尾遺跡

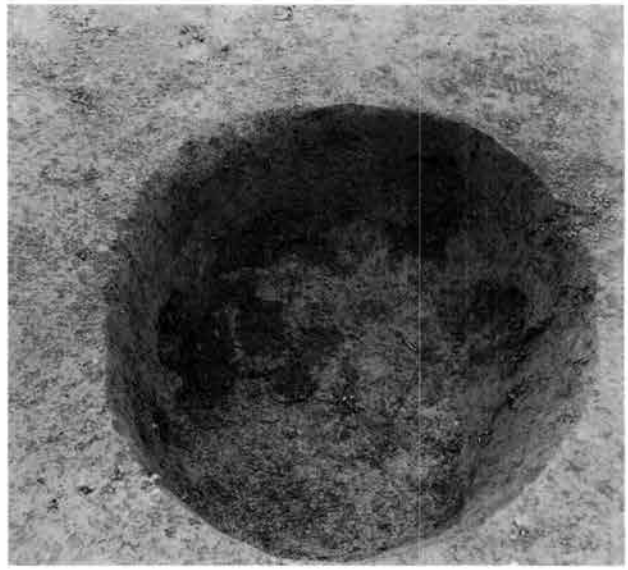
D地区全景（西から）

同上（東から）

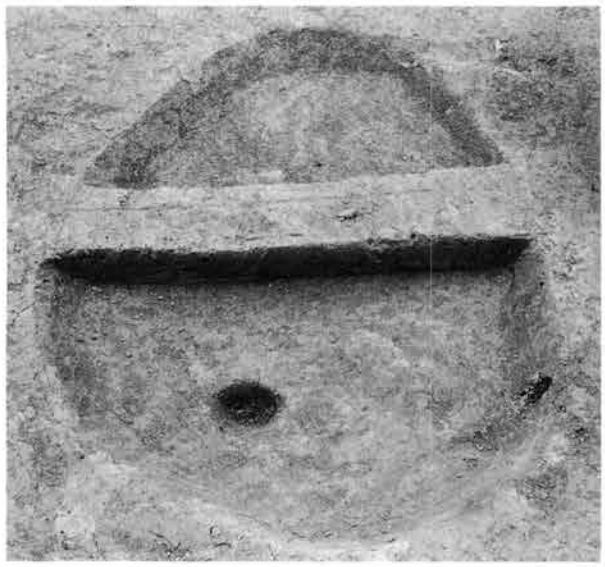
同上（北から）



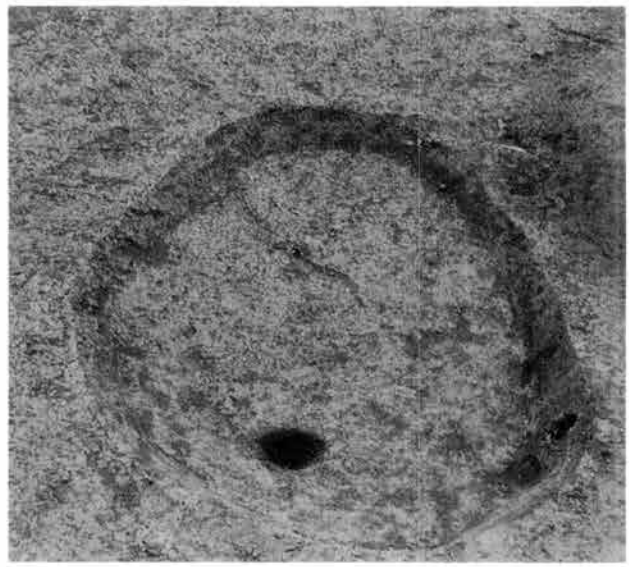
ＳＫ１土層断面



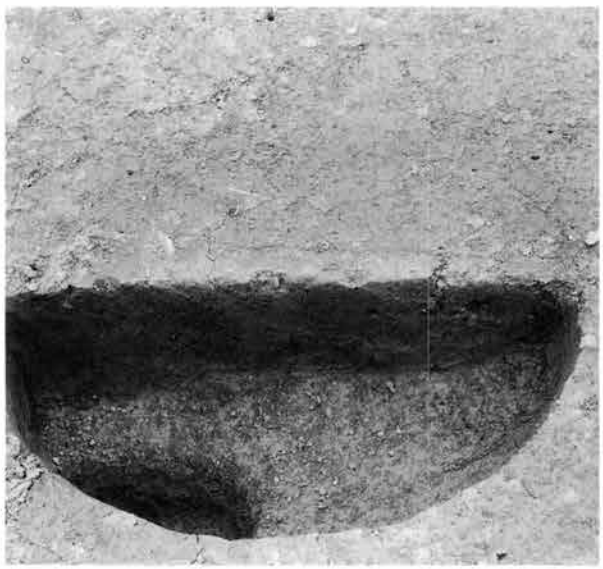
ＳＫ１



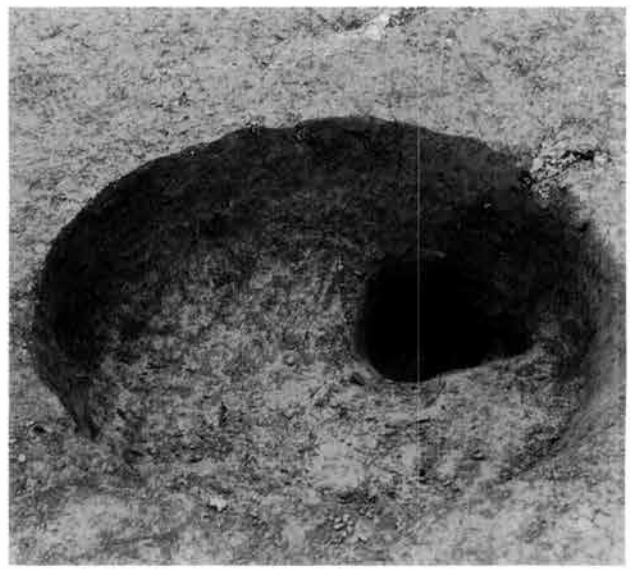
ＳＫ２土層断面



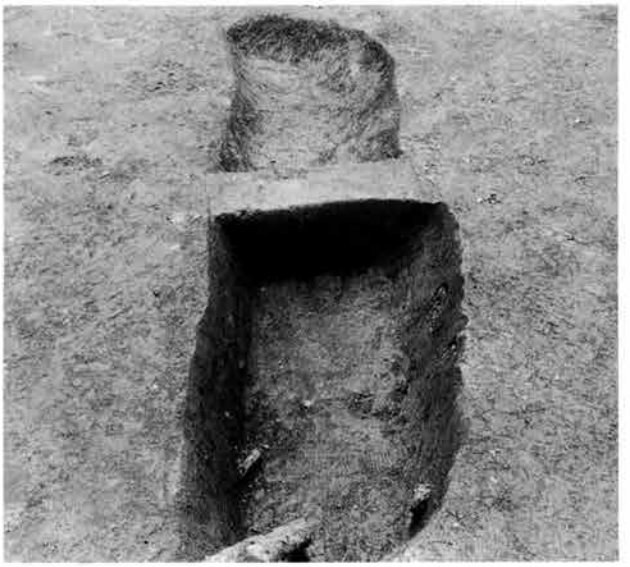
ＳＫ２



ＳＫ３土層断面

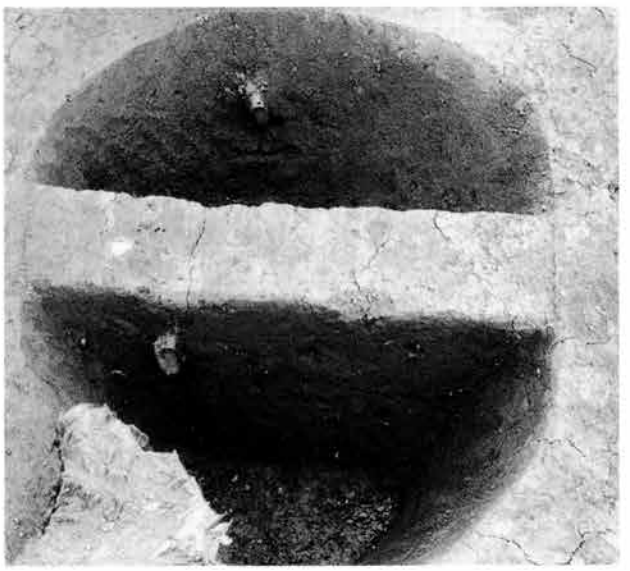


ＳＫ３



ＳＫ４土層断面

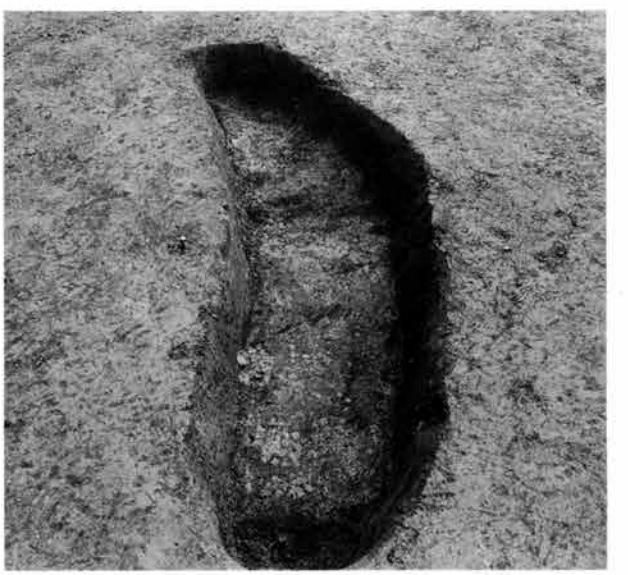
ＳＫ４



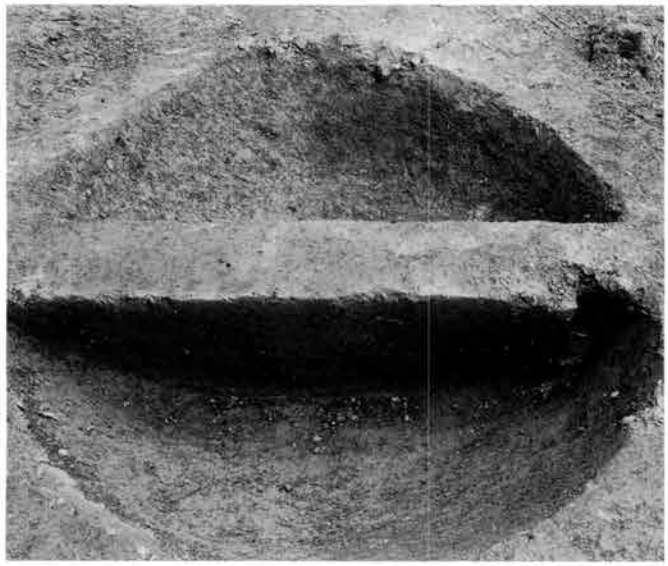
ＳＫ５土層断面

ＳＫ５

ＳＫ６土層断面

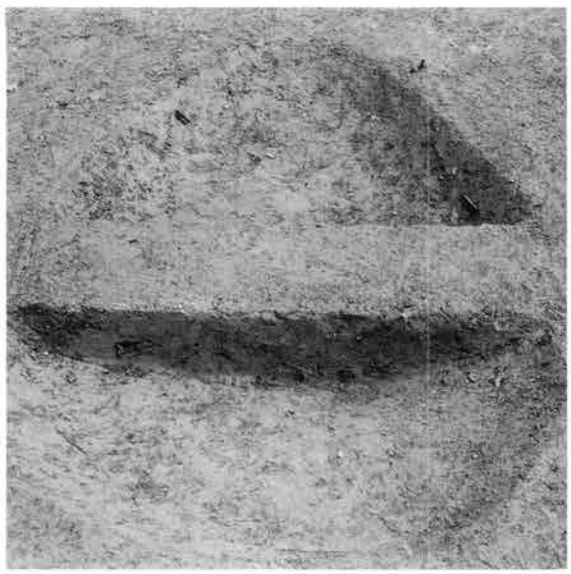


ＳＫ６



ＳＫ７土層断面

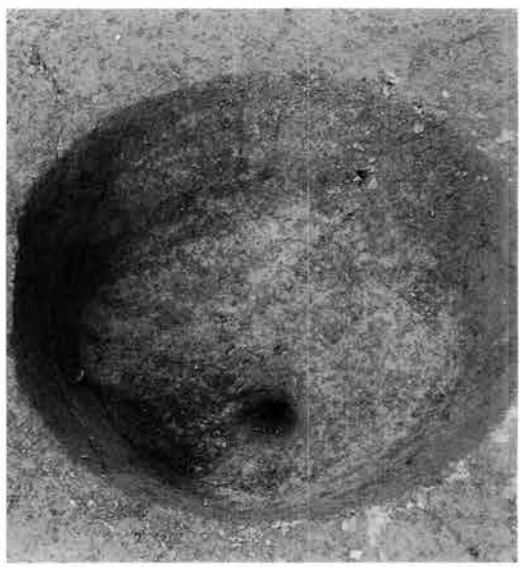
ＳＫ７



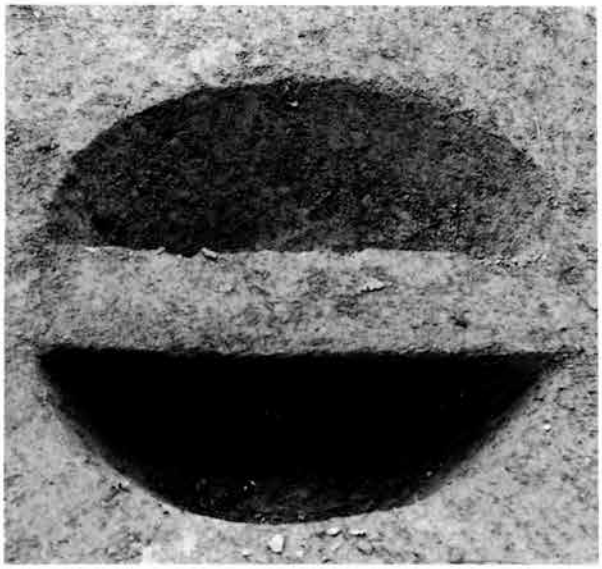
ＳＫ８土層断面

ＳＫ８

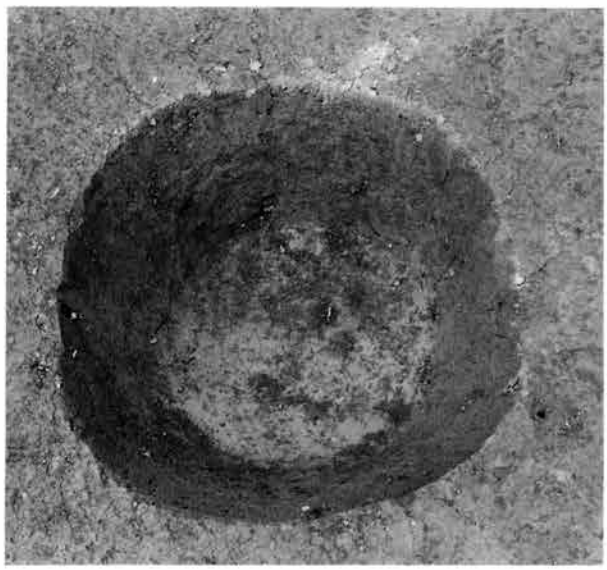
ＳＫ９土層断面



ＳＫ９

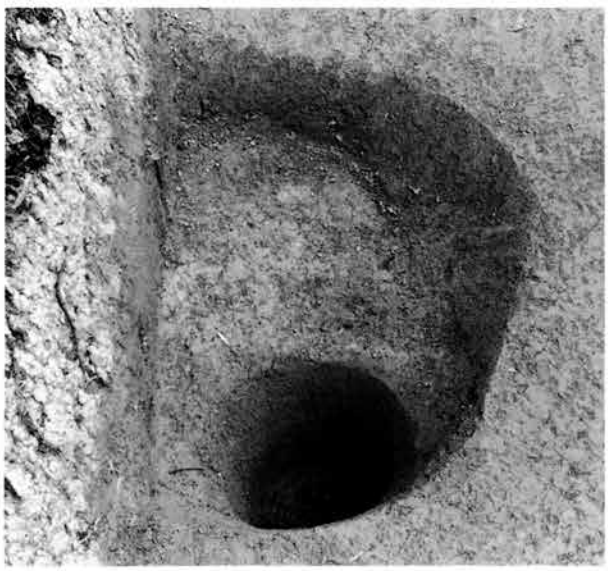


ＳＫＩ０土層断面

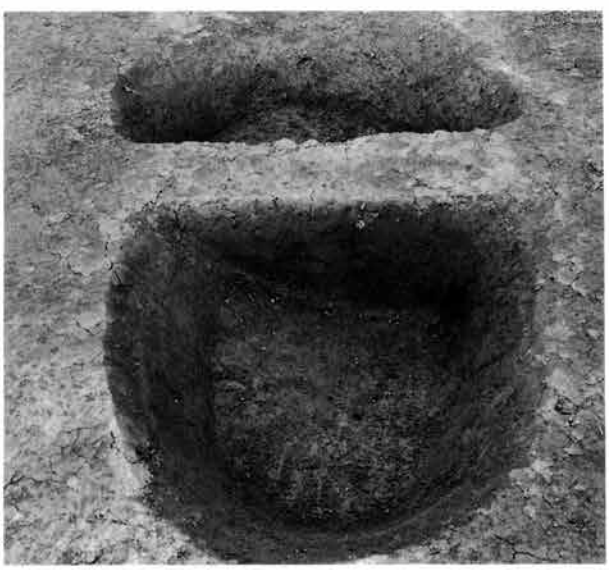


ＳＫＩ０

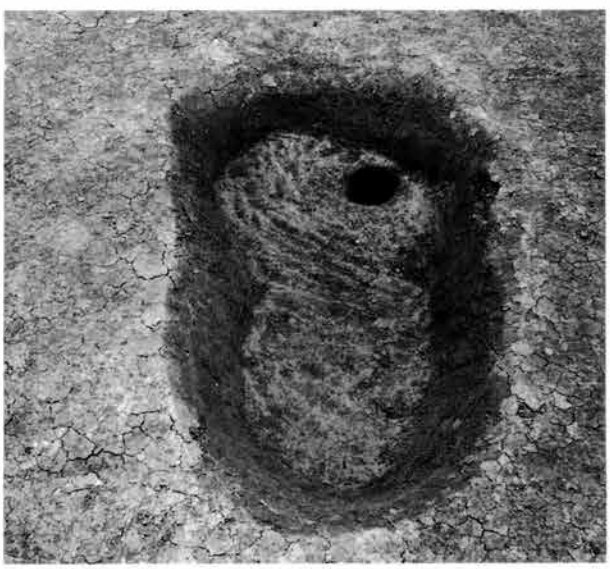
ＳＫＩＩ土層断面



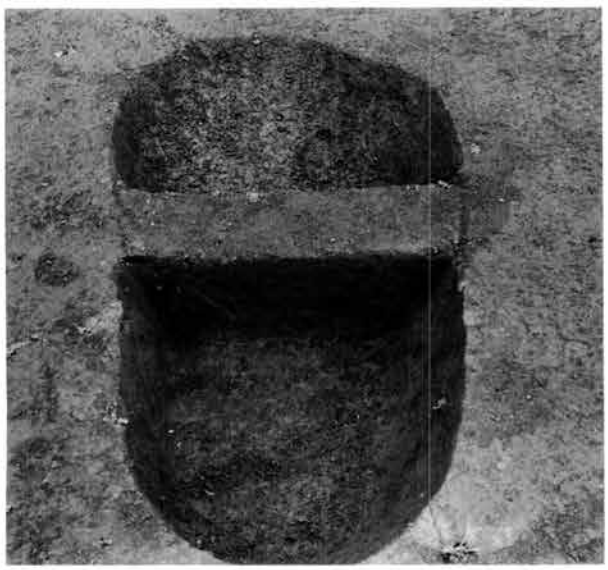
ＳＫＩＩ



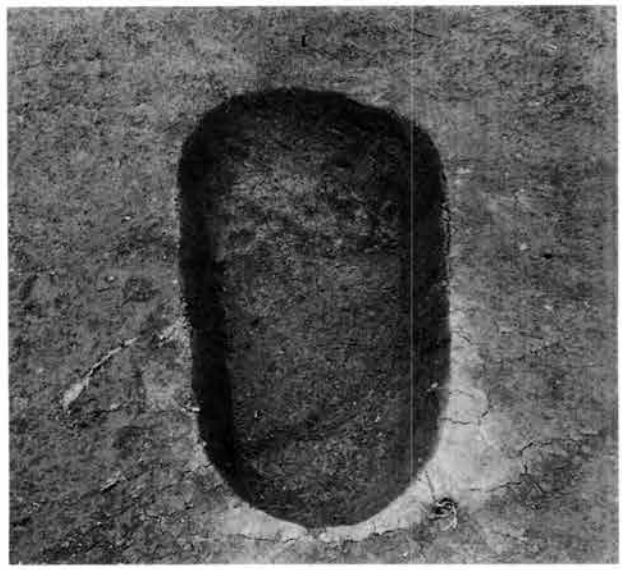
ＳＫＩ２土層断面



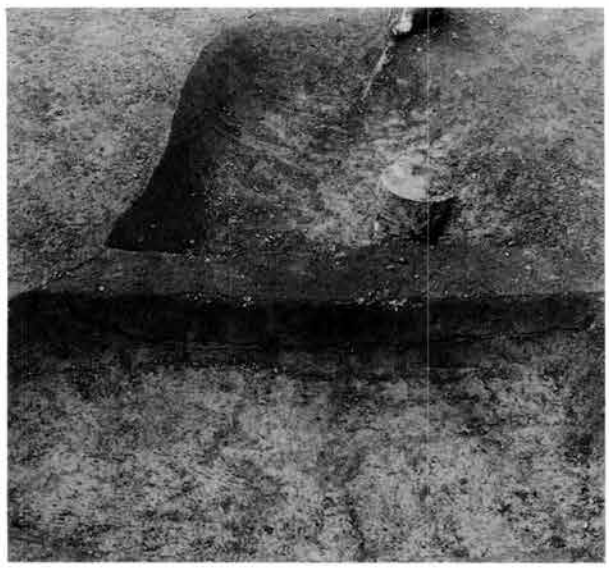
ＳＫＩ２



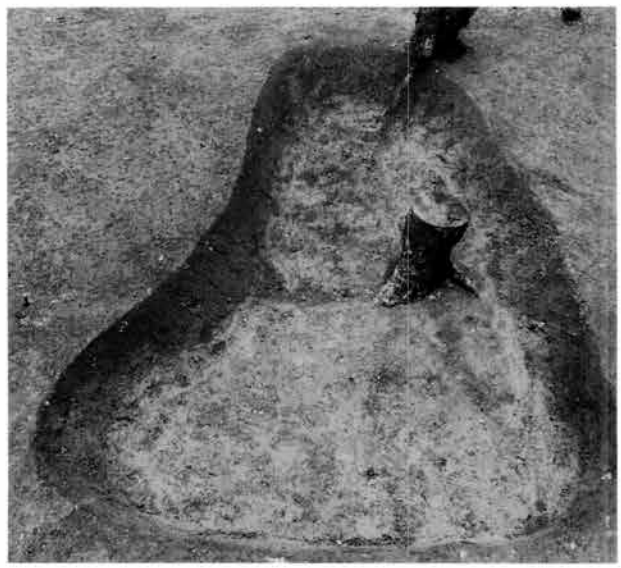
ＳＫＩ３土層断面



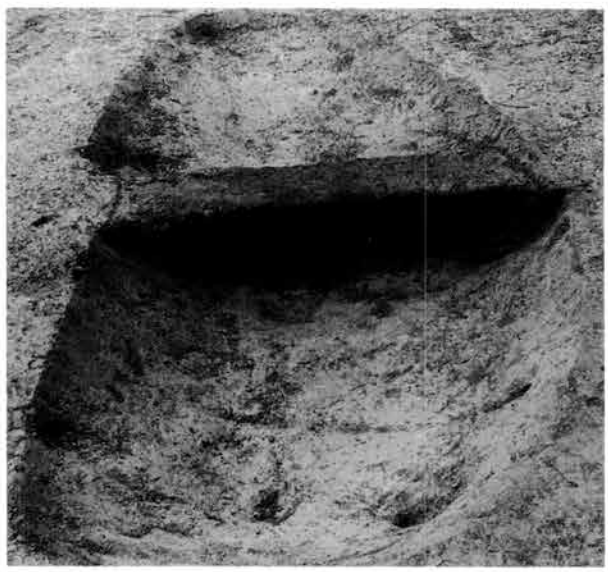
ＳＫＩ３



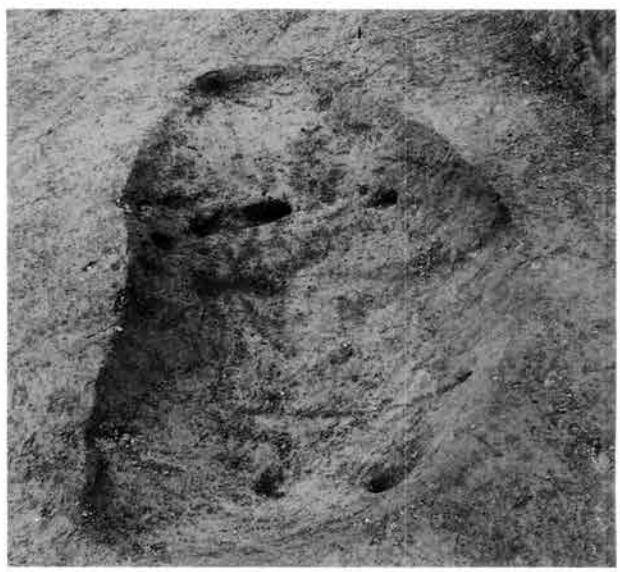
ＳＫＩ４土層断面



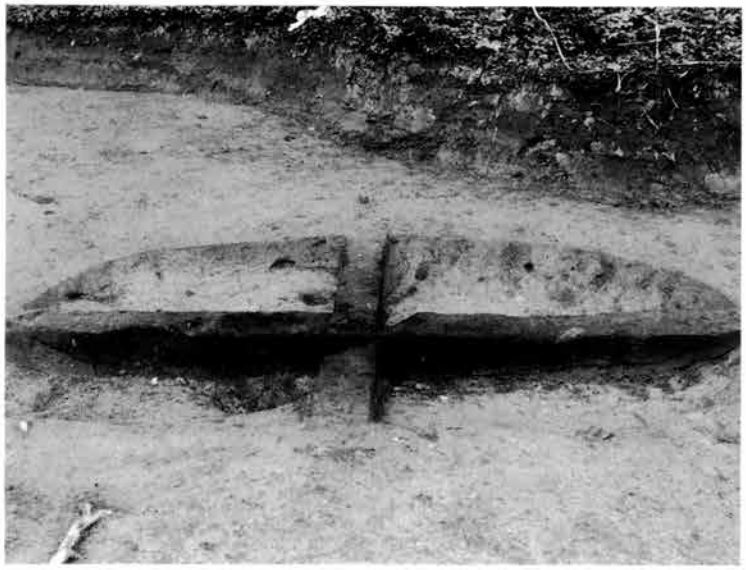
ＳＫＩ４



ＳＫＩ５土層断面



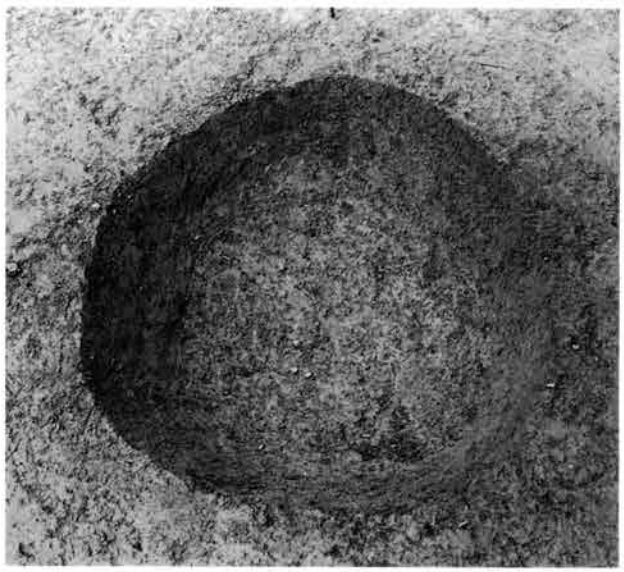
ＳＫＩ５



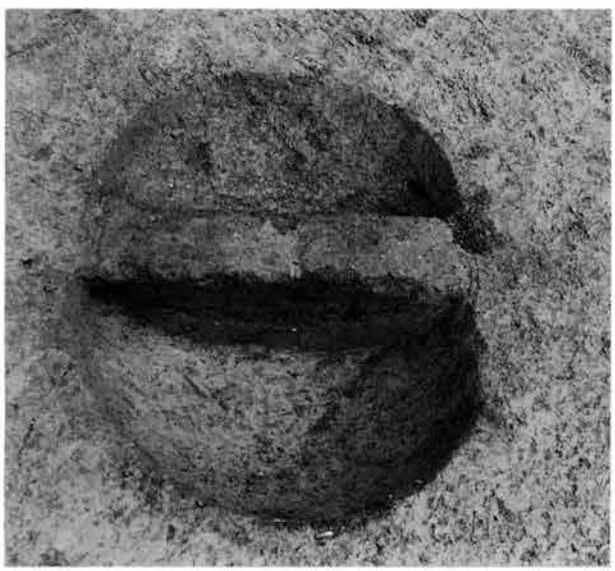
ＳＫＩ６土層断面

ＳＫＩ６

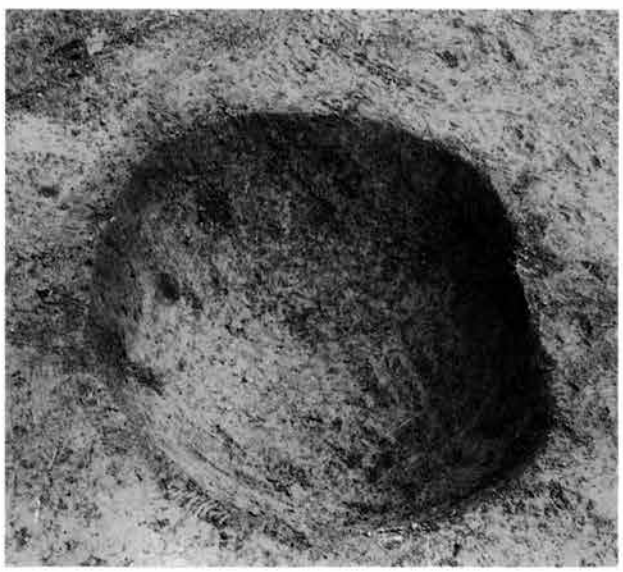
ＳＫＩ７土層断面



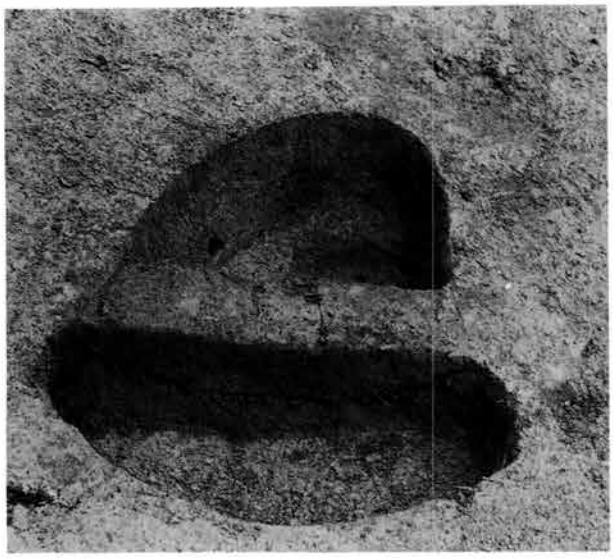
ＳＫＩ７



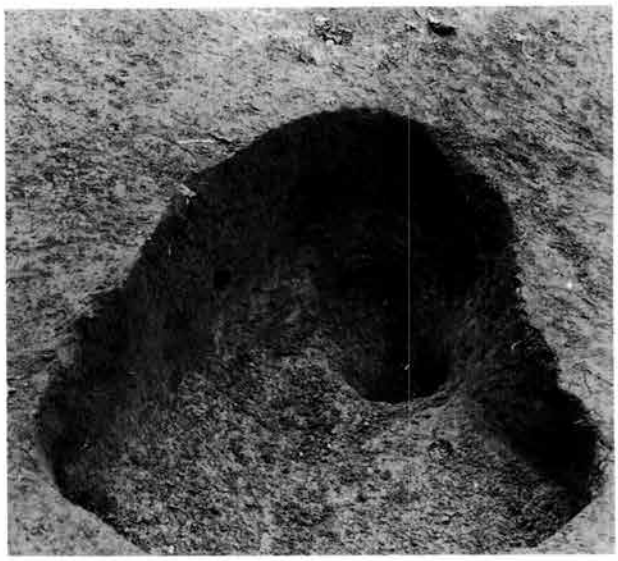
ＳＫＩ８土層断面



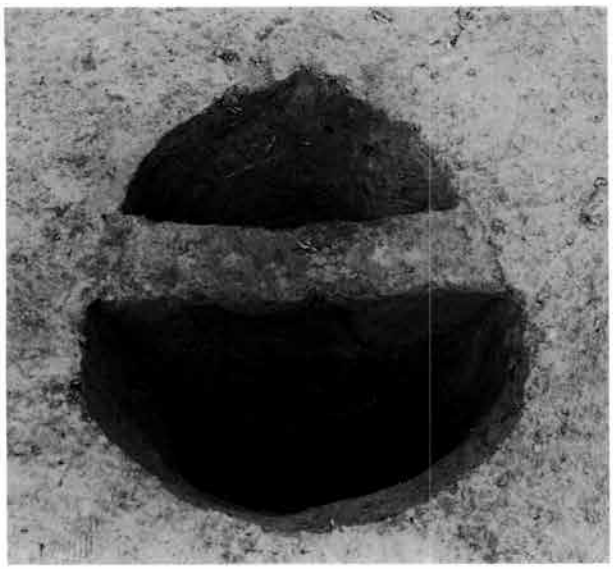
ＳＫＩ８



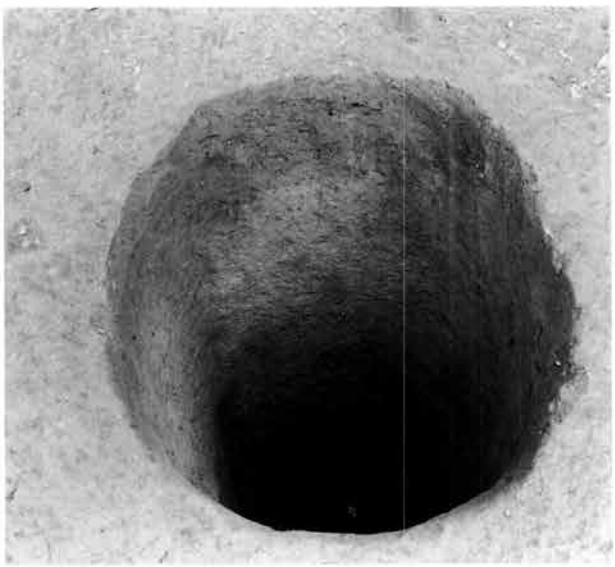
ＳＫ１９土層断面



ＳＫ１９

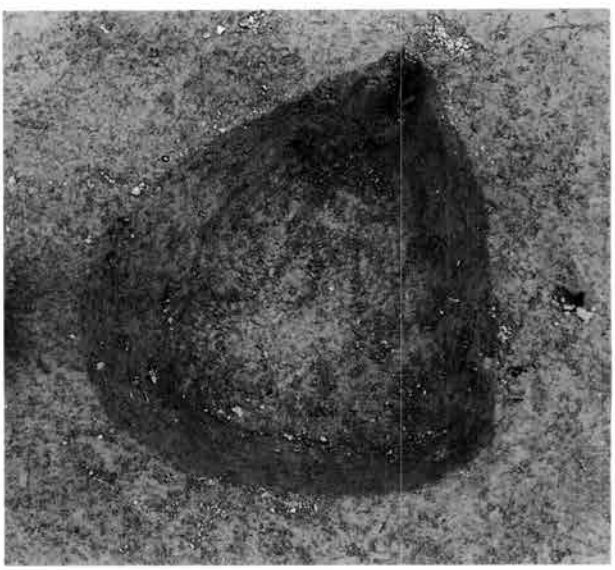


ＳＫ２０土層断面



ＳＫ２０

ＳＫ２１土層断面



ＳＫ２１

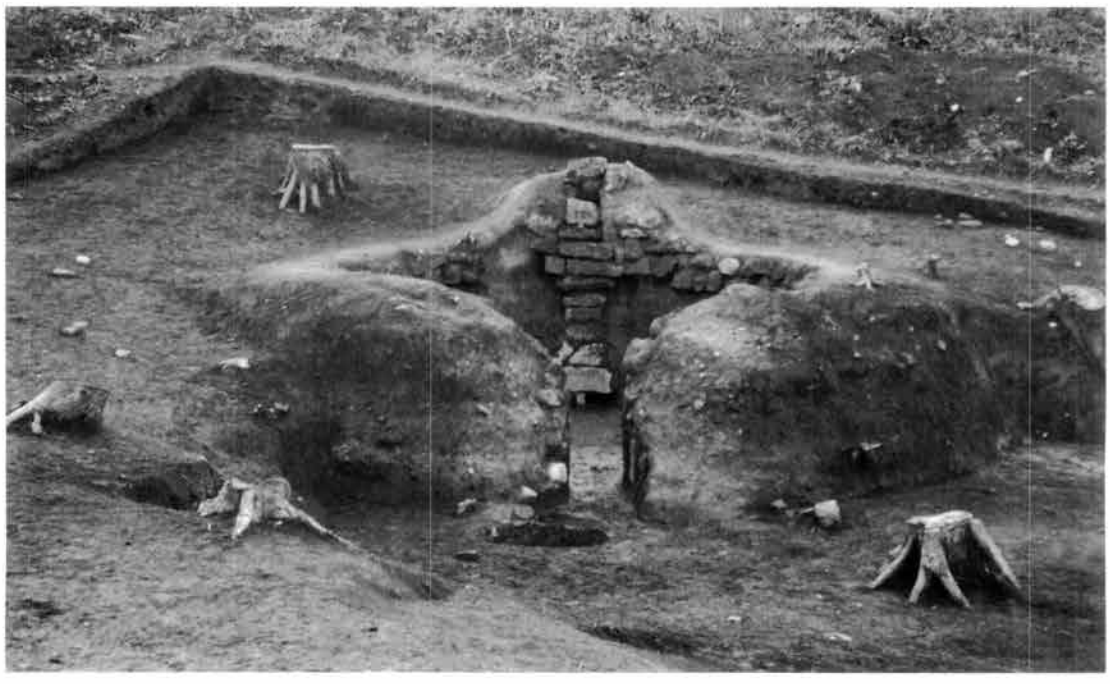
223
224
225
227
228
232
229
250
246
248
249
247
256
256
256
256
256
260
261
261
262
263
257
258
258
272
271
271
281
277
274
280
278
290
296
295
299
294
300
298
301
297

出土土器

図版54　長滝宮谷遺跡

調査区全景（南西から）

炭窯全景



同上

図版55　長滝宮谷遺跡

炭窯内部

同上

煙道部

図版56　長滝宮谷遺跡

煙道部上部

入口部分

石積み（南側）

石積み（北側）

土坑

土坑入口部

図版58　炭窯

炭窯址全景（東から）

同上（北東から）

第2号炭窯閉塞状況

図版59　炭窯

前庭部全景（東から）

第3号炭窯奥壁

第2号炭窯奥壁

図版60　炭窯

第4号炭窯全景

同上　煙道部

同上　奥壁部

図版61　炭窯

第5号炭窯遠景

同上　全景

同上　近景

図版62　滝谷寺跡

堂跡（北から）

同上（西から）

七ツ滝（二の滝）

能美丘陵東遺跡群 II

いしかわサイエンスパーク整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日　平成9年8月20日（1997）

編集者　石川県立埋蔵文化財センター
発行者　921　金沢市米泉4－133

印刷者　前田印刷株式会社